

くらがり森の迷劍鍛冶師ときりふり山の伝説の竜になりたい子竜

雅

目次

第1章 鍛冶師と小竜	6
1 きりふり山の白竜	7
2 へっぽこ鍛冶師の苦悩	10
3 夢は大きく視野は広く	14
4 固い卵	16
5 襲撃	22
6 夜の追跡	29
7 森の中の戦い	34
8 帰宅	39
第2章 ラウルと小竜 村へ行く	45
1 癒し系は食い尽くし系で淋しがりや系	46
2 キルセン村	50
3 母に会う	54
4 ボードガード竜舎	58
5 竜は飼えないまつろわない	63
6 訪問者	65
第3章 旅の仲間	69
1 戦士は御前試合に出たい	70
3 鍛冶工房の仲間達を紹介するぜ	77
4 二人と三人目／ツインス魔法使いは冒険したい	83

6	If Winter comes, can Spring be / 冬の日.....	95	5	5と1と3とプラス1	148
7	If Winter comes, can Spring be / アルバート・オーランド とセルゲイ・オーランドの確執.....	100	6	這い寄るもの.....	156
9	If Winter comes, can Spring be / 手帳.....	109	7	捕食者.....	165
10	If Winter comes, can Spring be far behind?	113	8	再戦.....	171
11	出発.....	117	9	その光る.....	176
第4章 きりふり山の冒険.....122					
1	さわやかな森の不穏な一行.....	123	10	ゆらぎ.....	187
2	霧の中.....	129	11	6と1と3とプラス1と1	194
3	霧からの遠吠え.....	137	12	霧は晴れ.....	198
4	初戦.....	140	13	きりふり山の山中で	203
			14	白骨ヶ原.....	210
			15	霧を染める赤	213

16	巢	217	4	6と1と1とマイナス1	268
17	決闘の日	223	5	またいつか	274
18	巢(その2)	227	6	鏡の中	278
19	雷撃	233	7	へっばこ鍛冶師の日常	281
20	共鳴	236			
21	猛き風	241			
22	狡猾	246			
23	きりふり山の白竜	249			
第5章 帰る		254			
1	小竜、でんせつを指摘す	255			
2	いのちに連なるもの	259			

第1章 鍛冶師と小竜

つい先ほどまで綺麗に青く晴れていた空には、にわかには黒雲が垂れ込め、雷鳴がその合間を切り裂き轟いていた。

雲の上に浮かぶが如き山の頂^{いただき}は、硬く積もり重なった雪が岩肌を覆い、草木はほんの僅かも無い。

長く続く山脈の北端、足元の深い森の中に潜り込むように位置するこの山は頭抜けて高く、遠く南へ向けて連なる山々はどれも並び得なかった。

急峻な斜面の中腹から下は深い霧に覆われ、麓の様子は見えな^い。霧は中腹から麓まで一年を通して覆い、滅多に晴れることがなかった。麓に広がる深い森がこの霧を生み出している。

きりふり山、と山は呼ばれていた。

そのきりふり山の尖った山頂の、大きな岩の影は少し広めの洞窟のような造りになっていた。洞窟と言っても深くはなく、頭上に天然の庇が張り出した岩場と呼ぶに近い。

常に寒気や風雨に晒され生物が憩えるとはとても思えないその岩床に、大小様々な形の石でぐるりと丸い縁が作られ、木の皮や枯葉が円の中に敷き詰められていた。大人が三人腕を繋いで円を作ったくらいの大きさがある。

中央に寄せるように、三つ。
置かれているのは卵。

やや青い殻には水に油を落とした様相の、灰色の筋が模様を描いている。

卵のすぐ傍で黒く大きな影が動く。たった今まで卵を温めていた岩場の主だ。

三ヶ月に及ぶ抱卵期間の終わりも迫っており、自分が食べることも後回しに温め続けて来た卵が、今日にも孵る頃合いだった。

孵った後の子育ての為には体力をつける必要がある、この最後の時期に一度だけ、親は巣を離れる。

卵の一つが微かに揺れた。こつこつと、中から殻を突いている音。

親は自分の足元にある卵に長い首を寄せ、その音に喉を鳴らして語りかけた。

早く生まれておいで。お前たちの顔を見せておくれ。

どんなに可愛かろう。

畳んでいた翼を広げる。

透き通るような白色の鱗が広い翼の皮膜を縁取っている。

同色の、見るからに硬質な鱗は軀に、長い首、長い尾に鎧に似て被い連なる。

——竜。

尾までの体長二間(約6m)ほど、広げた翼は三間を超える。

巣を抱えるのは雌だ。

母竜は長い首を持ち上げた。巣から離れ難いが、体力を補う為には餌を取りにいかねばならない。

岩場の縁へと数歩進むと、急峻な斜面に覆い被さる雷鳴の走る空へ、母竜は滑るように飛空した。

俄かに冷たい風が岩屋に吹き込み、三つの卵はその風を感じたのか、小さく揺れた。

コツコツ、一番奥の卵が中から殻を叩く。巢の中でコトコトと揺れる。

もう二つの卵はまだ中で微まじろ睡ねんでいるようだ。

コツコツと叩く音を立て、返る声が無いと分かると、殻の向こうから微かに「びい」と鳴いた。

しばらく、時折殻を叩く音以外なく――

大気を打つ翼の音がした。

風が吹き込み、巢を組む小枝を揺らす。

もう一度、翼の音。

卵の内側から叩く音が迎えるように鳴り、だがふと、静かになった。

空気が張り詰めたのが分かる。

息をひそめる静寂が岩屋に満ちた。

重なる翼の音と共に岩屋の入り口に現われたのは、母竜ではなかった。

全長一間（約3m）ほどの大型の鳥が二羽。

いや――鳥ではなく。

軀は獅子、胸の二対の乳房は人のものだ。首は長く鱗がびっしりと連なっている。その先についた頭は、悍ましいものだった。

人の顔。うっすらと笑みを浮かべている。

ぶ厚い翼が空気を掻き混ぜ音を立てる。

長い尾の先端には、蛇の頭がしゆるしゆると舌を震わせていた。

人面の獣が喉を鳴らし、落ち窪んだ双眸を岩屋の奥に向けた。卵を捉えた双眸が光を帯びる。剥き出した鋭い牙の隙間から涎が滴った。

二匹は主人が不在の岩屋に悠然と踏み込み、太い脚の鉤爪を、卵に掛けた。

軋む音がして――鉤爪の先が、卵の殻に食い込む。

最早殻を破るのを待ただけだった幼竜が、中で警戒の鳴き声を上げる。

その声に触発されたかのように、人面の顎が耳の脇まで割れて蝦蟇口の如く開き、手前の卵を一つ、まるまる飲み込んだ。

もう一頭も牙を剥き出し、割れた顎の中に卵を飲み込む。

残る卵はあと一つ。

二匹はそれぞれ飲み込んだ卵で満足することは無く、大柄の頭が残る一つに近付いた。突き立てた牙が、硬い殻に穴を穿った。

穴の奥に、小さな丸い瞳が覗く。

ぱちりと瞬き、突如開いた穴と流れ込む冷たい空気、そして迫る鋭い牙を見た。

大気を揺する咆哮が響いた。

長く鋭い鉤爪が手前にいた人面獣の肩口に食い込み、腹部まで引き裂くと同時に岩屋から引き摺り出す。

人面獣の腹から潰れた卵が岩屋の床に落ちる。

駆けつけた母竜は怒りに満ちた咆哮を上げ、引き裂いた一頭を岩屋の外へ放り出すと、もう一頭の首元へ、ずらりと鋭い牙の並ぶ

顎あぎとを開き、食らい付いた。

人面獣の喉から、たった今飲み込んだばかりの卵が競り上がるように吐き出される。

人面獣が嵐の如く身を揺する。

喉に食らい付く竜の顎から逃れるその動作で、鞭となつてしまった尾が一つ無事に残っていた卵を弾いた。

卵がくるくると回りながら岩床を滑る。母竜からは人面獣の影になり見えていない。

外へ放り出された人面獣が肩から裂かれた半身をぶら下げながら、母竜の尾に噛み付く。母竜が尾に噛み付く人面獣を仕留めようと身を捻る。

卵はその戦いの足元を滑り続け、母竜が気付く前に、空へと飛び出した。牙で開けられた穴から、幼い瞳がまんまるに見開かれたまま。

卵は一度斜面に落ち、そのまま斜面を雪と混じりながら転がり落ちていく。

高さ一里（三千m）を越えるきりふり山の斜面を、どこまでも、追いかけるものも止めるものも無く。

遠退いていく岩屋を、二頭の魔獣と戦う母の姿を、懸命に見つめる瞳。

激しい咆哮、噛み合う牙の音。打ち鳴らされる首、尾。

空へ、二頭の人面の魔獣が放り出された。

一呼吸後——白い光条がその後を追ひ、岩屋から放たれる。空へ広がり人面獣を飲み込んだ光条が、大気に細く消える。

二頭の軀は白く凍り付いていた。

大気中の塵が凍り、薄い陽光を僅かに弾いている。

斜面に落ち、大小バラバラに砕けた欠片が雪面に散らばる。

その横に、親指の先ほどの輝く球が落ちた。竜が吐く息が凝った宝珠だ。虹色を纏うそれは大気に触れ、ゆっくりと解けていく。

母竜は凍る息の名残を吐き出すのも惜しく、傷付いた軀を岩屋の奥に巡らせた。

見る影もなく壊された巢の石や枝に混じって、卵の殻が散らばっている。

もう姿を見せるのを待つばかりだった幼い竜が二匹、小さな軀をぐったりと投げ出して横たわっている。

母竜が鼻先を寄せ呼びかけても起き上がる気配はない。触れた鼻先に生命が感じられないことも、母竜にはもう判っていた。

二匹——

あと一つは。

母竜は岩屋から飛び出した。

傷付き破れた翼で斜面の途中、砕けた人面獣の身体へと降り立ち、その欠片の中に我が子がいないかを探す。

——いない
いない。

あとの一つも、ただ吞まれてしまったのか。他の人面獣に既に喰われてしまったのか。

母竜は長い首を空へ逸らし、短く高く鳴いて呼びかけた。何度となく呼びかけるそれに、返る返事は無い。

見渡す荒涼とした斜面には生物の姿も気配すらもない。

——おお、なんという……

もう今日にも、殻を破って生まれ出ただろうに。

どれほどその時を心待ちにしていたことか——

傷付き、何より失意に満ちた重い身体を再び巢に戻し、母竜は長い喉で息絶えている二匹の我が子を長い首で掻き寄せた。

青に赤い虹彩を揺らす瞳に怒りを滲ませる。

——魔物共

——巢を探し出し、もろとも根絶やしにしてくれる

母竜は再び、傷付いた喉で咆哮を上げた。

怒りと悲しみの咆哮が響く範囲には、ただ一羽の鳥さえ恐れて近付かなかった。

2 へっぽこ鍛冶師の苦悩

ラウルはこの先の人生に不安を覚えていた。

今に始まったことではないのだから。

今、ラウルは小さな小屋の中に一人、手にしている仕上がったばかりの剣を溶かすか地面に埋めるべきかで悩んでいる。

素材となる鋼を自分で採取し、溶かし、三日間寝食も忘れかかりきりになって打ち上げた剣だった。

端的に言えば、今日も鍛冶は失敗だ。

いや、失敗というのかどうなのか。

打った剣の姿は美しく、覗き込む姿を映す刃も切れ味を表して澄んでいる。この見た目だけならば名剣と自画自賛できるのではないか。

「はあ……」

肩を落とし、ついでに溜め息も零し、背後の、壁を振り返る。そこにはこれまでにラウルが打った剣がずらりと並んでいる。

十振り。大小揃わず、かつ様々な形は、試行錯誤した結果を如実に表していた。

岩でも断つつもりと言わんばかりの大剣が立ててあり、その隣に同じ人物が打ったとは思えない細身の剣が横にして掛けられている。

上段にギラギラと光を放つ剣。

その横には思わずふらふらと近寄りたくなるほどの美しい姿の剣。

節操のない様相を呈している。それぞれ違う鍛冶師が打ち上げた剣を並べても、こうは無軌道にならないだろう。

ラウルは鍛冶師だ。

とは言っても本格的に鍛冶を職としたのは二年前からで、まだ見習いの域を出ていない。この工房で二年前から半年間、このくらが森の鍛冶師に師事したが、高齢だった師匠は一年半前に九十歳を目前にして他界してしまった。

名工と呼ばれ、遠く都から買い付けに来ることもあったそうだが。

とても気難しくこれまで弟子は取っていなかったのだが、ラウルの家とは祖父の代からの付き合いがあったこともあり、また幼い頃から折りに触れて顔を出していたラウルの置かれた境遇を慮ってくれたのか、鍛冶師になりたいと申し出たラウルを弟子にしてくれた。

身寄りのなかった師匠の死後、ラウルがこの鍛冶小屋を引き継いだ。

以来一年半、打ち上げた剣は十二振り。

手元に残る剣は十一振り。

つまり売れていない。

人手に渡ったのは一振り、それも果物などを剥く短刀で、ラウルを憐れんだ弟のエーリックがせめてこれなら何とかなるかもと引き取っていった。

幸い使えているようだ。切れ味がいい時と悪い時のムラがあると文句を言われるが。

「ううん」

ラウルは今年で二十四歳になった。

すっきりした面立ちで、明るい緑の瞳は彼の性格そのもの、赤銅色の髪も朗らかな印象を与えている。

母と弟、妹は、この『くらがり森』のすぐ傍にあるキルセン村という、人口二百人ばかりの小さな村に暮らしていた。飛竜を育てる竜舎があることが自慢の村だ。

家族から離れて若いラウル独り、世捨て人のようにこの鍛冶小屋に暮らしているには訳があるのだが

『なあなあ』

まあまあこの暮らしは気に入っていた。

鍛冶はさほど上手くないが竜舎に轡くわなどを納めて何とか暮らせるし、小さいながら畑の収穫もある。

『おーい』

おいおい将来を真剣に考える必要はあるものの、父が早逝するまでの暮らしとは大違いとはいえ悪くはない。

『ちよつとちよつと』

ちよつとばかり、父が不慮の事故で亡くなった当初は全く先行きが見えずに不安を抱えていたが、人生、どんな所でもやっていけるものだ。

『なああってば、浸ってんなんて。たった今最高の名剣が打てたんだぞ。爆誕を喜べよー』

爆

ばく——まあいい。

何ならラウルは以前の暮らし———そうたいした家柄でもないのに
体面を保って、規律やしきたりを重んじなければならなかった暮らし
より、今の暮らしの方が好きだ。

『おれ様を見る———！ どうだ、これほど美しい、天才の、切れ味抜
群の剣はまたとないぞ！ 最高！ あんたも名剣だと思おうよな———！
な———！』

母は家を復興してくれと会うたび口うるさいし、弟はラウルをこ
んな小屋に押し込んで蓋をするような叔父を腹立たしく思っている
のを隠さないが

『おれのお披露目いつにする———？ ぱ———とやろうぜぱ———と！
王様とか来ちゃうかもしれないな———』

妹はラウルが楽しそうにしているのを見て、見守ってくれている
し

「はあ……十歳の妹に見守られて喜ぶのもなあ」

『なあなあなあなあ』

それでもこれまで、鍛冶師として身を立っていきこうと考え、がん
ばってきた。

けれど、今日、その意思是グラグラと揺らぎ始めていた。

いやまあ、今に始まったことではないのだが。

『なあ！ なああってば！ なあ———！』

……本当にうるさい。

そしてしつこい。

何とか頑張って無視しているのに諦めずずっと話しかけてくる。

ラウルはもう一度、深々と溜め息を零した。

『無視すんなよ———！ なああってば———！』

溶かすか。

「それとも埋めるか」

『ちよつとちよつと———！ あんたほんとに鍛冶師か？！ もの価
値を知らないのか———！』

ラウルの打つ剣は売れない。

手にしたままの剣に視線を落とした。

切先は鋭く、剣幅はやや細身。剣身二尺（約60 cm）の片手剣
だ。澄んだ白銀色の肌地にラウルの姿が映っている。

用意した柄の握りに丁寧に張った革はラウルの期待そのものだっ
た。

見た目はとても美しい剣なのに。

『なあ———！』

「ちよつと、黙っててくれるかな？」

ラウルは心の底から願った。

剣に。

答えたのは今までの、やや剽軽な風味の声だ。

剣の———どこだろう、たぶん柄に近い辺りから。

『ええ———。どうせおれとあんたの二人しか居ないんだしさ———、寂し
いだろ？』

「傍^{はた}から見たら俺一人きりだから」

『誰も見てないって！』

「喋る剣かあ」

剣を正面の低い作業台に置き、ラウルは独りごちた。

これまで打った剣はどれも、形こそ剣だが問題は多かった。

何故なのか、ラウル自身には理由がさっぱり分からない。

金槌を手に取り、問いかけるように滑らかな打面に触れる。

「師匠……俺教わったとおりに打ってますよね……？」

記憶の中の師匠に尋ねる。

教えてもらった手順は外れていない。はずだ。

ただ、ラウルは物や動植物に触れるとその声が聞こえるという、便利に見えてまるで便利では無い能力を生まれ持ち、そのせいで剣を打つのにちよつと――

いや、かなり、かれら素材の希望を聞き過ぎているというか。

他の剣より一番大きくなりたいたいか、無骨なのは嫌だ美しくなりたいたいか、他と同じは嫌だつまらないとか、誰よりも輝きたいだとか。

つまり鋼達が口々に主張するそこらへんが、つい剣に反映されていた。

それにしても。

「はあ……」

さすがにここまで自由闊達に喋り出したのは初めてだ。

鍛冶師という職業選択が間違っていたのかもしれない。

自分一人の生活に困らない範囲で好きなように打ってあげればいいだろうと、甘っちょろい考えだったのがいけなかったのだろうか。

「俺に剣を打つ才能は無いのでしょうか、お師匠さま……」

『何言ってるんだ。このおれ様を打ったんだぞ。あんたは名工だ。誰よりも優れている。自信を持って――』

すっごい褒めてくれる。

「はあ……」

ラウルは項垂れた。

「兄さんはさあ、剣を打つ才能は無いよね」

小屋を訪ねて来た弟は、喋る剣に釘付けだった目を上げて、可笑しそうに笑った。

母親に似て目元が涼しく、繊細で優しい面立ち、明るい栗色の髪が窓から差す木漏れ日の光にも艶やかだ。

「あら、エリックく兄さま、私はあると思うわ！ ラウル兄さまは鍛冶の天才だと思う」

十歳になったばかりの妹、アデラードはまだ幼さの残る面を紅潮させ得意そうに頷いた。長い栗色の髪を三つ編みにして、左肩の前に垂らしている。大きな緑の瞳が愛らしい。

「他の鍛冶師さんはこんな剣打てないもの」

『そうだそうだ』

「僕は兄さんの打った剣、使い所が判らないけど」

「大丈夫よ、世の中には珍し物好きな方も大勢いるもの。探せば買ってください方は絶対いらっしゃるわ」

「この国広いけど、どうかなあ……」

「王様がもしかしたら買ってくださいるかも」

『王様?! おれは王様にふさわしい剣だぞ！ 早く王様のところに連れて行けー!』

「アデラードは大きな夢を持ってるなあ」

『あんたも大きく夢を持ってー』

「いいから二人とも、早く品物持って帰りなさい。遅くなると危ないし」

二人の会話にいたたまれなさを覚えつつ、ラウルは床に置いてある木箱を示した。

キルセン村の竜舎からの注文の品を納めてある。あと、弟達が街で売って生活の足しにする用と。

尚お客様のお求めは剣ではない。

「はいはい、帰ります。まだお昼過ぎたばかりだけどね」

エリックは肩をすくめてみせた。それでも兄の気遣いへ「有難う」と礼を言うのを忘れない。十六歳だが、時々ラウルより大人びている。

「そうだ、兄さん」

轡くつわや鎧あぶみなどの入った二つの木箱に紐を掛けながら、エリック

クはラウルへ首を巡らせた。

「昨日竜舎で聞いたんだけど、最近また飛竜の密猟者が増えてるらしいよ。ケイが畑仕事帰りに見たことない数人の男が森に入るのを

見たって言って、それでボードガード親方おとといが一昨日、街の領事館に相談したって」

街の領事館、と言った声にはやや複雑な色が載せられている。

この地域の今の領事はセルゲイ・オーランド子爵で、街の警備兵は半分国、半分子爵家の所有だった。

「ここは飛竜の巣からはそんな近くないってことだから、まあ心配はないと思うけどさ」

「そんなんだったらお前たちこそ、帰り道に気をつけるんだぞ。アデラードだっているんだし、わざわざここに来なくてもいいんだから」

アデラードが頬を膨らませる。

「だって兄さま、このところ全然村に来てくださらなかったじゃない」

「先月品物を届けに行ったじゃないか」

「先月でしょう。それに届けたらすぐ帰ってしまわれるし」

妹にむうっと睨まれて、そんなに薄情に見えているのかと、ラウルは自分の行動を反省した。

とは言え余り村にも居難いし、行くと母に毎度毎度「あなたは長男なのよ」だとか「本当の跡継ぎはあなたなのに」だとか「家族のために家を再興しておくれ」などと切々と訴えられ続け、辟易してしまうのだ。

「母さんは寂しいんだよ。生活もまだ慣れないみたいだし」

そう言ったエーリックの微笑みはやや悲しげだ。

良家の令嬢として生まれ蝶よ花よと育てられ、穏やかに不自由なく暮らしてきたのに、夫——ラウル達の父が亡くなってから一気に生活は崩れてしまった。

「まあ、父さんが生きてる時から、うちは没落一直線だったけどね。母さんはそれで苦労したのね。その父さんも酔って川に落ちてあっけなく死んじゃうし」

「農業用水路よ」

「そこ、訂正するかな」

「だって、父さまは領地を見回っていらしたんだもの！ きちんとお仕事をされていたのよ！ お酒だってあの日、そんなに多くは、召し上がってなくて」

エーリックはアデラードの膨らんだ頬と涙の滲んだ瞳を柔らかかな笑みで見つめた。

「うん、わかっているよ、アデル。わかっている」

領地の経営が傾き出してから、父は昼から酒を飲んでいることが多かった。

不慮の死の遂げ方もそれは仕方がないと、ラウルには当時、納得がいつてしまったことだった——

「——そうだな」

ラウルは頷き、エーリックとアデラードの頭を撫でた。

「僕はもう子供じゃないよ」とエーリックが苦笑し、アデラードは嬉しそうだ。

「近いうちに行くよ。母さんにそう言うておいて」

「必ずだよ」

エーリックが木箱を二つとも抱える。

驢馬を引いて来ているので、背中に括り付けて持ち帰るのだ。

行きにはラウルの為に、パンやじゃがいも、塩漬け肉、林檎や野

苺の果実煮、蜂蜜など細々と色々持ってきてくれた。

小屋の扉を開けると、太陽の光と外の冷えた空気がさつと流れ込んでくる。

ラウルは日差しの中の弟達の姿を眩しく見つめた。

「母さんには、剣が喋り出したことは黙っててくれよ」

「分かってるよ。そんなこと伝えたら母さん倒れちゃうからね。でも兄さん、その剣どうするの？」

「迷ってるんだけど、溶かすか埋めようかなって」

『ちよつとちよつとまて！』

「もつたいない、いい話し相手になるじゃない」

『そうだそうだー、おれ様を重宝しろよー重宝ー』

「剣がいい話し相手って何だよ」

常に会話に絡んでくるのやめてくれないかな、と心中呟きなが

ら、ラウルは表に出るとエーリックとアデラードの姿が樹々の間の細い道を曲がって見えなくなるまで見送った。

室内に戻ると早速剣が話しかけてくる。

『あんたのきょうだい、途中からおれをがつつり無視してたよなー』

「珍妙な剣には慣れてるからね」

つい答えてしまった。

4 固い卵

靴底で拳大の石がごろりと逃げる。

きりふり山に近付くにつれ、足元は大きめの石や岩がごろごろと転がり始めた。斜面の角度も少しずつ、きつさを増している。

ラウルはつるはしを担ぎ、朝早くに小屋を出て採掘場へと歩いてきた。

剣を打つ為の鉱石を掘り出すのだ。

出かける間際に一昨日打ち上げた剣が連れて行けと騒いだが、煩いので置いてきた。

「自分が使えぬ剣も打てないんだもんな」

一昨日は鍛冶師としての先行きが不安過ぎて落ち込んだが、だいぶ立ち直ってきた。

やっぱりまだまだもう少し、剣を打ちたい。

胸を張って外に出せる剣が打てるまで。

師匠から引き継いだ採掘場は、きりふり山を少し登った位置にあった。

入口を閉ざしている 門かんときを外し、入ろうとしたラウルの耳に、

聞いたことのない音が辺りに響いた。

獣の咆哮だと思った。咆哮は悲しげに長く、頭上から降り注ぐようだ。

一瞬、空気が冷たくなったと感じ、ラウルは身を一つ震わせ、周囲を見回した。抜けてきた森の小道は、森の奥の曲がっていく辺りまで変わった様子はない。

咆哮に似た音ももう止んでいた。

だが、くらがり森には昔から魔獣が棲む。今いるきりふり山の麓辺りはあまり出沒しないのだが、それはきりふり山の主の縄張りだからだと考えられている。

恩恵に与れ、かつ邪魔だと思われない絶妙な位置がラウルの暮らす小屋辺りなのだ、いつだか師匠が言っていた。

「今の声は、それかな」

見上げた空は灰色の雲で厚く覆われ、山の斜面は中腹を覆う霧に隠されている。

山の主を一度見てみたいものだ、そんなことを思った。

ラウルは採掘場の入り口を潜ると、獣の侵入を防ぐため、扉に中からつつかえ棒を当てた。

掘り進んで洞窟になった採掘場は、入り口からもう十間（約30m）も山に入り込んでいる。

壁に手を当て鉱石達が囁く声を聞きながら、ラウルは奥へ進み、一番声の大きいところで採掘を開始した。

午前十刻ごろから五刻ほど、途中昼食も挟みながらつるはしを振ると、用意した背負い籠は鉱石でいっぱいになった。

これで二振りは剣が打てそうだ。

束の間考え、ラウルは自分の考えを訂正した。

剣は一振りにして、生活の足しになる轡や鎧を作ろう。それなら売れる。

「今日もいい汗かいたなあ」

持って来た蜂蜜酒を一口、二口含んで喉の渇きと疲れを癒し、ラウルはずつしりと重くなった籠を背負い、採掘場を出た。

採掘場に入る前は空模様が怪しかったが、出てみると晴れているか霧の向こうに太陽の丸い光が見えた。このきりふり山だけは一年中その中腹に白い霧を纏わせていて、麓からは山頂を見ることができない。

真っ直ぐ降れば二刻ほどで暮らしている小屋に帰り着くが、ラウルは来た道とは違う、川へと繋がる道を選んで歩く。鍛冶で使う川底の泥を採取したいのだ。

半刻ほど歩くと川の流れる音が聞こえてきた。

『きりよせ川』という名で、山腹から流れ落ちてくる幾筋もの川が寄り集まり流れてくる。

きりふり山を覆う霧が集まり、川になったと言われていた。

森を抜けると川岸に出る。川は幅半間（約150cm）にも満たず細い。

斜面を流れ落ちる水は速く、所々挟まれて落ち込み、小さな段差を作っていた。

乾いた喉を川の水で潤す。四月のこの時期、まだ水はキンと冷えている。

先に岸に枯れ枝を組み火を熾わこしてから、靴を脱ぎ、靴下も脱い

で、ラウルは箒ざるを持って川の中に入った。

深い場所に足を取られないよう慎重に二、三步進む。裸足の指先と足裏で川底の感覚を探り、柔らかい場所を確認すると、手にした箒で川底の泥を掬った。澄んだ水に泥が舞い起こる。

何回か掬っては岸に運び、あと一箇所だけ掬おうと上流を見渡し、た時だ。

ラウルは少し先の岸の傍に、何かが浮いているのを見つけた。

水に削られて窪みになったそこに上流から流れて来たものが溜まっているようで、ラウルが見つけたものは流れに巻かれ二、三度沈んでは浮き上がりを繰り返している。

岸が上がって近付くと、卵だと分かった。けれど大きい。

「大型の動物か、魔獣とか——」

辺りに親が居たら拙い。

だが頼りなく浮き沈みしている卵を見過ごすのも憚られ、ラウルは恐る恐る近寄り岸から腕を伸ばして卵を持ち上げた。

重い。

加えて、両腕に抱えて丁度いいほどの大きさに、改めて驚きを感じる。

「でかい。何の卵だろう」

川底に石など多い速瀬を流れて来ただろうに、卵は上部の数カ所に穴が開いているだけで他はほんの少し傷がついているだけだった。

河面を浮き沈みしていたとしたら、かわいそうだがもう中の生物は。

卵を逆さにして溜まっているだろう水を出そうとしたが、数滴、滴っただけだ。

「ほかも穴が開いてたかな」

卵を起こし、

「びい……」

ラウルは驚いて思わず声を上げた。

「——えっ」

目が合った。

丸い、深い青い瞳。

まるで宝玉のようだと思った。

「生きてる」

応えるように、殻の中の存在がもう一度、「びい……」と弱々しく鳴いた。

ラウルは慌てて卵を下ろし、自分の上着を脱いで包んだ。

「じゃない、卵包んでも」

中の子は孵化同然だ。早く身体そのものを温めてやらないと、と卵の穴に指を掛ける。親指をそのまま入れても十分な穴が空いている。

力を込めたが

「——ツツ、ぐうおッ硬！ かつた！」

ラウルは思わずまじまじと卵を見つめた。

全く割れない。

もう一度指をかけ、今度は全身の力を込めた。

「——う、ううおおおあ！ え、何だこの卵！？」

殻は確かに分厚いのだが、もう既に穴が空いているのにこんなに割れないことがあるだろうか。

ラウルは一瞬躊躇したものの、すぐに道具袋の中から小ぶりの金槌とのみを取り出し、^{のみ}鑿の先端を上着の上に横たえた卵の、穴に当てた。

「お前、奥に行ってる！」

声をかけ、金槌を鑿に振り下ろす。

一度、二度。

それでも割れない殻に内心舌を巻きつつ、三度目、金槌を鋭く振り下ろした。

ガキンツ、と派手な音がして、ようやく殻に軋が入る。

生まれる時一体どうやって殻を破るのかと、そんな疑問を奥歯に噛み締めながらもラウルは殻に手をかけて力を込め、今度こそ卵を割った。

「冷たっ」

ラウルは手のひらを見た。掴んだ殻の破片と

「氷——？」

薄く張った氷。しゃりしゃりと手のひらで微かな音を鳴らし、溶けた。

卵の中に、氷——、と持ち上げた卵から、滑り出る。

ラウルの膝の上にぐったりと転がり出たのは、蜥蜴——

「……えっ」

違う。

首と尾が長い。

鱗は真っ白だ。

そして、空を飛ぶ為の翼。

すぐに思い浮かべたのはキルセン村の竜舎だ。飛竜を卵から孵して育てている。

「——えと、飛竜の、子どもか……？」

「びい」と弱々しい鳴き声に我に返り、ラウルは子飛竜を上着に包み込んだ。

その時、ラウルの脳裏に小さな声が流れ込んだ。

——おかあさん

思わずそつと抱きしめる。

それから、声が響いたことに改めて驚いた。

ラウルは人以外の声が聞こえる体質だが、鉱石などや例えば家具、植物に限られ、これまで動物の声を聞いたことはない。

ともかく上着の中の小さな飛竜の仔を慰めるように撫でた。

巢からどう運ばれたのか、本当なら殻を破って生まれたこの子を迎えるのは親だったはずだ。

「……冷え切ってる。飛竜って冷えて平気なのか？ とりあえず温めた方がいいのか？」

岸に熾していた火へと寄り、ラウルは子飛竜を抱えたまま火にあたった。

改めて姿を眺める。ラウルの上着の中で、畳んだ翼に顔を埋めるように縮こまっている。

体長は頭から尾まで、一尺五寸（約45 cm）ほど。

鱗は真っ白だが、竜舎で孵る飛竜も最初は色が薄いと言う。

子飛竜は火の温もりにあたり、安堵しているように見えた。温まれば次に気にすべきは餌だ。どのくらい食べていないのだろう。

「孵化したてだと、餌は……」

飛竜は雑食で食べられないものは少ないと聞くが、生まれたてなら柔らかいものがいい。

ラウルは自分の鞆から昼の残りのパンとチーズ、蜂蜜酒を取り出した。

焚き火の上に小さな鍋を置く。自分で打った鍋なので少し無骨だ。

そこにパン、チーズを入れ、蜂蜜酒をひたひたに注いだ。

しばらくすると蜂蜜酒が煮立ち始めた。チーズがとろけパンと絡み合う。蜂蜜の甘い香りが辺りに漂う。

子飛竜がびくりと頭をもたげる。

「匂いに誘われたかな？ 食べられるといいけど」

酒精を飛ばし、パンもチーズもとろろにするると火からおろして焚き火のそばに置いた。

木のお椀にほんの少し注ぎ入れ、今にも飛びつきそうな子飛竜を抱えて抑え、人肌程度に冷めるのを待った。

「もういいかな」

意味が解ったのか、子飛竜は飛び出すようにお椀へ長い首を突っ込んだ。

音を立ててお椀を揺らし、まだ不器用ながらも夢中になって食べている。

懸命な姿に微笑ましさと心に灯るような温もりを覚え、ラウルは子飛竜の首を撫でた。

お椀はあっという間に空になり、子飛竜が頭を巡らせもつと欲しいとラウルを見つめる。

きらきらと期待に光る瞳は、殻の中から見えた時は濃い青だと思っただが、陽の光の下で見ると澄んだ空色だった。朱金の虹彩が見える。

「ちよつと待って」

鍋の残りが程よく冷めているのを確認してもう一杯注ぐ。途端に首を突っ込んだ子飛竜に、ラウルは今度は声を出して笑った。

「お腹空いてたんだねえ。まだあるからいっぱい食べな」

子飛竜が一旦顔を上げ、了承なのか期待なのか、きらきらした目を向ける。

合計五杯、食べ終えた時には小さな鍋はすっかり空で、それでも子飛竜は物足りなさそうだった。

「よく食べるなあ。きつと大きくなるね」

生まれたてながら足の大きさも立派だ。

爪もまだおとなし目だが、立派な鉤爪になりそうだった。

そういえば、とラウルは思い起こした。

あれほど硬かった卵の殻に綺麗に空いていた幾つかの穴、あれはひよつとすると獣の爪が付けたものではないだろうか。子飛竜も大きくなればその位の爪になりそうだ。

「でもまさか、親が爪で穴は開けないよな」

殻を破るのを手伝って、だとしたら無いこともないか。

それとも獣が巢から卵を盗もうとしたか。

「うん……この子はどこから来たんだろう」

ラウルは腕を組んで思案した。

周りを見回しても、樹々の枝の向こうの空を見透かしても、やはり親らしき姿は見当たらない。

状況からすると、川のもっと上の方から流されて来てしまったのだろう。

「どうするかな」

巢に返してあげたいが、飛竜の巢がある場所は竜舎だけが知っている。飛竜の卵を密猟から防ぐ為だ。

飛竜は重要な移動手段であり、許可を得た竜舎が卵から育てて人を乗せられるように整える。

竜舎は所有する飛竜の番^{つがい}が産んだ卵を育てるか、森で卵を採取しに行くのだが、乱獲は固く禁止されていた。

飛竜は春になると、一度に二個から四個の卵を産む。

採取できるのはその中から一個だけ。そして森に入れるのもこの四月のひと月だけ。厳正な決まり事だ。

破ればその竜舎は許可を取り消され、関わった者は牢へ直行で罪が軽くても五年は出られない。

竜舎の職人は飛竜養育官とも呼ばれ、国が決まり事を整えている国家的重要職だった。

おまけに飛竜の巢から卵を取ってくるのは命懸けの勇敢な仕事でもある。

だから辺鄙なキルセン村に正式な竜舎があることは、村人達の誇りでもあった。

「取り敢えず、今日は家に連れて帰って、明日竜舎のボードガード親方にどうしたらいいか聞いてみよう」

屈強なボードガードの姿を頼もしく思い浮かべて頷く。

もしかして、エーリックの言っていた密猟者に巢が襲われたという可能性もあるかもしれない。情報を入れておかなくては。

それから。

「おかあさん」

ラウルの脳裏に響いた声。

通常生き物の声は聞こえないのに、とても強く、そして切なく届いた。

「お母さんに会いたいもんな」

早くこの子を巢に帰してあげよう。

見ればお腹が満たされて落ち着いたのか、ラウルの上着を軀の下に敷いて翼の下に首を突っ込み丸くなっている。

健やかな寝息をたてる子飛竜を見つめ、ラウルは母の元に帰してあげたいという思いを一層強くした。

荷物を担ぎ、子飛竜を上着ごと体の前に抱え、ラウルは薪に水をかけて火をすっかり消すと歩き出した。

きりよせ川の川岸に沿ってしばらく降り、途中で森の中に入る。

5 襲撃

両側に水^{みず}槽^{なら}の木が続く古道を歩く。

緩やかな風が肌をやさしく撫でる。揺れる梢。

午後の四刻、もうそろそろ森の中には陽の光が届かなくなる頃合
いだ。見上げる頭上の枝葉の間には青い空が垣間見える。

鳥達が囀る声。短く澄んだ音を重ねて鳴くのはハイタカだろう
か。

珍しい拾い物をしたものの、いつも通りの森の爽やかな香気と穏
やかさに浸りながら、ラウルは森の小径を歩いていった。

——その後を。

小道に落ちた木の枝を踏む足音を極力抑えてごくゆっくりと、付
かず離れず追いかける影があった。

事が起こったのは、夜も更けぐつりと眠りに落ちていた頃だ。
昼に拾った子飛竜は夕食も盛大に胃袋に収め、食糧庫に保存して
いた。パンをすっかり食べ尽くしてしまった。

明日、村に行ったら多めに買い込んでこなければならぬと、ラ
ウルは微笑ましき大半の溜め息を零した。

その間、おととい打ったばかりの剣はあれこれと話しかけて来て
いたが、時折返事をしてしまいつつも概ね流せた。

居間と台所と寝室と、三つしかない部屋の寝台でラウルはいつも
のように寝^{やす}み、子飛竜は寝台横の台に置いた籠の中で丸くなって

いた。
眠りも深くなる、深夜二刻の少し前——
不意に沸き起こったけたたましい声に、ラウルは叩き起こされ
た。

『起きろー！！！！』

金属を打ち鳴らすようだ。

「——なっ、何だ何だ?!」

『起きろ!!! ぼけっとすんな!』

鋭い警告の響き。

すぐ隣の部屋からだ。

だがここにはラウル以外誰も——

「——剣!？」

慌てて飛び起き、ラウルは寝台から滑り落ちた。思い切り尻を打つ。

「いてて」

声はまだ続いている。心の奥底に不安を掻き立てる。

さっと目を向けた子飛竜は籠から首を持ち上げている。その瞳がぱちりと瞬いた。

「ここにおいて」

隣室——台所の食卓に剣を立てかけたままだ。

扉の把手を鳴らして飛び込んだラウルの鼓膜を、途端に剣の音が震わせる。

『襲撃だ!』

「しゅう——」

言葉の意味を飲み込むのに、一呼吸かかった。

同時に。

派手な音を立て、窓硝子が割れ、石か何か、塊が部屋に飛び込んだ。

「!」

降りかかる破片に顔を腕で覆う。

室内は暗くぼんやりとしか見えないが、今いる位置の右、裏庭側の窓だ。向こうの夜の中に火が揺れるのが見える。松明か。

“襲撃”

何で、と思考を巡らせる前に、割れた窓は更に叩き壊された。

窓を乗り越えようと人影が動く。

ぞっと腹が冷える。

「だ、誰だ!」

人影は一度顔を上げたものの、構わず窓を乗り越え室内に降りた。それ以外にもまだ外に人がいる。入ってこようとしていると分かった。

何が起こっているのか判らない。強盗か。もう一人、窓を乗り越える。靴音。

ヒヤリと、命が失われる恐怖を感じる。足が震えた。

侵入者達の間を遮るのは木の食卓だけだ。

「で、出て行け! 人の家に勝手に……」

『俺を使え!』

声が耳を叩く。食卓に立てかけておいた剣に目が行った。

ラウルは剣に手を伸ばした。柄を握り、鞘もないそれを取り上げる。

構えようとしたラウルの目の前に、白い光が過ぎった。瞬きの

後、剣が松明の灯りを弾いたのだとわかる。過ぎよったのは短剣だ。

幸い掠めもしなかったが、切先の鋭く冷えた名残に背中が凍る。

よろめいた足が椅子に引っかかり、ラウルは派手な音を立てて床に倒れ込んだ。

咄嗟に身構えたものの侵入者はラウルを跨ぎ越し、床を無骨な足音で鳴らす。最初より増えて、三人。

(まだ外にいる)

ラウルはしゃがんだまま背中を壁に寄せ、震える手に剣を握り直した。

一体何の為に、こんな森の奥の、何もない場所に。

疑問に覆い被せるように一人が荒っぽく声を上げる。

「いたぞ！」

三人はラウルには背を向けている。視線の先は寢室だ。

(いたって何が)

「飛竜だ」

その言葉にはっとした。

「密猟者——！」

思わず叫んで立ち上がる。

全員がラウルを振り返った。

部屋にいるのは三人。慣れて来た目に、男達のそれぞれ短剣が握られているが見える。

まずい。

「黙らせろ」

一人が言い、すぐ前にいた男がラウルへと踏み出す。

ラウルは剣を正面に構えた。

ラウルの手元の剣に気付き、男がびくりと足を止める。

男の手には短剣、ラウルの剣は刃渡り二尺(約60cm)近くの片

手剣だ。一見すればラウルに分がある。

「おい、剣を持つてる、厄介だぞ。こいつ先に殺っちまおう」

「甘ったれんなよ」

舌打ちを返したもう一人もラウルへと足を戻す。

ラウルは剣を握り直した。さっきから鼓動が激しくて心臓が爆発しそうだ。

『気を付けろよ』

ラウルと自分達との間から上がった場違いな声に、一瞬男達は怯んだ。

「もう一人いるぞ！」

「何だ、どこに——暗くて見えねえ」

「とにかくそいつ殺せ」

一人が食卓を回り込む。正面に一人、食卓を挟んで左側にもう一人。

じりじりと下がるラウルの背中は部屋の角に早くもぶつかりそうだ。

寢室、そして居間への扉は男の向こう。正面の食卓の左右に、三人の侵入者。

逃げ道が完全になくなった。

(どうすれば——)

ラウルは剣で戦ったことなどないのだ。

剣術の稽古を真面目にやってこなかったことを今更ながらに悔やむ。

(でも、こいつら、密猟者だ)

飛竜を狙っている。

あの小さな飛竜を連れて行かれない。母親の元に帰すのだ。

(どうしよう——)

『俺の言う通りに動けよ』

耳に届いたのはのんびりとした剣の声。

男達はまた一瞬怯んだ。

「やっぱりいるぞ」

「どこだ、もう一人」

『せーの、右ー！』

どうやって、と問う余裕もない。

ラウルは片手剣の柄を両手で力いっぱい握り、剣を右に思い切り振った。

剣が勝手に動くようだ。

暗がりの中、右手にいた男の短剣を、ラウルの切っ先は寸分の狂いなく弾いた。

剣の勢いに引っ張られて身体が泳ぐ。

『馬鹿！ 片手で使えー！』

と言われても手が離れない。

『左返せー！』

呼吸を喉の奥に飲み込んだまま、身体ごと左へ振る。飛びかかろうとしていた左側の男の鼻先を切先が掠める。

ラウルはつんのめり食卓に腰を思い切りぶつけた。

「痛っ」

『そんな暇ない！ 左上ー！』

振れない。剣を握ったままの両拳を食卓についている。体勢が悪い。

頭の左上から、短剣が突き下ろされる。ラウルの後頭部へ。

笛に似た、鋭い鳴き声が暗い部屋に響いた。

寢室の扉の近くにいた男の頭上へ、白い影が飛び掛かる。

気付いたラウルは咄嗟に声を上げた。

「駄目だ、戻って――！」

まだ不十分な鉤爪で男の頭へ掴み掛かる。

飛び出したラウルの後頭部に短剣の柄が落ちた。強烈な痛みに呻き、支えるものもなく床へ倒れる。

床で動かなくなったラウルを見て、男の一人に掴みかかっていた子飛竜はもう一つ高く鳴き、まだ小さな顎を男達へと開いた。

そこへ、空気を呼び込んでいる。

ラウルを殴り倒した男が何かを投げる。夜の中で広がったそれは、四隅に重石を付けた捕獲用の網だ。

網は子飛竜の翼に絡まり、そのまま床へと絡め取り落とした。

力が入らず起き上がるにも身体が動かないまま、ラウルは男達が網ごと子飛竜を掴み上げるのを目で追った。

「ま……」

掠れた声も、喉から出て行かない。後頭部がずきずきと鈍痛を訴えている。

「捕まえたぞ、行こう」

「こいつは」

「念の為に殺しとけ」

右手にいた男の靴先が、ラウルの目の前の床を踏む。

（殺される――）

身体が起こせない。頭を打ったからというより、純粹に怖い。

殺される。

どうにか剣を握った。思うように力の入らないその手が剣ごと震えている。

――唐突に。

ラウルの手の中で剣は硝子を搔くような、耳をつん裂く音を上げた。

高く、長く。

「何だ!？」

室内を圧してどこまでも続く。

家の外で、どん！ と大きな音がした。

続いて金属が打ち合うような音。

がしゃん！

「誰かいるぞ！」

「くそ、いい、引き上げろ！ 獲物は手に入れた！ 急げ！」

足音がどかどかと床を踏み鳴らし、侵入した窓から外へ、移っていく。

剣が鳴らす音に追われるように窓の外の松明が遠ざかる。

下草を踏み荒らす足音が消え、束の間、室内は塗り潰したような夜の闇と静寂に満ちた。

いくつ呼吸をした後か――

静寂に鼻の鳴き声が響き、ラウルはびくりと身を縮め、我に返った。

息を吸って、吐く。

指先に力を入れると、どうにか動いた。

椅子と食卓に捕まって身を起こし、まだ震えている右手を同じく震えている左手で掴む。

剣を見る。

視線が返った気がした。

『大丈夫かー？ 奴等逃げてくれて良かったなあ。心配したぞ、あ

んた全然^{おれ}剣をつかえないしさー』

のんびりとした声が、今起こったことが夢だったかのように思わせる。

けれど現実だ。

ラウルは立ち上がった。

「今すぐ追わなきゃ」

『ええ、何だよ』

「あの子を連れて行かれてしまった」

『あの竜かー？ ありや仕方な』

「あの子に助けられた。このままじゃどつか良くない竜舎に売られて、酷使される。あの密猟者達だって捕まえないと」

盛大に呆れた声が返る。

『あんた、自分を解ってねえなあー！ あんたにそれは無理だよ。あいつら三人だけじゃねえぞー？ もっといるだろ、一人でどうすんだよー』

ラウルはぐつと詰まった。

「でも」

何がでも、だと我ながら思うが。

「本当は、俺の方が助けてあげなきゃいけないのに」

やや呆れた、けれどどこか温かい溜息の気配。

剣なのに。

「今、追えば、せめて行き先だけでも分かる。それを村に知らせて、ロッソの警備兵を呼ぶ」

ラウルの名前では警備兵を出さないかもしれない。

けれど竜舎が呼べば必ず出すだろう。

それか、徒歩で三日は距離が離れてはいるが、エル・ノーの駐屯兵か。

剣はもう一度、人とまるで変わらない溜め息を吐いた。人の姿だったら肩でも竦めているのだろう。

『どうやって追うつもりだよ。言っとくけどおれは奴らの行き先まではわからないぞ』

一緒に行ってくれるつもりかと、ラウルはちよっと笑った。心強い。

「森の樹とかに聞きながら行く。得意技だ」

彼等の声を聞く。

時間が経つ前なら、迷わず追える。

『まあ、その特技のおかげでおれが喋れるんだけどさ、鍛冶師なんだからちよっとくらい剣使えるようにしとけよ』

「ずいぶん前に習ったは習ったんだけど、急には、ちよっと……だいたい鍛冶師が剣を使えるとも限らないし」

そもそも自分は鍛冶師とも主張できない気がする。

『今度から勝手に動いていいか？』

「え？ う、うん」

勝手に……？

いやまあ考えてみれば、ラウルの意志があっても変わらないというか、かえって足手まといというか。

けれど。

ラウルはゆっくりと、改めて、息を吐いた。

「ありがとう、助けてくれて。君がいてくれて良かった」

そう言うと、剣は不思議なことを言った。

『おれだけじゃないぞ。あいつらもだよ』

「あいつら——？」

母家から一間（約3m）ほど離れた場所に建つ鍛冶小屋に入り、ラウルは驚いた。

手に掲げた角灯の投げる灯の中、壁に飾っていた十振りの剣が全て、土の地面に重なり合って倒れている。

先程密猟者達を驚かせた音はこれかと、ラウルは何度も目を瞬かせた。

一番初めのどすんという音は、立て掛けていた大剣が倒れたものだろう。

次に響いた派手な音は他の剣達が重なり合って落ちた音。

眩しいのは重なり合う剣の二番目くらいで光っている剣で、あれは打ち上げた瞬間からぎらぎら光り始めたやつだ。

『あ、まずはリトを早く戻してやれよ』

「リト？」

『名前だよ』

「なま、え……？」

戸惑うラウルに構わず、剣の切先が勝手に動き、重なり合う剣の一番上の一振りを示した。

ラウルが打った中でも一番優美な剣身をしている。

鉱石を掘り出した時から誰よりも美しく打ってくれと訴え続けていた。

『リトスリトス。あいつめっちゃ綺麗好きで自分一番で誰より大切に扱われないと怒って手をつけられないらしいぞ』

「——そうなんだ……」

『おれがリトって雑に呼んだから今怒ってる』

「ええ……」

ラウルは首を振った。

ちよつと言っていることがすぐには飲み込み難いが、とにかく今は先ほどの男達を追いかけるのが先決だ。

地面に倒れた剣を手早く壁に戻し——リトスリトスは思わず恭しく扱った——、最後にやや苦勞して大剣を立てかける。

それからもう一度、壁の剣達を眺めた。

男達に対抗するには。

よし、と気合を入れて頷き、大剣に手を伸ばす。

「じゃあ、この剣を持って行って」

『馬鹿なの？』

「ひどい」

切れ味鋭い。

『おれを満足に使えないあんたにこいつが振れる訳ないだろ——』

「うう」

『今回はおれと、そうだな——』

喋る剣はつつ、とまた切先を動かした。

ギラギラと光りを放っている剣を示す。

素材の時に「誰よりも輝きたい」と主張した剣だ。

『フルゴルだ』

名前だな、とすぐ分かった。

煌めくとかそういう意味だ。

『こいつを連れて行こう。森は暗いから』

「あ、うん」

分かる。

ラウルは割られた窓の下に立ち、まずはすぐ前に立つ樫の樹の幹に右手のひらで触れた。

どこへ行っただろう、と問いかけると、

——右の道を行つた

と深い声が答える。

これが本当に声として耳に聞こえているのかはラウルには分からない。弟達には聞こえないらしいから、証明ができないと言うべきか。

ともかく示された道へ、夜の森を歩き出す。

——真つ直ぐだ

——わたしを右へ進んだ

——水みずなほ槽達の古道を抜けていった

耳に響くのは自分の靴底が落ち葉と枯れ枝を踏む音と、夜の向こうの鼻の鳴き声。

手には星の光を集めたように、内側から輝く剣。

腰に帯びたもう一本はずっと黙っている。あんなに喋り続けたのが嘘のようだ。

ふと見れば、樹々の間に小さな光が散っている。釣鐘型の小さな花を咲かせる地星草で、紫や白の花が光を含んで僅かな風に揺れている。

幻想的な、静かな夜の森の中を一步一步、樹々に訪ねながらラウルは確実に男達の後を追いつく。

まるで穏やかな散歩に見えるが、内心では剣もまともに扱えない自分が大胆なことをしている不安が一步ごと、川底に足を踏み入れたときに上がる泥のように舞い起こっていた。

心臓が鼓動を夜の中に散らしている。

『ところでご主人』

調子つ外れの声が腰の辺りから届く。

ラウルは思わず飛び上がった。

「——な、な、何」

喋り続けるか喋らないかのどっちかにして欲しい。

でも少し、迫り上がっていた不安が落ち着いた。

「ていうか、ご主人？」

『おれを打ち上げたんだからご主人だろ？』

「別の呼び方がいいなあ」

『考えてたんだよーおれ』

「何を？」

もはや普通に会話しているが、先ほどまでの無限に繰り返される不安よりずっといい。

一人じゃないと安心できる。一人だが。

『ご主人はへっぽこだけどおれみたいな優れた剣を生み出せる力もある』

それは結論へっぽこで纏まとまるような。

「あまり嬉しくないような」

『何言ってるんだ、最大の賛辞だぜー。賛辞は素直に受け取るもんさ』

「自画自賛のような」

ラウルを無視して剣はそれでさ、それでさ、と嬉しそうに続けた。

『今度、打った剣全部並べてこの国の王様にでも売り込もうぜー。面白がって取り立ててもらえるんじゃないか？』

やっぱり面白いと思ってるんだな、とラウルは内心呟いた。

「国王陛下にはもう全然剣は必要ないんじゃないかなあ……ん……まあもしかしたら逆に興味をお持ちになるかもしれないかな」

とは言えそれは国王自身の剣に、ではないだろう。

「まあ、そもそも俺なんかじゃお会いすることもできないし、そんな未来もあるといいよねって」

『何言ってるんだ』

心底呆れた声音だ。

『無欲とかってさ、いいもんじゃねーぞ。怠慢ってるんだ。自分で動かないと期待だけしてたって誰も拾ってくれねーよ』

「厳しいなあ」

グサリときた。

ふっと思ひ浮かんだことがある。鍛冶のことではないけれど。

確かに、無欲の振りをして誤魔化しているのかもしれない。

弟。妹。

母の願い。

それと。

(うーん、にしても)

この剣、何歳生きてきたんだろうと思わせる。つい悩みを相談しなくなる。

水櫃の続く古道を抜けると、きりよせ川の川沿いに出る。昼間、子飛竜を見つけたのはもう少し上流の川岸だ。

この辺りは子飛竜を拾った場所まで、川岸しか歩ける場所がない。

川を辿り見覚えのある場所へ着くと、狭い河原の大きな岩に手を触れ、ラウルは目を閉じてまた密猟者達の行方を問いかけた。

——私を左に巡って、小径を森へ入っていった

小径の入り口に立つ櫛の木に振れる。

——少し前に通った

ラウルは思わず手にしていた剣を背後に隠した。灯りが見つかってしまうかもしれない。

『布で隠せ。おれと持ち変えろ』

「うん」

ギラギラと光る剣を布で包む。たった今まで照らされていた周囲がふっと暗くなり、川面を渡る風がより冷たく感じられる。

一度身を震わせ、ラウルは手元の剣達を見た。フルゴルは布の奥で相変わらずぎらぎらと光り、包んだ布の隙間からわずかに光をこぼしている。

きちんとした鞘を作ってやらないとな、と思った。他の剣達にも。

この喋る剣は鞘に入ったらお喋りが止まるのだろうか。そういえば。

「君——、名前は」

『ないぞ。欲しいぞ』

「自分で決めてないなら、俺が名前をつけてもいいかな」
喋る剣さんとはさすがに呼びにくい。

『付けてくれるのか？ よろしく頼むぜ！』

と言われ、ラウルは束の間考えを巡らせた。

すぐに思い浮かんだ単語はひとつ。

「ヴァースにしよう。言葉に連なる意味がある」

『ヴァース！ ヴァース！ いいな、いいな！』

嬉しそうだ。

ラウルは口元に笑みを滲ませた。

「他の剣はみんな自分で名前考えてるのかな」

『主張強い奴しかまだ聞いてないな』

あの主張だらけの剣達の中でも主張の強い弱いがあるのか。

まあ帰ったら聞いてみて、まだ無いのなら考えよう。

「ヴァース、君も一緒に」

『おっと、静かに』

ヴァースの声もまた、これまでで一番小さく抑えられた。

『近い』

ラウルはそつと足を止めた。

傍らの樹に手を伸ばし、触れる。

声があった。

——その奥、左に二百歩ほど入ったところに小屋がある
ぎゅっと、心臓が縮み上がった。

極力音を鳴らさないよう、地面に足をそつと下ろしながら進む。

五十歩ほどそうやって進んだところで、重なり合う樹々の間にちらちらと微かな灯りが見えて来た。

はじめは誰かいるのかと怖気付いたが、よくよく見ると動かない。

最後の樹が小屋と言っていたから、おそらく窓から洩れる明かりなのだろう。

じりじりと近付くにつれ、夜目にも小屋の姿が見えてきた。

「こんな場所に——」

石積みの小さな小屋だった。四角く切り出し重ねた石には苔が蒸し、小屋全体を重苦しい印象にしている。足元は雑草で生い茂げり、打ち捨てられて長いように見えた。

ラウルが暮らすところもなかなか手狭てせまではあるが、ここは例え

樹木伐採の仕事の休憩小屋程度の大きさだ。

右手の奥に柱四本に屋根だけという物置があり、そこに長い木材が数本寝かせられているから、実際そうだったのかもしれない。

(最近、くらがり森で木材の伐採をやってるって聞かないし)

ラウルの父が付けていた財産台帳でも、くらがり森での林業の記録があるのは五年前までだった。

都からイル・ノーの街まで物流が飛躍的に改善して、もっと安全に伐採できる森から木材が運ばれるようになった。

(それもうちの収入が、落ちる原因の……)

鼻が思いのほかすくそばで鳴き、ラウルは肩を跳ねさせた。

逸れていた思考を引き戻し、小屋に集中する。

手元でヴァースは黙っている。ただ手の中の彼の意識を感じられ
た。

「――」
そつと息を吐く。

自分がこれからやることをもう一度確認する。

無理はしない。絶対に。

まず、気を付けて近寄って、中にあの男達がいるのを確認する。

確認したら朝を待たず村に行つて竜舎に報告しよう。

竜舎からロッソの街に応援を呼んでもらうのだ。

応援と一緒にまたここに戻り、小屋に踏み込んで、あの子飛竜を
助ける。

(よし)

深呼吸を、一つ。

(もっと、近付いて……)

灯りの漏れている窓から中を覗けそうだ。

近付くほどに体内で鼓動が音を増し、乱打している。

ラウルは時間をたっぷりかけ、どうにか灯りを湛えた窓の側に寄
つた。

さつきと逆だな、と何とも言い難い難い気持ちになる。あの男達も同
じようにラウルの家の窓を覗き込んだのだろう。

あの時のことを思い起こし、今更ながらに背中が粟立った。

煤けて半ば曇っている硝子窓の隅から室内をそつと覗き込む。

暗い森に慣れた目には室内が眩しくさえ感じられた。殴られた頭
は正直まだ痛い、それでも大きな怪我がなく済んでよかった。

覗き込んだ室内はほぼ物置に近かった。部屋も一つだけのよう
だ。

真ん中に小ぶりの木の机が一つ。その前の椅子に男が一人、机に
両足を乗せ眠っている。もう一人、椅子の背に身体をだらりと預け
ている男と。

(あいつらか、どうか――)

襲われた時は暗かったから、確信は持てないが。

壁際に木箱が幾つか置かれている。上に重ねるように置かれた鉄

格子の――檻。

その中に。

「いた」

あの子飛竜、とラウルは目を凝らし、そのまま見開いた。

「え、違う」

子飛竜は真っ白な鱗をしていたが、檻の中に入っているのはどう
やら緑鱗に見える。

その隣の檻も、その隣にも同じく緑鱗の飛竜の幼竜が入れられて
いた。おそらく生まれたてだ。

眠っているのか、檻の中で軀を伏せている。

壁に寄せて積まれた檻はラウルから見えるだけでも七つあるが、
部屋の様子からして今覗いている窓側にもありそうだ。そしてその
どれにも飛竜が入れられているようだった。

「竜舎――」

『な訳ねえ』

そうだ。こんな森の奥の、こんな狭い荒れた場所だ。
「けどあんなに」

村の竜舎のボードガード親方は、慣れた、飛竜養育官を多く抱える竜舎でもひと季節に四、五個、卵を採取できれば上出来だと言っていた。

そして採るのはあくまでも卵だ。一つの巣から一つだけ。生まれた後は手を出さない。

もうひとつ、ボードガードから聞いたことがある。ボードガードの言葉を借りれば、

「密猟者^{ヤツラ}は巣から根こそぎ持っていきやがる」

卵から孵すよりも時間も手間もかからない。

買い取る竜舎は当然真つ当な許可を得ている所ではなく、飼育環境は劣悪だ。

何よりも許せないのは、とボードガードが低く押し出した言葉。

「あいつらは大抵、親を殺してく」

追ってこられると面倒だという理由で。

その後のことを何も考えない、完全な荒らし行為だ。

小屋に今いる飛竜達も、みなそうして連れてこられたのだろうか。

(あの子も、もしかしたらそうだったのかもしれない)

子飛竜の青い、綺麗な瞳。

本当は親の姿を写しているはずだった。

ラウルは強い憤りを覚え、手にしていた剣の柄を握りしめた。

「——村に、知らせに……」

『まづい』

ヴァースが緊張を帯びた声を発した。

『誰か来た』

ラウルは首を引つ込め息を殺したが、室内の男達は眠ったまま、扉が開く気配もない。

「大丈夫——」

ヴァースの声は更に、緊張を増した。

『違う、後ろからだ』

『後ろから来るぞ——』

ラウルが辿って来た道から。

息を呑み振り返った森の奥に灯りがちらちら揺れている。近付いてくる。灯りを遮り揺れる人影と、話し声。

左右に首を巡らせ隠れる場所を探す。

小屋の周囲は雑草が伸び放題で枯れ枝が転がり、急げば絶対に音が立つ。さすがに小屋にも近付いて来る方にも気付かれてしまう。

這うように一歩、二歩。

『急げ、小屋の後に』

それでもヴァースが急かすのは、近付いてくる灯りとの距離は、思った以上に無いからだ。

焦るラウルの三步目は、草むらの中にあつた枯れ枝を踏んだ。

枯れ枝の折れる乾いた音が立つ。

「誰だ！」と叫びが上がった。数人が小道を駆け寄ってくる。三、いや四人——

小屋の中でも靴音がする。

草むらの中で中腰の体勢で竦んだラウルへ、角灯の灯りが差し掛けられた。角灯の向こうにいるのは四人か。

「てめえ、ここで何してる」

「小屋を見られたんだ、やばいぞ」

小屋の扉が開いた。出て来たのは四人——もう二人、室内にいたのだ。

合わせて八人。

森を歩いてきた四人の真ん中の男が声を荒げた。

「見張りは何やってんだ見張りは。ベン、テメエはよ！」

そう言って男は肩に担いでいた麻の袋を地面にどざりと下ろした。

弱々しい鳴き声がかぐもって聞え、麻袋がごそごと動く。

麻袋はべとりとした液体で黒く汚れている。

ラウルは思わず正面の男を睨んだ。

「それも、飛竜なのか」

正面の男がラウルを見下ろし、顔を歪める。

角灯の汚れた硝子を通した灯りに男の白目が光る。

「知らねえよ。おい、こいつを中に連れてって、丁重にもてなしてやれ」

抵抗する間も無く男達はあつという間にラウルの剣を二本とも奪うと、腕を掴んで引きずり、小屋の中に蹴り込んだ。

肩から床に転がる。

「いつ、て」

起きあがるうとした胸の上に塊が落ちた。足だ。ぐう、と上がつた呻き声が喉の奥でくぐもる。

「お頭、こいつ剣を二本も持ってんぜ」

お頭と呼ばれたのはラウルを小屋へ入れるよう指示した男だ。

踏みつけられたラウルの横にしゃがみ、睨め下ろした。

「お前、竜舎か？ 軍か？ 仲間が近くにいんのか」

「俺は」

軍、と言った方が相手は恐れてくれるかもしれない。

「そうだ、軍——」

「お頭、こいつ、さっきの小屋の奴だ」

ラウルを遮って、右にいた男がラウルを指差した。

「小屋？ ああ、珍品連れてた奴か」

へえ、とラウルを踏んでいる男が笑う。

「何だ、お仲間か」

子飛竜の他にも檻に捕まっている子飛竜がたくさんいる。ざっとみても十頭。

ラウルの視線に気付いて男——首領のようだ——がますます睨む。

「うちの商品掠めようってか」

「違う！」

咄嗟に声を上げ、自分で怯む。

けれど。

檻にいる、十頭もの飛竜の子ども。

「こ、こんなにたくさん——卵でもなくて……」

採取するのは卵だけ。

生まれた後は手を出さないのが竜舎の鉄則ではないのか。

そう思うと勇敢でもなく武芸もろくに身につけてもないのに、

押し出す声が止まらなかった。

「す、巢に返してやらなくちゃ——今なら、まだ、親竜だつて受け入れて」

「今なら——？ そうかねえ」

「そ、そうだよ、まだ……」

ラウルの横にしゃがんでいた男——首領が立ち上がる。

首領が右手を振り、踏み付けていた靴底が浮いた。

抜け出ようとしたラウルの右頬に、石が当たったような痛みが走った。靴先が蹴り付けたのだとわかる。

呻きも立てられず転がり、硬いものに身体がぶつかる。机の脚

だ。痛みに自然と涙が滲んだ。

「巢なんてもうねえよ」

首領はラウルの髪を掴んでひっぱり、見下ろしてせせら笑った。

「同業でもねえならますます殺すしかねえ」

見下ろす複数の視線。ラウルを囲む男達の向こう、今いる左側に粗末な机がある。

剣は二本ともその上だ。

素早く立ち上がって手を伸ばせば、なんとか取れる、と思う。

(ヴァースを)

呼吸を測って身を起こそうとした肩を、再び首領が蹴る。

ラウルは弾かれ、机の脚に背中をぶつけた。

歯を食いしばり、ラウルは机の脚を掴むと、身体を懸命に起こした。自分では最大限の速さで、机の上に手を伸ばす。

「ヴァー……」

「おい、そいつの剣をよこせ」

首領の声に机の横にいた手下の手がさっと伸び、ラウルの指先が

掴みかけていた剣を取り上げた。

ヴァース

剣を受け取った首領は鞘もなく剥き出しの刃を、机に縫った

まま振り返ったラウルの首筋に当てた。

薄暗い蝋燭の灯りの中でも、嘲り含みの笑みがラウルへ向けられているのがわかる。

「ずいぶん切れ味良さそうじゃねえか。二本も剣を大事に抱えて勇ましいこった。テメエのこの剣で首を搔つ切つてやるよ」

「おい、もう一本剣の布を剥がせ」

続く指示に、手下の一人が机に残っていたもう一本の剣に手を伸ばした。

首領が顔を上げその手下を睨み付ける。

「何やってんだ、俺のもんだ、勝手に触んじゃねえ！」

「え、今、あんたが剥がせて——」

「はあ？」

『——光れ』

手下の手から剣を覆っていた布が床に落ちる。

『光れ光れフルゴル！ 思う存分輝けよー！ ご注意目を閉じろー！』

声と同時に剣——フルゴルは、華々しく強烈な光を發した。

雷が室内に落ち続けているかのようだ。

密猟者達が目を覆い、光に灼かれた痛みに呻き口々に罵る。

机に背を向けていたラウルは咄嗟に目を閉じたこともあり、すぐに動くことができた。

首領に体当たりしてヴァースを掴み、身を返してフルゴルを掴み、子飛竜の檻に駆け寄って掴んだ。

その四つを自分でも驚くほど早くやり遂げ、ラウルは無我夢中で小屋を飛び出した。

（ごめん——）

他の飛竜は後で、警備隊に任せる。

とにかく森を出て、村に、行かなくては。

小屋の中で交わされる罵り声、ほんの僅かな時間の後、バタバタとした足音。

ラウルが雑草を踏み分け小屋から数十歩離れたところで、何人が扉から転がり出た。

まだ目が眩んでいるのか、よろめきつつも胴間声で脅しつけながら追いかけてくる。

目眩しの分だけ有利だったとはいえ、その効果も、それからついさつき電光石火のように動けた身体も限界だったようだ。

日頃鍛えていない上に蹴られた身体もずきずきと痛み、すぐに距離を縮められた。

息が苦しい。急な動きと緊張で心臓がものすごい勢いで脈打ち、喉から飛び出しそうだ。

首のすぐ後ろに追い縋る気配を感じた。

『ご主人、おれが動く、自分を捨てろー！』

「ええ……」

どうやって、と思ったが、もう自分の意思で身体を動かすことはあちこち痛いし辛いし難しい。

ヴァースを握った右手が勝手に動いた。

追い縋る男の鼻先をヴァースの切先が掠め、先頭にいた男が足を滑らせて転がる。続く仲間に踏まれて上がる苦鳴。

『もいっちょー！』

剣が腕を引つ張り、真横にぶんと夜を薙いだ。ラウルへと振り下ろされていた剣を弾く。

『右に一歩ー!』

剣に引張られる形で足を踏み出す。目まぐるしくて何が何だかわからない。

「腕が痛い!」

『根性根性ー!』

ヴァースの剣の平が縦に、突き出された剣を防ぐ。

そのまま弾きつつ振り被り、背後に寄った一人の剣を背中叩き落とす。ラウルからは見えていないのに寸分の狂いもない。

ぐるりと身体が回る。

「ぐえ」

横薙ぎ。二人の剣を同時に弾く。

驚くべきは、ヴァースが的確に相手の剣を弾き、その勢いで転ばせ、混乱に陥れていることだ。怪我を負わせてもいない。

「すごい」

すごい、けれど。

ラウル自身が保たない。

優れた剣も使い手あつてのものだ。

「もう、む……」

ぐん、と身体が剣に引張られた。フルゴルと子飛竜を入れた檻が手から滑り地面に転がる。

「あつ」

檻の片側が外れ、鳴き声と翼の音が聞こえた。

屈もうとして足がもつれ、ラウルは地面に転がった。

目の前に男が立つ。あの首領だ。怒りに歪めた顔で、自分の持つ剣をラウルへ、突き下ろした。

「フルー」

『フルゴル!!』

ラウルとヴァースの声が重なる。

地面に転がっていたフルゴルが再び雷光のごとく輝いた。

ラウルの左肩横に、首領の手から零れた剣が突き立つ。二度光に焼かれた両目を抑え、首領は低く怒りを吐き出した。

「この……、クソ野郎が……ッ」

フルゴルの輝きの中を翼の音と共に影がよぎり、首領の後頭部に広げた小さな鉤爪が掴み掛かる。

「ぎゃッ!」

子飛竜だ。

子飛竜は一度羽ばたいて離れ、浮いたまま口を大きく開けた。

ラウルの首の横に突き立っていた剣を首領が掴み、もう一度振り翳した。

ぼひゅん!

あまり聞かない音が続いて、どこからか冷たい風が吹き付けた。

首領が振り上げた剣の刃が一瞬、白く曇る。

「冷っ」

「剣を捨てて、両手を上げろ!」

不意に木立の間に響いた鋭い声は、ラウルとも、密猟者の男達とも違うものだった。ヴァースのものとも。

顔を上げた首領の男は、森の中に揺れる幾つもの角灯の灯と、近付いてくる十数の人影を見つけ、それが何者かを悟って憎々しげに呻いた。

「くそ——」

警備隊——いや、ラウルの目が角灯の灯りの中に捉えたのはロツソの警備隊のものとは違う、夜目に黒い軍服だ。

「軍……」

密猟者達が次々と拘束されていく。

どつと、体の奥底から安堵が噴き上がる。

命拾いしたが、一体なぜ今彼らがここにいるのかと疑問が浮かび、それから昨日の弟の言葉を思い出した。

エーリックは村の竜舎が街の領事館に相談していると、確かそう言っていた。

「もう、森に入ってたのか……」

「立て！」

ぐいと腕を掴まれ、引き起こされた。

「へ？」

三十代位の兵が中腰になったラウルの腕を掴み、厳しい顔で見下ろしている。

「お前もだ。エル・ノーに連行する」

「……え、いやいや俺は、その」

『おれは巻き込まれただけだー！ 見りゃわかるだろまちがえんな
ぼけー！ すつとこどっこーい！』

「わああ！」

ヴァースの暴言にラウルは慌てて大声を被せた。

兵士の眉根がますます寄る。

「何だって？」

「すみません、何でもありません！ ええとでも、俺は、ラウル・

オーランドです。キルセン村の鍛冶師の」

「オーランド——キルセンの？」

兵士はオーランドと聞いて、不味いものを含んだ時の口調になった。

「ああ——あんたがオーランドさんか」

兵士の手が離れ、ラウルはどきりと尻餅をついた。

「いてて」

「何でこんなところにいるんだか。まあ簡単に事情を聞かせてもらって——」

歩き出し、ラウルが尻餅をついたままだと気付いて振り返る。

「え、立てないのか？」

ラウルはヴァースを支えによいしょ、と立ち上がった。

「いえいえ、逃げ回ったから体力使い果たしたただけで」

(あ)

この言い方は良くない。

兵士の視線はラウルに落ちた。

「ああ」

もう一度。

そうだろうな、と。

兵士の目が雄弁に内心を物語り、ラウルから離れた。

“逃げる“

ラウルは逃げたと思われている。

二年前のあの件はロツソの街でだけではなく、エル・ノーにも伝わっている。当然に。

(仕方ない——)

森の中は多くの兵がいて、これまでラウルが経験したこともないほど騒がしい。

小屋がある方向から兵士達の一団が檻ごと飛竜を運んでくる。さきほどラウルに話しかけた兵は檻に近寄り、その中を検分している。

ラウルははっと顔を上げた。

「あの子は?!」

ラウルの周囲に白い鱗の姿は見えない。夜なら目立つと思うのだが。

「どうしよう、無事なのかな」

『びんぴんしてたぞー』

ヴァースが小声でそう言った。

『飛んだった』

「――」

ラウルは束の間、樹々の梢の隙間から覗く空を見上げた。

「――そうか」

それなら良かった。

解放されて、巢へ帰ったのかもしれない。

夜だしちゃんと巢まで辿り着けるかが心配だが、自分の翼で飛んでいったのなら大丈夫なのだと思います。

(小さいのに二度も助けてくれて、ありがとうな)

子飛竜の青い瞳を思い出し、心の中でそう呟いた。

その後、兵隊長の前で色々と質問され、ラウルはこの経緯――川で流されてきた飛竜の卵を拾ったこと、家に連れて帰ったその夜に襲われたこと、取り戻してきたことをひとしきり説明した。

兵隊長が「妙な光を見た」と言った時はヒヤリとしたが、幸いヴァースも静か、フルゴルも光るのをやめていたおかげで、密猟者がないか持っていたのではないかと何かと何か、誤魔化すことができた。素人が危険なことをするなと叱られたものの、奇異な目で見られることがなかったのが幸いだ。

それでもラウルが解放されたのは、現場の検分が済んだ明け方だった。

樹上に白々と明ける始めた空が広がっている。

澄んだ空気が森に満ち、早くも小鳥たちが囁りを交わしている。

兵士が家まで送ってくれ――することもなく、兵達が回収した飛竜の檻を個々に背負い森を抜けて行くのを横目で見送りつつ、ラウルも家へと歩き出した。

痛み疲れ果てた身体で両手に重い剣を二本抱え、帰りの足取りは重度の酔っ払いのようにふらついた。

ヴァースがずっと『もう一步! もう一步!』とラウルが足を踏み出せるよう応援してくれている。

(嬉しいけど、剣二本は重い……)

戦いの時のように、勝手に動けるなら歩いてくれないかな、と思っただがそれはさすがにできないようだ。

もう一歩も歩きたくない。体力の限界。気力の限界。限界ぎりぎりのところで、懐かしの我が家が見えた。

つま先で地面に引きずる跡を残し、鍛冶小屋へ差し掛かる。

「……そうだ、いちおう、帰ったって……」

剣達に。

『律儀だなーご主人』

鍛冶小屋の扉を開く。

ラウルは扉の枠に捕まりながら、小屋の中を見まわした。

「えと、み——みんな？」

剣達ー？

「ぶじ、帰ったから——」

声をかけたとたん、壁に掛けていた九振り of 剣が身を揺すり、次から次に地面に落ちた。

どさどさがしやん、ずしん！

最後のずしんは立てかけていた大剣が地面に倒れた音だ。

「ええ……」

『みんな喜んでるぞー』

「ええ……ほんとお？ うれしいい……」

立てかけ直してやらなくてはいけないではないか。

特に綺麗好きリトスリトスな剣をこのままにしておけない。

(文句言われちゃ、かなわないしね……)

ラウルは半苦笑を浮かべ、鍛冶小屋によるめき入ったと。

「びい！」

「え？」

ばさりと、翼の音と共に白い影がラウルの肩に降りる。

白い透き通るような鱗、まんまるな青い瞳。

「——君！」

もうそれで、ラウルの体力は尽きた。

剣達が重なり合っている前に、どさりと座り込む。そのまま仰向けに倒れた。ヴァースとフルゴルも一緒だ。

フルゴルがギラギラと輝きを放ち、小屋の中を真昼のように明るく照らし出す。

ラウルは覗き込んでくる子飛竜の、青い目を見つめた。光に照らされると空色に澄みわたる。

「君——、ここに戻ってたの……？」

ぴい、ぴい、と幼い声が応える。尾っぽが合わせてぱたぱたと地面を叩いた。

軀は子犬よりも大きいのだが、そんな仕草はまだまだ生まれたての赤ちゃんだなあ、とラウルは微笑んだ。

「そうか——無事でよかったよ」

ぴい、と顎先が頬にすり寄る。ひんやりとした鱗が気持ちいい。

「そうか——」

寝て。

起きて。

今日の出来事をちよっと、整理して。

それからこの子に餌をあげなくては。お腹がだいぶ空いているだろう。

ちよっとだけ、寝てから……

視界がぼやける。このままここで寝てしまおう。
もう最高に眠い。

このまま寝たらどんなにか気持ちいいかと

——ごはん！

顎先から、強い意志が伝わってきた。

「——」

瞼が落ちかけた途中、ラウルは半目になった。

「……ごはん……うん……」

——ごはん！

根性で目を開けた先、子飛竜は丸く青い瞳をラウルへ向けていく。
その目が如実に物語っている。

僕はがんばったのだから、とてもおながすいたのだ、と。

「——んぎぎぎ……！」

ラウルは渾身の力で身を起こした。

「食べざかり……食べざかりだもんね、きみは……」

親は飲まず食わずで卵を温め、生まれたら休みなく餌を持ってくる。
そうしなければ雛は育たない。

「待って——」

剣達を壁に掛け直し、特に大剣にはもう倒れてはいけなないと固く
言い含めて、ラウルはふらふらと家へ向かった。

子飛竜がふよんふよんと上下に羽ばたきながらついてくる。

まだ拙い飛び方が微笑ましく、とにかく今は食べさせてあげなくて
は、とそれだけを思い、家に入った。

その後、夕方まで爆睡した。

目覚めた時はもう、傾いた陽射しが柔らかく窓から差し入っていた。
た。

大体夕方の五刻頃だろうか。

明け方までのごたごたが嘘のように、室内は穏やかだ。

深夜に荒らされた台所をひと通り片付け、割られた窓には板を張
って当座をしのぐこととして、ラウルは居間に行くところらせと
暖炉の前の長椅子に腰掛けた。

まだ眠い。

ラウルが座る足元に、窓から暖かな陽射しが差している。

子飛竜がふよふよと、ラウルの膝の上に降りる。

そこを居場所と決めたのか、翼の下に首を突っ込むようにして丸
まった。

ヴァースは鍛冶小屋に置かず、ラウルが座る椅子の横に立っ
ている。何となく。お守り代わりというか。

ラウルはあくびを一つ、それから長椅子の上で伸びをした。

ふう。

落ち着く。昨日は本当に頑張った。

『お疲れー』

のんびりした声がかかる。

この声に随分助けられた。

「ありがとう、ヴァース。頑張ったね、俺達。思い返すとほんと良
くやったよ。ほとんど君とフルゴルががんばったんだけど」

子飛竜が翼の下から顔を覗かせた。今の瞳の色はやや濃い空色
だ。

顎を開き、くああ、とあくびする。

「にしてもよく食べるなあ、君は」

おととい、弟達が持ってきてくれたものも含め、食糧庫にはもう
残り少ない。

ラウルの夕飯と朝食分を取り分けて、明日の朝までに子飛竜の胃
袋に全て入ってしまう。

「うふふ」

震える。

痺れる。

飛竜が高い理由が良くわかる。

「明日、村に買い出しに行かなきゃな。その時君を竜舎に連れて行
つてあげるよ」

ぱちり、と目が瞬いた。

首が持ち上がり、ラウルを見上げる。

「あれ、竜舎ってわかる？」

首を傾げる。

「さすがにわからないか。竜舎にはね、君みたいな飛竜の子がいつ
ぱいいるんだよ。ボードガード親方の竜舎に行けば大切に扱って
もらえるし、身体の特徴から巣がわかるかもしれない。そしたら連れ
て行ってもらえるよ。君はお母さんに会いたいよね」

びい。

一瞬、この子の親が無事であるかどうか、ラウルの心の中に不安
がよぎる。

『巢なんてもうねえよ』

あの密猟者達が、この子の巣を襲ったのだとしたら――

びい。

「あつ、違うよ、君の親は――」

子飛竜はラウルのお腹に頭をぐりぐりと、甘えるように押し付け
た。

――ここにいる！

声がそう流れ込む。

ラウルは目を見開いた。

「う……嬉しいけど、ここにいちや、お母さんと会えないよ。俺は
きちんとした世話の仕方知らないし」

――ここがいい！

ぱちりと瞬く丸く青い瞳が愛らしい。

もう一度、頭をぐりぐりと押し付ける。

ラウルは思わずうふふ、と笑み崩れた。

「困ったなあ」

とまんざらでもないデレた口調で呟く。

ラウルに巣が探せるだろうか。

樹々に聞いて歩けば何とか分かるかもしれないが。

問題はその先だ。

「場所がわかってても、飛竜の巣は俺なんかじゃ辿り着ける気しない
しなあ」

ぐりぐり。

うふふ。

「やっぱりボードガード親方に頼んで、誰か一緒に行ってもらって」

すりすり。

えへへ。

かみかみ。

にはは。

『微笑ましいところ悪いけどご主人、こいつは飛竜じゃないぞ』

長椅子の横に立ってかけていたヴァースがしれつと告げた。

『竜の仔だ』

「竜——？」

ラウルはヴァースの言葉の意味がしばらく掴めず、あどけなく見つめてくる子飛竜を見下ろした。

子飛竜——ではなく。

「——えっ、竜？ えっ、竜?!」

思考が一瞬停止した。

じっと見つめてくる小さな姿は、長い首と広い翼と、長い尾——言われてみれば、飛竜の体付きよりも胴体がちりちりしているかもしれない。それに爪もなんだか鋭いような。

白く澄んだ鱗も、生まれたてだとやや薄いのだとは聞いたことがあるが、飛竜の鱗の色としては確かに聞かない。緑、赤、黒、銀。

飛竜の鱗は基本この四色だ。

「——竜って……」

どうしよう。

どうすればいいか、すべきことが咄嗟に思い浮かばなかった。

竜となると、竜舎は対応してくれるだろうか。

(無理かな……竜舎は当然飛竜第一だから……)

他の飛竜に影響があることは受け入れ難いかもしれない。

竜舎で引き受けてもらえない場合、この子を巢に帰す為にはどうしたらいいのだろう。

そもそも竜の巢がどこにあるのか、竜舎でも知っているかどうか。

滅多やたらに存在する相手ではない。

「——あれ、ん？」

ラウルはふと、一年中霧をまとって聳える山を思い出した。

「いや——、もしかして……」

きりふり山の、主^{ぬし}。

周辺の魔物さえ近付くのを恐れるという主は、ひよつとしたら竜なのかもしれない。

この子を拾ったのはきりよせ川だったのだし。

「君は、主のこの子かな……」

子竜はラウルの問いかけが分かっているのかいないのか、首をちよこつと傾げた。

「どうだろう。でももしそうになると、俺はきりふり山を登るようになるのか……」

無理だ。

標高一里(約3 Km)を超える急斜面の山なのだ。

それに霧がかかる中腹辺りは樹々が生い茂り、迷いやすい。

子飛竜——、ではなく、子竜がびい、と鳴いてラウルの手に頭を擦りつける。

どうしたら良からうかと思案に暮れていたラウルは、その仕草に
ついつい微笑んだ。

「まあ、どうにか君のお母さんを探すよ。安心して。それまではうちにいる？」

びい。

首を縦に振ったかと思うと、膝の上でくるくると回る。

喜んでくれている様子にじわりと愛おしさが膨らんでくる。

その内子竜は自分の尾を追いかけ始め、ひとしきりぐるぐる回ってぱたりと倒れた。目が回ってしまったようだ。

「あらあら」

へへへ。

めちやくちや愛くるしい。

このままここで育てたいという思いが湧き上がる。

けれど竜ならばなおさら、巢に帰さなくては。

(方法を探そう)

でもそれまでは、この子は食べなくてはいけない。

一人きりのこの生活は気に入っているが、しばらくの間小さなお客さんをもてなすと思うと気持ち弾んだ。

「君——」

ラウルはひっくり返っている子竜を見つめた。

「君とだけ呼び続けるのもね。名前があるよね。お母さんが付ける本当の名前があるだろうけど、君が家に帰るまでは、名前がない

と。俺が考える名前と呼んでいいかな」

子竜が身体を起こして首を持ち上げ、こくりと縦に振る。
印象的な瞳が上下した。

それだ。

最初に見た時から、思っていた。

「オルビーイスにしよう。君の目は綺麗な宝珠みたいだから」
宝珠に喩えた双眸が、嬉しそうにぱちりと瞬いた。

第2章 ラウルと小竜 村へ行く

1 癒し系は食い尽くし系で淋しがりや系

食料庫が空になった。

とても厳しい状況である。

ラウルは今朝もたらふく食べて幸せそうに丸くなっている子竜を見つめ——うふふ、と笑み崩れてから、改めて表情を引き締めた。

「いかんいかん」

食料庫はすっからかん、もう今日の昼の分すらない。

家の周りの畑で細々とした収穫はあるものの、もともとラウル一人の口を賄えばいい程度でしかなく、子竜が加わった今それだけでは如何ともし難い。

昨日朝方の疲れはまだ取れきっていないが、やはり今日、村へ行かなくては。

今は朝の八刻。支度をしてすぐ出れば村には十刻には着ける。

家に顔を出して、それから食材を買い、いやその前に竜舎に行く。オルビーイスのことを相談したい。

だいたい戻って来るまでに、合わせて五刻といったところか。

「よし」

子竜——オルビーイスをもう一度見つめる。

お腹がいっぱいになったからか、丸まったまま眠っているようだ。

置いていくのも心配だが連れて歩けば珍しい白鱗は目立つ。また良くない輩に目をつけられないとも限らない。密猟者の手入れがあったばかりだし、森の方が問題は少ないだろう。

「眠ってる今の内にさっと行ってこよう」

『起きちゃうんじやないか？』

そう話しかけてきたのは鋭利な刃を持つ片手剣、ヴァースで、その声はのんびりかつ剽軽な響きだ。

打ち上がって四日にして、すっかりラウルの生活に馴染んでいる。

「そしたらヴァース、君に頼むよ。相手をしておいて」

『ええー！ どうやってだよー』

ヴァースの閉口した様子にラウルはちよつとばかり、してやった気分になった。彼が打ち上がってからこの方、さんざん困惑させられている分、少しくらい困ってもらいこちらの気持ちをおわかってもらいたい。

「相手——話かけたりしてくれればいいから。お腹空いちやうと思うから、鍋にある朝の残りを食べてって」

じゃがいもなどの根菜と兎の干し肉を煮込んだスープがまだ鍋に半分くらいある。

「帰りは驢馬を借りないとなあ」

大量の食材を運ばなくてはいけない。

懐持つかなあ、とラウルは震えた。

今まで道具類を売って得た微々たる蓄えが、二、三度の買い出しですっかりなくなりそうな気配がする。

『剣の誰か連れてけよー』

斬新な投げかけだな。

「いやいや大丈夫」

『何かあったらどうすんだー？』

余計何かありそうだな。

「いやいや大丈夫」

『おれを連れていくのが一番だと思うけどなー』
社会的に終わりそうだな。

「いやいや大丈夫」

ラウルはてきばきと身支度し、ヴァースに留守を任せ、四半刻で家を出た。

村までは歩いて二刻かからない。

今日は空も晴れ、森の上に昇った太陽が、さんさんと陽射しを注いでいる。

緑の葉は輝き、木漏れ日は樹々の葉影を足元に淡く揺らす。時折木立を抜けていく風が心地よかった。

ラウルは目を細めた。

深々と息を吸う。

ここ数日なんだか慌ただしかったなあ、と、溜めた息をゆっくり

吐

「びー!!」

「えっ」

ずどん。

「おゝッ」

背中に何かが激しく衝突し、振り返る前にラウルは柔らかな地面に正面から倒れた。

「びい! びい! びい!」

「……」

ぐりぐりと背中に鼻先を押し付ける感覚。

子竜の鼻先はなかなか尖っている。それに硬い。さすが竜。剣をも弾くという硬質な鱗が持ち味だ。

「ちょ」

ぐりぐり。

「オル」

ぐりぐり。

「……」

ぐりぐり。

「……もうちょっと……左……」

ぐりぐり。

「そうそう、その肩甲骨の、脇……」

だいぶ凝ってて。

じゃない。

起き上がり、ラウルは背中から滑り落ちた物体を抱き上げた。

腕の中でじたじたしている。

「オルビース」

びい! と声が返る。

オルビースは長い首をラウルの首に絡めた。

「オルー」

——行っちゃやだ——

伝わる切々とした響きに、ラウルは思わず胸を掴まれた。

置いていかないでくれ、と。

独りにされる不安——巢から、親からたったひとり離された不安を、この子竜は胸の奥に抱えているのだろう。

ラウルは長い首に頬を寄せた。

「違うよ、オルビーイス。すぐ戻ってくるから。ずっとひとりになってしないよ」

ラウルに長い首を絡めたまま、前脚と後ろ脚、四つの鉤爪はしっかりとラウルの服を掴んでいる。

「オルー……」

ラウルは優しく微笑み、オルビーイスを剥がそうとした。が、鉤爪ががちり服を掴んだままだ。

「ちよっ……」

ぐいぐい。

「ちよつと、オルビーイス、いいかな。爪を一旦放そうか」
ぎゅうぎゅう。

「オルー」
びり。

竜の爪って鋭いんだな、と、ラウルは改めて知った。

服が破れようが何だろうが、オルビーイスはラウルに――もはや破れた服にだが――しがみついている。

ラウルは笑みを零し、諦め交じりの溜息を吐いた。

「これは縫わないとなあ。まあ仕方ないね。着替えたいし一旦帰ろうか」

まだ陽は昇りきってもいない。一日の余裕はたっぷりあった。

ラウルはオルビーイスを肩に乗せ、来た道を引き返した。

『やっぱ飛び出してっただなー』

迎えるヴァースの声にラウルは恨みがましい目を向けた。

「頼んだじゃないか、ヴァース」

『無理言うなよーご主人、おれ歩けないんだからさー。そもそも飛ばれたらお手上げだぜー』

ヴァースはしれつとしている。

「戦う時は君の意思で動けるじゃないか」

『それは持ち手がいるからー』

まあそうか。

「でもその内君は、脚くらい生えそうだけどなあ」

『次はそういう剣打つかー？』

「いや、それはもう剣ではないというかね」

何と定義付けすればいいのだろう。

とりあえず下手なことは言わない方がいいのは確かだ。

「さて、困ったなあ」

もう一度村へ向かうために服を着替えたのだが、オルビーイスはラウルの肩と頭にしっかりとしがみつきななおしている。

尻尾をぐるりと首に回し、爪はやわ噛みならぬ、やわ掴みだ。

うん。

「えらいぞ、オルビーイス。爪を立てないのえらいぞ」

頭の横に覗かせた額を撫でる。

「あと、服は破っちゃダメだって覚えような」

ぴい。

と一応理解してくれた。

「えらいぞー。オルビーイスは頭がいいんだなあ」

かわいいなあ。

「じゃあ、おうちで待ってようか」

——一緒にいく。

「ヴァース」

『無理だってー』

ううん。

「とすると、出かけるのはやめに——でも食糧が必要だし——」

『連れてけ連れてけ』

ううん。

『おれも連れてけー』

「ううん。それはちよつとね」

『おい、みんなー、ご主人が出かけるから誰かお供に立候補』

ラウルは急いでヴァースを掴んだ。

「行こうかヴァース！」

また剣達に一斉に地面に落ちられてはたまらない。

ラウルはヴァースを腰に帯び、蔓で編んだ背負い籠を引っ張り出すとオルビースをそこに入れ、再び家を出た。

「ああいう脅し方、良くないよなあ」

『時短時短ー』

「時短って」

『結局誰か連れてくことになるんだからさー』

「誰かって誰」

まあ、落ちた剣を壁にかけ直す手間はかけなくて済んだが。

「頼むから母さんの前では喋らないでくれよ、ヴァース」

『興味深いなー』

「いやいやいや」

『ご主人の母上、剣とか好きー？』

「あまり好きじゃないよ」

控え目に言つて。

『ええー』

「び」

「オルビースは籠から出ちゃだめだぞ」

「びい」

「村では鳴かないようにね。竜を連れてるってわかったら騒ぎになるだろうし、飛竜だと思うにしても俺が飛竜を、しかも白い鱗の君を連れてるなんてやっぱり問題になるだろうし」

軍に知られたらあの密猟者の仲間と思われてもおかしくない。

「びい！」

わかった！ だろうか。

「ありがとうね」

『あつ、ご主人！ ご主人！ 村の人に挨拶していいかー』

「いいわけ無いよねー」

きりよせ川を渡り、樹々の間を曲がりくねって伸びる道を半刻ほど進むと、くらがり森の外に出る。

村はそこから東に三里（約9km）ほどだ。

途中農家の荷馬車と一台すれ違い、あれ、という顔をされながら、ラウルは畑の中の農道を歩き、十刻過ぎにキルセン村に着いた。

キルセン村は小規模村落に分類される。

丸太を組んだだけの簡素な囲いで一周ぐると囲んだ村には、二百人ばかりが暮らしていた。

村人達の生業は三分の二は農家で、ほかに服や雑貨、道具類、小料理屋などのちよつとした店を構えている家と、宿。

この村は宿の数が近隣の同規模の村より多かった。竜舎があるからだ。

その竜舎は村の外れ、くらがり森側にほぼ円形に作られた村からやや突き出すように位置していた。

竜舎の飛竜養育官が十名ほど。

彼等は村の名士だ。

直接竜舎に行きたかったがラウルはまず、弟と妹、母の暮らす家に顔を出すことにした。

非常に気が重い。

「エーリックが働いてる店に寄るかな」

母の様子を聞いておこう。

「あれ、ラウルさんじゃないですか」

途中声をかけてきたのは顔馴染みで、道具屋の息子のケイといった。

ラウルの作る道具類を買い取ってくれるありがたい店でもあり、ラウルを見かけると屈託なく挨拶をしてくれる明るい青年だ。

「こんにちは、ケイ。この間は鋏を買ってくれて有難う」

「すぐ売れましたよ。また頼むねラウルさん。今日はなんか持って来てくれたんですか？」

「ぜひ仕入れて欲しいけど、手元に何にもなくて。またお願いします」

「こっちこそ、頼みます」

ケイはにこやかに笑みを返し、通り沿いの道具屋の扉を潜り、店の中に消えた。

「ラウルだつて」

次に届いた声は別にラウルに掛けられたものではない。

うっかり首を回らせてしまい、ラウルは内心しまった、と思つた。こちらはケイのように歓迎してくれる視線ではない。

くらがり森に暮らすようになってしばらくは、それこそラウルが逃げたことをみんなが知っていて、それに対する軽蔑の眼差しが主だった。『たいそうな家に生まれたのにねえ』と。

だが今は。

「ぜんぜんまともな剣を打てないらしいよ」

(うつつ)

ラウルは胸を押さえたくなつた。

「立派な工房だけ先代から譲られて。名鍛冶師だつたつてのにねえ」

「剣が打てなきや炉も先代も泣いてるよ」

(うつつ)

「たいして稼げなくて、弟を働かせて」

(うううっ)

つらい。

つらいし、エーリックに申し訳なくて心苦しい。

すいません師匠。

ごめんなエーリック。兄ちゃんが、兄ちゃんが不甲斐ないばかりに苦労させて……！

腰の辺りで気配がす——る予兆を素早く捉え、ラウルは咄嗟に

ヴァース

剣の柄元を押さえた。

『剣なら打つむぐ』

そこを押さえると止まるんだと感心しつつ、

「こんにちはー！」

いい天気ですね、と、村人へ精一杯明るく挨拶をして通り過ぎた。

通り過ぎてから小声でヴァースを嗜める。

(頼むから、喋らないでくれよ)

『挨拶してないぞー』

(そうじゃなく！ 声出すのが森以外ではだめだから！)

ちえ、という気配がして、それでもヴァースはおとなしくなかった。

息を吐き、顔を上げ——ラウルははっとして、足を止めた。

エーリックが働いている貸本屋兼雑貨屋が、あと五十歩ほど先にある。

店の前にはエーリックが、ラウルに背を向けて立っていた。

その前に。

「——レイ……」

背の高い青年だ。エーリックより頭ひとつ分ほど越して、肩まで伸ばした濃い茶金の髪が揺れる。

整った面はややつい印象を受けた。

レイノルド・マリウス・オーランド。

この一帯の領主であるオーランド子爵の息子だ。

ラウルの——、一歳下の従兄弟。

「また来てたのか」

ラウルは一つ息を吐き、唇を引き結んで二人に近付いた。

「レイ」

さっとレイノルドの顔が上がり、ラウルを見つけて開いた口を、ぐいと閉じた。

険しい視線がラウルに注がれる。

「レイ、弟に何か用かな。話なら俺が聞くよ」

「——兄さん？ 急にどうしたの」

エーリックが振り返り、ラウルの姿を見て驚きと安堵を昇らせる。

ラウルはエーリックの横に並び、あともう一本、前に出た。

レイノルドは苦いものでも嚙んだように眉根を寄せ、ラウルを上から下まで眺めた。

「俺のことをそんなふうになんか気安く呼ぶな、ラウル。逃げた奴が偉そうに」

毎度のことだと、ラウルはほんの少し首を傾けた。

事実は事実だ。

「それで、用件は。こんな店の真ん前に立って話をしたら迷惑だから、場所を移そう。ごめんなエーリック。後で寄るよ」

レイノルドがいいとも何とも言う前に、ラウルはすたすたと歩き出した。

レイノルドはラウルを無視することもできるはずだが——ついて来る。

目が合うと後ろから棘のある声が追いかけてきた。

「ラウルお前、おとといの捕物に関わったらしいじゃないか」

「耳が早いなあ。まあそうか」

オーランド子爵はロツソの街の領事でもあり、この辺り一体を管轄している。それに一昨日の件で軍が動いていたのは当然竜舎がロツソに申し入れ、ロツソがエル・ノーの駐屯軍に要請したのでらうから、情報は入るはずだ。どんな伝わり方だか気になるどころだが。

ラウルは人目につかない小屋の横に回り、レイノルドと向き合った。

「ここでいいか。レイ、それで、何の用かな」

「だから、俺を気安く呼ぶなっていつも言ってる」

苛立ちを含んだ声が返ってくる。

「偉そうに」

レイノルドはラウルの一つ下の二十三歳。

そして、従兄弟だ。

ラウルの父が生きていた二年前までは仲が良く、しょっちゅう行動を共にしていた。

ラウルの父の酒量が増えていることを親身になって心配し、悩んでいるラウルのことを励まし助け、エーリックやアデラードとも良く遊んでくれていた。

ラウルの父が死んだあとすぐ、ほんの少しのことで諍いになり、ラウルはレイノルドから決闘を申し込まれた。

決闘などだいたい昔に廃れた制度だが、こうした片田舎の土地ではまだ残っている。

互いの命と名誉を賭ける、由緒正しい儀式。

その決闘から、ラウルは逃げた。

ラウルは指定された時間までに、決闘の場に行かなかったのだ。

だからラウル・オーランドの名前はオーランド子爵領の中で、著しく不名誉なものとして広がっている。

「おとといのことを聞きに来た」

「だったら鍛冶小屋に来ればいいじゃないか。いつでも歓迎するよ」

いや、ちょっと今は状況的に歓迎しかねるか。

突然来なくてよかった。

「ふん、あんな所に行けるか。お前が街に住めばいいだろう」

「それは無理だよ」

むっとしたのか、レイノルドは口を尖らせたやや子供じみた顔つきになった。

もう二十三なのになあと可笑しくなる。昔からそうだった。ラウルよりほんの少し、いやまあそこそこ、子ども——

でももしかして今も普通りだったら、今回のことをレイノルドに相談できたかもしれない。

(まあ昔どおりだったなら、ヴァースも、オルビーイスもないんだけど)

「隊長のヘインズから聞いた。お前が密猟者と争ってたとか、妙な光だとか、他にも人が——お前の仲間かなんかがいたんじゃないかとか、そんなことを言ってたが」

内心ギョツとしつつ、ラウルはしれつと首を傾げてみせた。

「他につて、そんなのいないし、争う以前のやばい状況だったよ。

俺が剣はからつきしなの知ってるだろ。レイとは違う。軍が来てくれてほんと助かった」

レイノルドは憎々しげにラウルを睨んだ。

まるでレイノルドの方こそ親の仇でも見るようだ。

「俺は、目立つことはするなど言いに来たんだ。お前は森の中の小屋に引っ込んで、身を縮めて暮らしてればいいんだからな！」

「びい！」

ラウルの背中から、やや憤った声が上がった。

レイノルドが眉を寄せ、きよろきよろと辺りを見回す。

「何だ、今の声」

「と、鳥じゃないかな」

ラウルは微笑んだ。

「お前の背——」

「これは納めに来た杓とか、鎧だよ！」

「何か隠して——」

「無いつて。もういいだろう、レイノルド・オーランド」

その言い方にレイノルドはまたむつと眉を寄せた。

「俺の」

「貴方にお願ひしたい。あまり弟達に、不安な思いをさせないでやってくれないか。何かあったら俺に直接、言っしてほしい」

「——」

レイノルドはしばらくラウルを睨んでいたが、ややあつて首をフリと巡らせ、ラウルに背を向けて大股に歩き出した。

「——」

ラウルはその背中を見送つて、息を吐いた。

「とりあえず」

「兄さん、それ」

ふいにかかったエーリックの声に、ラウルは驚いて振り向いた。

エーリックが一間後ろくらいに立っている。

「エツ、エーリック！ いつの間に」

「それ、どうしたの」

エーリックが指差しているのはラウルの背中だ。背負い籠の蓋からはみ出す、白い尾。

ふりふり。

「うわ！」

蓋を開けて見上げた青い双眸に「ダメだよ」と言い聞かせ、ラウルは尾をしまい込んでからエーリックに向き直った。

エーリックの不審そうな目が痛い。

「兄さん……それ、飛竜？ じゃないよね？」

白いし、と鋭いことを言う。

「いつ、やつ、これは、ちよつと、そう、わ、訳があつてね」

エーリックは繊細な眉をすうつと寄せた。

「兄さん、大丈夫なの？ レイにい従兄さんから密猟者の騒動に巻き込まれたって聞いて、本当にびっくりしたんだ」

余計なことを話すなど言うのに。
釘を刺すのが遅かった。

「今日村に来たのはどうして？ 危険なことに巻き込まれてるんじゃないよね？ ただでさえ離れて一人で暮らしてて、心配なんだから」

「大丈夫だよ、エーリック。心配なのは俺の懐くらいだ」

エーリックの眉根は寄ったままだ。

「いや、だから、ちよつとした訳があるんだけど、だから竜舎に相談に来たんだよ。巢に返そうと思って」

「——」
じいい。

真つ直ぐな目がラウルの言い訳をどう受け止めようかと考えている。エーリックはそんなふうに大人びている。

ややあつて、エーリックは軽く息を一つ、吐いた。

「わかったよ。説明できるようにになったらちゃんと説明して」

「ごめん。——あのさ、母さんには」

「僕は何も言わないよ。でも今日、この後会いに行くんでしよう」
行きなよね、と。

なんかもう、今日は顔を出すのをやめておこうかと思っていたところを釘を刺された。これではどつちが年上だかわからない。

「うん……」

3 母に会う

細い窓の下に置かれた背負い籠と、そこに立て掛けた剣へ一度視線を向けたが、母アンナはそれについては何も触れなかった。無かったものとしたようだ。

「本当に貴方は、全然顔を見せないで、私がどれほど心配していると思っっているの」

母と低い卓を挟み、斜めに向かい合って座る。

母と弟のエーリック、妹のアデラードの三人は、キルセン村東側の外れにある小さな館に暮らしていた。

オーランド子爵家の所有でラウルの父が生前、狩りをするために良く滞在していたものだ。

叔父はこの館一つだけ、ラウルの母——アンナのために残した。

日中エーリックは働きに出て、アデラードはエーリックが送り迎えし昼過ぎまで村の手習い所に勉強に行っている。

「もつと頻繁に顔を見せてちょうだい。貴方はこの家の家長なのですよ」

栗色の柔らかな髪に灰色の瞳。

自分の母であり、かつ、こうして面と向かって相対しているのに御伽噺の登場人物のような印象を受けるのは、整った小造りの面立ちと、今も尚あどけなさを感じさせる微笑みが不自然さを感じさせず、加えて、その瞳がどこか夢見るような雰囲気を含んでいるからだ。

母アンナはラウルの父の遠縁で、ラウルの父とは異なり裕福な子爵家に生まれた。何不自由なく育ち、十八歳で『本家』であるラウルの父に嫁いできた。

十九でラウルを産み、エーリックとアデラード、三人の子ども達を育ててきた。

家が傾き、夫が酒に逃げ、苦労が無かったわけではない。その中でもアンナのどことなく少女のような印象は崩れなかった。

夫を失い、それまで住んでいた城館もなし崩しに手放して、このキルセン村に移り住んできてからも。

生活に窮していても。

三人の子供達の中では、エーリックが母に良く似ていて、ただこの少女然とした雰囲気は母独特のものだ。

「すみません。本当に日が開いてしまいました」
ラウルは素直に頭を下げ、親不孝を詫びた。

卓に置かれた陶器の茶碗から香りよく漂うのは、林檎の香りを含んだ紅茶だ。アンナが輿入れの際伴った古くからの侍女が、この館にも供をしてくれていた。

それから家のことをあれこれと行なってくれる従僕が一人。どちらももう六十歳を過ぎている。

加えて、料理人が一人。これはアンナの生家が手当した。
とは言え生家は兄が継いでいて、彼の二人目の妻とアンナとは折り合いが悪い。

「エーリックが小屋に来てくれるのに甘えてしまって。私の立場だとあまり、森を出て大つびらに歩き回るのも、憚られるのもあつて」

母の前は何となく緊張する。幼い頃はただ甘えていたのだが。

怒るわけでも、詰るわけでもない。ただ毎回切々と訴えかけてくる内容に、ラウルは応えきれないのだ。

「私も、鍛治を早く活計たつきにして母上や弟達の助けになれるよう、整えたくて、つい夢中に」
「ラウル」

おー。

この答えは不正解だ。
「貴方の本分は何なのですか」

春の陽だまりを思わせる灰色の瞳が、じっとラウルを見つめてくる。

「ほ、本分。ええと……」
「背筋を伸ばして」

「は——、はい」
隅のほつれた麻布を張った椅子の上で、ラウルは改めて背筋を伸ばした。

「言葉は明瞭に」
「はい」

語尾の響きは優しくふわふわとたおやかに、言葉が飛んでくる。
「お父様のあとを継ぐのはラウル、貴方です。貴方の本分は決して鍛治ではありません」

怒っている。

あまり表情に変化はないが、叱られる時の時の口調だ。

「オーランド家を再興することが、貴方の役目なのですよ」

母アンナがこの二年、ずっと言い続けていることだ。

母がそう願う気持ちはわかる、けれど。

「——お言葉ですが、母上。家は、もう継がれています。私はもう」

「^{セルゲイ}彼は正統な継承者ではありません」

柔らかな花のような瞳のまま。

「略奪者です」

自分の鼓動が跳ねるのが分かった。

あの時——

ラウルは、^{セルゲイ}叔父が落とした手帳を拾い上げようとした。

『触るな！』

叔父はラウルの手から手帳をひったくった。

その時向けられた目。その色。

手帳から、一瞬流れてきた声——

ああ、でも。

そんなことは、思い違いだ。

あるべきではない。

「——」

逃げている。

いつも。

「貴方があの森に暮らすのも、セルゲイが勝手に決めたこと。何故そんな勝手な決めごとに従う必要がありますか」

ラウルが一人、くらがり森に暮らすことは、家族がこの館に暮らすための条件だった。

アンナは当然、それを理解している。

その上で言う母の想いを、ラウルもまた理解している。

「ラウル。貴方は本当に、レイノルドとの決闘の場に遅れたの？」

何度目の問いだろう。

「——それは、本当だよ。意図してじゃないけど」

アンナは静かに息を零した。

「貴方がお父様の汚名を雪^{すす}がず、家を再興しないで、一体誰がそれをするのでですか」

離れたところにある細い窓から、陽の光が差し込んでいる。

古ぼけた絨毯の、褪せた赤い色。

窓が細く少ない古い造りの館は、昼間でも薄暗い。

室内の空気さえ埃を舞い散らせてくすんでいるように思えるが、それでもかつて——ラウルの記憶にはないが、この館も華やかだった時があるのだ。

黙り込んだラウルをしばらく見つめ、アンナはまた柔らかな空気を取り戻した。

「ラウル」

ふわりと、少女のような。

これはこれで居た堪れない。

「エーリックやアデラードの為に、貴方がオーランド家を再興してちょうだい。それから貴方ももう二十四。しっかりしたところのお嬢さんを貰って、オーランドの血筋を継がなくては」

うっ、とラウルは心の中で胸を押さえた。

欲しい。

心底欲しい。

まずお付き合いする相手が欲しい。

好みはええと、誠実な癒し系です。

けど俺が残念なやつなので無理だと思います。色々。

「エーリックだってそう。でも貴方がいつまでも結婚しないので

は、次男が先に結婚はできないでしょう。エーリックも、由緒正しいオーランドの次男が生活のために雑貨屋なんかで働いて。エーリックには貴方の補佐として、まだまだ学問や、領地経営を学んで欲しいのに」

(ごめん、エーリック)

流れ矢が飛んだ。

「エーリックは優秀だし、時間があれば俺も教えるし、自分でも学んでるって」

「それに」

ううっ。

次に来る言葉がわかる。

ラウルにはこの言葉が、一番ずしりとくる。

「兄として、家長として、アデラードに品位のある相応しい結婚をさせてあげたくはないの？」

「——それは、俺も責任を持って考えたいと」

「アデラードももう十歳よ。本当なら家庭教師をつけて、園遊会や舞踏会での所作や踊り方を学ぶ年頃なのに、今のままでは」

駄目だ。撤収だ。

アデラードの話で攻められたら躲しきれない。

「すみません、母さ——母上、今日は竜舎に行く予定なんです。ポードガード親方に話したいことがあって」

アンナは繊細な眉をそっと寄せた。

「まあラウル。もう行ってしまふの。久しぶりに会ったのよ。まだ話をしたことがたくさんあるのに。母さまと話をするよりも大切なことがあるのですか。大体貴方は」

『まーまー母上ー、ほどほどにしといてやれよー』

「ひッ！」

そっち方面を完全に油断していたラウルは椅子の上で飛び上がった。「ちよっ」

アンナが目を見開き、辺りを見回す。

「いまのは、何……？」

『ご主人、困っちゃってるぜー、なあオルー』

「びい！」

「わああ！ か、母さん、これは何でもなくて」

「貴方、その剣……それと、何の鳴き声？」

母の目が籠と剣に据えられ、恐ろしいものを見るように見開き震えている。

「ラウル」

ラウルはヴァースを掴み、ヴァースを立てかけていた籠を掴み、「すみません、また来ます！」

脱兎のごとくラウルは母の前から退却した。

4 ボードガード竜舎

早足で館を離れつつ、右手に持ったヴァースを睨む。小声で苦情を申し立てた。

「困るよヴァース。母さんの前じゃ喋らないでくれって言ったよね?!」

『いやあ、なかなかの母ちゃんだなーと思ってさー』

思ってたさー、じゃない。

「オルビースもね、俺がいいと言うまで、静かにしててね。見つかつたら連れて行かれちゃう。いいかい？」

籠の中から微かな声でびい、と返る。

語尾が下がっているあたり反省している様子で可愛い。

とは言え。

「村にいるほんのわずかな間が怖い……」

森に帰りたい。

早いところ用事を済ませなければ。

そうこうしている内に、ボードガード竜舎の大きな赤い屋根が見えてきた。

ボードガード竜舎はくらがり森側、キルセン村を囲う柵から敷地が半分飛び出るようになってあった。

平屋の竜舎が村側にあり、森側には飛竜が降り立ち、あるいは飛び立てるように広場がある。

木の柵を過ぎて土が剥き出した道を歩く間にも、空から二頭の飛竜が円を描きながら竜舎の向こうの広場へ降りていく。

背に乗っている、あの濃い緑の制服は飛竜養育官だ。

竜舎で働く者達はその誇りを示すように同じ制服を纏い、その中で飛竜養育官は特に襟周りや胸元に燕脂の線が入った深緑だった。

ラウルは竜舎の正面入り口に立った。両開きの引き戸は開け放たれている。

竜舎は活気に満ち、戸口からは従業員達の交わす声や飛竜の嘶き、金具の当たる音などが流れ出している。

ラウルは足取りが軽くなったのを感じながら、入り口横の受付に声をかけた。

「こんにちは！」

「あいよいらっしやい！ ってああ、ラウルさん」

朗らかに迎えてくれたのは、エマ・ボードガード。この竜舎のおかみだ。

全体的にふっくらとした体型で、黒髪黒目がまた人の良さそうな雰囲気を出している。ラウルは肩の力を抜いた。

エマは皺の浮いた目元を温かく細めた。

「いつも杓やら鎧やら、ありがとねえ。あんたさんの作る道具は使い勝手がいいよ」

「いやあ、そう言ってもらえると」

剣でなければ評判がいいのだ。

「今日は何か持ってきてくれたのかい」

注文の品は一昨日だったか、エーリックが届けてくれている。

「違うんだけど、おかみさん、親方にちよっと相談したくつて。今いる？」

「ああ、そうなの。待ってな」

エマは奥を向いて、おおい、と良く通る声を張り上げた。

「あんた！ ラウルさんが用だつてさ！」

竜舎は十一間（約33 m）四方の広い平屋を、飛竜を育てる柵で複数に仕切っている。

一番奥はラウルが今立っている戸口よりも広い両開きの引き戸がある。開け放たれたそこから陽光がいっぱい差し込み、舎内で立ち働く十数人の姿を影絵のように見せていた。

その中の一つがエマの声に振り返り、柵の間を抜けて来る。大柄だから親方のボードガードだとすぐにわかる。

それぞれ柵の中にはまだ幼い飛竜や、そろそろ人を乗せられるくらいまで育った飛竜の姿があり、ボードガードが通りかかると鼻先を撫でてもらうと柵の上に出した。

（何度見ても、飛竜は可愛いなあ）

飛竜達の様子にも釣られ、ラウルは竜舎の中に入り、歩いてくるボードガードへと数歩、近付いた。

その時だ。

背中中の籠の中で、オルビーイスが身を起こしたのがわかった。

「びい！」

途端に、それまで大人しかかった飛竜達がそこで翼を広げ、首を伸ばし、嘶きを上げた。

驚いた養育官達が手を伸ばしたり柵に入ったりして騒ぐ飛竜を宥めている。

「しまった」

ラウルは慌てて後退り、竜舎の外に出た。

「びい！」

なんかいる！ とでも言いたげだ。

「オル」

「お前さん、何連れてんだ？」

洪く響きの良い声が背中にかかる。

振り返るともう、ボードガードが戸口まで来ていた。

「親方、すみません！」

「いや——」

アーセン・ボードガード。キルセン村の誇りである竜舎の主だ。十歳で飛竜養育官を志し、十八歳でこのキルセン村に竜舎を開いてから、あと二年ほどで三十年になる。

身長は六尺二寸（約186 cm）を超え、広い肩幅と厚い胸板、筋骨隆々とした腕と脚。焦茶の髪を角刈りにし顔半分は髭で覆われている。強面だが髪と同じ焦茶色の目は穏やかだ。

「ちよつとこつち来て、籠の中見せてみる」

そう言うとラウルの肩に腕をかけ、有無を言わずぐいぐいと敷地の、竜舎から離れた場所へとラウルを連れて行った。

改めて向き合い、焦茶の瞳でじいっとラウルを見る。

「お前さん、昨日の捕物に関わつたらしいな」

やっぱり知っているのか、と思う間もなく、続くボードガードの言葉にラウルは首をすくめた。

「うちにも話が来たが、なんでも白い鱗の飛竜がいたって言うじゃねえか」

オルビースの姿を兵に見られていたのだ。それか、あの密猟者達が取り調べで話したか。

ラウルははっとした。

取り調べで当然、軍に情報は入るのだ。ラウルのところにも兵が聞きに来るかもしれない。

オルビースがラウルのところにいるのが見つかったら――？

飛竜と言って誤魔化せるだろうか。

「どこかへ飛んでつたらしいが、お前さん、知ってるか？」

ボードガードの目が鋭い。ラウルの不安を見透かすようだ。

「あ、いや、その」

「その背中に、何を入れてんだ、ラウルよ」

驚かさないう、そして誤解を与えないようまず状況をしっかりと説明してからと考えていたが、諦めてラウルは背中の籠を地面に下ろした。

「森で、拾ったんです。一昨日。それで親方に相談したくて」

蓋を開け、ボードガードが籠の中を覗き込む。

青い瞳がぱちりと瞬き、自分を見下ろすいかつい男を不思議そうに見上げた。

白い鱗の子竜を見て、ボードガードはただでさえ幅広の口をあんぐりと開け、うおう、と唸った。

「竜だ」

やっぱりそうなのか、と。

ボードガードがはつきり竜と断言したことに、覚悟していたはずが息を吞んでしまった。

「まあまあ予想はしてたが、こりや……いやはや」

飛竜達が騒ぐ訳だわな、と呟いている。

「親方、その」

「元いたところに返しな」

もう一度、これもびしりと告げる。

それから口調が和らいだ。

「飼育が認められてんのは飛竜だけだしなあ。お前さんにとって一番いいのは、これから元いたところに行つて、こいつを置いて来ることだ」

「けど親方、この子は卵のまま川に流されてたんです」

ラウルはひとしきり、オルビースを拾った時の状況を説明した。

ボードガードは黙って聞いてくれている。

全て説明し終わると、ボードガードは「なるほどなあ」と太い腕を組んだ。

片方の手で頬の髭をさする。

「まあ、ラウル、さつきも言ったように、元いたところに返すのが一番だよ。ただ」

ボードガードはラウルの言いたいことを先回りした。

「今んとこ、お前さんのとこに戻ってくる可能性が高いんだな？」
「餌を」

良くない行為だったか、と、ラウルは両手を握りしめた。

「あげてしまったんで……多分それで」

「まあなあ。飛竜だと思ってたろうし、腹すかせてりや何とかしてやりたくなるだろうよ。そりやお前さんが悪いわけじゃねえ」

ボードガードは組んでいた腕を解き、ラウルの背をばしんと叩いた。
た。

「よし、まずはどうするか考えるぞ！」

やや咽せつつ、ラウルはボードガードを斜めに見上げた。

「あ——ありがとうございます、親方！」

心底安心できて、心底有難い。

ボードガードは首を傾けた。

「お前さん、何か考えてることがあるか？」

「ええと——」

ラウルは籠の中に視線を落とした。

「親元に戻せればと、思ってます」

「それがいいなあ」

オルビーイスは大人しく籠の底で丸まり、空色の瞳をラウルへ向けている。その目がとても愛らしい。

ボードガードが初めに言ったように、まだ幼いこの子竜を元いたところにただ返すというのは忍びない。

「あの、せめて、もうちよつとの間、世話はしようかと……幸い、うちの周りに他の人は住んでないですし。この子は、言い聞かせればわかるみたいだし、おとなしいんです」

ぴい！

とオルビーイスが元気に応える。

ボードガードは目を細め少し笑った。「愛着湧くなあ」

だが、と首を振る。

「お前さんも大体知識はあるだろうが、竜は人に懐くもんじゃねえし、大概気性が荒い。今は大人しくてもふとした瞬間に人間が——お前が餌に見えるかもしれねえ」

わかりやすく例えれば、と。

「熊を育てられるかって話だな」

「——」

それは、怖い。

「竜は熊なんて餌だぞ」

ラウルが迷う様子を見て、ボードガードはラウルの背を、今度は軽く叩いた。

「悪い悪い、あんま脅すつもりはねえんだがなあ。けど早いとこ対処しねえとならんのも実際だ。村人や領事館に知られたらえれえ騒ぎになる」

焦茶色の目がラウルの目を捉える。

「お前さんも、それじゃ一層まずいだろ」

「——俺のことは、まあ、今更です」

ボードガードは頬髭をさすり、首を僅かに傾けた。

「親元に返すのに、親方に、力を貸してもらえないかと思って。竜の巣を知りませんか」

「巢か」

ボードガードが唸る。

「まあ、そうだな。心当たりがなくもない」

ボードガードの視線を追って振り返ったラウルは、雲を纏って聳えるきりふり山の頂いただきを見た。

やはり。

「きりふり山の、主ですか」

「だと思ふな。目で確かめた訳じゃないが、飛竜の巢があこの山を避けてる。こいつがきりよせ川に流れたんなら尚更なあ」

「じゃあ、きりふり山に、登って」

『竜の巢に行くなんてご主人にやむりだぜー』

剽軽な声がラウルの腰から上がった。

「わあ！」

ラウルは飛び上がった。

すっかりヴァースの存在を忘れていた。まずい。

「何だ、誰だ？」

ボードガードがきよろきよろと辺りを見回している。

ラウルはさつと剣の柄元を押さえた。

「いえ、不安による俺の裏声」

それでもくぐもった声が手の下から流れる。

『おれ様はヴァース！ ご主人が打った名剣宝剣国宝剣だー！ よろしくなー！』

「いえ、不安による俺の裏声」

ボードガードの視線はラウルの腰にくくった剣にすっかり落ちている。

「……それ、何だ」

「へえ？ 何のことで」

『おれ様はヴァース！ ご主人が打った名剣宝剣国宝剣だー！ よろしくなー！』

「ヴァース！ 頼んだらろ！」

「剣——？」

これまたラウルの自分が打つ剣に対する悲しげな説明を聞き終えると、ヴァースをしげしげと眺め、ボードガードは頭の痛そうな声を出した。

「まさかラウル、沓^{くつわ}とかが喋り出したりはしねえよな？」

「それは、きっと、多分、大丈夫かと……」

ラウルの胡散臭い細い答えにボードガードは太い首をばしんと叩き、鼻から息を吐いた。

「ふん、まあ、いや、まあ、うん」

うん。

「なるほどねえ。まだ打ててねえとか言っていていつまで経っても剣を売らねえと思ってたが、そういうことだったのかよ。お前さんの言った、そのあと十本の剣——やたら光るとか、でか過ぎるとか」

髭の強面の、焦茶の温もりのある目をラウルに向ける。

「確かに普通の買い手はつかねえだろうなあ」

「あ、やっぱり親方でもそう思いますか」

分かってはいたが、懐の広いボードガードにそう言われると、ちよつと悲しい。

「ま、普通のは、な。それもお前さんの才能だと思やあいさ」

慰めるように笑い、「とにかく」と顔を上げる。

「今の問題は、そのちび竜をどうするかだったな」

「あ、はい」

そうだった。

「目ぼしいとこできりふり山に登ってみんなが一番だが、あの山に登るのに今日明日すぐにつて訳にもいかんだろう。それなりの準備してかなきゃならねえ」

何と言っても。

ボードガードが指折り数える。

急斜面である。

岩だらけである。

山道らしい山道がない。

中腹は霧が深く方向を見失いやすい。

谷も多く、霧の中で谷に足を滑らせる可能性がある。

獣や魔獣が出る可能性が高い。

一日で行って帰れる場所ではない。

その為の装備を揃えなければならぬ。

素人数人では命が危ない。

「飛竜では」

「連れてきたくねえ」

ボードガードはきつぱりと言った。

「竜と飛竜はお友達ってわけじゃねえからな。ちよつとくらいは意思疎通できるかもしれないが……だいたい、きりふり山の主が竜とも限らねえ。下手に怪我させんのはごめん」

一頭の飛竜を育てるのにかかる労力と経費は尋常ではない。

「何か、だんだん不可能に思えてきました」

そこまで、ラウルの為に苦勞し命をかけるような話に乗ってくれる人達がいるだろうか。

「まあまあ、俺の方で心当たりを声をかけてやるよ。商売柄^{って}手^が無くもねえ」

「親方……」

じわりと胸が温まり、ラウルはボードガードへ深々と頭を下げた。

ボードガードがこの村で慕われ頼りにされている理由が身に染みてわかる。

「本当に、有難うございます。ご迷惑をおかけしてすみません」

「何言ってるんでえ、改まって。第一まだ何も終わっちゃねえだろ」

ボードガードは照れ臭そうに笑うと、籠の横にしゃがみ込み大人しくお座りしている子竜をまた覗き込んだ。

オルビースが伸ばした首を傾げると、強面の髭面が幼い子でも見るように緩む。強面の大男がにこにこしている姿は微笑ましい。

「軍に依頼できりゃいいんだが、あんまい手じゃねえしな」

「ですよね……」

ラウルも籠の傍にしゃがむ。

ボードガードは顎髭を引っ張りながら頷いた。

「竜は軍にしてみりゃ討伐対象だしなあ。そもそも今までがなあ」

「そうなのだ。」

竜と言われて軍がまず考えるのは、五年前、それから何百年も前の、想像を超えた騒乱のことだろう。

ラウルは人伝^{ひとつて}に聞いただけでしかないが、人里近くに竜がいる

と知り軍がどんな反応をするか分からない。

「まだ、孵化したてだし、そりゃ大食いだし鉤爪もあるけど……身体もまだ小さいし……」

呟いていると、ボードガードは何に引っかかったのか、「待てよ？」とラウルを見た。

「こいつ、お前さんの話じゃほんの二、三日前に孵化したばかりだよな？」

「俺が拾った時に、孵りました。孵化は本当は、もう少し早かったかもしれないですけど」

「それでも一日程度しか変わらねえだろう。それでもうこいつは飛べんのか。飛竜も自力で飛べるようになるまでひと月はかかるぞ」
言われて初めて、ラウルはそのことに思い至った。

確かに、鳥や獣でも自分である程度のことをできるようにするまで、それなりの日数が必要だ。

「さすがに、孵化して一日で飛べるようになるとか、あまり聞かないですよね」

「竜がそういうもんなのかもしれねえが」

成長早いな、と付け加えたボードガードの言葉が今のラウルの悩みに拍車をかける。

「なるべく早く手を整える。それまでお前さん、くれぐれも餌にないつたりしないように気を付けてくれよ」

『オルーはご主人を喰ったりしねえよー、なあオルー！』

「びい！」

オルビーイスは意志を表明しようと首をうんと伸ばした。

ボードガードの目がすうっと細くなる。

「オルー？」

ラウルはぎくりと首をすくめた。

『こいつはオルビーイスってんだ、よろしくなー』

「ヴァ、ヴァース！」

止めたが、後の祭りだ。

ボードガードがじろりと、ラウルを見据える。

「ラウル——、お前さんまさか、名前なんて付けてないよなあ……？」

……ん？」

「っ……っ……」

ボードガードの真剣な眼差しが怖い。

ラウルは正直に頭を下げた。

「付けました……」

6 訪問者

きい、と安楽椅子を揺らす。

暖炉の前に敷いた毛足の長い絨毯の上で、これも師匠から譲り受けた年季の入った椅子は、大切に使い続けられ木の手すりや背もたれが磨いたように艶やかだ。

ラウルは足先を暖炉の火に向け、温もりを感じながら椅子の穏やかな揺れに身体を任せた。

丸い小ぶりの卓の上に置いた灯りが、煤けた硝子の筒の中でほんのりと室内を照らしている。

ボードガードの厚意を有難く頼りつつ、ラウルはいずれくるかもしれない未来の想像に、胸が掴まれる気持ちがしていた。

もしもオルビーイスの存在が知れ渡り、軍がオルビーイスを討伐対象と見做してしまったら。

竜と聞けば全て討伐する訳ではないが、脅威と判断されれば動くだろう。

(イル・ノーくらいなら、まだ——だけど、もし、王都に危険だと判断されてしまったら)

そうしたら、小さなオルビーイスはあつという間に討伐されてしまいかもしれない。

ラウルは椅子の背に深くもたれ、安楽椅子を揺らした。

天井の梁を見上げる。梁の向こうは三角屋根の丸太の木組みがそのまま見えている。暖かい空気が上に逃げてしまうので、板を張っ

て天井にして上は物置にしようかな、と考えているのだが、まだ手を付けられていない。

首を巡らせ、足元の絨毯へ視線を落とした。絨毯の上に折り畳んだ毛布にオルビースが丸まっている。

帰ってきてまたひとしきり食事をし、お腹が膨れているせいか、気持ちよさそうに微睡まどろんでいた。

ラウルの視線に気付いたのか、オルビースはまだ半分微睡んだまま首を上げた。こうやってしょっちゅう目が合う。

本当に可愛く思うし、良く目が合うのは多分オルビースが愛情を欲しているからだ。

『いずれ野生に戻す動物に名前を付けるとか、お前さんなあ』
ボードガードはラウルの軽率さを叱ったが、拾った経緯とオルビ

ース自身がその名前を気に入っている様子に、仕方ないと思ったようだ。

『名前を付けたんなら、尚更最後まで責任を持てよ』

名付けは覚悟でもあるのだと。

これまで四十年、何百頭と飛竜を育て送り出してきたボードガードの言葉はずしりと重い。

「びい」

鳴き声の響きはどうかしたのか、と問うようだ。

「うん——そうだね」

ラウルは椅子を鳴らし、身体を起こしてオルビースへと屈んだ。

オルビースも首を伸ばし、自分の鼻先をラウルの鼻先に寄せる。

そうすると、目一杯青い双眸が広がる。

「君がちゃんと暮らせるように、餌を取ることを覚えようね。本当はちよつとまだ早いかもしれないけど、明日からは狩りの練習をしよう」

きりふり山に登る準備が整うまで時間がかかる。ラウル自身の準備として、弓の練習と、それから携行食づくりと。

オルビースの親を探し、親元に帰してあげるにも、まだ少し日数が必要だ。

懐も保たないし。

ラウルも自分の口に入る程度、狩りは心得ている。畏も仕掛けている。

さっそく明日、兎くらいから始めよう。

オルビースが再び首を下ろして丸くなるまで、ラウルはその姿を見つめていた。

狙いをつけて放った矢が、逸れて木の幹に当たる。

がさり、と茂みを揺らし兎が飛び出した。

ラウルも一緒に飛び出る。

樹々の間を左右に跳ねながら駆ける兎の薄茶色の軀。見え隠れするそれをラウルは懸命に走って追いかけた。

頭上に一瞬目をやる。重なり合う枝葉の隙間に空が見える。どこに。白い鱗を探す。

「——オル」

『足元——！』

ヴァースの声だ。

同時に靴先が木の根に引っ掛かり、ラウルの身体は一瞬浮いた。宙を泳ぐように手足をばたつかせ、根と根の間、溜まった落葉の絨毯に突っ込む。

「ぶええっ！」

顔を上げて口に入った落ち葉をぺっと吐き出し、首を巡らせようとしたラウルの前に、オルビーイスがばさりと降りた。

脚の鉤爪に先ほどの兎を捕らえている。

「すごいぞ！ オルビーイス！」

目を見張ったラウルに、オルビーイスは得意げな「びい！」を返した。

これで今日三匹目だ。どれもオルビーイスが捕まえた。ラウルは手伝ってやるうとしているもの、実際のところ何の役にも立っていない。いや、茂みから追い立てるくらいの役には立ったと思いたい。

「まあね、君が自立できればいいんだからね。俺が狩りの腕を上げなくてもね」

『ご主人はもう少しがんばんねーと、腕上げる以前の問題だぞー』

「俺は罾で十分だもんね」

ラウルは負け惜しみを言って、

「さ、次は俺の番だ。仕掛けた罾を見に行こう」

自信満々に歩き出した。

ラウルの仕掛けた三つの罾はどれも空だった。

『罾のコツを学んだほうがいいんじゃないかー？』

「今日はね、たまたま空だったんだよ」

『餌だけきれいに取られてたぞー単なる餌場だと思われてんじゃないかー？』

「そしていつか油断するんだよ」

オルビーイスの成果である兎五匹を肩に背負い、家路を辿る。

「——あれ？」

家が見える位置で、ラウルは立ち止まった。

人がいる。

家の前で、ラウルに斜めに背を向け、鍛冶小屋を熱心に見ている。

「オルビーイス、隠れてて」

び。

『客じゃないかー？』

「客?! ヴァースは静かにね！」

ラウルは小走りに近寄った。

「あの！ お待たせしました！」

振り返った相手を見て、ラウルは最後の一步を踏み出すのを、止めた。

中途半端な位置で立ち止まる。
身に纏っているのは、鎧。

銀の銅と、銀の冑。^{かぶと} 繊細な模様が刻まれていて、見るからに由緒正しそうだ。腰には長剣を帯びていて、鞆の装飾も見事だった。背筋はぴんと張り、上げた面当てから覗く面は凛々しく引き締まっている。

ただ、揃いの肘当てや手甲、膝当てに脛当て、靴は革製だ。ラウルが中途半端に足を止めたのは、そのちぐはぐな格好と本人の持つ雰囲気のためだ。

(全部金属だと動きにくいからかな。それとも足りない部品を打って欲しいのかな)

男は両手で冑を外し体の脇に抱えると、ラウルへと深々と上体を伏せた。

ほぼ直角。

「え、いや、あのっ」

たっぷりふた呼吸分頭を下げ、それから顔を上げると、男はラウルをじっと見つめた。濃い青の瞳は生真面目さを表しているようだ。

「私は、セレスティ・ヨハン・バルシュミーデと申します」

思ったよりも声が若い。

黒に近い短い髪は緩く癖が付いている。

「バルシュミーデ」

聞いたことがある。

ここから更に南に下った地域の領主が、バルシュミーデー——伯爵だ。

その関係者だろうか。雰囲気がある。「童舎のボードガード殿にお聞きした。貴殿が伝説の鍛冶師殿とお見受けする」

「ああ、ボードガード親方からの……」

ラウルは束の間考え込んだ。

「え、親方、どんな言い方したの」

「素晴らしい剣を打たれるとか」

「え、親方、どんな言い方したの」

先日説明を盛ってしまっただろうか。

「貴殿の腕を見込んで、私に、ぜひに剣を打って頂きたい」

セレスティの言葉にラウルは瞳を輝かせた。

やった。

仕事だ。

やっぱり鎧が足りないのだ。

銅だけではこの青年を鎧うに不十分だ。

「剣ですか、分かり……」

剣。

ひたと動きを止めて束の間考え込み、ラウルは顔を跳ね上げた。

「え——、剣ですか?!」

第3章 旅の仲間

1 戦士は御前試合に出たい

「セレスティ・ヨハン・バルシュミーデと申します」
青年はそう名乗り、剣を打って欲しい、と告げた。

念の為、ヴァースを鍛冶小屋に、他の剣達と一緒に壁に掛けた。
「ヴァース、オルビーイスをここに呼んで、隠れてるよう言っておいて」

小声で頼んで小屋を出ると、ラウルは外で待っていたセレスティを母屋の居間に案内した。待っている間も背筋をピンと張って姿勢が良い。

暖炉に火を入れて、セレスティにその前の椅子を勧めると、セレスティはかつちりした動作で腰掛けた。鎧は脱いで戸口のそばに置いてある。

お茶を淹れて戻ると、セレスティは暖炉の火をじつと見つめていた。やはり背筋は整然と伸び、首だけ傾けている。

軍人みたいだな、と思った。

ただ軍服でもないし、鎧もちぐはぐだが。

お茶を勧め、ラウルも椅子に腰掛けた。

「改めて、私はラウル・オーランドと申します」

「先触れもなくの訪問となり、失礼いたしました」

とまたセレスティが上体を伏せる。

顔を上げるのを待って、ラウルは問いかけた。

「あの、バルシュミーデというと確か、フェン・ロー地方の伯爵家の？」

「はい。決して広大とは言えませんが、北ゴーズ帯を預らせて頂いております。家は昨年、兄が継ぎました。私は四男のいわゆる穀潰し、他に兄が二人、姉が一人、弟が一人おりまして、さほど広くない館に居場所もなく。故に一念発起して半年前に家を出た次第です」

以来旅をしているのだ、と言う。

セレスティの言うことはラウルにも馴染みがある。貴族の次男坊以下は長男と扱いが異なるのが一般的だ。

「一念発起、というのは」

「はい」

セレスティは整った、凜とした面をまつすぐ持ち上げた。

何歳くらいだろうか。ラウルと同じ二十四歳くらいかもう少し上——同い年ならばなんとなく嬉しいな、と、その面差しと所作を見る。

「王都に出て、御前試合で我が身の価値を測りたいと愚考致しました」

「御前試合——来年の？」

そう言えば、そんなことを聞いたような、と首を傾げる。

セレスティは頷いた。

「おお。ご承知の通りです。さすがは名鍛冶師殿。まさに来年の四月に、久方振りに王都で行われるそれを目指しております。なにせ前回の開催より十年近く過ぎておりますので」

多くの志願者がいるだろう、と。

「私はその為にまず武芸を研鑽し備えたいと、場を求めて旅をしていたところ、我が家も世話になってきたキルセンの竜舎のボードガード殿より、貴殿のことをお聞きしました。なかりたいことがおありとか」

話が、見えてきた。

ラウルは脈拍が高まるのを感じた。

きりふり山に登るための――

(親方、ありがとうございます)

伝手を探すと喋って来て、さっそく声をかけてくれたのだ。

心強い助け手が現れた。

「共にきりふり山に登る者を探しておられると」

セレスティはラウルを見つめ、にこりと微笑んだ。

凜々しい面に少し幼い印象が加わり、好ましい。

「どうか私に、道中を共にさせて頂きたい。まだまだ研鑽中の身ではありますが、剣は手に馴染んでおります。貴殿の目的を果たされたのち、私がお役に立ったとお認め頂けるのであれば、剣を打って頂ければ」

とても有り難い申し出だった。

ただ、一つ。

大きな問題が。

「あの」

ラウルは姿勢を正した。

「ご協力のお申し出は大変有り難いですし、是非にもお願いしたいのですが」

「はい、是非」

にっこり。

屈託なく笑う。

何という好青年。

「私の方が、バルシユミード殿のお役に立てるかどうか」

「と、申されますと」

「ボードガード親方の言うとおり剣を打ってはいるのですが、伝説の、と言うのがちよつと……だいぶというか、完全に誇張というか」

セレスティの生真面目な瞳がラウルの説明を待っている。

「すみません」

とラウルは深々と頭を下げた。

「伝説の、というなら多分、先代のことでしょう。王都からも依頼が来たと聞いています。ですが先代は昨夏、亡くなりました。晩年は数を打たず、その手の作も全て手放し、ここにはお譲りできるものが残っておりません」

いや、実のところ一振りだけ、残っている。

けれどそれは、ラウルの手本として大切な一振りだった。

手本と、それから――

「私はこの工房を引き継ぎましたが、駆け出しで、まだろくにまともな剣を打ち上げたことはありません」

「なるほど……」

この好青年の期待に添えないこと、落胆されることはとても残念な気持ちになる。

セレスティは自分の右手を見つめてほんの少し考えていたが、視線をラウルへ戻した。

「先ほどの小屋は、鍛冶小屋でしょうか。剣を収めておられた。無礼を承知で申し上げますが、貴方が打たれた剣を見せては頂けませんか」

「えっ、あつ、いや、はい」

挙動不審になりかけるところを極力抑える。

ヴァースを小屋にしまったところはセレスティも見ているから、剣がないとは言えない。

大丈夫だろうか。

不安しかないが。

「あの、では、外へ」

案内して鍛冶小屋の扉を入ると、セレスティは戸口でまず足を止め「おお」と唸った。

壁に立てかけられた大剣、その横に掛けられた十振りの剣。

それらが美しい剣身を見せて並んでいる様は見栄え良く、目を引くものがある。

見栄えだけが。

「近寄っても？」

「うっ、はい」

セレスティは近寄って剣を一振り一振り眺め、ややあつて息を吐き、ラウルを振り返った。

「いずれも素晴らしい作品ではありませんか。これでもご自身は満足されていないということでしょうか」

「いや、そうでは」

「びい！」

「あつ」

そうだった。オルビーイスがここにいたのだった。

失敗したと思う前に、もうオルビーイスはセレスティの目の前でラウルの肩に降り立っていた。

やや警戒気味に、頭越しからセレスティを覗いている。

セレスティが目を丸くする。

「飛竜——？ いえ、違いますね」

「あ、あの……」

この状況、何度目だろう、と、ラウルは数日前からのことを頭の中で数えた。

2 戦士は大剣に憧れを抱く

「なるほど、オーランド殿、貴方がきりふり山に登ろうとしているのは、そういう事情があったのですね」

オルビーイスを拾った経緯を丁寧に説明したことと、ボードガードからはラウルが訳ありであること、まずは会って話を聞いてみてほしいと、前もってそう告げられていたということもあり、セレスティの面からは始めの驚きの色は消えていた。

興味深そうに、ラウルの肩に陣取っている小さな竜を眺めている。オルビーイスも慣れてきたのかセレスティをじっと見つめ返している。

「竜というただ恐ろしい印象を強く受けておりました。初めてこの目で見ましたが、まだこのくらいだと可愛らしいものですね」

「そう——そうなんですよね！」

思わずラウルは拳を握り込んだ。

前のめりになったのでオルビーイスの尻尾が背中中で跳ねる。

「こんなに小さいのに頭が良くて、俺の言いたいことがちゃんとわかるみたいなんです。それに狩りももうできて、俺より。結構早く飛べますし、それにたくさん食べるのが、嬉しそうで何ていうか可愛くて。ちよつと懐はきついですけど」

セレスティはにこりと微笑んだ。

「確かに、ラウル殿によく懐いているようです」

「駄目なことは駄目と、伝えればきちんとわかってくれます」

誰かを傷付けたりなんかしない。

「そのようです。それにしても、驚きだ」

「えと、竜がいることに？」

「それもですが」

とセレスティはラウルを見た。

「その子竜は、生まれたばかりなのでしょう。十日程度前に。それでもうその子は飛べて、狩りもできるとは——通常は飛べるまでもう少しかかりそうなものですが」

ボードガードにも同じことを言われた。

「竜は、分かっていることが多いって言いますし」

口にした響きは少し急せいでいたかもしれない。

「元気なら、それで、まずは」

「そうですね」

セレスティはラウルに頷き、なおさら興味深そうな目をした。

「私は、オルビーイスを触っても大丈夫でしょうか」

「たぶん——」

いや、今までラウル以外が触れたことはない。

「オルビーイス、触っていい？」

オルビーイスは首を傾げたが、ラウルがセレスティに近付けようと背を傾けると背中をささっと移動した。

お尻の辺りにぶら下がっている。

「うーん」

微妙な体勢になってしまった。

「好まないようです。無理を言ってしまうすみません」

少し残念そうだ。

「そんな。あの、それで、剣なんです。見た目は、まあ俺も納得がいつているっていうか、問題は（そんなに）ないんです」

「という、納得されていないのは切れ味でしょうか。とても良く切れそうに見えますが」

「ええ、その、中身」

「がたがたつ、と壁の剣達が騒いだ。

「ん？ 今」

訝しげにセレスティが壁へ首を巡らせる。

「いえー！ ね、鼠かな？！」

ラウルは背筋を伸ばしてキョドキョド、さほど広くない小屋の中を見回した。

「暖かくなりましたし！」

「確かに、もう四月も終わりです」

セレスティが見回している間に、ラウルは剣達に視線を送る。

（静かにしてて、お願いだから）

「剣を、手に取って拝見してもよろしいですか？」

「ど、どうぞ……」

怯えつつも、ラウルはセレスティが最初にどの剣を手取るか、

ふと興味が湧いた。

姿の違う剣達の中で、セレスティの好むものはどれだろう。

「では」

と言って、セレスティは手を伸ばした。

立て掛けていた大剣に。

（うわー。俺と一緒にだー）

けれど背が高く筋肉質なセレスティなら、問題なく使えるのかも
しれない。

期待して見つめる先で、壁の大剣の柄に手を伸ばして身体の前に
倒し——かけて、セレスティは唸った。

斜めになった剣を支える腕の、袖から除く手首の辺りに血管を浮
き上がらせ、支えるためか右足を一步引いている。

「こ——、これは見た目以上に、重量が……」

「す、すみませんすみません！ 怪我しないように！」

剣身と柄を合わせて、セレスティの頭まである代物だ。

（あれ、でも俺は倒れたのを起こすくらいなら何とかなるけどな
あ）

筋肉質なセレスティならもつと楽そうなものだが。

「手伝いま」

「いえ——しばし、私に」

それでも少しの間セレスティはそのまま剣を支えていたが、やが
て残念そうな溜息を一つつき、大剣を壁に立てかけ直した。

その動作だけでもかなりの重さだと伺える。

ふう、と肩で息を吐く。額には汗が薄く滲んでいる。

「これは、常人では構えるどころかただ持ち上げるのも困難です
ね。どのような場面を想定されて？」

「いやあ。気付いたらそうなっていたというか。夢中になりすぎま
して……」

剣が誰よりも大きくなりたいと主張したとか言えない。

「ははは。面白い方だ」

爽やかに笑ったが、まずそれを選ぼうとしたセレスティもちよつと面白い。

何とか粘ろうとしていたし。

「ふむ……」

腕を組んで他の剣を見回す。

時折大剣に視線が戻り、なかなか他の剣に手を伸ばす気配がない。

「——大剣がお好きなのですか」

「滅多に見ない。憧れますね。どうにか使いたかった」

「なるほど」

素直だ。

御前試合に挑もうというだけはある。

ラウルはふつと瞳の端に捉えたものに、上がりかけた声を飲み込んだ。

フルゴルが主張ひかりしかけている。

さつと手を伸ばし柄を握ると、意思が伝わったのかフルゴルは光るのをやめた。

「ふう」

「どうかされましたか」

腕をぴんと伸ばして寄りかかるように剣を抑えているラウルを見

て、セレスティはラウルと押さえているフルゴル剣を見比べた。

「その剣が、貴殿の見立てとか？」

「いえ、この剣は——」

どさつ。

一番右端の十一番目に打った剣が落ちた。

素材の時あまり主張せずラウルの好きなように打てばいいと言ってくれた剣だ。

「あつ、斜めに掛かってましたかねー」

そう言いつつ拾い上げる。

(珍し……)

ガタン！

(ひい！)

セレスティの背後でガタガタと身をゆすつたのはリトスリトスだ。

「ん？」

セレスティが首を巡らせる。

「こっここ、小屋の建て付けが悪くてー」

「そう言えば今日は風もありますね」

「ですすす」

どうしようか。

もう観念すべきだろうか。

早いところ白状した方が傷は浅いかもしれない。

いやあ、この剣達、個性派揃いで。光るわ喋るわ倒れるわかくかくしかじか、名前もあるんですよー。

(ぐふう)

精神を抉られる。

「え、ええと、あの、バル……」

「オーランド殿、こちらは——」

二度。三度。

っらい。

『あんたはいい所に来た。剣が欲しいならこの世のどこよりもここが正解だ。こいつは天才だぞー。おれ様を打ち上げた才能に震えろー』

「うっ。うっううう」

ラウルは涙を零しぶるぶると身を震わせた。

3 鍛冶工房の仲間達を紹介するぜ

セレスティはヴァースのことをすんなり受け止めてくれた。驚きはしたが、頭での理解と納得が早いのだ。

そしてその上で、ラウルの今ある剣のうち、いずれかを使わせて欲しいと、そうも言ってくれた。

(何ていい人なんだ。ヴァースが喋ったのを見てもまだそう言ってくれるだなんて)

こんな人物はもう二度と現れないかもしれない。

(それに)

先ほどはあれで終わり、どの剣を選ぶかをまだ決めていないのだが、どうやらリトストリスがセレスティに一目惚れしているようだ、とヴァースがこっそり教えてくれた。

(えっと。どういうことかな)

一目惚れ。

さらりと出てくる単語なのだろうか、剣から。

(まあそもそも普通の剣は喋らないけど)

とは言えこの剣が貴方に一目惚れしてるからこの剣を使ってください。

とはさすがに伝え難い。

ラウルは今ある剣達を見比べて考えたのち、今回きりふり山に行くのにどれを使ってもらってもいいことと、きりふり山から戻ったラセレスティのために新しい剣を打つことを約束した。

「改めて、私のことはどうぞセレスティと呼んでください。オーラ
ンド殿」

鍛冶小屋から居間に戻り、暖炉の前の椅子に座って再び向かい合
う。

「あ、では俺、私のことも、ラウルと呼んで頂ければ」

「ありがとうございます、ラウル殿」

慌てて手を振る。

「殿はいらないです。ラウルで」

「ならば私も、セレスティと、そのままで」

呼び捨てでいいと、そう言った。

「それは、伯爵家の方を……」

ラウルの子爵家とは格が違う。

「申し上げたように貧乏貴族の、私は四男ですし何より若輩者です

ので、お構いなく」

「そんな」

これは。

これは、友達になる流れでは？

きりふり山の冒険を通じて固い友情で結ばれる話では。

なんだか嬉しい。

「とはいえ——」

歳上かもしれない相手をやはり呼び捨てでは、と言おうとして、

失礼に当たらないよう先に確認しておくことにした。『何より若輩

者』と、そう言っていたような。

「あの、セレスティ殿——じゃなくてセレスティ、貴方の歳をお聞
きしても？」

「はい」

おもはゆ

面映そうに、セレスティは微笑んだ。

「来月、二十歳になります」

まじかー。

歳下かー。

いやいや、歳上か歳下かなんて関係ない。セレスティはいい人だ
し。

まじかー。

歳下かー。

まじかー。

「ラウル？」

「はっ」

ちよつと混乱していた。

「いえ、思ったよりお若いんですね」

頬が引き攣っていなかったか気になったが、セレスティはまた気

恥ずかしそうに

「この外見は有難いのです。ハツタリというものが効きますので」

と微笑んだ。

「ただ、剣については幼少より鍛錬を積んで参りました。そこは信

頼していただければ」

「それは、もう」

(俺、年下より役に立たないかもしれない)

『だからご主人ー、ご主人も剣の腕を磨けよー』

「心を読むのやめてくれる？」

セレスティはしばらくラウルの小屋に滞在しながら、きりふり山に行くには準備を整えることになった。

武器や防具、防寒具などの装備、食料、飲料。きりふり山の山頂まで行ったとして単純計算では丸二日。道に迷った時を考えて最低三日分は用意したい。

その日の午後からラウル達はそれぞれ、きりふり山登頂の準備に取り掛かった。

山頂に棲むだろう、きりふり山の主——竜。

険しい山道と、まだ残る雪、中腹の霧。

霧の中から襲いかかってくるかもしれない、獣や魔獣。その息遣いを思い浮かべると背筋が泡立つ。

これはラウルの人生できつと、二度もあるかないかの冒険だ。

ただ一番の問題は、竜がいるかもしれない山に登るにあたっての人員がまだ揃っていないことだった。

例えセレスティが王都を目指すほどの剣の腕を持っていたとしても、二人だけでは心許ない。

(特に俺がほとんど役に立たないし)

それはセレスティも同様のようで、ラウルの元を訪れた翌日、ロードガード竜舎へ相談に行った。

帰りには荷馬車を雇い、携行食とラウル用にと革鎧を、それからオルビーイスのために食料を買ってきてくれたので、オルビーイスはしばらく嬉しそうにセレスティの周りをうろついていた。

ついでに言えばセレスティは料理の腕もかなりのもので、挨拶代わりにと次々美味そうな料理を作り上げていくセレスティの周りを、ラウルもオルビーイスと一緒にうろついていた。

翌日。

ラウルは朝から緊張していた。

井戸から汲み上げた冷たい水で顔を洗い、冷えた朝の空気に濡れたままの頬をさらす。

それから両手で挟むように頬を叩いた。

「——よし」

心を決めたのだ。

今ある剣達の中から、セレスティに今日、朝食後、選んでもらう。

そして旅が終わったら、改めて新しい剣を打とう。

なるべく寡黙な鋼を選び、実直な、セレスティの人柄に相応しい剣になるようお願いを込めて。

セレスティはラウルの提案を喜んでくれた。

という訳で朝食後、ラウルとオルビーイスとセレスティは再び鍛冶小屋に立った。

昨日は誤魔化してしまったが、全部しっかりと洗いざらい説明するつもりだ。

「どのような特徴を持つ剣なのか、それぞれご説明させて頂きませう」

とまず告げる。

セレスティは本当に好青年で、昨日も剣達が風変わりなことやオルビーイスのことも、ラウルの話を呆れることなく受け止めてくれていた。

とは言えこの素っ頓狂な剣達を何の考えもなく紹介したら、ちょっと引かれるかもしれない。

(まずは――)

やはりヴァースだろう。

「私は素材の声が聞こえる質なんです」

と言い出したラウルのことも、セレスティは生真面目な面持ちで見つめてくる。

「鋼達が色々と主張をするんですが、それを聞きながら打っている」とつい」

『ついじゃねーだろー。おれ様の誕生は必然だー』

「このような剣が打ち上がる訳ですが、いずれもちよつと癖はありますがそれ以外はフツウで、あとは使用方法といえますか」

『ご主人の剣は名剣揃いだぞー。中でもおれ様が一番だけどなー。他の奴らはくせ者ばっかだなー』

「ヴァース。ちよつとだけ静かにしてくるかな」

ややこしい。

「とても興味深い。他の剣がどのようなものか、楽しみですね」
セレスティは微笑んでいる。

(いい人……)

「では、」

ともう一度咳払いし、ラウルは次に壁に立てかけた大剣を示した。

「昨日ご覧になったこれは、鋒から柄尻まで六尺(約180cm)ありますが、というのも打っている間ずっと『大きくなりたい』と熱望しております」

気が付いたら振り回せないほど大きく重い剣になっていました。

「シュディアルといいます」

「鋼鉄という意味ですか。本当に素晴らしい……」

まだ未練があるのか、セレスティは熱のこもった眼差しで大剣を見つめている。

(何だか男の子みたいだなあ)

とラウルは微笑ましくなった。

が。

シュディアルを使おうというのは普通に無理なので諦めてもらう。

「えー、次は、打っている間『無骨なのは嫌だ』とずっと言っていた、この剣です。スキアーという名前です」

とても薄い刃をしているが、打ち上げた時に手を滑らせて足元に落とし、側にあった作業台を真つ二つに絶ってしまったほど鋭い。

「影を切ったら本体を切っちゃった、みたいなー感じでしてー」

ちよつとカッコ良さげなことを言えただろうか。

「ふうむ、確かに。見るからに切れ味がよさそうです」

セレスティは感心しきりだ。

（う、嬉しい——）

弟の苦笑していた顔が思い浮かぶ。

（エーリック、にいちゃん、認められてるぞ——！）

次の、四本目、行っちゃうかな。

ふふっ。

「この剣はレペルトウス。とにかく『普通なのを嫌』がって。まあ何が普通か、俺もちよつともうよくわからないんですが」

唯一、直剣ではなく『く』の時に曲がった姿をしている。

切れ味はそれほど特筆すべきところはないが、軽いので投げて使うといい、だろうか。

「副装備にいいかもしれません」

「そうですね。使うには訓練が必要そうです」

「はい。今回はちよつと無理ですかね。それで、五本目のこの剣は、オリゴゴスです」

「オリゴゴス？ 珍しい名前ですが、どのような意味が」

「凄く無口らしくて、ヴァースが」

『まんま無口って意味だよ。おれ様がつけてやった！』

見た目は非常に一般的な片手剣だ。

そのくせ片手では扱えないほど重い。さすがにシュディアルほどではないが。

ラウルにもこの剣は一番拵めていない。

「次に、これがフルゴルと言って。光ります」

「光る」

「敵の目眩しにとってもいいです。混戦時とか、すぐく」

実体験です。

フルゴルがじわじわと光り出した。

選んで欲しいようだ。

「なるほど。眩しい」

喜びの気配を感じる。

セレスティが真剣に聞いてくれているのが心苦しい。

煌々と光すぎる前に次に行こう。

「次は、えーと」

セレスティの視線がその隣の剣に移ると、剣はガタガタと身をそれ

揺らし始めた。

（おう、落ち着けー）

「動いている。この剣もヴァースのように？」

「ではないと思いますが、今までそういうことはないの——」
持った感じは特に重くとも軽くとも、どちらでもないのだが。

「ええと、彼女は、リトスリトス、です」

打っている間ずっと『私を見て見て。美人に打って』と言いつづけていた。

ちよつとでも気を抜こうものなら非常に怒られた。

（セレスティのことを好きだと言っているのは、この際黙っておこう）

まあ本当に見惚れるほど美しい姿形をした剣ではある。

「彼女——この剣は女性なのですね」

セレスティが腕を組む。

「確かに、とても美しい剣です。惚れ惚れするほどに」
カタカタ。

(照れてる……)

「ただ私にはやや、細すぎるかもしれません」

ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ

「リトスリトス！」

ラウルは腕を伸ばしてリトスリトスの柄を押さえた。

「静かにしよう。ねっ？」

「申し訳ない、私が失礼な発言を——」

心底申し訳なさそうな顔をしているセレスティにラウルは精一杯首を振った。

「いえいえいえ。用途の問題ですから」

というか、剣に失礼な発言で何なのか。

言葉に引っかかってガタガタ身をゆする剣とは。

もう、何というかこう、この小屋の中は一般常識から大きくかけ離れた様相を呈している。

(リトスリトス)

ガタン！

(さん)

ガタ。

(とても美人なリトスリトスさん)

静かになった。

(セレスティに変だと思われないように、静かにね)

ふう。

「ええと。ここにある最後の剣が、こちらです。ヴァースの一つ前に打ちました。ノウム」

そう言ってラウルは、一番右端の下段に掛けてある剣を示した。

この剣だけは打っている間、好きに打てばいいと言ってくれた。

だからか、大き過ぎたりも切れ過ぎたりも光ったりも重過ぎたりもガタガタと揺れたりも、喋ったりもしない。

ごくごく一般的、村の武器屋に打っていても何の違和感もないだろう。

ただラウルはもうこの時点で、村に売りにいく気力は失っていた。

さてこの中で、セレスティに相応しいのは一体どの剣だろう。

(一番無難に使ってもらえるのは——)

ノウム。

そういえば昨日、セレスティの前で壁から落ちたのがノウムだった。

(主張するなんて、珍しいな。ノウムがいいかな)

それともオリゴゴスとか。

ふと、ラウルは小屋の奥にある扉付きの棚へ目を向けた。

そこに一振りだけ、師匠である鍛冶師の打った剣が収められている。

最後の一振り。

(あれは)

ラウルは一つ息を吐いた。

あの剣は、大切な手本であり指標だ。

セレスティにとっては一発扱いやすく、切れ味も良く、彼が欲しているものだと思うが。

(申し訳ないけど、俺の打った剣の中から選んでもらって——)
ちらり、とセレスティを確認する。

(ああ。まだ見てる。シユディアル 大 剣 見てる)

無理ですから。

さすがに装備して十歩も歩けませんから。

多分巨人用ですから、彼。

「じっくり。じっくり選んでください、セレスティ。まだ出発には
日が必要ですからね」

と言いつつラウルは、じつと大シユディアル 剣に熱視線を注いでいるセレ

ステイの腕を引いて鍛冶小屋を出た。

4 二人と三人目／ツイズ魔法使いは冒険したい

セレスティが来て四日目の、早朝のことだった。

地面から濃厚な霧が樹々の間に白く立ち込め、五月に入ったとは
いえ朝の森は陽射しが差し込まず、まだ肌寒い。

家の外が騒がしかった。

ゆめうつ 夢現に、声が途切れ途切れに聞こえている。

誰だろう。

——呼んでる。

誰だ。

「ラウル」

——父さん

「ラウル。お前は何をしている。そこで」

——父さん。俺は

「オーランドを、領地を、お前は見捨てるのか？」

ラウルは首を振った。

違うよ、父さん。

そんなつもりじゃない。

「ラウル」

——レイ

いつもずっと、色んな話をしてきた。

そのまま、その先もと——

「何故決闘の場に来なかった」

「俺を見くびって——軽んじた」

レイ。レイノルド。

あの時、俺は

「ラウル」

はっと目を開ける。

ラウルは枕から頭を上げ、ほの白く滲んでいる窓を見上げた。

オルビーイスを見れば、寝台横に置いた籠の中で心地良い寝息を立てている。

「た……も……」

また、外で何か声がした。

「なんだ——」

一瞬警戒したのは先日の密猟者の一件だが、枕元のヴァースは反応していない。

と、今度は小さいながらもはっきりと、声が聞こえた。

「たーのもー！」

女性——女の子？

幼さを残した声だ。

(何で、森に)

「たーのもー！」

たーのもー？

「——」

「たーのもー！」

ラウルは首を傾げた。

「……頼もう？」

コンコン、と扉が叩かれる。

扉を開いて顔を出したのはセレスティだ。

いつ起きたのか、もう身支度を済ませている。

「ラウル。どうやら貴殿に客人のようです」

「——客——!?! ありがとうございます！」

がばりと跳ね起き、ラウルは寝巻きの上に上着を羽織ると居間を横切った。居間だと声ははっきりと聞こえる。

若い、声だ。

とても。

一人ではない。

「たーのもー！」

「や、やめなよ、リズちゃん、まだ朝早いんだし、め、迷惑だよ」
「だって全然出てこないんだもん！ 寒いしお腹減ったし！ たーのもー！ たーのもー！ たーのもー！ たーのもー！ たーのもー！」

「リズちゃんってば。怒られるよう」

「いいからヴィリも一緒に声出してよ。気付いてもらえないじゃない。ほらあつ。たーのもー」

がちやり。

玄関扉を開け、ラウルはすぐに来客を見つけた。

戸口前の三段ばかりの階段の下、足元に霧の漂う中、二人、立っている。

同じ身長、白と黒、色違いの膝丈の外套を纏い、外套の頭巾を目深に被って立っている様子は、昔読んだお伽話の一場面のように感じられた。

目を引いたのは、二人がそれぞれ手に持っている五尺（約150cm）とちよつとの、彼等の身長よりも少し背の高い杖。

二人はラウルを見上げた。

「……たーのもー！」

「あ、聞こえてます。えっと、お待ちせしました、おはようございます。何かご用ですか？」

右側にいた、黒い外套が一步前へ出た。

と言うか、白い外套の方が黒い外套の背中に隠れたような。

黒い外套の頭巾を背に落とすと、耳元まで揃えたまっすぐな黒髪が、顔を縁取ってさらりと揺れた。

ラウルは目を見開いた。

大きな水色の瞳。あどけなさを残した頬と唇。

少女——そしてとても綺麗な子だ。

少女はラウルを見上げて、胸を張った。

「初めまして。あたしはリズ。こっちはヴィリ。法術士。あ、二人ともね。あなたがラウル・オーランドさん？」

そう、と声に出す前に、リズは更にもう一步踏み出し、身体の前に右手に持っていた杖をとん、と立てた。杖の先端に飾られた鈴がしやらんと澄んだ音を立てる。

「一緒に、きりふり山に行こうと思って来たの」

「改めて、ラウル・オーランドと言います」

セレスティの時と同じく、ラウルは法術士と名乗った二人を招き入れ、暖炉の前の席を勧めた。

「あたしはリズリア・トルム。この子はヴィルリア。ヴィリって呼んでる。二人とも十六歳。見たとおり双子だよ」

言うとおりに、二人の顔の造りはそっくりだった。

身長は二人とも五尺と少し。小造りで繊細な顔立ちに柔和な眉も同じだ。

柔らかな黒髪をリズリアは耳元ですっぱりと切り、ヴィルリアは首まで伸ばして両側の髪を後ろで括っついて、それが二人の印象を変えていた。

水色の瞳が何より、意識を捉える。

素直な気持ちを言えば、滅多に見ないくらい美しい少女達でラウルは密かに緊張している。

「住んでるところはイル・ノー。父さまが学者で母さまが法術士なんだ。だから法術の腕は信頼してもらっていいと思う」

「リズちゃん、僕は自信ないよ……母さまに」

「ヴィリは黙っててっ」

『よー！ おれ様』

「最初に言っておくけど、この剣喋るんだ」

ヴァースの機先を制し、ラウルは傍らに置いた剣を指差すときっぱりと言いつつ切った。

「え？」

「ど、どれ……」

と『この剣』を探してリズリーアとヴィルリーアの目がさ迷う。

「この剣ね、この剣」

ラウルの指さす先。

「ええー！ 何それ、嘘お！」

「じよ、冗談ですよ……」

二人が瞳を見開き、椅子の上で恐々と身を乗り出した。

「冗談なんかじゃないよ。この剣は冗談ばかり言ってるけどねー」

とにこにこし、ラウルはヴァースを持ち上げた。

「ほら、ヴァース、ご挨拶して」

『……おれ様はヴァース。ご主人の打った、ええと』

(戸惑ってる戸惑ってる)
にやり。

先手必勝だ。

「ほら、ね？ まあちよっと他の剣と違うだけだから、気にしないで。仲良くしてやってね」

最初から説明してしまった方が何かと楽なのだ。

二人は瞳も口も丸く開いたまま、互いに顔を見合わせた。

「法術……？ ヴィリ、知ってる？」

「え、え、聞いたことない、けど……」

『ちえー』

ヴァースは唇を尖らせたように呟き、と思ったらラウルの腕は独りでに動いて高くヴァースを掲げた。

『よく聞けガキどもー！ おれ様はヴァース！ ご主人の打った名剣宝剣国宝剣だー！ よろしくなー！』

めげないな。

そもそもこの子達も、君より年上だけだね。

「へええ……」

双子は口をあんぐり開けて見つめていたが、リズの二つの瞳が宝物を見つけたかのようにきらりと輝いた。

ぴよん、と子うさぎのように身を跳ねる。

「すごい！ 喋る剣だなんて、初めて見た！ どんな術使ってるの？ あっ、改めてあたし、リズリーア・トルム。リズって呼んでね。今十六歳。よろしくね！ ヴァースさん」

『よろしくなー』

『よろしくなー』

「よ、よろしくです。僕はヴィリです」

『よろしくなー』

『法術じゃないしー』

「でもきつと絶対、あたし達の母さまならその法術知ってるし」

「ええ、嘘お。法術以外ないと思うし」
『違うしー』

「嘘お。法術だし。母さまに聞いたらすぐわかるもんっ」

「リ、リズちゃん、失礼だよ……」

リズリーアは勝気でどうやら少しせつがちで、ヴィルリーアの方は引っ込み思案のようだ。

妹のアデラードと印象が重なるところもあり、ラウルは微笑ましくなった。

(アデラードに紹介したいな。年齢ならエーリックと同じだけど)

二人に。

とは言えこのままヴァースとのやりとりになってしまいそうなので、ラウルは話を戻した。

「それで、君たちの用件は？」

きりふり山とか何とか言っていたけれど。

寝起きだったから聞き間違いかもしれない、と思ったが、リズリーアは得意げに顔を持ち上げた。

「ボードガードさんから貴方が助っ人を探してるって聞いたんだ。きりふり山に登るんでしょ？ 二人じゃムリ。だからあたしたちが協力してあげる！」

「僕は、そんな、自信ないし……」

「ボードガード親方が」

オルビーイスはまだ寢室だ。ラウルは寢室のある壁へちらりと視線を向けた。

ボードガードが、特に今回のことを滅多な相手に話すとは思えない。

ボードガードの紹介ならば、この子達は年齢と見た目に反して、かなりの法術の技術を持っているのかもしれない。

「じゃあ本当に、きりふり山へ一緒に行こうと思ってるんだね？」

「そう、当然。だから来たんだもん」

胸を張る。

リズリーアの黒い外套——法衣は幅広の襟が肩をぐるりと巻いていて、黄色混じりの白い糸で蔓草と花弁の刺繍が施されている。首元に縫い取られた太陽の意匠が目を引きいた。

ヴィルリーアの白い法衣には灰色混じりの濃紺の糸で同じ刺繍が施され、首元の刺繍は月だ。

「さ。早いとききりふり山へ向けて出発しよ。今日出るんでしょ？」

せっかちな様子にラウルは微笑んだ。

「いやいや、まだ無理だよ」

「何で？」

「何でって、食料とか武器とか防寒具とか色々準備しなきゃ。君たち、たとえば装備は何を持つてるの？」

「この杖」

再び、とん、と杖を立てる。しゃらり。

長さは五尺四寸（162 cm）ほど、艶やかに磨かれた木は山桜だろうか。ほんのりと赤みがかっている。

先端が輪っか状になっていて、そこに小さな鈴が三つ、ついていた。リズリーアは金色、ヴィルリーアは銀色。

「失礼——」

それまでただ話を聞いていたセレスティが、改めて名乗ると、二人へと問いかけた。

「お二人は法術士とのことですが、どのような法術を用いられるのですか」

セレスティの凛々しい姿と声にリズリーアは頬を輝かせた。

「あたしは、治癒とか。裂傷を治す程度の初歩だけど。あと、泥水の浄化と、眠り寄せ。でも中級治癒を覚えたいんだ。中級なら骨折が治せるようになるから。だから実践の経験が必要なの」

今回の旅で経験を積んだ、と意気込んでいる。

「治癒系なのですね。素晴らしい」

「えへへ。ほら、次、ヴィリも。ヴィリはね、攻撃系なんだよ」

へえ、とラウルは意外さを覚えた。双子の印象は逆だ。

ヴィルリーアはもじもじと手を組み、俯きがちに口を開いた。

「ぼ、僕は、光の矢とか、えと、その、か、風切り……まだ全然、

弱いんですけど……」

「だから実践練習が必要なの。ヴィリは特に度胸も」

「でも本番で実践なんて、無理だよ」

「だから前衛がいるとこに参加するんじゃない。前衛に盾になってもらってる間に試すの」

ね！ とセレスティへ首を振る。

セレスティは特に気を悪くした様子もなく、にこにこ頷いた。

「お任せを。ヴィルリーア殿は攻撃系ですか」

「う、羽翼系も少し……鎧とか、剣とかを、強化するやつ、です」

右翼系は支援系統の術式だが、ラウルもセレスティもその辺りはあまりわからない。

「強化、それは有難い」

身を乗り出したセレスティに、ヴィルリーアはますます俯いた。

「あ、あの、ほんの少しだけです、ちよつと」

「それでも有難いものです。ラウルの剣が強化されるんですね。早く実戦に用いてみたいものだ」

「ヴィリは雷撃も覚えたいんだよ。ね」

振られてヴィルリーアは椅子の中で身を縮めた。声もだんだんと小さくなり、消え入りそうだ。

「そ、そりや夢だけど……雷撃なんて、そんなのまだまだ、ムリ……」

セレスティはますます興味深そうだ。

「雷撃」

と声を弾ませた。

「目にしたことはありませんが、相当の威力なのだ聞いたことがあります。修得に時間がかかりそうですが」

ラウルも詳しくは知らないのだが、セレスティと同じ感想だ。

「難しそうだよ。すごいな」

「まだつ、使えないんです」

ヴィルリーアはますます小さくなり、逆にリズリーアが得意げな声を出した。

「そう、術そのものは第四段階——中級の中の術だけど、その中で一番威力があるんだ。攻撃系の中でも上位かも」

胸を張る。

「熊とかなら数頭を一撃で倒せるくらい。強いのは打てれば竜にだって効くよ。でもまあ、確かにまだまだ修得まで辿り着くのに全然なんだけどね」

リズリーアは勇ましいことを言い過ぎたと思ったのか、照れくさそうに舌を出した。

「でも、あたし達役に立ちそうでしょ？」

セレスティと、それからラウルへ、水色の瞳を向ける。

その色は期待でいっぱいだ。

水色の瞳に弱いのもかもしれない、とラウルは心の中で呟いた。

「お父さんとお母さんは承知してるの？」

「と、当然——！」

リズリーアがぐっと拳を握る。

「母さまも父さまも、行ってらっしゃいって見送ってくれたし！」

「俺が危険だと判断したら、君達だけでも引き返してもらおうけど、いいかな？」

リズリーアとヴィルリーアが瞳を見交わす。

リズリーアは一度息を吸い、頷いた。

「それは、仕方がないし」

ラウルは頷いた。

「約束だ」

そう言っ、四人は改めて握手を交わした。

「これで冒険隊結成だね。心強い。俺がいる分ちよっとへっぽこだけど」

「ラウルは立派ですよ」

「冒険！ それすごくいい響き！」

「ぼ、僕、僕もがんばるから」

『おれ様がいるから安心しな』

戦士と、法術士が二人。と喋る剣。

(ヴァースは俺と行って来いかなー)

これできりふり山への同行者が三人になった。

とは言えセレスティもリズもヴィリも、くらがり森に入ったのは

今回が初めてのようだ。

贅沢を言えばあと二人——後衛にもう一人と、森の中に詳しい人

物が欲しい。

二人は無理でもせめて一人。

何と言ってもラウル自身がへっぽこだ。

(ボードガード親方に、もう一度心当たりの人がいないか聞いてみよう)

こちらから頼みに行ってもいい。

リズリーアとヴィルリーアを見回し、

「君達にあとひとり、旅の仲間を紹介するよ」

そう言っ、ラウルは寢室の扉に声をかけた。

「オルビース！ こっちにおいで」

ぴい、と返事が返り、開いたままの扉から真っ白な小さい竜がふわふわと、居間へと飛んでくる。

リズリーアもヴィルリーアもその場に固まったように立ち、白い

子竜を穴が開くほど見つめている。

オルビースはラウルの肩にちよこんと降りた。

青い瞳がぱちりと瞬き、新しくやってきた双子を見つめる。

「この子はオルビーイス。つい最近きりよせ川の岸辺で、卵を拾ったんだ。今回、この子を巣に戻すためにきりふり山に登りたい」

「ぴい！」

「ここにいる！」

「オルー」

今のうちから言い聞かせておかなくては、とラウルは肩の子竜へ首をめぐらせた。

「——か、かわいいっ！！！」

弾んだ声上がる。

リズリーアが瞳を輝かせ、ラウルに——ラウルの肩のオルビーイスに詰め寄った。

「かわいいきれいかわいいかわいい！」

5 四人目／狩人、そして案内人

リズリーアとヴィルリーアが訪ねて来た翌日。お昼に差し掛かった頃だった。

煮炊きの煙が煙突から薄らと、樹々の枝葉を越え、雲の多い空へと上がっていく。

その煙を目印に、男が一人、ラウルの小屋へと続く森の中の道を軽々とした足取りで歩いている。

膝丈の短い外套とその下の上下の服。なめし革の靴と服の上に重ねている年季の入った革鎧に至るまで、全て薄茶色で統一され、樹々の中に溶け込みそうだ。

肩に負っているのは四尺（約120 cm）ほどの短弓と矢筒。腰の背中側には使い込んだ短刀を一振り帯びている。

五十歳近いだろう陽に焼けた面は、左頬から左耳にかけて切り傷を刻み、とつくに癒えているそれがほんの少し引き攣れている。こめかみから下を剃り上げた灰色の髪は、頭頂部だけ長く伸ばして後ろで括っていた。

太い眉の下の灰色の瞳が、樹々の合間に目指す家——ラウル・オーランドの住まいを見つけ、男は首を一つ、回した。

ほどなく辿り着くと、男は三段の階段を二歩で登って張り出した庇の下に立ち、丸太を組み合わせた玄関扉を拳で叩いた。

「ラウル殿はいるか」

張りのある声が家の周りの空地に流れる。

扉の向こうで人が近づく気配。

扉が開く前に男はもう一度声を張った。

「ガイド・グレスコーだ。今回の件、アーセンの奴から頼まれた」
扉が開くのと驚いた声が返るのが同時だった。

「——グレスコー……さん?!」

迎えたのは家の主人であるラウルで、取っ手を掴んだまま身を乗り出し、グレスコーという名にまじまじと目を見張った。

グレスコーの言ったアーセンとは竜舎のボードガードの名前だ。
アーセン・ボードガード。

そのボードガードから頼まれたというガイド・グレスコーのことを、ラウルは直接の面識はなかったが、人づてに何度も聞いて良く知っていた。

ボードガードが飛竜の卵を採取に行く際、必ず伴う狩人で、弓の名手。

六年前、戦乱で国が荒れた。治安が乱れ、この辺りでも魔獣が跋扈しキルセン村にも被害が出たが、グレスコーはその際キルセン村周辺の魔獣討伐に参加し、一年で百頭以上の魔獣を狩った。

その後、王都で新王から勲章を授与されている。

長弓で百間（約300 m）先の的を射抜いた逸話や、弓に矢を三本
番え同時に三羽の鳥を撃ち落とした逸話は有名だ。

アーセン・ボードガードと並ぶ村の名士であり、英雄でもある。

「えっ……、ボードガード親方が、今回のために、貴方を？」

まだ驚きが抑えられないまま、とにかくラウルはこの名狩人を室内に招き入れた。

グレスコーは外套を脱いで室内に入りつつ、ラウルの問いに頷く。

「きりふり山に登る無謀な奴がいるから、手伝ってやってくれないか。先に何人か来てるはずだが」

台所から顔を覗かせたセレスティを見て頷き、それから暖炉の前の絨毯の上に座っていたリズリーアとヴィルリーアの二人へ視線を移した。

若い二人がいることにほんの少し訝しそうな顔をしつつ、「全員は揃ってないか」と独りごちる。

ラウルはまだ状況が呑み込みきれず、やや下にあるグレスコーの顔を見た。

「貴方が手伝ってくださるんですか？ 本当に？」

ガイド・グレスコーが。

「ああ」

とグレスコーはことも無げに答えたが、今回の冒険にこれほどの人物が加わってくれると思っていなかったラウルは驚きと興奮が抑えきれない。

「すごい……あ、ちょっと待っててください、今お茶を！ どうぞ、あの、暖炉の前に……！ お昼を召し上がりますか？」

「気を使わなくていい。ちょうど昼時に来ちまって悪かったな。弓をここに置いていいか？」

扉の脇を指すグレスコーに何度も頷く。

「いえ、なんにも、全然です。お昼、ぜひ！ セレスティが作ってくれてるのもあってとても美味しいです！ 人数分以上ありますんで！ お代わりもありますんで！」

何といってもオルビスの分がある。

グレスコー一人が加わっても何ら問題はない。

「下にも置かない扱いってこのことね」

暖炉の前にぺたりと座ったままリズは呆れた様子だ。

ヴィリは感心したように

「それだけ凄い人なんだねえ。リズちゃんは知ってる？」

とのんびり言った。

リズリーアが目を剥く。

「え、ヴィリ、聞いたことないの？ あの時イル・ノーでもしよっちゆう名前聞いたじゃない。軍の話とか、ちよつと気にかけてれば耳に入ってきたよ」

「そ、そうなの……？」

「まったくう。ヴィリったらいつつもぼーつとしてるんだから」

「ぼーつとなんてしてないよう」

「してるもんね」

「してないよう」

むうつとヴィルリーアが頬を膨らませる。

リズリーアはその頬をつついた。

猫がじゃれるような会話に微笑みながら、セレスティが前掛けを外してグレスコーへ近寄り、姿勢を正して片手を差し伸べた。

「セレスティ・ヨハン・バルシュミーデと申します。私の出身である北ゴースはここからかなり離れておりますので、お名前は寡聞ながら初めてお聞きしましたが、ラウルの反応を見るだけで、優れた技能をお持ちなのだろうと分かります。とても心強い」

「ガイド・グレスコーだ。よろしく。アーセンから戦士が加わると聞いていたがあなたか。名前からするとどこぞの貴族の出か？」

グレスコーも細かい傷が刻まれた手でセレスティと握手を交わした。

大柄のセレスティと小柄なガイドは頭半分ほど身長差があるが、その差など感じさせない存在感がグレスコーにはあった。

「南方の、フェン・ロー地方のごく小規模な貧乏貴族です。私は四男で、爵位とは無縁で」

「なるほどね」

グレスコーはセレスティと握手したまま手を持ち上げ、「手のひらが分厚いな」と笑った。

「剣の鍛錬を欠かしてないのがわかる。あなたに前衛を任せることになるな、頼んだぜ。どうやら戦闘力は俺とあなたと、二人か」

「はい。全力を尽くします」

「あとは法術士ってのがどの程度かだな」

「はい！」

リズが立ち上がり、手を上げた。

「法術士！ 私たち！」

「はあ？」

グレスコーの頬の傷が歪む。

鋭い目が細くなった。

「子どもがこんなとこに遊びに来てたら危ねえぞ」

「あたし達子どもじゃないから！ もう十六だし。法術士だし、ふたりとも。あたしがリズリーア、リズで、この子はヴィリ」

と言つてリズがグレスコーの正面にくつつきそうなほど近くに立つ。

精一杯睨みを聞かせている。

が、グレスコーはさらりと流し、両腕を組んだ。

「法術士って——アーセンは確か、トルムって法術士に声を」
ぎくりと、リズが息を呑んだように見えた。

「だ、だからっ、あたし達がそのトルムなんだってば！」

「お前さん達が？　しかしなあ」

「あたしが回復役で、ヴィリが攻撃役なの。ヴィリの法術はけっこう強いんだから！」

胡散臭そうに眺めたが、視線を一度天井へ流し、グレスコーは肩を竦めた。

「へえー、まあ、なら期待してるぜ」

「あつ、今鼻で笑ったでしょ、おじさん！」

「んなこたあねえが、評価も認めんのも実力見てからだな」

「じゃあ今見せたげる。ヴィリ、風切り！」

「お、落ち着いて、リズちゃん」

「やんなさいよっ」

「屋内でなんてできないよう」

居間があつという間に賑やかになり、ラウルはヴァースを台所に置いておいて良かったと息を吐いた。

「收拾がつかなくなるしね。あれ？　オルビーイスは」

紹介しなくては、と台所の戸口に視線を向ける。

ついさっきまで、お昼ご飯を作っていたセレスティの周りをうろうろしていたはずだが、見当たらない。

つつ、と下に視線を落とすと、オルビーイスが床に伏せ、戸口の木柵から鼻先だけ覗かせるように身を隠していた。

「オルビーイス？　どうかした？」

目が三角になっている。

しゃがんで、抱え上げようと手を伸ばしたとき、ふっと影が差し
た。

振り返り見上げた先に、いつの間にかグレスコーが立っている。

「そいつが、例の」

「あ、はい」

ラウルの手が捉える前に、オルビーイスは素早く飛び上がって食卓の後ろに隠れてしまった。

「オルー？」

「俺が怖がられてんだな」

とグレスコーはオルビーイスに向かって両手を広げて見せた。

「そら、弓は無い。お前に射かけたりもしない。な？」

「狩人って分かるんですかね」

「まあ、俺も身に染み付いてるもんがあるんだろう」

「童も？」

これまで狩ったものに、と恐る恐る尋ねると、グレスコーは「無いんだが」、と言ってから頬の傷を歪めて豪快に笑った。

「狩ってみてえなあ！」

「びー！」

オルビーイスは水場の足元にあつた野菜の木箱の中に、頭から突っ込んだ。長い尻尾が丸見えだが。

がたがたがたがた。

「オルー！　大丈夫、大丈夫だから！　グレスコーさん！」

「おっと、すまんすまん。つい本音が」

「この子は！　この子は絶対に駄目ですからね?!」

「冗談だって」

本音って言った……。

じと、とラウルは複雑な目付きをグレスコーに向けつつ、オルビーイスを抱き上げて落ち着くような長い首を撫でた。

グレスコーが色々と必要なものや注意すべきことを教えてくれたおかげで、きりふり山登頂準備はあつという間に整った。

彼が来て二日目の夜、出発をいよいよ翌日朝と決め、ラウル達五人は暖かな部屋での食事を終えた。

きりふり山から戻ってくるまで数日——数日で済むと期待しているが——、暖炉とも寝具とも、たっぷりの食事ともお別れだ。

食卓を片付け、暖炉のある居間へと移る。

セレスティ、リズリーアとヴィルリーア、グレスコー、それぞれが明日出発の準備に余念がない。

ラウルはヴァースを椅子に立て掛けて置き、オルビーイスを手招いて、彼等の輪の間に背筋を伸ばして座った。

セレスティが鎧を点検する手を止め、ラウルへと顔を上げる。

「ええと」

弓の弦に松脂を刷り込んでいたグレスコーも、熱心に法術書を読んでいたリズリーアとヴィルリーアも顔を上げた。

「少しいいでしょうか」

一つ、出発前に話しておきたいことがラウルにはあった。

ラウル・オーランドという人間の過去についてだ。

キルセン村では当然、イル・ノーの街でも噂程度に、ラウルの話を耳にする機会はあつただろう。

きりふり山への登頂という危険なことに手を貸してくれる四人には、その噂話についてきちんと説明して、知っておいてもらいたい。

「皆さんには、俺の過去を話しておきます。半分くらい知ってるかもしれないませんが」

そう言つて、ラウルは懐かしい想い出を掘り起こすように話し始めた。

「待つてよラウル、置いてかないでよう」

雪を蹴立てる栗毛の馬の蹄。

跳ね上がった雪が晴れた空から注ぐ陽光をその都度、きらきらと拡散する。

ラウルは馬の手綱を緩め、遅れているレイノルドを待った。もうレイノルドも十一歳だというのに、何だかいつまでも気弱で微笑ましい。

「レイ、そんなに馬にしがみつくように乗っちゃダメだよ。背筋を伸ばして、歩行に身体を合わせて」

「そんなこと言ったって、僕ラウルみたいに乗れないもん」

ようやく追い付いてきたレイノルドは息を白く切らし、茶金の髪が数筋、汗で額に張り付いている。

ラウルの父とレイノルドの父が兄弟だ。顔は男前と評判の彼の父セルゲイによく似ていて、陽に透けると明るい金に見える鳶色の髪、そして青い瞳は彼の母譲りだ。

「雪だし、乗りにくいし」

「雪だつて、馬に合わせればそんなに変わらないよ。だいじょうぶ」

「ラウルは一月生まれだから、雪もだいじょうぶなんだ」

「へええ。じゃあレイは五月生まれだから、五月になったら俺より上手くなるんだね」

唇を尖らせたレイノルドを見てまた笑う。

ラウルはこの一月で十二歳になった。レイノルドより一年とちょっと、年上だ。

「じゃあラウルは、あぶみとか手綱の音が聞こえるから、上手く乗れるんだ」

「そうかなあ」

ラウルは微笑んだ。

「いいな、ラウル」

「そうかな？ と、これは心底思ったが口にはしない。

触れたものが何でも喋ったら結構困る。物はいろいろな記憶を蓄えているものだ。

今は自分で耳を塞ぐ術を心得ているが、幼い頃は怖くて、でも誰もラウルと同じ体験をしてくれなくてしょっちゅう泣いた。

「でもさ、レイも聞こえるかもしれないよ。耳を澄ませてみればさ」

唇を尖らせたまま、それでもレイノルドはほんのりと期待を込めて首を傾げる。

「——聞こえない」

「ふふ。じゃあ俺が教えてあげよう」

手を伸ばし、レイノルドの手綱に触れる。

「なんて言ってる？」

レイノルドが不安と期待に身体を乗り出す。

「手綱氏はこう言ってる」

ちよつと勿体ぶつてみせ、ラウルは悪戯っぽく笑い、声色を変えた。

『馬を怖がらせないようにつけて乗ってるのはレイの優しさだ。でも馬は、もうちょっと元気に走りたいって言ってる』——って」

「本当に？」

「ホントだよ」

「ばあつとレイノルドの顔に笑みが広がる。

「じゃあ僕、もう少しがんばるよ」

「うん。もう少し走ろう」

そう言って微笑み返し、ラウルはレイノルドの手綱から手を離すと、右手に広がる湖を指差した。

「レイ、父さん達が手を振ってる」

湖といっても広めの池に近い。冬が長いこの地では、一月には毎年厚い氷を張った。

指差した先で、ラウルの父アルバートと母アンナ、レイノルドの父セルゲイと母マルグレーテ、それから四歳になるラウルの弟エリックが手を振っている。

ラウルとレイノルドも大きく何度も手を振り返した。

氷の上では父達の他にもたくさんの人が、靴底に細長い鉄の刃を付けた靴で氷の上を滑り楽しんでる。

笑い声が風に乗って流れ、凍った湖面は晴れた空から注ぐ陽光の光を全体に受けて、目を細めなければいけないほど白く眩しかった。

ロツソの辺りは国の東北東の端に位置していて、秋から春にかけては乾燥して寒い日が多かった。特に一、二月は雪が良く降る。

その日も雪が降り積もる畑の中の道を、ラウルとレイノルドは父と叔父と一緒に歩いていった。近くの村の雪祭りに家族ででかけた帰りだった。

ラウルとレイノルドが雪道を歩きたいと主張して、母達と五歳のエーリックは馬車で先にロツソの館へ戻った。

父達が難しい言葉で領地経営を語り合いながら歩いているのを、背中に誇らしく感じつつ、二人は時折り駆け出しては雪を投げ合った。薄曇りの空に笑い声が弾けて溶ける。

ラウルは十三歳、レイノルドは十二歳。レイノルドはまだラウルより小指一本ぶんほど背も低く、何よりこの歳の一つ年上は体格や力に明確な差があった。

ラウルの投げる雪玉はレイノルドに届くけれどレイノルドのものはラウルの足元に落ちてしまい、次第にレイノルドは半べそをかきはじめた。

「ラウルばかり雪玉が届いて、くやしい」

涙を滲ませ、頬を膨らませる。

「手が大きいから、雪玉だって大きいしさ」

雪の冷たさで真っ赤になった指を、悔しさを表してぎゅっと握り込んでいる。

父と叔父は飛び交っていた雪玉が無くなったのに気付いていたが、いつものことだと足を止めて見守っている。

ラウルは笑ってレイノルドに近付いた。雪の上に長靴の跡が点々とつく。

道の左右には雪に覆われた畑が広がり、その少し先にこんもりとした常緑樹の林があった。林の樹々も雪を被っている。

「わかったわかった。じゃあ、このくらいの距離でどう？」

四、五歩下がり、右手を開いてレイノルドに向ける。

「それに俺は、右手だけにするよ」

むう、とレイノルドの唇が尖った。

「そんなの、つまんない。手を抜くとか、そんなの」

言ってくるりと背中を向けて早足に歩き出す。

機嫌を損ねてしまった。

「レイ」

ラウルはレイノルドを追いかけて、彼に並ぼうとした。

「ごめんね、手を抜くとか、そんなつもりじゃなくて——」

「ラウル！」

父の声と同時に、白い影がラウルの視界を遮った。

雪の中からいきなり現れた。

「レイ！」

ラウルは咄嗟にレイノルドを突き飛ばした。

いきなり現れたそれがラウルに覆い被さり、もろともに雪道に倒れる。

低く、身を震わすような唸り声。生臭く熱を持った息。

鋭い牙が見えた。灰白の毛並み。

狼。

「ラウル！」

父か、叔父か、誰かが叫ぶ。

けれどラウルの意識には、目の前の牙と視界いっぱいの開いた赤い喉しか無かった。

庇った腕に牙が食い込む。痛い。

怖い。

食い殺される。

怖い。

「ラウル！」

レイノルドが駆け寄り、落ちていた木の枝を掴んで狼の背に振り下ろした。

「ラウルを離せ！ この！ このっ！」

何度も、何度も振り下ろしても打ち付ける力は軽く、まるで効果が無い。

腕にますます牙が食い込み、雪に赤い血が散る。

「ラウル！ ラウル！」

レイノルドが泣き叫んでいる。

狼に食い殺されるといふ恐怖の中で、レイノルドの鳴き声が意識を切り離れたかのように明瞭に聞こえた。

防いでいる腕の感覚が無い。

もう限界だ。自分が喰われたら、次は。

「レイ、逃げ……」

犬に似た悲鳴が上がった。

急に、視界が開けた。覆い被さっていた狼の姿がない。

「ラウル！ もう大丈夫だ！」

父がそばにしゃがみ、ラウルを覗き込んでいる。

レイノルドがラウルの足元にペタンと座り泣きじゃくっていた。

まだ茫然としている間に叔父がどこからか戻ってきた。手にした剣から血が数滴、雪に滴る。

「大丈夫だ。森に逃げ帰った」

落ち着いた叔父の声。

ラウルは父に助け起こされ、雪道に座って周りを見回した。

父の背を撫でる手と、叔父の厳しい面に浮かんだ笑み、レイノルドの泣きじゃくる声。

背中で溶けた雪の冷たさを今更ながらに感じ、それから右腕の痛みとたった今の出来事の恐怖に、ラウルは声を上げて泣き出した。

「ラウル、レイノルド、一緒にくらがり森に出かけよう」

月の幾日か、祖父はそう言って二人を誘った。

このロツソの街からは馬車で一日のキルセン村に一泊し、翌日にはくらがり森に住まう祖父の長年の知己、フェムルト鍛冶師を訪ねるのだ。

フェムルトの家でまた一泊する。森の中の家は狭いが、祖父やレイノルドとくっついて寝るのは楽しかった。

「アルバートとセルゲイは難しい話をしとるからな」

そう言う祖父の顔は誇らしげだ。

父アルバート・ヴォルフ・オーランド子爵と叔父セルゲイ・レイナー・オーランドは互いに協力し、このオーランド子爵領の領地経営を行っている。

祖父がラウルとレイノルドと一緒に連れてあちこち行くのも、将来はアルバートとセルゲイのように助け合って領地を経営してほしいという想いがあるからなのだった。

ラウルは祖父が父達を誇りにしていることも、ラウル達に期待をしていることも、どちらも嬉しい。

「鍛冶師先生のところに行くの？」

「そうだ。頼んだ品ができているだろう」

祖父は子爵だった頃、家族に対して——とくに長男である父には非常に厳しかったらしいが、爵位を父に譲って引退してからはすっかり丸くなり、書物に耽ることや小さな畑を耕すことを好み、気ままに日々を過ごしている。

一人で出かけることも多いのだが、こうして祖父が二人を連れて行く時は、大抵父達が領地について難しい懸案を抱えている時だと、ラウルはうっすらと理解していた。

「竜舎に寄れる？」

聞くと

「おお、寄るとも」

と請け合う。

ラウルとレイノルドは顔を見合わせて笑った。

「僕、飛竜の世話したい！」

「俺も！俺も飛竜の世話する！」

世話を手伝うとボードガードは飛竜に乗せてくれた。それが楽しい。

「早くエーリックが大きくなるといいね。一緒に行ける」

まだ五歳のエーリックは、母アンナが連れ歩くことを許さず留守番で、それが残念だ。

レイノルドは出かける時に毎回淋しがって大泣きするエーリックを思い浮かべたのか、困ったような嬉しそうな顔をした。

一人っ子のレイノルドはエーリックを実の弟のように可愛がって
いて、エーリックもよく懐いている。

二組の家族なのだが、そんな隔てなど何も感じられず彼等は仲が
良いのだ。

キルセン村では竜舎に行き飛竜の世話をさせてもらった。

くらがり森を訪れると、齢七十八を過ぎたフェムルト鍛冶師は相
変わらず気難しく、ただ剣を打つ手元を覗き込む二人を突き放した
りはしなかった。

「先生」

二人がフェムルトを呼ぶと、「何が先生だ。お前らのような弟子
を取った記憶はない」と睨まれる。

けれどラウルもレイノルドも懲りずに先生と呼び、フェムルトの
節くれだった無骨な手が生み出す美しい剣をうっとり見つめてい
た。

姿形が美しく、剣の肌は澄むよう。

切れ味が鋭く、刃毀れしない。

遠く、王都からも求めに来る者がいたほどだ。

「いつか先生のような剣を打てるようになりたい」

とラウルは言い、レイノルドは

「僕は先生の剣を持てるようになりたい」

と勇ましく言った。

一度、ラウルは数日間泊まり込みで剣を打たせてもらったことが
ある。

見よう見まねで何とか打ち上げたをフェムルトはしばらく手に取
って眺めていたが、ひと言、「お前に鍛冶師は向かない」と言っ
た。

それがひどく残念だったのをラウルは今でも覚えている。

もしかしたらその時、フェムルトはラウルの剣の特性を見抜いて
いたのかもしれない。

レイノルドはその頃、剣の修練にのめり込んでいた。フェムルト
の剣を見ていたからというのもあるだろう。

いつか先生に認められて先生の剣が欲しいと、訪れるたびに口に
していた。

ラウルが十三歳、エーリックが六歳の冬、妹のアデラードが生ま
れた。

晴れた朝で、降り積もった雪が陽光を弾いていた。

オーランド子爵邸は喜びに満ち溢れ、特に父であるオーランド子
爵の喜びようはラウルから見ても微笑ましいほどだった。

なんととってもオーランド一家にとって、初めての娘だ。

オーランド子爵は嫁がせない拳を固め、アンナに呆れられてい
た。

セルゲイ叔父はセルゲイ叔父で「警護を付けよう。礼儀作法の教
師を呼ぼう」とあれこれ算段し始めた。

エーリックは妹ができたことに興奮してお兄ちゃんになるんだ妹を守るんだと意気込み、レイノルドはひたすら妹を羨ましがっていた。

ラウルは目に入れても痛くない宣言をした。

7 If Winter comes, can Spring be / アルバート・オーランドとセルゲイ・オーランドの確執

ラウル達をあちこちと連れて回ってくれた祖父も、ラウルが十五歳の時に亡くなった。

それ以来、フェムルト鍛冶師の元を訪れる機会はがくと減った。

祖父が亡くなったせいばかりではない。

子爵家の領地経営が傾き始めたのがこの頃だった。

元々さほど豊かな地とは言えず、過去にも経営が傾いた時は度々あったが、それなりに持ち直してきた。

だが今回は悪天候や病害が続いて作高が戻らず、なかなか持ち直すことができない。

そこに追い討ちをかけたのが、ラウルが十七の年に発生した蝗害だ。

どこからともなく現れた蝗の大群が、収穫間近の麦の穂や畑の作物を食い荒らし、食い尽くしていった。

国が対策を講じ、軍と軍の法術士が蝗の群れを焼き払ったことで翌年ようやく回復に向かったものの、収穫は壊滅。

農地からの収入が激減したことにより、領地経営は深刻な影響を受けた。

もともとオーランド子爵領は国の東北東の端、主要交易路から外れた地域に位置している。雪も多く降り、交通の便は良いとは言い難い。

主要な産業は農業で、副産業として林業——くらがり森から伐採する材木の収入で、強みと言えるのがキルセン村の竜舎だ。

国の交付金などを入れた上でも、領地経営は慢性的に厳しい条件の中にあつた。

書斎から言い合う声が聞こえてくる。

時折声は、言葉がはつきりラウル達の耳にも届くほど大きくなり、ただすぐに抑えられた。

「父さん達、また言い合いをしてる」
レイノルドが溜息をつく。

十六歳を過ぎ、身長はラウルより三寸（約9^〇/_〇）ほど高くなつていた。剣の鍛錬を重ねてきたこともあり、昔の泣き虫の面影はまるでない。

「ごめんな、ラウル。父さんはいつも言い過ぎなんだ。当主である叔父上にあんな言い方」

二人の傍では九歳になつたエーリックとようやく三歳になつたアデラードが、遊び疲れてすっかり眠っている。

ラウルはエーリックとアデラードの柔らかな髪をそれぞれ撫でて整えた。

「仕方ないよ、セルゲイ叔父さんも領民とオーランドのことを憂いてるからこそだし。結局のところ二人とも似てるんだ。なかなか他人に譲れないところとか」

困つた大人だよ、とまだ若い二人は目を見交わして苦笑した。

父達が言い争いをしててもそれはオーランド子爵領のためであり、だから今の課題が改善すれば元通り仲の良い兄弟になると、ラウルもレイノルドも信じている。

「父さん達が喧嘩しても、俺はラウルを支えるよ。ラウルが爵位を継いだら、父さんみたいに俺がラウルの補佐役になる」

もちろん喧嘩なんかしない、とレイノルドが素早く付け加える。

「俺よりレイの方が領主は向いてる気がするけど」

「そんなことない！ 後継者はラウルだぞ。そんなこと言うな」

むきになつたレイノルドにラウルは「そうかなあ」と微笑んだ。

「うん、でも、俺たちもこのオーランド領と一緒に支えて、発展させよう」

「約束だぞ。忘れたなんて言うなよ」

「レイこそ、俺がぼんこつで手に負えないからって、途中で放り出さないでくれよな」

この頃はレイノルドの方が馬に乗るのも上達し、剣の腕はラウルなど足元にも及ばない。

レイノルドはまた頬を膨らませた。

「そんなことするもんか、絶対」

新年を目前に、ラウルの父、アルバート・ヴォルフ・オーランド子爵は領民、特に農村に手厚い支援金を配ることに決めた。

これに反対したのが、弟のセルゲイだ。

兄アルバートの補佐役として子爵家の財政が厳しいことを熟知していた弟セルゲイは、兄の施策を批判した。

支援金などというその場しのぎの対応をすべきではない。一つの家に渡せる額など高が知れているし、それでは財産を食い潰すだけで経営回復には繋がらない。

数年の間厳しい状況を堪えてでも、この地の地理的条件や特性を踏まえ、将来的に継続した収入に繋がる取り組みを早急に検討して実施すべきなのだ。

オーランド子爵はそれに対し、今、食料がなく苦しんでいる領民を救うべきだと譲らなかつた。

協力しあつて領地経営に取り組んでいた二人に決定的な意見の違いが生じたのも、ここからだつた。

ラウル達の願いをよそに、オーランド子爵とその補佐役であるセルゲイの関係は亀裂を深くし始めていた。

一年前の蝗害発生により領地に大きな打撃を受けたまま、遠く西の地で大規模な戦乱が発生したのが、五月。

その戦乱の様子と、長くこの国を収めていた国王が失われたらしいということ。

衝撃的な情報の詳細がようやくロッソに伝わってきたのは、六月に入つてからのことだつた。

その頃にはすでにキルセン村周辺には、くらがり森ときりふり山脈から現れた獣や魔獣による被害が何件も生じていた。

討伐隊が生まれ、イル・ノーに駐屯する兵達に町や村の男達も加わつた。グイド・グレスコーも加わり、数か月後にはその腕前がキルセンやロッソ、そしてイル・ノーでも知られていた。

八月に入ると魔獣の出現と戦乱の影響を受けた物流の寸断により、オーランド子爵領内の財政はますます悪化した。

子爵は次第に酒量が増え、セルゲイと話をしても毎回喧嘩別れに終わつていた。

十八歳になつたラウルは父につき領地経営を学んでいたが、ラウル自身、現状へ直接的な支援を行う父の政策が良いのか、それとも将来的な手を打とうとする叔父の考えが正しいのか、いずれとも判断がつかず迷う毎日だつた。

二つは同時に選べない。財源は限られている。

もし自分が領地を継いだなら、どのような取り組みをすべきか。

叔父に考えを聞きたくても、父はそれを嫌つた。

「レイ、叔父さんは何て言つてる？」

レイノルドとは毎日会つて話をした。

お互い経理や資産管理、雇用や農作物について学び、加えてレイノルドは剣の鍛錬に多忙な日々を送っている。

もう子供の頃のように馬の駆けっこをすることは滅多になくなつていたが、それでも二人で事あるごとに顔を寄せ合い、この先オー

ランド領をどうして行くべきか、父同士にまた協力しあってもらうにはどうしたら良いのか、そんなことを時間の限り話した。

「ごめんな、ラウル。父さんが聞く耳持たなくて」

そう言ってレイノルドはラウルに誤った。

「そんなことないよ」

二人は少し高い丘にいた。

レイノルドの向こう、なだらかに下っていく丘の下には畑がどこまでも広がっている。ところどころ土をむき出しにして。その間に点在する家は農家のものだ。

もう数年、絨毯を敷き詰めたように続く緑を目にしていなかった。

そろそろ収穫できるようになるカボチャなどの根菜も、街道の行き来が困難なことで新たな種が入手しにくく、収穫量は一昨年の半分にも満たない。

去年の蝗害で小麦の種も取れず、保存しておいた僅かな種を植えたが、今年の収穫はわずかなものだった。

例えばこの麦の取り扱いにしても、ラウルの父は挽いて食料にすべきだと言い、セルゲイ叔父は全て種子にして、他から購入する種子と合わせて今年巻くべきだと主張した。

「うちの父さんこそさ。セルゲイ叔父さんの言ってることは間違っていないと俺は思う」

「伯父上だってそうだ。どっちも正しいことをいってると思う」
でも、全く違う視点で。

そして、両方の手法を取り入れる財源がないのだ。

ラウル達も、どちらか一方の施策だけでは今のオーランド領を豊かにするには難しいのだともわかっていた。

「今は国全体が厳しい。父さんもヨルン伯爵に上申してるけど、芳しい答えが来ないんだ。なかなか対応策が取られないって。軍役に国費を当てなきゃいけないから」

「戦争だもんな……」

遠く西の地で多くの兵が亡くなったと聞く。国王は未だ戻らず、世継ぎである王太子はまだエーリックよりも幼い。

戦争に負けてしまったら、麦の種の扱いどころではないだろう。

ふと、ラウルはレイノルドを見た。

そう言えばレイノルドは良く、鍛えた剣を役立てたいと言っていた。

戦争が始まって、新兵の募集の触れがこのロツソの街にも届いている。

兵が不足している状況が深刻だと、そう聞いた。

「レイ。一緒に、良い方法がないかもっと考えよう。こんな時こそ俺達で、父さん達を支えなきゃ」

ラウルは素早くそう言った。

レイノルドは何の迷いも見せず、力強く頷いてくれた。

七か月に及ぶ長い戦いが終わり、新たな年を迎えると、ようやくロツソの街も以前の賑わいを取り戻し始めた。

ラウルは十九歳になっていた。

戦勝に国中が沸き、ふた月後の五月に新王の即位を控え、国内が上向きになる期待がロツソの住民達の上にも見て取ることができ

る。
戦後の復興に向け、農業税や人頭税の減税が行われ、新たな農地開墾にあたっては五年間税が免除されると布告された。

オーランド子爵領は相変わらず苦しい状況から抜け出せずにはいたが、ラウルもレイノルドもこれをきっかけに領内が豊かになり、父達の関係が改善してくれるのではないかと強い期待を持っていた。

だがラウルが――父や、おそらく叔父も願ったようには、ならなかった。

農地の回復が遅れていることに加え、魔獣の被害や戦乱により物流が停滞していたことで、くらがり森から伐採していた木材の売り上げが目に見えて落ちた。

戦乱の中、この地を所領する公爵が離反し、半年以上に渡り不在となっていた。問題を伯爵に訴え、伯爵から侯爵、侯爵を通じて公爵へ、というのが通常の流れであり平時においてはやや冗長さを覚えるものでもあったが、その流れが様々な要因の中、一年近く停滞、混乱してしまった。

オーランド子爵は王都から遠い北東の果てにある。そういった地方へも目を行き渡らせるための仕組みが、王の権限の公爵への移譲だ。

雲の上の王や公爵の治領など一見関係ないように見えて、やはりオーランド子爵領にも影を落としていたのだ。

税収は期待通りに戻らず、領地の経営は厳しいまま日ばかりが経つ。

父と叔父の間の亀裂は深まる一方に思えた。

そうこうしている間に、オーランド子爵領にとっては逆の決定打となる施策が打たれた。

これまで飛竜が唯一その手段だった空の移動。その新たな移送手段――

飛空艇とその航路の開発だ。

幼い国王が、自らの治世の第一歩として打ち出した変革だった。寄港地はまず試験的に、東西南北の主要街道沿いに設定された。

オーランド子爵領のロツソ、そしてキルセン村は主要街道を一本外れていた為、イル・ノーへ初来航した飛空艇の船体の輝かしい姿を、ほんの遠くの空にさえ目にするのがなかった。

ただ、オーランド子爵領に限らず、飛空艇の影響を受けた土地は国内の至る所に生じた。

ノクムツル

新陽二年、新王は飛空艇によって経済基盤が変わる地域への対応策として、二つの施策を打ち出した。

一つ目は、飛空艇による航行利益の二割を当該地域へ配分すること。
と。

飛空艇の経済効果は目覚ましく、オーランド子爵領も、林業に受けた打撃分の七割近くを補填することができた。

二つ目に、新たな事業への支援だ。

新事業に取り組むことにより生じる経費の五分の三までを五年に渡り国が助成する制度で、まず国へ事業を提案して了承を得ることと、事業の経過や課題、知見を共有すること、五年間国による監査を受けることが条件となっていた。

深夜、ラウルは寝苦しくて目を覚ました。

水を飲みに一階へ降り、ふと、足を止める。

廊下の奥——居間から、父と叔父の言い争う声が出ている。

押さえてはいるが、二人の声はこれまで聞いてきた以上に厳しく、張り詰めたものだった。

ラウルは床板を鳴らさないよう、そっと居間の扉に近付いた。

「新事業に取り組むべきだ、兄さん。王都の支援を受けて、方向性の転換を図らなければ」

「駄目だ」

「兄さん」

詰め寄るようなセルゲイの声に、抑えた父の声が返る。

「何度とも言わせるな。私もそれは考えた。だがもともと資源の少ないオーランドにとって、賭けに近い」

「賭けでも何でもこれまでと違ったことをやらなければ、何も変わらないだろう！ 王都の補償があるんだぞ！ 今——」

「領民を賭けで飢えの危険に晒せるか！」

弾き返すような声に、セルゲイが束の間黙り込む。

ラウルは扉の傍から動けなかった。仲裁に入ることも、立ち去ることもできない。

ややあつて、セルゲイは声を押し出した。

「兄さんのその弱気な姿勢が、既に領民を飢えに晒している。つくづく軽蔑するよ」

声に籠った響きはこれまで聞いたこともないほど無機質で、ラウルは腹の底が冷たくなるように感じた。

二人の間の亀裂は、これほどまでに開いていたのだ。

足音が近付き、扉が開く。

セルゲイは扉の横に立ち竦んでいたラウルに気付いて一瞬驚いた——苦い表情を浮かべたが、何も言わずそのまま廊下を歩いて階段へ消えた。

その、数日後だっただろう。

「ラウル。イル・ノーに行くことになった」

レイノルドが訪ねて来て、そう言った。

「イル・ノー？ 何でいきなり」

ロッソから最も近い東の基幹街道の都市だが、馬で二日も離れている。

「父さんが、今日発つて」

今日。

それほど急に。

ラウルは返る答えを予想していたが、尋ねた。

「いつ帰ってくるんだ？」

「――」

ほんの少しの間黙り、レイノルドは小さく「帰らない」と言った。

予想通りの答えだ。

ここひと月ほどの父と叔父の確執は、埋めようがないと思えるものだった。

それでも、話をしていけばいつかは、と、期待していた。

あの夜の言い争いが、決定打になってしまったのか。

「俺はここに残りたいって言ったけど――、許されなかった。後継ぎだからって」

まるで十年前の気弱だった頃に戻ったように、レイノルドは俯いている。

「ラウル、俺」

俯いて伏せた顔がちょうどラウルの目線の下にある。

「……仕方がないよ」

ラウルは何とか平静を保ち、声押し出した。

レイノルドがゆっくり顔を上げる。

「レイノルドが一番に支えなきゃいけないのは、セルゲイ叔父さんだ。それに父さん達は少し、距離を置いてお互いを見た方がいいのかもしれない」

レイノルドはしばらくの間、口を閉ざしていた。

もう一度、声を聞いたとき、ラウルは自分が言葉を間違ったと、そう思った。

「ラウルは、俺がいなくても淋しくないんだな」

「そんなこと」

「エ、エリックも、アデルもいるから――ラウルを支えるのは、俺じゃなくてもいいんだ」

「レイ、違うよ、そんなわけない」

二人でオーランドを支えようと、そう誓い合った。

ラウルは今でもそう思っている。

ただ、レイノルドはそれきり口を閉ざしてラウルの前を去ると、その日の内にイル・ノーへ移り、ラウルの元を訪ねて来なくなつた。

新王の御世も即位から三年を過ぎて安定を取り戻し、荒れた農地も次第に回復していく。新たな施策により以前より豊かさを増す土地も増えていた。

だがその新たな風をオーランド子爵領へ呼び込むことはできなかつた。

あの夜以来父は塞ぎ込むことが多くなり、ラウルが二十二歳の頃には昼間から頻繁に酒を飲むようになった。

目はいつもどこか遠いところを見据え、身体を気遣う母の言葉も、ラウル達の心配も素通りしていくようだった。

周囲の意見に耳を傾けず、今この時の救済策と成果に固執した。それが叶うには問題が多すぎる。それでまた酒量が増える。

そうした中であっても、父が子供たちには笑顔をを見せていたことが、ラウルの心の中に今も残っている。

ただその笑みも、遠くに感じられたが。

ふと、父は酒の酔いに任せ、ラウルに洩らしたことがある。

——領地を陛下に返上しようと考えている

ラウルは息を呑むほど驚いたが、反面、それも良いのではないかと思つた。

国王の直轄地になれば、この土地も豊かになるかもしれない。

父の感じていた焦りと苦悩と限界に対し、ラウルは何も、何一つ、解決する手段を持っていなかった。

その意志はただの思いつきではなく、いつからか、心に期していたのだろう。

父はセルゲイがイル・ノーへと移つて初めて、自分から弟を訪ねた。

ただその話し合いはやはり上手くいかなかったのだろう、戻つた父の酒量は目に見えて増すようになった。

「父が亡くなったのは、その年の九月の終わり頃、まだ暑さが残る日でした」

父がセルゲイを訪ねた、一月ほど後だ。

ラウルは顔を上げ、暗い窓の外へ視線を向けた。耳を傾ける。

「もう日が短くなり始めてたんですが、午前中雨がかなり降つたんで、夕方ごろ馬に乗つて父は近隣の畑の見回りに行きました。従僕が一人ついて」

父が出て半刻ばかりした頃、また雨が降り出した。

空はあつという間に掻き曇り、束の間、目を開けていられないくらい豪雨になった。

ラウルは父が心配で、エーリックに母とアデラードの側についているよう頼むと、まだ雨足の収まらない中を探しに出かけようとしていた。

馬を街門まで引き出したところで、従僕がずぶ濡れの泥まみれになりながら駆けてくる姿が見えた。

父が伴つて出た従僕だ。

——ラウル様

ずぶ濡れになって身体を冷やした以上に、従僕の顔は青ざめ張り詰めていた。

息を切らし、寒さと恐怖と驚き——衝撃にか、呂律も怪しい。

——御館様が、お、お父上が、水路に、落ちられて

ラウルが駆けつけた時には、周囲の住民達の手で草の上に引き上げられていたが、父の呼吸は止まっていた。

「だいぶ水を飲んだみたいです。雨で斜面が滑りやすくなってたせいで、足を滑らせて」

水嵩が増していて、早い流れに数十間流された。

アデラードがどれほど泣いただろう。

母アンナは顔を強張らせながら、泣きじゃくるアデラードを抱きしめ背中を撫でていた。

エーリックは涙を滲ませた目で唇を噛み締め、母と妹に寄り添っていた。

窓の外の光が滲む。

十月に入つてすぐ、アルバート・ヴォルフ・オーランド子爵の葬儀が行われた。

二か月の喪が明けたのち、ラウルは爵位を継ぐことになる。

その重責が心に重くのしかかった。

父が、父と叔父が苦勞して、それでも上向かなかった領地を、自分がかどうかできるのか。

誰の協力を得られるのか。

ラウルは二十二歳。エーリックは十四歳、アデラードはまだ八歳だ。

母と弟妹を、使用人達を、領地を、そこに住む人達を、ラウルが支え、食べさせていかなければならない。

血の気が下がり、目がまわる感覚。

(レイ)

従兄弟の顔が浮かんだが、ロツソとイル・ノーは馬で二日の距離にあり、もう三か月近くレイノルドとは顔を合わせていなかった。

葬儀でもラウルは喪主として忙しく、二人だけで話す時間が取れなかった。

レイノルドとだけではなく、最も頼りにすべき叔父のセルゲイとでさえ。

セルゲイはラウルと二人になるのを意図して避けているようだった。

半日がかりの葬儀を終え、弔問客を送り出したのが午後三刻を過ぎてからだだった。

一息つくまもなく玄関へ向かうセルゲイの背を見ながら、ラウルも見送りのために薄暗い廊下を歩く。

父と仲違いをする前なら、叔父はこんなにあっさりと帰ろうなどとしなかった。

アンナやラウルたち——特に一番年下のアデアードに寄り添い、慰めてくれただろう。

きつと爵位を継ぐラウルにも、一つ一つ心構えや考え方、これから必要な手配などを教えてくれた。

今、無言で前に行く背中には、話しかける隙がない。

レイノルドも父のやや後ろを、ラウルに背を見せて黙って歩いている。

セルゲイの妻のマルグレーテが長いこと病に臥せていて、二人が急いで帰るのもそれが理由だ。

どうすれば良いのだろう、この先。
叔父に戻ってきてもらえれば。
レイノルドに。

紙の束が落ちたような音に目を向ければ、ラウルの進む先に革の手帳が落ちていた。

(叔父さんの)

手を伸ばし、指先が触れた瞬間、ラウルはびくりと動きを止めた。

振り返ったセルゲイの手が手帳をひったくるように取り返す。

叔父はラウルの目を覗き込み——ただそれも一瞬で、拾ってもらったことへの礼を短く口にし、早足で玄関を出て行った。

その時、レイノルドが振り向いていたのが分かったが、ラウルは視線を合わせられなかった。

自分の驚きがレイノルドに伝わってしまったら——

玄関先の庇の下から、走り去る馬車を見送る。

馬車がすっかり見えなくなつてからも一人そこに立ち、ラウルはセルゲイの手帳に触れた指を見つめた。

触れた指先に伝わって来た、『声』——

——最後まで愚かだった。

——だから死んだ。当然の結果だ。

湧き起こった一抹の不安。

(そんなことは、無い)

叔父がそこまで、父を。

「ラウル？」

長いこと黙っていたのか、セレスティの問いかける声にラウルは顔を上げた。

小さいけれど暖かな居間だ。

一人で暮らしていたラウルにはそれでも充分広く、今こうして五人と一匹になってみると窮屈なくらいの。

「すみません」

すっかり喉が渴いている。

「お茶を淹れてきますね」

茶葉と茶器を人数分、盆に乗せて戻る。

暖炉の網に置いていた鉄瓶から熱い湯を注ぐと、爽やかな香りがふわりと立ち上がった。

湯気を立てる木彫りの器を配り、ラウルはまた椅子に座った。オルビーイスの前にも水の器を置く。

器に首を突っ込んで尻尾を振りながら水を飲む姿に微笑み、椅子に立てかけていたヴァースを見て、ずいぶん静かだったな、珍しい、と一人笑う。

それぞれ喉を潤したのを見計らい、セレスティがラウルを真っ直ぐ見た。

「踏み込んでいることを承知でお聞きします」

手元の木杯を床に置く、木材同士がぶつかる柔らかな音。

「何故、長子である貴方が今、オーランド子爵家を継いでいないのですか」

「そう、それ——」

リズリーアも身を乗り出す。水色の大きな瞳はずいぶんと真剣にラウルに据えられている。

それを語ろうとしていたのだった。

思い出話に時間を取り過ぎた。

「俺が、オーランドを継がなかったのは」

複雑といえば複雑、けれど一言で表せる。

その資格を失った。

(違う)

資質、だろうか。

「廃嫡になったからです」

グレスコーは承知している話だろう、眉ひとつ動かさなかったが他の三人、特にセレスティには衝撃的な言葉だったようだ。

「廃嫡とは——」

言葉を探した後、セレスティは眉を寄せた。

「ラウル、貴方とこうして話をして、廃嫡となる問題が貴方にあるようには思えません」

セレスティにそう言われるのは嬉しい。

「そうよ！」と何だかりズリーアが怒っているのも。

「何か事情が？ それはお聞きしてもいいものですか？」

「はい。ただ、俺自身の、まあ恥ずべきところというか。そこを話すのが肝心なのに、時間がかかってすみません」

「かまわねえさ。物事を理解するには順序ってもんがある」

そう言ったのはグレスコーだ。

「下手に気イ回して浅く聞いたって上っ面でしか理解できないもんだ、結局のとな。それじゃそこから聞く無責任な噂話と変わらんだろう。現に俺はオーランドの領主殿方がどんな悩みを抱えて領地を見てたかなんて、こうして聞くまで知らなかった」

見え方がだいぶ変わった、と。

ラウルは礼を口にする代わりに微笑んだ。

「俺は、結局爵位につく前に廃嫡になりました。グレスコーさんは良く知ってると思いますが、ある決闘から逃げたのが一番の原因です。決闘はもう正式には認められていないので、そのことに対する問責と、その上決闘そのものから逃げたっていう不名誉と」

「それって何か、矛盾してない？ あたしはおかしいと思う」

リズリーアが唇を尖らせる。傍らでヴィルリーアも頷いた。

「ラウルさんは、決闘をしない判断をしたのに」

「うん——」

セレスティが二人に微笑み、だがそれについて何も言わなかったのは、彼には一定程度、理解できるからだろう。

改めてラウルに向き直る。

「しかし、決闘とは大事おおいです。きっかけは？ きっかけがあった

のでしょ。貴方から決闘を持ちかけたのですか？」

そのあたりは曖昧だ。

きっかけは些細で、でもあつという間にそこへと転がってしまった。た。

「父の死について、叔父セルゲイが関わったのではないかと、噂が流れたんです」

ロツソの街の住民達に、父と叔父の不仲は知れ渡っていた。

「キルセンにも流れてきたな。噂好きの奴らはどこにでもいる」

グレスコーはどんな噂を聞いていたのか、肩を竦めた。

「イル・ノーでもちよつと、聞いた」

とリズリーアはばつが悪そうだ。

「えっ、リズちゃん知ってたの？」

驚いた顔のヴィルリーアにリズリーアは「またヴィリは……」と呆れ顔で頬を膨らませた。

「でも噂話なんてろくなものじゃないもん。ヴィリは聞かなくて良いの」

双子だが自分が年上のように、リズリーアはヴィルリーアの頬をぶにぶにとつつく。

その様子について口元を綻ばせ、それからラウルは椅子の上で背筋を伸ばした。

この後をこそ、知ってもらわなくてはいけない。

「噂が広がる中で、レイノルドはある日、ロツソへ来て言いました。お互いの親の不名誉を晴らすべきだと」

オーランド子爵邸の前の広場で二人は口論になった。

小さい広場ながら人通りも多い。

自分は噂のようなことは思っていないと、いくら言ってもレイノルドは引かない。

「俺たち二人が言い争いのようになっているのを聞いて、人が集まり始めてました。その時集まった人たちの中の誰かが、名誉を賭けるのならば決闘をしたらどうかと、そう言ったんだったと思います」

いつの間にか、決闘をしなければ許されないような空気になっていた。

レイノルドが引けば噂を認めることになり、反対にラウルが引くことは、子爵家の次期当主としての姿勢と尊厳を問われる。

狼狽している間に、決闘の日は二日後と決まってしまった。

従兄弟と——、それもつい数ヶ月前まで兄弟同然に育ち、一緒にオーランドを盛り立てようと語り合ったレイノルドと、決闘なんてしたくない。

「剣を抜いて、斬り合うなんて」

なら自分が、負けを認めればいいだろうか。

剣を抜かず、真偽の分からない噂でセルゲイの名誉を傷つけたことを詫びればいい。

——最後まで愚かだった。

——だから死んだ。

けれど本当は、父は——？

違う。

ラウルの知っているセルゲイは、そんなことはしない。

泡のように浮かぶ疑問をその都度振り払う。

そんなことを考えることそのものが嫌悪感を抱かせた。

ラウルは一睡もせず、決闘の朝を迎えた。

結局、ラウルはレイノルドが指定した決闘の場に行かなかった。

正確には時間通りに着けなかった。

一刻近くも遅れて現れたラウルを、レイノルドはこれまでに見たことのない硬い表情と憤りを帯びた眼差しで迎えた。

結果的に、どちらも剣を抜くことなく収まったのだけが幸いだ。

人々はラウルの不名誉な行為を呆れ、信義を損ねる者は自分たちの領主として相応しくないと言い交わし、その声はオーランド領にあつという間に広がった。

オーランド領を包括するヨルン伯爵にも噂が伝わるほどだ。

ヨルン伯爵は早急にオーランド子爵家としての名誉を回復するよう急がせた。領地の経営不振についても、改善せよとの厳命がヨルン伯爵から下った。

話し合いの結果、ラウルは廃嫡となり、叔父セルゲイが後を継ぎ、新たにオーランド子爵に叙された。

ラウルが今後一切子爵家に関わらずくらがり森で暮らすことを条件に、母やエーリック、アデラードはキルセン村の館で暮らすことを認められた。

「それで？ その後は？」

リズリーアが膝を詰める。

ラウルは「それで今に至るんだ」と微笑んだ。

「それで今、俺はここに引きこもって暮らしてます」

語る間に、オルビーイスが頭を、膝に置いたラウルの手の下に突っ込んでいる。

(可愛いなあ)

重苦しくなっていた心がほんわりと暖かくなる。

「俺が至らなかった。それだけなんです」

『そんなことねーよー。今どき、決闘なんてよー』

ヴァースが声を上げる。しっかり聞いていたようだ。

(君は何歳だ？)

ラウルはくすりと笑った。

『だいたい決闘なんてご主人に著しく不利じゃねーかよー。剣の腕なんて無いに等しいへっぼなんだしなー』

「うう」

こと戦闘について、ヴァースからの評価を覆すことは多分できないと思う。

それはさておき、ラウルの剣の腕云々以前に、レイノルドの剣の腕はかなりのものなのだ。

逃げたと思われても仕方がない。

「それっておかしいと思う！ だって決闘なんて、もう他じゃほとんどやってるなんて聞かないもん！」

「ほ、僕も、そう思います……」

拳を固めるリズリーアの隣で、おずおずとヴィルリーアが口を開く。

「ラウルさんがそれで責任を問われて、廃嫡なんて……そんなの……」

セレスティも引き締まった誠実な面に抗議の色を浮かべている。

「本来、上役でもあるヨルン伯爵殿が正しい判断を下すべきことだったと私は思います」

「貴族の詳しい事情なんてわかんねえが、オーランドはしきたりを重んじる家のような」

グレスコーが言うと、セレスティは「それはそうですが」と眉を寄せた。

「爵位は当主の思惑だけでどうこうなるものではありません」

そう言ってラウルを見る。

その瞳は鋭い。

「長子の貴方が廃嫡となった場合、本来次男である弟君が爵位を継ぐものでしょう」

セレスティの言う通り、それが通常だ。

「それも、考慮されての上ですか？」

「そうです。エーリックは十四歳で、まだ爵位を継ぐには幼いと判断されたんです」

「国王陛下だって、王位を継いだ時まだ御年六歳だったじゃない」

「陛下は、特別でいらっしやるから——。それにオーランド領が豊かで落ち着いてたなら、判断も違ったんだと思う」

セレスティが膝をつめる。

「王城まで上げれば、そのような話は再考されると思いますが」

「へ……？」

間の抜けた返しになった。

王城。

ぶんぶんと首を振る。

「え、いやいや、王城なんて、まさか、うちみたいな小さいところは」

わざわざそんなところまで上げる話ではない。

王城は物理的にも、地位的にも遠く、それなりの祭事がない限りは行くことがない。

もう一度セレスティが首を振る。

「爵位の高低は関係ありません。国に仕える貴族として、我々は国家、王家に資する責務がありますが、王家は我々を庇護する責務を持つのです」

爵位が一つ上がると精神的な面での教育が異なるのか、それともセレスティならではのものか、ラウルは自分がそこまで考えたことがなかったと感心した。

考えてきたのはオーランドの中のことばかりだった。

「正しい判断を陛下に委ねましょう」

「そうだよ！ 行こう！ 王都行こう！」

リズリーアが膝を立てる。

「いやいや——」

ラウルは止めるように両手を上げ、「いいんです」とセレスティを見た。

「お気持ちはいがたいですけど、実際、俺は今の生活に不満があるわけじゃないですし、剣を打つのも好きです。ちよつと好きと腕が釣り合わないですけど」

父が手に負いきれなかったものを、エーリックに負わせたくなかったのもある。

だからラウルは爵位が叔父に移るとなった時、反対しなかった——

いや、安堵した。

「それに」

これが一番、肝心だ。

セルゲイは子爵位に就きオーランド領を引き継ぐと、新たな事業に着手した。

新たな水路を農地に引くことと、農地の改良。

水路を引く為の労働者へ賃金を出すことで農作物の不作に対応し、一年の間土を休ませたことで、今年の収穫は数年振りに豊作と言えるようだ。

飛空艇の停車地の候補地にも手を上げている。

「セルゲイ叔父の方が、ずっと上手く領地を経営してくれています。本来俺が負うべき重積を背負ってくれているんです。だから、このオーランド領が豊かになるなら、俺はそれで良いんです」

セレスティはそれでもしばらくの間ラウルの瞳を見つめていたが、頷いた。

「分かりました。オーランド子爵家の問題です。これ以上口を出しますまい」

「ええー、あたしは王都に行くべきだと思っけど」

リズリーアは頬を膨らませている。

「行こうよ王都。みんな。だいたい何で決闘に遅れたのー？」

「リズちゃん、僕たちがまず行くのはきりふり山だよ。当初の目的でしょ？」

「でもお」

ラウルは場を見回した。

必要なことは伝えられただろう。

「ええと。まあ俺の過去というか、そんなところです。頼りなくて、きりふり山に行くのに不安になったら、遠慮なく言ってくさい」

「俺は端はなから知ってたから不安も何も無いぜ。まあ強いて言やあ

きりふり山に登ることそのものだが」

グレスコーがさらっと告げる。

「あたしも！ 全然行く！ だってあたし、ラウルのこと嫌いじゃないし、法術練習したいもん！」

ん？

今の、もう一回――

実は練習台とか、建前だったり――

「ぼ、僕は、僕も、ええと」

「ヴィリはあたしよりずっと実践練習が必要でしょ。行くよ。盾役がいる機会なんて滅多にないんだから」

「うん」

うん。

練習台だ。

「ラウル」

セレスティの手が、ラウルの前に差し出される。

「私も、ラウルの過去がどうであってても出会ったのは今です。ラウルと共に、この一行できりふり山に登る意思は変わりません」

ラウルはセレスティの手を握った。

「――嬉しいです」

やはり後ろ指を刺されてきた過去は、自分ではどうしても、他者の信頼を得られないのでは感じてしまう。

服が何か引つ張られるな、と思つて目を向けると、オルビーイスがラウルの服をよじ登っているところだった。

肩に辿り着くと背中に尻尾を垂らし、ゆっくり揺らし始めた。

『よーし、まとまったなー。ならこの場はおれ様が締めてやろう』

ヴァースが嬉々として声を出す。

『過去は謂わば今の素材なんだぜ。今の自分を構成するものの一つだ。溶け合った今、一つだけ弾くこともできねーし分解して打ち直すこともできねーそのまんま、付き合ってくしかねー』

なんか哲学的だ。

『けど、ご主人がここに引きこもったおかげで、この国宝級宝剣であるおれ様が生まれたんだ。ご主人は今を誇ればいいんだよ』

なんだ。

自画自賛か。

ヴァースがラウルを褒めるとヴァースを打ったラウルとして、何かラウル自身が自画自賛している複雑な気持ちになる。

「その通りです」

とセレスティが力強く頷く。

それから、

「貴殿の後悔とはまた種を異にするのだと思いますが、私も後悔していることがあります」

そう言った。

「セレスティに？」

ラウルは首を傾げた。

「六年前の戦乱——動乱とも申せましょう。まだ若く力も無かった私は、何の役にも立たぬまま新たな世を迎えました」

六年前、セレスティは十三歳か、十四歳になったばかりだっただろう。

「この辺りの方が魔獣の流出も多く、より被害はあったかと思いますが、北ゴーズも戦地にこそならずとも、街道沿いは荒れ、獣などの被害が無い日を数える方が早かったように思います」

「でも、それはセレスティ個人の問題じゃあないでしょう。そもそも十三、四の子どもに何かできたとは言いがたいです」

それを言ったらラウルなど、当時もう十九になっていた。何事か成せる歳だ。

けれどセレスティのように自分が戦乱の中で兵士として役に立つべきだ、と思ったことが無かった。

戦場を恐れたというより、考えたことがなかったから。

「そうは思っても、あの時——と、時折考えてしまうのです。だからこそ、今回きりふり山に登って、オルビーイスを親元に返し、自身がこの手で何かを成せるのだと示したい」

「——」

ラウルも、同じ想いを心の奥底に感じた。

きりふり山に登り、主である竜の巣を——竜を見つけ、オルビーイスを返す。

危険で途方もなく思える冒険を、自分たちの力で成し遂げることができたら。

ゆっくり息を吐く。

「——はい。オルビーイスを必ず、親元に返しまし痛いつ」
オルビーイスがラウルの耳たぶに噛み付いている。

「イタタ、イタタつ、オルビーイスっ」
本気ではないが、かなり抗議の意思がこもっている。

「——ここに居る！」

「オルー！」

周りの協力で何とかオルビーイスを引き離れたラウルは、オルビーイスを膝に乗せ、人を噛んではいけない、もちろん自分の命が危ない時は別だがそれもほどほどに、と懇々と諭した。

翌朝は鳥の囀りが始まる前に起き出し、ラウルは井戸で顔を洗うと、朝食用の水を素焼きの壺に汲んだ。

顔を上げた空はまだ星を瞬かせている。

あと半刻もすれば、あの星の光もすっかり太陽の輝きに隠れてしまっただろう。今日もよく晴れそうだ。

ラウルの肩でオルビーイスが翼を広げて軽く風を扇ぎ、ラウルの顔の横で首を空に伸ばす。

「飛びたいのかな？ 良い天気になりそうだもんね」

「びい！」

いつでも出発できると言うように胸を張る。

「オルビーイスは準備万端だね」

微笑んで、それからふと一抹の寂しさが込み上げた。

順調に行けば明日には、オルビーイスとはお別れだ。

十日も一緒にいただろうか。

ほんの短い間なのに、オルビーイスの真っ白な鱗や空色の青い瞳が常に傍にあったような気がする。

目頭がじわりと熱くなり、ラウルは慌てて目元に手を

「痛あ！ オルビーイス、髪の毛、髪の毛を引っ張っちゃダメ！」

ラウルの髪の毛の端を啜えぐいぐいと引っ張っている。

「抜けちゃうから！」

「朝から元気だな」

オルビーイスの口を開けさせようと四苦八苦しているところへ、グレスコーの声がかかった。

「ちょうど玄関から出てきたところだ。」

「ラウルを困らせてやるなよ」

子供にでも声をかける口調でそう言い、ラウルと同じように井戸で水を汲み上げ、顔を洗う。

「へへへ。やんちゃで。その時その時、一つ一つ教えないのです」

ようやく髪を離れたオルビーイスを目の前に持ち上げ、「髪の毛を引っ張っちゃいけないよ、痛いしね」と言い聞かせていると、鍛治小屋の扉が開きセレスティが出てきた。

ラウルよりも早く起き出し、鍛治小屋に籠っていたようだ。

グレスコーが「おはよう」と声を掛け、

「決まったか？」

と問うと、セレスティは頷いた。

「はい」

「剣が。」

「決まったんですか？ どの剣に？」

ラウルも身乗り出す。

セレスティは八本の剣の内、この旅にどれを持っていくか、ずっと検討を重ねていた。

何度となく大^{シニティアル}剣を手に取ろうとしては重さ故に断念するを繰り返して、ラウルはハラハラしていた。

「はい。この剣をお借り致します」

セレスティはラウルへ、剣を両手で捧げるように示した。

剣を見て目を見張る。

「ノウム」

打つ時に、「君の好きなように打てばいい」と言ってくれていた両手剣だ。

今いる剣達の中では、一番セレスティに相応しいかもしれない。きっとセレスティの役に立ってくれるだろう。

「ノウムを選んでくれて、ありがとうございます。よろしくお願ひします」

我が子を認められたような気分だ。

ラウルは深々と頭を下げた。

家に戻るとラウルは暖炉に残っていた炭で湯を沸かし、この春摘んだばかりの香りの良い茶葉でお茶を淹れた。

（あとは、双子——）

寢室を双子に譲ってラウル達男三人は居間でごろ寝をしていたから、まだ二人が起き出していないのは分かる。

今日は朝の七刻に発とうと決めていたが、そろそろ六刻になる。

「うーん」

扉の前に立ち、ラウルはどうしようか、一度唸った。

旅の仲間が揃ったことに一度は浮かれたものの、いざ出発となると、そのことがやはり問題だと思えてきたのだ。

「起こさねえって手もあるよなあ」

と言いつつグレスコーが後ろを通り抜ける。

「はい。うーん」

「起こしてあげましょう」

朝食の用意をしながらセレスティがやんわりと笑う。

「十六歳はもう大人です。でもまだ純粋な」

「はいはい。俺は擦れた大人だよ」

「ふふ」

おどけるグレスコーに「それが頼もしいのです」と返す。

十九歳のセレスティがラウルよりも歳上のように思える。

肩に乗ったオルビーイスの尻尾が背中を叩く。

ラウルは頷き、寢室の扉を叩いた。

「いよいよ出発だね！」

リズリーアは元氣一杯に朝食をたいらげ、水色の瞳を輝かせた。

「昨日、法術の準備、念入りにしちゃった。特にあたしに期待されるのは治癒だよ。必要になったらすぐ言って。一日一人、そう

ね、一回ずつくらいなら完璧に治してあげる。切り傷程度ならだけ

ど」

うきうき。

きらきら。

「ごそごそ、と足元に置いた肩掛け鞆から巻物を取り出す。

「これ。中級の治癒とか覚えたいから巻物持ってくんだ。あつ、中級は骨折とか対応できるんだけどあたしはものは試しに感じて

から、治らなかつたらごめんね。努力するけど。あと、内臓系とか

は上級にならないと無理だから、内臓傷付けないように注意して

ね」

「おお。骨折の対応は有り難い。上級ならば内臓も治癒できるとは

……」

セレスティが関心しきりに頷いている。

「そんな術士はここにやいねえ。ちゃんと内臓系は守れよ。骨折もこいつに直せる保証はないんだぞ」

「母様は治せるよ！ だから私もやればできるもん得意満面だ。」

うん。

ラウルはリズリーアとヴィルリーアに向き直った。

「リズ。ヴィリ」

「な、何？」

ラウルの表情に、リズリーアはやや顎を引いた。耳の下までの黒髪が警戒気味に揺れる。

「もう一度確認するけど、君たち、本当にボードガード親方から依頼された？」

リズリーアは急に顔を引き攣らせ、背筋を張った。

「ほ、ほ、本当だよ！」

「リズちゃあん……」

ヴィルリーアがおろおろとリズリーアを見る。

「直接かな？」

「そそそ、そうだけどっ？」

「嘘だろ」

グレスコーが横からずばりと放り込む。

「どっ、どどどっ、どうしてっ、うっううっ嘘とかっ」

「リズちゃあん……」

ヴィルリーアはリズリーアにしがみついた。

（この双子、まるで嘘がつかないな……）

微笑ましさを覚える。

「そりや、アーセンの奴がこの件を子供に依頼する訳ねえからなあ」

「あたしたち子供じゃないもん！」

「子供だし、法術士としちゃ駆け出した」

グレスコーは背を反らし、腕を組んだ。

良く日焼けした肌と頬の傷が言葉の説得力を増している。

「イル・ノーのクリスタリア・トルム法術士は面識はねえが、俺も名前は聞いている。法術は王都仕込みだっただから腕は確かだろう」

「そうなの！」

状況を忘れ、リズリーアは飛び上がらんばかりに顔を跳ね上げた。嬉しさが満面に弾けている。

「母様の法術、すごいんだから」

「アーセンがこの件で依頼するなら、クリスタリア・トルム自身だろう。なんせ目的は竜だ」

きりふり山の主（あるじ）——まだ主がオルビーイスの親だと決まったわけではないが、竜である可能性は非常に高い。

リズリーアは恨みがましい上目遣いになった。

「な……何、今さら、連れてかないとか言う？ 昨日、みんなであんなに盛り上がったのにっ」

「リズ、ヴィリ」

「裏切り者ー！」

「リズ」

と、ラウルはゆっくり呼んだ。

「竜がいるんだよ。オルビーイスの親だ、確実にいる」

「——知ってて来たよ」

ラウルは微笑んだ。

竜がいることは知っていても、竜そのものは知らないのだ。

竜舎の者達であつても、見たことがある者は殆どいないという。

「——でも、法術士が必要なんでしょう？」

「うん。必要だよ。だから今からでも、母君に」

「母様王都で学会だもん！」

しーん。

「あと半月、帰ってこないから！」

「です……」

ヴィルリーアが隣でコクコク頷いている。

「学会」

「ということ」

セレスティがグレスコーとラウルを見る。

「高位の法術士は、いずれの方も軒並み王都ということですね、お

そらく」

『ひよっ子しかいねえってことだな、わはは——』

ヴァースが盛大に笑う。

「また君は。リズムもヴィリも、君より年上だろ？」

『おれ様は形成されて三千万年だ——！』

「えっ」

全員の顔がヴァースへ向いた。

三千万年。

『敬え——。崇めろ——。奉れ——』

「——頭がついてかなかったわ」

グレスコーが視線を反らし、セレスティも頷いた。

「もはや何と言えばいいか……」

『敬え——。崇めろ——。奉れ——』

「すごい、父様が目の色変えそう」

「うん」

双子は素直に目を輝かせている。

ラウルはヴァースから視線を反らした。

内心、そこまでの年月の重みが今こんなひょうきん剽軽な結果になつてい

ることにちよつと責任感じるな、などと思いつつ。

双子へ視線を戻す。

「……その父君は、今」

「学会！」

また学会いい……。

「王都——？」

「ううん。その近くの都市。北の公爵様が主催する学会に行ったの」

ほぼ王都と同じだ。遠い。

ラウルとセレスティとグレスコーは、また瞳を見交わした。

セレスティが背筋を伸ばす。

「ラウル。貴方が二人を心配する気持ちは私も分かりもます。一方で彼らの気持ちも、私は分かります」

五年前の戦いに何も貢献できなかった、とそう話した時のセレス

ティは、心の底から悔しそうだった。

「十六歳はもう、子供だと周囲が管理する年齢ではありません。自身で考え、行動し、様々な経験を積み重ねていく歳です。初めに彼らと約束したように、危険になりそうだと判断したら、その時点で戻ってもらうので良いでしょう」

ラウルはセレスティを——彼の手が剣を振り続けて厚みを増している様を見た。

もう一度、リズリーアとヴィルリーアを見つめる。

二人の目は真剣そのものだ。ヴィルリーアは逃しそうになる視線を懸命に堪えてはいるが。

「——そう、ですね」

「置いてかれたって絶対、付いてくもん！」

「だよねえ」

こつそりついて来られる方が危ない。

グレスコーを見たが、特に止める様子もない。

セレスティは自分の胸に手を置いた。

「私が盾になりますし」

「そんな機会滅多にないし！」

リズリーアが前のめりに拳を握る。

「ちゃんとあたし達が、法術でみんなを助けるから」

ヴィルリーアと二人立ち上がり、お互いの右手と左手をぎゅっと

繋ぐと、ラウルとセレスティとグレスコーを一人一人見つめた。

「あたしたち、旅の仲間なんですよ？」

「まあそうだな」とグレスコーが言い、セレスティは「盾は任せて

ください」と言った。

ラウルも立ち上がり、卓の上へ右手を差し出した。

「うん。よろしくお願いします」

セレスティが手を重ね、リズリーアとヴィルリーアもその上に手を置く。

(おお)

何か、ちよつとした物語のようだ。

「おじさん、おじさんも！ ほら！」

リズリーアはまだ加わっていないグレスコーを急かした。

「若いなあ。小っ恥ずかしいんだよ、この歳になると」

それでもリズリーアに目力一杯に促され、グレスコーも渋々と立ち上がり右手を重ねる。

「旅の成功を願って」

セレスティが最初の一言を発する。

「みんなでがんばろー！」

「せ、成功させましょう……」

「気を抜くと大怪我するからな」

『おれ様とオルーがいるからよー、大船に乗ったつもりでいろよー』

「びい！」

一巡した。

手にかかる重みと手のひらの熱。

ラウルはやや気恥ずかしく、そしてやや、気負いつつ、集まって

くれた四人を見回した。

「一刻後。きりふり山に出發しましょう」

第4章 きりふり山の冒険

1 さわやかな森の不穏な一行

しゃらん、と鈴の音が朝の森の中に流れ、まだ葉先に残っていた朝露の雫が揺れて落ちる。

何だかんだリズリーアが、『隊列』の一番前を歩いていた。

右手に持つ杖は山桜の枝を削りささくれ一つなく艶やかに磨いたもので、ほんのり赤みがかった木肌、長さは五尺四寸（約162cm）と本人の身長より拳一つ分ほど高い。

その先端は細い枝を編むように輪っかを作り、中心に金色の鈴が三つ揺れている。

涼しげな音を立てる杖を視線に追いかけて、ラウルは歩を早めて少し先を歩くリズリーアと肩を並べた。

初めはラウルが先頭を歩いていたのだが、リズリーアが追い越してしまうのだ。

しゃらんしゃらんと鳴る鈴にオルビーイスが興味津々で、ラウルの肩から首を伸ばしては揺れる鈴を啜えようとしている。

ラウルはオルビーイスの鼻先を指で押さえつつ尋ねた。

「リズ、その杖、法術士はみんな持つてるの？」

「ううん」

と屈託ない声が答える。

「持つ人と持たない人と、それぞれだよ。あたしとヴィリのは母様
が作ってくれたんだよ。特製のの」

「へえー。鈴も色違いなんだね」

「間違えないようにね。それぞれあたし達の特性に合わせてくれるんだ」

ラウルは歩きながら後ろを振り返った。

二人の後ろをヴィルリーアがせつせと歩いていて、その後ろをグレスコー、そしてセレスティがしんがり殿で続いている。

森の中の道は木の根が張った盛り上がり避け曲がりくねって細く、二人並ぶと片足が土と草の境のちよつと斜めになった道の端を踏みながら行くことになる。

ラウルの視線を受け、ヴィルリーアも頷いた。

「杖は、まだ僕たちが半人前だからで……、ほ、法術の補助をしてくれるんです……」

「い・ち・に・ん・ま・え！」

リズリーアは言い返し、「こういうのもね、母様はさつと作っちゃえるんだから」

と得意げに胸を張った。

「だからその母上をだなあ」

グレスコーをきつと振り返る。顎までで揃えた黒髪が跳ねる。

「おじさんしつこい！」

「はいはい」逃げるように肩を引く。「しかし十代から言われる

『おじさん』に『しつこい』は地味に刺さるねえ」

「そんな感慨深げに」

セレスティが苦笑する。

「父様より歳上だし！」

「うお……」

グレスコーが胸を押さえて黙り込み、セレスティがさすがに「リーズ」と嗜める。

「ごめんなさいごめんなさい……っ」

代わりにヴィルリーアが振り返り、白い頭巾の頭を何度も下げている。

肩をすくめて舌先を出したリーズリーアを、ラウルも一言注意することにした。

「リーズ。この森の中で一番重要なのは何」

「——経験……」

「一番経験があるのは？」

「おじ——グレスコーさん」

やや反省気味に言ったが早いか、リーズリーアは法衣を翻してくるんと向き直った。

六枚の布を合わせた法衣がふわりと広がって花卉を思わせる。

「グレスコーさんって呼びにくいから、ほかの呼び方でいい？ グ

レスさんとか、グっさんとか、グーさんとか」

「やめてくれ」

グレスコーは心底嫌そうに眉根を寄せている。

「じゃあグーちゃん」

「ガイドでいい。さんも要らん」

「えー、つまんないー」

「リーズちゃんってば」

ヴィルリーアがせいっぱいお腹に力を込めて声を出し、リーズリーアはそれでいったん口を継ぐんだ。

「——それできー！」

ひとときも黙っていない。

くるくると表情が変わり、猫のようだ。

森の中は樹々の間から陽光が差して明るく、これから危険なきりふり山に登ろうとしている雰囲気は全くない。

「きりふり山ってどんな感じのところ？ 父様は“ベルス・ミステール”って呼んだりするよ。霧まとう偉大な山みたいな意味。

ミストラきりふり山脈の最北端だよね、標高——」

ヴィルリーアを見る。

ヴィルリーアはすらすら答えた。

「千三百七十三間（約4,120 m）だよ」

「えっ」

ラウルは一瞬足が止まった。

「一里（約3,000 m）では？」

「ええと、そんなに低くないです」

一里も十分高いのだが。

果てしないのだが。

『ヴィリが正しいなー。あいつはおれ様が形成されるよりもずっと前からあの形だったぞー』

むむむ。

千三百間。

千三百間とは。

「ラウル」

リーズリーアがくい、と袖を引っ張る。

不安にさせたかと、ラウルは手を振った。

「えーと、うん。俺もきりふり山には登ったことがなくてね……師匠が使ってた坑道が麓近くにあるからそこまでは行くけど、だいたいそこが麓から十七間（約50m）上がったくらいだから。その辺りだと霧もまだ無いし、ほとんどここらと変わらないしなあ」

「じゃあ完全に未知の世界だね」

弾むように言う。

「どんな場所で、どんな生き物があるのかなあ。法術、通用するかなあ」

不安になったのかと思えば、リズリーアには楽しみが勝るようだ。

「古い記録だと、狼と、蜥蜴とか。それから、猿も群生してるっていうし。猿は意外と厄介だよな。引っ掻かれたりとか。猿といえば、猿の魔獣……？ みたいな。大型で、人喰いだって。結構狡猾で、一人を攫って囿にしたりするみたい」

「こわいよう……」

反対にヴィルリアは両手でしっかりと杖を握り、法衣の中で身を縮めている。

（うわあ、こわい……）

ラウルもちよつと首をすくめた。

遭遇したらラウルなどすぐに死にそうだ。

「グレ——、ガイドさんはきりふり山に登ったことはありませんか？」

「標高、だいたい三百間くらいまではな」

さん付けしなくていいぞ、と返しつつ、ガイドは灰色の目を細めた。一番後ろを歩く足取りには音がない。

「そもそもきりふり山にやほとんど用がねえ。飛竜の巣が無いからアーセン——ボードガード舎では登らない場所だしな。三百三十間（約1000m）過ぎたあたりから魔獣の生息圏になって、六百七十間（約2000m）辺りを超えると一切居なくなるって聞くが」

「魔獣も、主ぬしがいるから大型が却って近寄らないんだって」

しやらん、とリズリーアが杖の鈴を鳴らす。

大型の魔獣とやらが居ないのはいいことだ。
が。

「この装備で足りますかね……」

不安になってラウルは自分のいでたちを見下ろした。

食料はそれぞれ三日分。と、ラウルはオルビーイスの分も持っている。

背中全体で背負う背囊は中で上下に分かれていて、下段が水袋、

上段に荷物を詰めた。

中身は防寒具。

食料。

火口箱。

毛布。

寝床の屋根に使う用の防水布。これがそこそこ重い。

松明一本を背囊に乗せ、角灯と油を背囊の右脇に括っている。

縄を三間（約9m）分、腰に括り、背囊の左脇の小物入れに岩等

に縄を固定するための金具。

これを一人分として自分の分を背負っているのだが、それなりの重量があつてリズリーアやヴィルリーアの分は防水布など嵩張るものの一部をラウル達三人で分けた。

加えて、ラウルは念のため鑿^{のみ}と金槌、砥石も持ってきた。

あとはあるもので代用するか、その場で代わりになるものを調達するしかない。

水は可能な限り、きりふり山から流れるきりよせ川で調達する。

今水袋に入っているものを先に使い、川で補充して新鮮さを保つ。

それから、武器武具の装備。

セレスティが両手剣^{ノックム}と短剣一振り。鉄の兜に胴、手甲。それ以外は革鎧。

ガイドが短弓に短刀、武具は革鎧と森に溶け込みそうな色合いの短い外套。矢は上下に蓋のある矢筒に二十本あるが、基本回収しながら使うのだという。

双子はそれぞれ杖に、黒と白の膝丈の法衣。色違いの鈴の杖。

「いざとなったら杖で殴るよ」とリズリーアは元気がいい。

ラウルはもともと鎧など持っていなかったので、なるべく厚手の生地的外套を選んで着てきた。

武器はヴァース、それから、フルゴルと。

ヴァースを腰の剣帯に差しフルゴルを背囊に革帯で留めている。重いフルゴルは役に立ってくれるし、その位置ならセレスティもすぐに引き抜ける。

これらは小屋を出るときは重装備に過ぎるように思えたが、きりふり山のことを詳しく聞くにつれ、足りないのではという気持ちになった。

「もつとしっかりガイドさんに話を聞いて、いろいろ持ってきて来ればよかったですかね」

ガイドが目を細める。そうすると頬に残る傷が目立った。

「敢えて教えなかったんだよ」

「え」

「今ので充分だ。あれもこれもなんて考えてたら、ラウル、お前なんて背囊一つに収めきれなくていつまで経ったって出発できねえだろ」

「うう」

その通りだ。よく分かっていらっしやる。

「まあしばらくは危険な獣や魔獣は出ない。森を抜けるまで気楽に行こうぜ」

「はい」

頷き、背囊の肩帯の位置を直す。

「ラウル」

ガイドはラウルの横に並んだ。

リズリーアをさりげなく先に行かせ、声を落とした。

「お前さん昨日の話、まだ言っていないことがあるだろう」

「え」

「そこが肝なんだと思うんだがな」

決闘に遅れたことそのものではなく、と。

「まあ、言えるんなら言えばいい」

「——はい」

頭を下げたラウルの背を軽く叩き、ガイドは一度、木立が続く周囲を見回した。

太陽は次第に高く上がり、樹々の間から差し込む陽射しが増える
と、冷えていた空気も少しずつ温まり始めた。

森の中は何の問題もなく、一行はただの散策と変わらない空気の中を進んだ。

誰かこの森で行き合わせたとしたら、一行の組み合わせと物々しい装備を何事かと思っただろう。

拍子抜けする思いもあったが、今までの自分の生活を考えてみれば当然だ。

「この辺りでぼんぼんと何か出てたら、そもそも俺が暮らしていないし」

もうとつくに喰われている。

腕を組んで頷くと、『それでもご主人はこれまで運が良かったと思っぞー』とヴァースが遠慮なく声を上げる。

『あんなへっぽこで良く今まで森で無事に暮らしてきたよなー』

「びいー！」

何やらオルビーイスが抗議の声を上げる。

『そんなことないって？ いやいやオルー』

「びいびい！」

『おれ様はご主人のへっぽこぶりをがつつり見たしー』

「びいびいびい」

『お前もあの夜の、戦いっぷり見ただろー？ 戦いっぷりっていうか戦えてなかったっぷりっていうかさー』

「びー！ びー！」

『うんうん、わかったわかった、良く分かったってー』

オルビーイスは胸を反らせ、ラウルの首に長い尾をくるんと巻き付けた。

「びい！」

『オルーがご主人を守るってさー』

くわあ、と顎を開く。まだ小さな牙がそれでも鋭く存在感を放っている。

『とっておきがあるから任せろってさー』

なんだかじわつと涙が出てきた。

「ありがとうね、オルビーイス。でも俺は自分の身は自分で守るから、オルビーイスはまず自分の命を大切にするんだよ」

青い瞳をぱちり、と瞬かせ、首を伸ばして頬をラウルの頬へ擦り付ける。ひんやりとした鱗が心地よい。

「えへへ……」

「お前それ、手放せるのか？」

ガイドに言われ、何度も同じことを考えていたラウルはうっと口籠った。

「まあ帰すしかねえけどな」

歩きながらガイドは、時折視線を樹々の間へと動かしている。

「何かいますか」

気付いたセレスティがガイドと同じように辺りを見回した。

「——いや。この辺りは至って平穏なもんだ」

双子が顔を見合わせたのをみれば、ラウルだけではなく二人——特にリズリーアもほっとした様子だ。明るく話していて分かりにくかったが、やはり不安はあったのだろう。

(このまま、山頂まで行ければいいんだけど)

ただ——

目指しているのは、あのきりふり山の山頂なのだ。

普段は立ち入る者もなく、深く霧が立ち込め、危険な獣、魔獣が棲む。

そして、遙か千三百間もの高みに悠然と存在する、きりふり山の

主——

そこに踏み込んで、無事で済むはずがなかった。

二刻ほども歩いただろうか。

ラウル達は目指すきりふり山の麓に着いた。

麓と言ってもラウルが鉱石を掘る坑道よりも高いところの、形ばかり『登山口』と呼ばれている場所だ。

「高あい」

リズリーアが首を逸らし、更に背中を反らして樹々の合間から覗くきりふり山の姿を見上げる。

「全然近づいた感じしないし」

「すごいねえ。首が痛くなるねえ、リズちゃん」

「見上げてるとひっくり返りそうだよねー」

標高およそ千三百四十間(約400m)。その山頂に辿り着いた者の話を、ラウルは身近で聞いたことがない。祖父でさえ登ったことがあるとは言っていないかった。

麓は森が覆い、その上 七百間(約700m)までは森から上がる霧が常に山体を取り巻いている。

まだこの辺りは霧もないが、心なしか、森の中を緩く登っていく登山道は今いる場所でさえ薄暗く思えた。

「ここから先は斜面がきつくなる。足元も霧で濡れてて滑るぞ。気をつけろ」

グレスコーが言い、

「私に先に」

とセレスティがまず細い登山道へ踏み込んだ。

「次あたし！」

と進みかけたリズリーアの外套をガイドが掴む。

「まてまて」

「俺が先に行くよ」

ラウルがセレスティに続く。リズリーアは不満そうだがガイドは頷いた。

「隊列はセレスティ、ラウル、双子、それから俺だ」

一行がいよいよ登山道に踏み込んだ、ほんの少し後——

足元の草と落ちた小枝を微かに鳴らし、一行を追いかけるように登山道に踏み込む影があった。

風が霧を押し、押された霧は重く動いた。
重なる葉先をゆるりと揺らす。

滅多に無い侵入者の気配に、森は敏感に気付いていた。
目。

浮かび上がる無数の双眸の一つ一つが、白い霧の奥から、乳海を
掻き分けるように進む一行へと注がれていた。

「ほとんど見えないけど、この方向で合ってるのー？」

リズリーアが空元気に張った声も、霧はすぐ飲み込んでしまう。
彼女が持つ杖の先端には、白く輝く明かりが灯っていた。リズリーアが法術で灯したものだ。

「フルゴル灯す？」と聞いたがリズリーアが自分でやりたがった。

進むごと霧を縫うその光も、乳白色の微細な粒子の中にすぐに拡散していく。

「登山道は一つだ。この道を進む限りは方向は合ってるだろう」

「本当に？ もう、全然周り見えないし、早くこの霧抜きたい！」

「まだ入ったばかりだよ、がまんだよ……」

「本当に霧が濃いですね。喉が乾かないのは助かりますが」
会話を聴きながらラウルは辺りを見回した。

登山道も樹々の枝葉も二間（約6m）ほど先までなら見えるが、その先は白く覆われている。

霧が肌を冷やし、衣類や髪もしつとりと重さを増したようだ。
何より、きりふり山の登山道に入ったと、そう意識しているせいか、森の空気がガラリと変わったように思えた。

太陽は霧の向こう、ほぼ天頂に、ぼんやりと球体の形を浮かべている。

登山道に入り半刻も経つと周囲は霧に覆われ、進むごとに濃さを増していった。

「中腹まで行けば抜けるさ」

宥めつつ、ガイドは視線を時折四方へ配っている。

霧の中に入って空気を変えたのはガイドも同じだった。

（歴戦の弓の名手、狩人の空気――）

ガイドがその空気をまとったというこたは、今までと状況が異なることを意味しているのだ。

自然ラウルの身も引き締まった。

「セレステイ、前方はどうですか？」

「今のところは問題ないと思います。と言っても視認性が悪すぎます」

先頭を歩くセレステイの銀の胄には、早くも露が光っている。胴鎧のあちこち凹みがある表面や、手甲などの革製の防具にも。

頬にざらりとした感触が当たる。オルビーイスがラウルの頬を舐めた、舌の感触。

オルビーイスは霧が興味深いのか先程からラウルの肩に降りたり飛んだり、肩にいる時は舌を出して霧を舐め取ろうとしている。

ラウルの頬もこうやって何度も舐めるので、水が欲しいのかと水袋の口を開けてやるが、そうではないようだ。

(何でも興味深いお年ごろなんだな)

ふいにヴィルリーアが張り詰めた声を上げた。

「リズちゃん！」

びくりと飛び上がったのはリズリーアだけではなくラウルもで、ヴィルリーアを振り返る。

「どしたの?!」

リズリーアがヴィルリーアの右手を握る。

「か、影が、向こうを通ったよう……」

「影？」

ヴィルリーアが指差した方は、道の左右に広がる樹木の姿も覆ってしまふほどの乳白色の霧が溜まっている。

霧が晴れていればおそらく、今までと変わらない森が広がっているはずだ。

おそらく、

ぞく、と、ラウルは背筋の寒さを覚えた。

本当に森が広がっているだろうか、この向こうに。

もしかしたら、樹々は何もなくて、それに模した何か、違うものが満ちているかもしれない。

自分の意識が外へ広がっていくように感じられる。

霧の奥。

少し離れたところに、

何か――

何かがある。

「――うん。ごめん。何も、いない、かも」

ヴィルリーアの言葉に現実に戻り、ラウルは首を振った。

耳を澄まして聞こえるのは風の音、それから細い鳥の鳴き声。それだけだ。

「もう行っちゃったかな」

リズリーアはそう言ってヴィルリーアの両手を自分の手で包んだ。

ヴィルリーアが見たというなら気のせいなんかではなく確かに見たのだと、空色の目が主張している。

「鳥とか、栗鼠とかだよ」

「――まあ、この中、気配は幾らでもあるしな」

「えっ」

ラウルは驚いてガイドを見た。

「動物は何にもいないのかと」

ラウルには何も感じられない。

そう、先ほどの感覚は気のせいだった。

「この森で何もいない訳がねえ」

「で、ですよねー」

頷き、ヴァースへ視線を落とす。

「どう？ ヴァース」

『んー。気配がごちゃついているな。けどいるぞー。おっさんの言う通り、こんな森だしな』

「そこは三千万年歳下の扱いしてくれないのかよ」

軽口を言いつつガイドは一旦周囲を見回した。

下ろした左手には弓を握った状態だ。

矢筒からは引き抜きやすいように矢が一本、他の矢よりも上に矢羽を出している。

(そう言えばガイドさん、霧の中に入ってからずっと弓を手にしている)

『影とか気配を一つ一つ気にしてたら進めねーし、まあ大抵はほつときゃいいものばっかだしー』

ほつとしかけたラウルに、ヴァースは変わらない調子で告げた。
『でも幾つか、ついてきてるぜー』

「ついて……？」

きやあつとヴィルリーアが小さく悲鳴を上げ、元々目深に被っていた真っ白な頭巾を両手で一生懸命引き下げている。

リズリーアはその背中をさすった。

「大丈夫だってば、ね、ヴィリ。ちよつとヴァース、ヴィリを脅かさないでよ」

『事実だしー』

「ヴァース、何が付いてきてるんだ？」

『そこまで分かんねーな。おっさんはー？』

ガイドは首を傾けた。

「俺もそこまで分かん。けど、それなりの数だな」

「それなり……?!」

何それ不穩。

それについてくるとか聞いてない。

(じゃない)

セレスティが剣を引き抜いたのを見て、ラウルは本格的に背筋が冷たくなった。

「こつ」

これは——本当に、本当の、冒険だ。

怪我だつてするかもしれない。

「ど、どうしましょう」

「どうって、進むしかない。戻ったって目的果たせねえんだから」

「そうですがつ」

自分が彼等を連れて来たのだ。

怪我などしてほしくないし、そうならないようにする責務がラウルにはある。

「あの、我々に対処できる範囲ですか？」

「まあ」

ガイドは黙った。

ラウルはじつと見つめた。

ガイドの目がセレスティ、双子、ヴァース、オルビーイス

「——」

それからラウルへと移る。

「まあな」

もしかし——なくても俺が一番不安要素ですな——？！

と、ラウルは心の中で鎮痛な叫びを上げた。

『気にすんなつてー。ご主人がへっぽこなのははじめからだしー』

「心読まないでー！」

「どうする？ なんなら一旦引き返すか？ この先危険しかねえ

が」

グイドの声はラウルの臆病を軽んじている様子もない。

「まあかと言って、この霧が晴れるってことはそうそう無いけどな」

淡々と。

このまま進めば当然起こり得ることへ向かって、進むかどうかを尋ねているだけだ。

ラウルはセレスティや双子の視線を捉え、それから肩のオルビーイスを見た。

オルビーイスを帰すことが目的だ。

ここで引き返しても、グイドの言う通りきりふり山から霧が消えることはなく、霧が消えたとしてもこの森が危険の無い場所になる訳ではない。

オルビーイスはいずれ大きくなる。このままラウルの小屋にいれば、オルビーイスが何もしなかったとしても、いつか軍が討伐に出動する事態にならないとも限らない。

臆病風に吹かれてばかりいられない。

「——すいません、すぐに怖気付いて」

「初めは誰でもそんなもんだ。気にするな」

「も、目的はオルビーイスを帰すことですから」

痛い。

抗議の甘噛みがそれなりに痛い。

思い切り顎を広げてラウルの後頭部をがじがじしているオルビーイスを抱き上げ『頭を噛んではいけないよ』と諭しながら、ラウルは

「進みます」

と声に力を込めた。

「セレスティ。前の警戒をよろしくお願いします。リズとヴィリは、法術はすぐ使える？」

「風切りなら、詠唱にゆっくりふた呼吸欲しいです……」

杖が補助してくれますが、と白い杖を見上げる。

「あたしのはもうちょっと長いかな。でもそもそも戦闘後だから役に立つの」

「それくらいの時間なら俺とセレスティで作れるな」

「お任せください」

最後にセレスティが頷く。

ラウルも頷き返した。

「グイドさん、後方と全体を、お願いします」

「任せとけ。刺激したくねえし矢も温存したいから基本様子見だな。ただ射つときや射つ。なるべく声をかけてから射つが」

緊急時は射つのが先になる、と続ける。

「はい。ヴァース、警戒よろしく」

『おれ様に任せとけ』

気を取り直し、ラウルはいつ何が起きてもいいように身構え——たつものに本人的にはなり——ながら、霧の中の道を進んだ。

それら——その群れは、森の樹々の枝を、漣さざなみの音に似た静かさで渡っていた。

追っていたもの——彼等の獲物は立ち止まり、警戒しているのか
しばらくの間動かなかったが、また緩い斜面を登り出した。

乳白色の霧が常に漂うこの森は、棲息する生物も通常より聴覚と
嗅覚が鋭敏だ。

滅多に入り込まない『人』の匂いは異質で、すぐに分かった。
何より——彼等の中に微かにある、芳醇な香り。

それはある時急速に、その香りを高めた。

群れの一頭が、樹々を渡る動作を止め、顔をもたげて流れる霧を
嗅ぐ。

群れ全体が動きを止める。

周囲はつかの間、ゆるい風が枝葉を揺らす、樹々の騒めきだけ
になった。

数呼吸後。

唐突に、そして一斉に、群れは枝を鳴らして駆け出した。

「結局何にもないままお昼になったねー！」

お腹空いた！ とリズリーアが自分の背囊から今日の昼食を取り
出す。小分けに三日分、用意した干し肉とパン、それにチーズ。

量はそれほど無いが、パンに薄く削いだ干し肉とチーズを挟むと
見た目と香りが空腹を刺激する。

「いっただっきまー」

霧の向こうが俄かに騒がしさを増した。

瞬間、リズリーアの手に、何かが落ちる。

「ぎゃ」

黒い塊——

見下ろしたリズリーアと目が合う。

小さな、二つの目。

白目は無く色素が薄く、黒い点のような瞳孔。

毛に覆われた長い四肢と短めの胴。

固まったリズリーアをよそに、それは素早く動いた。

リズリーアの干し肉を両手に掴んで。

凍り付いていたリズリーアは、それが膝から地面に飛び降りてよ
うやく、叫び声を上げた。

「——っ、ぎゃ——！！！！ さ」

「猿か」

ガイドの矢はすでに番えられ、鋭い矢尻は猿を追っている。

「猿かじゃなーい！ あたしのお昼！ 取り返してっ」

「リズちゃ……」

駆け寄ろうとしたヴィルリーアの正面に、また黒い塊が落ちる。

同じく猿だ。

ひと呼吸もなく、樹上から次々と、木の葉とともに猿が降って来た。

その数、十——二十、いや、三十弱。

地面に降りるが早いか、騒がしい鳴き声を立てて休憩場所を縦横に駆け回る。

リズリーア、ヴィルリーア、セレスティの身体でさえもお構いなしに飛びつき、駆け上がった。

「きゃあ！」

ヴィルリーアはリズリーアに抱きつき、覆い被さるように倒れた。

「ぎゃー！　ぎゃー！　ぎゃー！」

倒れた双子達を猿が無情に踏みつけ踏み越える。

「ヴィ、ヴィリ、風切り……っ」

「多すぎて、むり、だよう……」

猿がヴィルリーアの握る杖を掴み、思い切り引っ張る。

「わー！」

「リズ、ヴィリ！」

「二人とも待ってて、今」

「足を止めて、荷物を抱えろ」

ガイドの冷静な声が耳を捉えた。

ラウルは考える間もなく自分の荷物を掴んで身体の前に抱えた。

ガイドの弓に、矢が三本、番え^{つが}られている。

「誰も動くな。威嚇する」

直後、ガイドの右手から弦^{つる}が離れ、空気を叩いた。

三本の矢が擦過音を鳴らし、三方向に突き立つ。

地面、左右の木の幹。

猿達の動きがぴたりと止まった。

「まだそのままだ」

ガイドは再び、三本の矢を番え空へ向けた。

ひと呼吸で放たれた矢はほぼ垂直に打ち上り、一旦霧の向こうに消える。

矢は放物線の頂点に達すると、向きを変え、落ちた。

三方に広がる。

ラウルの横、双子の前、セレスティの足元の地面に音を立て突き立つ。

凍り付いていた猿達は、矢が突き立つ音に恐怖し、霧の立ち込める樹々の向こうに一目散に逃げ込んだ。

打って変わった静寂が場を包む。

セレスティが息を吐き、抜き放っていた剣を鞘にしまった。

鞘と鏢が重なる音に、ラウルも、リズリーアとヴィルリーアも夢から覚めたように、ようやく身動きした。

「何と」

セレスティは足元の矢を回収し、ガイドへ手渡した。

「驚きました。ガイド殿の弓の腕、聞きしに勝る」

感心しきりにそう言い、猿達が散って行った森を見回す。

「ただの群れのようにでしたが」

「人にそう害は無いが、数が厄介だな。それぞれ盗られたものがないか確認しとけ」

リズリーアがハツと背を伸ばす。

「あたしのお昼！」

広げていた布は乱れて地面に落ちて土にまみれ、干し肉、パン、チーズ、全て持ち去られている。

「最低ー！ チーズと干し肉挟んだの好きなのにー！」

「リズちゃん、僕のあげるから……」

「大丈夫。それはヴィリのだもん。ヴィリが食べるの」

「いいの、二人で……」

振り返ったヴィルリーアの背囊は、一部が裂けて中身が転がり出していた。破られた布の破片が霧に揺られふわふわと地面を動いている。

慌てて探ったヴィルリーアは、目に見えてがくりと肩を落とすた。

「な、無いよう……」

「えっ」

「……食糧？」

ヴィルリーアが頭巾の下で頷く。

「食糧だけ、全部……です……」

確認した被害はリズリーアの昼食、それからヴィルリーアの背囊と三日分の食糧。

それだけだったのが幸いだ。

破けた背囊はとりあえず毛布で覆って縛り、ラウルのもとと交換した。

今日の分の昼食を分け合って食べた後、騒ぎから半刻で一行は出発した。

リズリーアは自分とヴィルリーアの食糧を盗られたことに腹を立て足取りが荒い。

「あいつら、絶対、今度見つけたら眠りの術かけて全員木から落とすてやるから」

きつとガイドを振り返る。

「今鼻で笑ったでしょ！」

「笑ってねえよ。前向け」

「笑ったつんぎやつ」

足元の木の根に爪先を引っかけてつんのめったリズリーアを、ヴィルリーアが手を伸ばして抱き止める。

「気をつけて、リズちゃん」

「ありがとうヴィリ」

「それにしても、怪我をする事態にならなくて良かった」

セレスティの言葉にラウルも頷いた。

「食糧狙いだらうからまた来るかもしれないですね。もっと気をつけないと」

どうやらあの程度だと、ヴァースの警戒の範囲ではないようだ。

(それと、オルビーイスだ)

十数匹の猿が駆け回り、双子だけではなく一番背の高いセレストイさえよじ登っていたのに、ラウルは一度もたかられなかった。数匹、ラウルの足元に来た猿はオルビーイスに気付くきくると向きを変えた。

オルビーイスはラウルの肩から飛び出そうとしていたが、ガイドが矢を番えたことで翼を畳んだ。

(あの矢が無かったら、オルビーイスは狩りをしたかもしれない)
オルビーイスの翼が、爪と牙が猿達に掴みかかる様を想像する。
猿達は恐れ、混乱して逃げ回る。

それはまだ見たことすらない成竜と、逃げ惑う人々の姿に変わる。

想像の中のその竜は、ラウルが住んでいたロッソの館よりも大きかった。

(まさか。そんな大きさ、四竜ってやつじゃないか)

西の風竜、東の地竜、北の黒竜、南の赤竜。

竜族の頂点とも言える強大な竜に、人がその名を冠したものだ。

それはおとぎ話ではなく、三百年前に風竜が、そしてほんの数年前には黒竜、更に戦乱の中に骸となって甦った風竜が、その姿を現している。

(まさか、この子がそんなふうになったらって、俺は思ったのか?)
ラウルはくすりと笑った。

それは飛躍しすぎだろう。きりふり山の主が四竜とも聞いたことがない。

オルビーイスを見ればラウルの肩に止まり、自分の翼を舌で舐めているところだ。

ラウルの視線を感じて顔を上げ、青い澄んだ瞳を瞬かせる。
愛くるしさしかない。

(でも、そこまでいなくても、もしかして)

もし、オルビーイスが成長して人を襲ってしまう可能性があるとして。

もしかして、自分が育てて、人を襲ってはいけなかつたり伝えていけば———というかその方が、結果的に良かったりしないだろうか。

(俺がもつと、森の奥に住んで)

手放したくないからこそその勝手な考えだと、ラウルはわかっていたが、それも一つの方策のような気がした。

道の傾斜がきつくなつてしばらく経った。

狼の襲撃で気分が半ば高揚し、初めこそは会話も多かったものの、今は時折ぼつりぼつりと言葉を交わすだけであとは黙々と足を運んでいた。

昼食を取ってから、もう二刻も歩いただろうか。

霧がまだ濃く漂っているが、周囲の樹々は少しずつ疎らになってきている、ように思える。

斜面をまっすぐに上がるのではなく、山をぐるりと回り込むようにして道は続いていた。

そのせいで、太陽の位置は把握しているものの、今自分がどの角度にいいのか分かりにくい。

その太陽もやがて西に傾き、霧に覆われた周囲がほんの淡い橙色に染まっていることで、日没が近いのだと知ることができた。

「夜が来ますね」

セレスティが足を止めず、首だけを巡らせる。

お昼以来目立った出来事はなく、とにかく狭い道を踏み締めて斜面を登り続けていた。

初めの緊張は薄らぎ、今は登り続けている疲労が大きい。

今、自分たちがどの程度の高さまで登ってきたのか、霧で覆われて把握できないのも少々きつかった。

オルビーイスはラウルの傍らを飛びながら進み、時々追い抜いたり追い抜かれたりしている。

「やすみたーい」

リズリーアが一言、肺の息を吐き出すようにそう言った。

意外と、と言っては申し訳ないが意外と辛抱強く、リズリーアが休みたいと口にしたのはこれが初めてだ。

先頭でセレスティが、太陽の光が残っている方角を見つめる。

「確かに。そろそろ野営できそうな場所を探しましょう。あまり暗くなり過ぎると道を外れかねません」

「そうですね」

足を止めて身体を休めたい。

足の裏が痛くて。

休む、と聞いたせいとか、オルビーイスはラウルの肩に降りてきた。

（おっと）

かなり重量を感じて、ラウルの右肩は一度下がった。

（もしかして、負担かけないようにしてくれてたのかな）

かわいい。

「本当は視界の開けたところが良いのですが、さすがにここでは叶いません。道が広がっているところがあれば、そこで」

セレスティの言葉に被せるように、細く長い咆哮が聞こえた。遠くからだ。

「なに？」

リズリーアが杖を体の前に引き寄せ、ヴィルリーアがリズリーアの側に身を寄せる。

応えるように、もう一つ、遠吠え。今度は低く。

「お、狼……狼だよ」

「そりや普通にいるな。まあまだ遠い。もっと上の方だ」

ガイドは目を細め、その姿から方向の位置と周囲の様子を探っているのがわかる。

「まだ遠いって……ち、近づいて来たりしないの」

「近付いても来るだろうなあ。そろそろ狩りの時間だろう」

「ええ、ヤダ」

「それ込みでこの森に入っただよ、俺達は」

続くリズリーアの抗議を背中に流しつつ、ガイドはセレスティとラウルに近付いた。

「ここらは高木がまだある。ここで野営を張ろう。もっと登ればその分樹高が低くなってくるからな。退避できる木のあるところで一晚過ごした方がいい」

ガイドの言うとおりで、この場所でも登り始めより樹々の背が低くなっていく。

「はい、そうしましょう」

この場を野営地と決め、ラウルとセレスティは早速、手頃な枝ぶりの木の間に縄と防水布を渡し始めた。

雨が降るかは分からないが、念のための屋根代わりだ。

『上から猿が降ってくるのも避けられるしな』とヴァースがのんびり言っている。

「もうあれ、ホントやだ！」

昼食の恨みを思い出したリズリーアが杖をぶんぶん振っている。

屋根を張った後は焚き火用に下草を刈り、落ちている木の枝を拾い集めた。

その間も時折、狼の遠吠えが聞こえた。

少し近付いたようにも思う。

「早めに食糧を胃袋に入れてしましましょう」

途中で捕えていた兔を捌き、香草と塩を加えて煮込む。

セレスティが手早く夕食を準備する間、ラウルとガイドはそれぞれ道の前後を見回ることにした。

ラウルは今通って来た方だ。

足元が薄暗くなってきたのでフルゴルを抜いて、その光で周囲と足元を照らしながら歩いた。

「――」

ゆっくり、野営地から二十間ほど降る。

あまり離れるなどガイドから忠告されているので、役割としては本当に念の為の警戒だ。

「猿はもうついてきてない、よな？ ヴァース」

『今はいないな』

「狼もいない？」

『この辺りにやいないな』

遠吠えはラウルの耳にもまだ遠い場所に思える。ヴァースの言うとおりでらう。

「他には？」

『まあ――いろいろ』

「いろいろ……危険なもの？」

『まあ――いろいろ』

「いろいろ」

ごくんと唾を飲み込む。

『ま、今は問題ねー。どっちみちその内出くわすかもだしー』

「そ、そう」

オルビーイスがラウルの肩を右から左へ移動する。白い尾が視界で揺れる。

この幼い竜は霧の中だろうがきりふり山の山中だろうが、特にこれといった危険などは感じていないようだ。

「オルビーイス。君の親の気配はする？」

尋ねたがオルビーイスはラウルの目を見て首を傾げるばかり。

「まだ無理かなあ」

きりふり山の主が竜だったとして、それがオルビーイスの親だったとして、近づけばオルビーイスの存在に気付くだろうか。

それはそれで気を付けなきゃな、と辺りを見回す。

霧の中からいきなり竜が現れたりしたらちよつと、いやかなり恐い。

しかし、とにかく全てが霧に包まれていて、視界は二間あるかないかだ。足元の登山道がなければすぐ迷ってしまいそうだが、とはいえこの霧の中に一人離れていても、ラウルは今の状況では心細さを感じていなかった。

「何かさ、俺一人だけど実質四名っていうか、全く一人な感じがしなくて助かるね」

右手にフルゴル、腰にヴァース、肩にオルビーイス。

完璧だ。

ラウル以外。

「もしかしたら、俺たちだけでくればよかったのかな」

狼の声を聞いてから、そんな想いが浮かんでいた。

狼なんて猿の比じゃない。

子供の頃に襲われた記憶が蘇り、思わず背中がぶるりと震えた。

オルビーイスが首の周りをグルンと一周する。

大丈夫か、と聞かれていたようでラウルは微笑んだ。

「俺一人じゃどうしようもないけど、君たちがいたら、何とかかなりそうだもんね」

『無理だなー』

あっさり否定された。

『さっきも言っただろ、危険なもんがいねーワケじゃねーんだし、第一俺を使えなきゃ話になんねーんだからよー』

それもそうだ。

ヴァースがいくら優秀でも、ラウルの筋力と体力と技術がついていかないのだから。

「じゃあせめて俺は、みんなの盾になれるくらい役割を」

ぱきん。

と。

枝の折れる音がした。道が降っていく先だ。

はつとして息を潜め、霧の向こうを見つめる。

音はその一度だけで、しばらく息を凝らして待ってみたが続く音はなかった。

「――戻ろうか」

何度目か鳥の鳴き声を聞き、澄んだその音色にどこことなくホッとしながら、ラウルは皆がいる野営の場所まで戻った。

その内出くわすんだし、と言ったヴァースの言葉通り。

野営地が襲撃を受けたのは、すっかり日が暮れて辺りが乳白色の闇に染まった頃だった。

霧の向こうから、遠吠えが響いた。

4 初戦

霧の中にどこかくぐもりながら響いたのは、狼の咆哮――

最初に聞いた時よりもずっと、近い。

そして、咆哮は一頭だけではなかった。

数頭が呼び交わすように吠えながら近付いてくる。

それは野営地の四方を、既に囲んでいた。

「セレスティ、ラウル、双子を中に置け」

ガイドの指示が飛ぶ。

既にガイドは矢を一本番え、弦を半ば張った右手の指にもう二本、矢を挟んでいる。

セレスティが斜面の上側、ラウルは斜面の下側に立ち、それぞれ剣を抜いた。

「か、か、風切り、用意します。僕の正面には、入らないでください」

ヴィルリアは登山道に並行に立って斜面の下を向き、身体の前
に杖を立てた。

「ヴィリ」

気をつけて、と頬をこわばらせるリズリアへ頷くヴィルリア
の顔は、もっとこわばっている。

「落ち着いていけ」

ヴィルリアと背中合わせに、斜面上側を向いてガイド。

回復役であるリズリアを真ん中に置いた陣形だ。

近づく足音は既に四方から聞こえている。ゆっくり、こちらの様子を見ています。

その音が四つ足の獣の、強靱な四肢を感じさせた。

ラウルはヴァースを構え、霧の向こうを見据えた。

手に汗が滲んでいる。小刻みに震えるのをなんとか堪える。

狼。

何頭いるのだろう。

「火、火があるから、襲って来ないんじや」

焚き火はセレスティとヴィルリーアの間にも赤々と燃えている。

「ほんの少し警戒するくらいだ。獲物がいたりやあ構わず来る」

「そ、そうですか——さんね」

唸り声。長く。

低く。

「来るぞ」

唸り声が切れた、瞬間——

乳白色の闇から一頭、影が飛び出した。

ラウルとグイドの間、斜面上からだ。

大きい。

弦が鳴り、放たれた矢が狼の肩口に突き立つ。

ギャン！ と声を上げ、狼の灰色の軀がもんどりうって斜面を滑

り落ちていった。

霧の奥に消える。

「っ」

もう一頭、ラウルの正面から間髪入れずに飛びかかってくる。頭から尾まで、半間（約150cm）はあるか。

開いた顎、剥き出しの鋭い牙。

「——ッ」

ラウルは思わず棒立ちになった。

鼓動が体の奥から太鼓の乱打のように響く。

真っ白な雪で埋もれた背景から突然現れた狼。

目に焼きついた、剥き出しの牙。

「——」

あの日の、腕に牙が食い込む痛みが甦る。滴る血と。

誰かが叫んでいる。

（父さん——）

もっと幼い声。

——レイ

「ラウル！」

耳元で思いつきり声がして、ラウルははっと意識を取り戻した。

森の中。

唸り声、金属音、声が交差している。

「ラウル！ 大丈夫!？」

耳元で叫んだのはリズリーアだ。

「ご、ご、ごめん！」

「ヴァースに感謝！」

リズリーアはまた叫んだ。

見ればものすごく力が籠って手のひらと手首が痛いくらいだが、ラウルはヴァースをしっかりと構えている。

狼を斬ったかどうかは分からない。

『一頭斬ったぞー』

ヴァースの声。

肩にオルビーイスがいない。

(どこに)

「ヴィリ！」

リズリーアの高い声。

「ヴィリ、落ち着いて！」

切迫した響きにラウルは視線を巡らせた。

ヴィルリーアはラウルの左斜め後ろにいて、杖を体の前に立てている。怪我はしていなさそうだ。

「ヴィリ、風切り、できる？」

リズリーアが懸命に声をかけているが、ちらりと見たヴィルリーアは杖を両手で握りしめたまま、夜目にもわかるほど全身で震えていた。

「か、かざ、ええと……っ きゃあっ」

狼の影が霧の向こうを過ぎる。

ヴィルリーアはすっかり怯えてしまっている。

「ヴィリ、落ち着いて、大丈夫だから——」

双子の真正面から、狼が飛び出した。

二頭。

ラウルは振り返り、ヴァースを握った腕を懸命に振った。

一瞬早くガイドの矢が狼の胸元に突き立つ。

セレスティがヴィルリーアの前に踏み込み、襲いかかる狼へ剣を薙いだ。

直後セレスティは身体を返し、道の上から飛び出してきた狼へ、剣を振る。

風を断ち、上がった血飛沫が霧に溶ける。

「リズ、ヴィリを下がらせる。ラウル、後ろ！」

道の下、ラウルの右後方から狼。

ラウルは半ばヴァースに引き摺られ、剣を左右斜めに払った。

腕がぐんと、右へ。右から飛び出してきた狼の鼻先を剣が掠める。

霧の中へ引こうとした狼へ、滑空したオルビーイスが両足の爪で掴みかかる。

唸り声、苦鳴。

狼が駈ける足音。

オルビーイスの翼が空を叩く音。

ガイドの弓がまた矢を放つ。連続して二射。更に二射。

四方の地面に突き立つ。

更に二射。

何頭めか——ガイドの矢がオオカミを貫き、斜面を転がり落ちていく。

ふいに。

周囲を囲んでいた唸り声が止んだ。

一声、咆哮が上がる。

雄々しいと、こんな状況でさえそんなことを思った。

「何——」

「しっ」

グイドが弓を構えたまま、四人へと視線を配る。

しん、と静寂の落ちた霧の中、ラウルたちの耳に、遠のいていく狼の足音が聞こえた。

次第に辺りが静かになる。

足音ももう聞こえない。

（——引いた？ 逃げた？）

ラウルはまだ肩から両手まで、ガチガチに力が籠ったまま、剣を構えていた。

呼吸も止めたままだ。

「——行ってみた」

リズリーアが息を吐き、「ヴィリ、大丈夫？ 平気？」とヴィル

リーアの肩を抱え背中を撫せている。

ヴィルリーアはふにやふにやとその場にしゃがみ込んだ。

「こ、こ、怖かったよう、リズちゃ……」

「怪我不い？ 大丈夫？」

「ご、ごめんね——ぜ、全然、詠唱が、出てこなくて……っ」

「気にする必要ないよ、初戦だもん。あたしも『眠り寄せ』とかあったけど、忘れてたし。ね。次、一緒にがんばろー！」

「でも、僕がリズちゃんを、まもらなきゃ」

「そーいうんじゃないの。双子なんだから。あたしだってヴィリを守るもん」

涙ぐむヴィルリーアの背を、リズリーアが何度も撫でてやっている。

ラウルは二人のやりとりを見て、狼の襲撃が何とか終わったのだと、ようやく実感した。

（終わった——、み、みんな無事……？）

声を出したつもりだったが音にならなかった。

ガチガチだった腕から力が抜け、それでもヴァースの柄がまだ右手の指から離れないまま、ラウルはとにかく剣を下ろした。

『ご主人、しっかりしろー』

「びい！」

自分の少し前に狼が一頭、倒れている。

セレスティがノウムの剣身を布で丁寧に拭い、鞘に収める。血の匂いが微かに、霧に漂った。

「引いたようですね。十数頭、いたようですし、覚悟した分少し拍子抜けですが」

「不利と見たら結構あっさりしたもんだ、狼ってのは。頭がいいからな。それより倒れてる奴に気を付けろ、まだ息がある奴がいるかもしれない」

普段の調子に戻った会話を聞きながら、ラウルは忘れていた呼吸を思い出しようやく息を吸った。

身体に血が巡る感覚。

緩んだ指先からヴァースがするりと地面に落ちる。

『おーい、おれ様を丁寧に扱えよー』

「ごめ——」

ラウルは地面に落ちたヴァースへ手を伸ばした。

『ご主人！』

「びい！」

オルビーイスが鋭く鳴く。

足元に倒れていた一頭が、バネを弾くように身を起こした。

開いた顎の剥き出しの牙が、剣を拾おうと上体を傾けていた、ラウルの喉へ。

「びー！」

ドン、と、オルビーイスが狼に体当たりすると、ラウルの正面から霧を裂き走った剣が狼の首を一刀に飛ばすのが、同時だった。

ラウルは驚きに体勢を崩し、地面に両膝と両手をついた。

瞳を見開く。

「——えっ」

死んだと思った狼が襲いかかってきたことも、危うく喉に食いつかれるところだったことも。

目の前で狼の首が飛んだことも——

全で一瞬で頭から消えた。

剣を払い鞘に収めた青年を見つめる。

セステイ——ではない。

ええと。

「……レ、レイ?!」

レイノルドだ。

ラウルの従兄弟。

「な——、え? 何? 何で君が。え? ここどこ?」

「借りを返しただけだ」

レイノルドはふい、と顔を逸らして憎々しげに答えたが、それよりもラウルにはここが何処だったつけ、ということが気になった。

夜。

霧の中。

山の中。

きりふり山。

——レイノルド?

「えっ。借り? 借りって、決闘の」

「決闘は違うだろう! あれは俺がお前に貸したようなもんじゃないか!」

ムツとしてレイノルドはラウルを睨んだ。

ややあつてぼそりと口を開く。

「前に……」

「? 前?」

ラウルはまだ地面に両手両膝をついたまま、考え込んだ。

肩にオルビーイスが降りる。

レイノルドの声に更に陰が籠った。

「ずっと前、狼に襲われただろうっ。あの時俺を、庇ったから、お

……お前が怪我を」

眉を寄せ瞬きし、あつと目を見開く。

「えっ。もしかしてあの、十四、五年前の?」

「決まってる」

駄目だ。

頭がかなり混乱している。

文脈はわかるが状況がわからない。

オルビーイスがラウルの背中の上で、自分の尻尾を追いかけてくるくる回っている。かわいい。

仁王立ちのレイノルドとしゃがんだままのラウルという奇妙な構図の二人へ、ガイドが歩み寄った。

「おい。何だコイツは。誰か後ろについてきてると思ったら、ラウルの知り合——」

目を細める。「ああ？ 誰かと思えば領主の」

「え、ガイドさん知ってたんですか？」

ラウルは驚いてガイドを見上げた。

ついてきてたの知ってた？

『俺も知ってたー』

ヴァースがのんびり声を上げる。

彼を拾おうとしていたのだと思い出し、ラウルはヴァースを拾い上げて土を払った。

「知ってたなら何で言わないの？」

『どうすんだろうなって思ったからー』

思ったからー、じゃない。

驚いたしこの霧の中で一人でいたら危険が生じていたかもしれないし、知っていたならもっと早く合流を

(えーと)

ラウルはレイノルドへ、しゃがんだまま真っすぐ身体を向けた。

改めて。

何故いるのだろう。

「気付かれていたのか」

レイノルドは決まり悪そうにガイドと、セレスティと双子を代わる代わる見る。

「いえ。私は気付いておりませんでした」

「あたしもー。こんな霧の中で気付くのおじさんくらいでしょ。でもそっか、貴方がレイノルドなんだ」

ずい、とリズリーアがラウルの横を抜けてレイノルドに近寄る。

レイノルドが一步引く。

リズリーアはもう一步近寄った。

リズリーアの繊細な面に揶揄うような笑みが広がった。

「借りって、何だ、もしかしてー、レイが剣を学んだのってラウルを助けたかったから？」

「なっ、何で知ってるんだ!？」

ぎよっとしてレイノルドはリズリーアから身を引いた。

「やっぱり？」

慌てふためいて首を振る。

「いやっ、違う、そういう意味じゃなくって、その時のことを……大体レイってなんだ」

「ラウルが話してくれたよ。子供の頃仲良かったんでしょ。今もラウルは仲良くしたいみたいだし、話の中でレイ、レイって言ったし」

「仲良く……レイって……」

レイノルドの顔が一回ゆるみ、無理やり引き締まる。

「き、気安く呼ぶな、ラウル！ もう子供の頃と同じじゃないんだからな」

リズリーアはヴィルリーアへ頭を傾けた。

「……分かりやすすくない？」

「うん……」

えへへ、とヴィルリアが微笑む。「ラウルさんのこと、好きなんだねえ」

「違う！」

「ちゃんとラウルとレイ、話した方がいいよ」

「だからレイって呼ぶな！ 話すって——」

「行き違いがあったみたいだし？」

ラウルはレイノルドと顔を見合わせた。

「ところでラウル、そろそろ立ったら？ その姿勢苦しくない？」

言われてラウルは未だに両膝をついて前かがみになっていたことに気付き、ようやく立ち上がった。

背中て尻尾を追いかけ回っていたオルビースがつつと滑り、服の裾にぶら下がる。

半ば無意識にオルビースを抱き上げ、肩に乗せる。

「ええと」

レイノルドだ。

確かにちゃんと、話すべきかもしれないが……

(どうしよう——)

「何だこりゃ」

ガイドの驚きと呆れが入り混じった声が耳を捉え、声の方を振り返った。

いつの間にかガイドとセレスティは少し離れたところにいて、二人とも道の先を眺めている。

「セレスティの剣の跡か。おい、ラウル、こりゃすごいぞ」

呼ばれたのをいいことに、ラウルは「ええと、ちょっと待ってね」と、いったんこの場から退却した。

「私も驚きました。このノウム、とても切れ味が良い剣です」
セレスティが感慨深そうに頷き、ノウムを身体の前に持ち上げている。

「ノウムが、何か」

二人の視線を辿り、ラウルは驚いて目を見開いた。

「えっ……」

狼の死骸が、一体。

左前脚から背にかけて、一刀のもと、すばりと断たれていた。その様はセレスティの腕の確かさを物語っているようだ。

ただ驚いたのはそのことだけではない。

「剣を振る際非常に軽く感じられますし、何より鋭い。鋭すぎる面もあります——」

道に筋が走り、更に木の枝がいくつも、道の上にはばらばらと落ちていた。

切り口は鋭利で刃物で断たれたものだとわかる。

「え、これ、ノウムで断ったんですか？」

「はい」

セレスティは頷いた。

「ラウルは自分に剣を打つ才能がないと言っていました、とんでもない。これは素晴らしい剣だと思います」

「ラウルが——ラウルが打った剣」

いつの間にかすぐ横に立っていたレイノルドが、セレスティの腰の剣とラウルを見比べている。

「この跡が？」

「そうです。驚異的だと思いませんか。これほどの剣は世にそうそうありません」

「え、あ、ああ」

セレストイがごく自然にレイノルドに話かけ、レイノルドは少し狼狽えている。

ええと。

『おれ様が名剣宝剣国宝剣だからー！ ノウムもおれ様には及ばないが、いい線いってるんだぜー』

「――え？」

レイノルドの目が限界まで見開かれ、ラウルが手にしているヴァースに落ちた。

「ねえねえ、剣もいいんだけど、誰も怪我した人いない？ ようやくあたしの出番だと思っただけ」

リズリーアがひよいと顔を出す。

『幸い誰もいねーみてーだなー。こりやなかかどうして頼もしい顔触れじゃねーかー』

「えーっ。あたしまだ一回も使ってないっつまんないっ」

『杖に灯りびかーって灯してただろー』

「あれじゃ使ったうちに入んないっ」

『いいじゃねーか、明日にとっとけよー』

「一日の詠唱回数、限られてるの。今日唱えなくても明日唱える体力が増えるわけじゃないの」

『そういうもんなのかー？』

「そういうもんなの。術式は精神力すごく使うから何回も唱えたらすごく疲れるの。ちゃんと寝て回復するのが大事なの」

レイノルドはじつと黙ったままリズリーアとヴァースのやり取りを見ていたが、ゆっくり、ラウルへと首を巡らせた。

目が瞬きしていない。

「――おい。ラウル。剣が喋ってるぞ……。何だ、これは」

ああ、うん。

そこからだよ、うん。

慣れきっている自分と状況把握が必要なことと、加えてレイノルドへーからあれこれ説明する労力を思い、ラウルは淡い笑みを零した。

「レイも今日ここで一緒に野営するの？」

リズリーアが屈託なく、にこにこレイノルドに話しかけている。

レイノルドはじりじりと後退った。

「べ、べ、別に、居たくて居るわけじゃ、ない」

うん。

もう日はすっかり暮れたし、夜だし。

「えー、でも、明日ここから帰るつもりじゃないでしょ？」

「ここまで来て、明日ただ帰るなんて意味がないだろう」

うん。

散歩で入る場所じゃないもんね。

ロツンからだいぶ遠いしね。

「じゃあレイも火番よろしくね！ 順番最初でいい？ ラウル、レ

イ、おじさん、セレスティの順」

「か、構わない、が」

うん。

いい感じだリズ。

俺一番目がいい。

セレスティが「私が中番をやります」とガイドに言い、「俺は慣

れてるから問題ない」とガイドが返す。

うう、ごめんなさい。楽しようとしてごめんなさい。

「俺が二番目をやります」

とラウルは自己申告した。何と言ってもこの一行の責任者だ。楽な役ばかりしてはいけない。

「レイは何か目的があつて来たの？」

「——そうだ。俺には俺の目的があつて」

「そっか」

リズリーアはばん、と両手を合わせた。

「ラウルの手伝いしたいもんね！」

うん——うえ！?

先ほどから火の様子を念入りに見ていたラウルは、焚き火の向この二人を二度見した。

「ぼつ——、そつ、そんなのじゃない！」

レイノルドの挙動が不審になっている。

焚き火を挟んでラウルと目が合い、影がくつきり浮かぶほど眉間に皺を寄せた。

「おつ、俺は——」

「違うの？」

「リ、リズちゃん……」

ヴィルリーアが袖を引いている。「あんまり、はっきり聞いちゃ

悪いよ……」

「だつてえ、面白いし」

「面白い!？」とレイノルドは端正——なはずの顔を思い切り歪めた。

「お——俺は、きりふり山に用があつて」

「何の用？ 危ないよ？ 一人で入るところじゃないよ？」

「あ——」

うん。
リズ。

突っ込んだじゃいけないところだそこは。

「いーじゃん、一緒に行こうよ。一緒に行ってほしいなあ」
「えっ」

焚き火の灯りに紛れたようだがレイノルドは顔を赤くした。

「盾は多い方がいいし」

うん。

そうだね、うん。

「た、盾？」

盾だね。

けれど狼との戦い、レイノルドの剣は見事だった。

「詠唱中、あたしとヴィリ無防備だから」

「やっぱり初めての实戦じゃ、勝手が違うし」と続ける。

「ご、ごめんね……僕、慌てちゃって」

ヴィルリアアが俯いてリズリアの袖をつまむ。

「もう、いいんだってば。実戦でなきゃできないことばかりなんだから。あたしもきつと同じだし、いい経験だよ」

リズリアは双子の両手を同じく両手で握り、額をコツンと当てた。
にこり。

首を傾げてレイノルドに愛らしく微笑む。

「盾が厚ければ落ち着けると思うんだ。ね」

「そ——」

レイノルドは口籠もり、顔を逸らした。

「そのくらいなら、やってやる」

「——おい」

『ラウル、貴方の打った剣はとても素晴らしい！』

セレスティの双眸に興奮と信頼が見える。

「いやあ、そんな……そうかな。そうですか？」

ラウルは剣を打つ夢を見ていた。

幾振りもの剣をどんどん打つ。一日一振りどころではない。どんどんどんどん。かんかんかんかん。

ラウルの打った剣は評判が良く、キルセンの村やロッソの街からだけではなく、イル・ノーや遠く王都からも一振りだけでいいからと、求める者が引きも切らなかつた。

——兄さん、すごいよ。今度の注文、誰からだと思う？

エーリックとアデラードが両腕に剣をたくさん抱えてはしゃいでいる。

アデラードは子栗鼠のように飛び跳ねた。

——兄様、私が教えて差し上げるわ。その方、国王陛下の、衛士でいらつしやる——

すごい、とラウルも気持ちが悪くなった。

彼には剣など不要なはずなのに。

それだけラウルの打つ剣が認められたのだ。

ずっと、一心不乱に鍛冶の腕を研鑽し続けた甲斐があったのだ。

師匠、俺、がんばりました——！

母アンナが笑う。

——当然ですよ。ラウル。あなたの打つ剣は、とても素晴らしい剣だもの——

——家なんてもういいの。あなたはあなたの才能を活かしなさい
ありがとう、母上。貴女に認められて、とても嬉しい。

それにしても、俺って。

俺って、もしかして

名工——？

「おい、起きろ」

乱暴に揺さぶられ、ラウルは夢から引き上げられた。

憎い。

じゃない。

そう、夢だった。

と言うか夢だと最初からわかっていた。

うん。

「おはよう……」

眠い目をこすり、起き上がる。

おはようという時間ではない。まだそう、寝てから三刻ほどしか

経っていないだろう。

午後の十一刻頃か。

「交替だ」

「うん。ありがとう」

いや。違和感すごいな。

何故レイノルドと見張り番を交替しているのか。

「何事もなかった。だがこの霧だ、視界が切れる先のことまでは判
らないが。霧の中に何が潜んでいるか」

「うう、怖いこと言わないでくれよ。俺今から見張りなのに」

見回しても周りは変わらず闇の中に霧が漂っている。

焚き火の炎も霧を追い払うには至らず、ともすれば飲み込まれて
しまいそうだ。

「うわ。ほんとに怖くなってきた……」

「相変わらずだな」

八、いや、九割呆れを含んでいる。

「情け無い。一人で見張りになるのか」

そんなトゲトゲ言うなら起きてくれていいんだぞ、と言いたか
つたがそこは抑えて、ラウルは視線を下ろした。

オルビーイス……はすやすやと寝ている。

ヴァースを手を取った。

「大丈夫。ヴァースと一緒にいてくれるしね。な、ヴァース」

『——』

「な、ヴァース」

『——』

「ヴァース……？」

『——』

寝ている。

え？ 剣で寝るの？

いやそもそも喋ったりするのもアレなんだけど寝るの？

「起きてくれー」

「ラウル」

「ちよっと待って、今ヴァースを起こして」

「ラウル。その剣光ってるぞ」

「ん？」

レイノルドが指差した先で、フルゴルがじわじわと光り始めていく。

ラウルはフルゴルに手を伸ばしてしっかりと抱き締めた。

「フルゴルー！ ありがとうフルゴルー！ これで心細くないよー」

フルゴルが明滅して応えてくれている。

優しいなあ、フルゴルは。俺が心細いの分かったのかな。

ていうか結構お茶目なんだよね。

「ラウル」

次は何だろう。ノウム——はセレステイが抱えて寝ているし。

「ラウル」

もう一度、やや語気を強め、レイノルドはラウルの名前を呼んだ。

どうやら話があるようだ、と、ラウルは洪々レイノルドに向き直った。

「お前の——、いや、まずその剣を下ろしてくれ。眩しい」

「あ、ごめんごめん」

言われたとおり、フルゴルを膝の上に下ろす。ついでに「少し眩しいから光を落としてね」と頼むと、フルゴルの光は蠟燭よりやや強いくらいの灯りになった。

ラウルの顔が下から照らされる。

「それで、話は」

ラウルの面に濃い陰影が揺れる。

不穏な感じだな、とレイノルドは呟いてから、胡座をかいた。

「何から聞けばいいのか——とにかくまず、そのお前の剣。光ったり、ええと、喋ったり、それから切れ味が何だか良くわからない……」

ノウムのあの切れ味は俺にも良くわからない。

けしてヴァースが喋ることを良く理解しているわけでもフルゴルの光る原理を理解しているわけでもないが。

残してきた剣達、大人しくしてるかな、とふと思った。

「それは、お前が打ったのか？」

「ええと——」

レイノルドの眉根が寄っている。

「うん。まあ、そうなるね」

「そうなるねって——今まで、そんなこと一言も、俺に」

「いやいや、だって俺も知ったのつい最近だし。そりゃ素材は色々言ってたけど、ヴァースが喋って初めて、ちよっと他と違ってるかなって」

「ちよっと？」

語気を強めないでほしい。

「だいが」

とつい言い直してしまった。

「師匠は何か言っていなかったのか」

「何も——まあ、亡くなったのは俺がまともな剣を打ち上げる前だったし」

師匠であるフェムルトは八十九歳で急逝した。

ただもし今も生きていて、ラウルの打った剣達を見たらフェムルトが何と言ったか、それはとても気になる。

「まあ師匠は珍妙な剣を打つ前に、ごく一般的な剣を打てと仰っただろうけどな」

言い返せない。

「俺もそう思うよ。そう言えば、レイのその剣、師匠のだよね」

むすつとしたままレイノルドは、肯定代わりに柄を握った。

両手持ちの、澄んだ剣身を持つ素晴らしい剣だ。

レイノルドは剣の腕を磨き続けてフェムルトから認められ、その剣を譲られた。

『まだまだ未熟だが——、まあいい』

気乗りしなさそうな口振りと言腹に、フェムルトが誇らしそうだったのをラウルは良く覚えている。

レイノルドの剣の腕は確かで、先ほど狼の首をひと薙ぎで断つてみせた。使い手の腕と剣の性能とが見事に融合した結果だ。

質実剛健。素晴らしい打ち手だった。

先ほどのラウルの浮かれた夢ではないが、フェムルトの剣は王都からも買い求められ、高位の法術士が求めることもあったと聞いている。

(ああ、そうだ)

フェムルトが打った最後の剣。

様々な客から高値で買いたいと請われたが、ラウルはその剣を手放さなかった。

(もし、レイが——)

「まあ剣のことはひとまず置いておこう。それよりもうっ、とラウルは肩を引いた。

「お前がこの山に登る理由がその竜を帰すためだと、それはさつき聞いて分かったが、そんな状況だったら何で一言言わなかった」

「何でって」

レイノルドの眉根に更に皺が寄っている。

もうここ数年、会う度にその顔だ。

あんまり眉を寄せすぎると眉間に溝ができてしまうよ。常に皺が寄っているような顔になっちゃうんだよ。

それはともかく。

「レイには言わないよ」

あれ以上迷惑はかけられない。

それにうっかりセルゲイ叔父に知られたら、討伐隊を出されてしまいかもしれない。

「——」

レイノルドは胡座をかいた膝の上で、拳を握り締めている。

「結構繊細な状況だったんだよ。あんまり沢山の人に知られないよ。気をつけなきゃいけないかったし、とにかく最小限の人にだけ話したんだ。特にきりふり山に帰すことは、ほんとうに広まっちゃ困ると思ってるね」

もしきりふり山に竜がいると広まったら、オルビーイスは穏やかに暮らすことができなくなる。

たがらラウルから話したのはボードガードにだけ。
あとはボードガードが信頼のおける人物に、声をかけてもらっ
た。

「だけど、無事返した後に、レイにも——」

レイノルドは俯き、低い声を押出した。

「もし誰にも言わずにここでお前に何かあつて、エーリックやアデ
ル、アンナ伯母様がどれほど心配して、どれほど悲しむか、考えな
かったのか」

「いやあ……だつてほら、帰すだけだか、ら……」

ひい。

すっごい睨んでる。すっごい睨んでる。

眉間がそのまま固まるぞ？

「レイ、あの、ちよつと……？」

レイノルドは握った拳ごとぶるぶると腕を震わせていたが、やや
あつて静かに、長く、息を吐き出した。

(そんな長い溜息つく……？)

「もういい。お前はいつもそうだ」

「いつもつて」

そうなんだろうか。

レイノルドの眉間に皺を刻ませてるのは俺つてことになる？

いやまあ確かに一部は確実に。

ラウルは居住まいを正した。

そう言えば、まだ肝心なことを尋ねていない。

「レイは何でここに来たんだ」

尋ねられたレイノルドはしばらくラウルの目を睨んでいたが、ふ
い、と視線を逸らせた。

「——寝る」

「はい？」

「お前が見張り番だろ。俺を付き合わせるな」

「はいい？」

いやいや、話があるつて言ったのはレイのほうだからね？

そう思ったが口にする前にレイノルドは立ち上がり、焚き火の向
こうへ行くところりと横になった。

「木の根が痛いから、毛布使えよ」

どうせ「いらぬ」と答えると分かっていたので、ラウルは立ち
上がつて否応なしに毛布を押し付け、また焚き火のそばに戻った。

これから三刻、ガイドに番を繋ぐまで、真面目に周囲の警戒をし
なくては。

気を引き締めていこう。

見ればオルビーイスが翼の下に頭を突っ込んで気持ち良さそうに
眠っている。

ヴァースも——眠つて——いる。

(ほんとかー)

フルゴルは剣身を柔らかかに明滅させてくれた。

リズリーアとヴィルリーアは本当に同じ間隔で胸が上下してい
て、その様子にくすりと笑みが零れる。

セレスティの呼吸は起きている時のように規則正しく、ガイドは
ほとんど気配がない。

「もういない」

続けて、こう言った。

「昨日、何回か気配があった奴だ。ヴァース、お前も感じてただろう」

ええ……

『いたな。ずっと遠巻きだったけど、慣れたのか、近付いて来やがった』

もう一度、ガイドが頭上を見上げる。

「何がいたかまでは良くわからないが——このまま追ってこられたくはないな」

太陽が昇り始めても霧を照らすことはできず、手早く朝食を済ませ、ラウル達は野営地を発った。

双子が起きる前に猿の死骸は片付けたが、あったことは伝え、何より不穏な雰囲気を感じ取っているのかリズリーアは口元を固く引き結び、青ざめているヴィルリーアの手をしっかりと握っている。

並び順は昨日と同じくセレスティ、ラウル、リズリーアとヴィルリーア。

昨日と異なるのはガイドの後ろにレイノルドが続いていることだ。

昨夜までは帰ったほうがいいのではないかと、そう言おうと思ってもいたが、今はそれも危険に思え、レイノルドが共に行くと聞いたことに安堵を覚えた。

ガイドは朝食後、何もしないよりはマシだと、焚き火に何やら懐から取り出した丸薬を投じて、ややつんと刺激臭がするその煙を全員に浴びさせた。

オルビーイスは嫌がって煙を浴びず、歩き出した後もラウルの肩に降りようと近寄っては離れるを繰り返した。

（何がいたんだ、あの時——）

猿を貪り食っていたものが、存在したはずだ。

姿は全く見え、音も聞こえなかった。

ラウルはいつでも気付けるようヴァースの柄をしっかりと握っていたが、朝以来ヴァースは警告を発する様子もなく、一行は阻まれるものもなく、狭い登山道を登った。

一日前のことだ。

霧の中を猿の群れは、昼間手に入れたご馳走をもっと手に入れたくて、人間達の後を遠巻きに追っていた。

あの時唸り飛んできた矢が恐ろしい。それにあの場にいた幼竜も。気をつけなくてはいけない。

それでも一度味わった味が忘れられず、隙を見てまた食料を奪おうと、猿達は周囲からの敵にも気を配りながら、樹々の枝から枝を慎重に移動していた。

それでも――

猿達は群れから一匹、また一匹といなくなつた。

静かに。

声も立てず。

追っていた人間達がまた足を止めたのがわかる。太陽は霧の向こうで、西の地平にゆっくりと降りていくところだった。

昼間のように、ご馳走を手に入れる機会に違いない――嬉々として近寄ろうとした猿達が慌てて樹上に止まったのは、地上に狼の群れが動いているのを見たからだ。

人間たちを獲物として襲おうとしている。

それではもう人間達の持っているご馳走を手に入れるのは難しく、逆に自分達が狼の餌になりかねない。

群れを率いる雄猿は追うのを諦め、群れに意思を伝えるために声を上げた。

おかしいと、気付いたのはその時だ。

応える鳴き声が少ない。

もう一度呼び掛けた声は、少し先の霧の中から上がる狼の唸り声と人間達の声とに紛れた。下ではもう戦いが始まっている。

雄猿は再び声を上げた。

やはり返答が少ない。

一番離れた場所から返った鳴き声が、半ばで途切れた。

雄猿は明らかに異常を理解した。

霧に覆われ目で見ることができなかったが、三十四ほどいた群れは、その時既に二十四匹にまで数を減らしていた。

――逃ゲナクテハ

そこに、それは現れた。

その姿を見た瞬間、恐怖に全身を握まれ、雄猿は尾の先を動かすことすらできなくなった。

狼の遠吠えが、霧を貫いて樹上へも響く。

その響きは異常を告げている。

それは枝を渡ってゆつくりと近付くと、手頃な場所に手を伸ばし、木の枝に張り付いていた猿を無造作に掴んだ。

猿は怯え切っていて、捕獲は容易だった。

鋭い爪が猿の腹を裂く。零れ出た腸はらわたを啜り、頭蓋を両手で割って脳を啜る。

その間にもそれは白くたおやかな腕を動かし、それぞれの手に一匹ずつ、合わせて六匹の猿を掴んだ。

逃げもせず、悲鳴も上がらない。

その双眸が——恐怖が、彼等の身体を縛っていた。

肉が裂ける音。

骨が折れ、砕ける音。

咀嚼音。

布をこすり合わせる時に似た、擦過音。

しゅる。

しゅる。

しゅる。

そこにいた猿の群れ、二十匹を超えるそれらの脳と腸はらわたを啜り

味わうと、肉体を丸々喰らう。残りは木の枝に引っ掛けた。

それは太い木の枝に絡むようにぐるりと丸くなった。

次に目を覚ましたのはまだ陽が昇らないうちだ。

既に空腹を感じていた。

そこに引っ掛けておいた餌を一匹掴む。

けれど冷え切って硬い骸より、霧の中に感じる温かな血の熱がその気を惹きつけた。

昨日、この森に入ってきた生き物——人間を、それはもう何度も喰らったことがあった。

猿よりずっと柔く美味と言えるし、あれ一体喰らえば二日は腹がくちくなる。

今、森を歩いているのは合わせて六体。手足を捻って保存しておけば、生きたまま半月は保つ。獲物がか細く呻く様は空腹を刺激し、喰らう時の旨味が増した。

全部捕らえて小さいものから先に喰うのがいい。今までそうしてきたように。

それは、人間の捕らえ方を心得ていた。

餌を一つ手に掴んだまま、ほかの残骸にはもはや目もくれず、それは樹々の上を移動し始めた。

時折、細い首を左右へと振り分ける。首の動きに合わせて長い黒髪が薄暗い霧に散る。

霧の中を進み、獲物達が固まって憩んでいる頭上近くにまできた。霧に覆われながらも、その目は血の熱を僅かに捉えた。

唇を笑みの形に歪めると、耳元まで黒々と裂ける。

猿などよりもずっと上等で、美味そうな匂いが鼻腔をくすぐる。

舌舐めずりをし、近付こうとしたその時、耳障りな甲高い音が彼らの中から湧き起こった。

一瞬、体を硬直させたその肩へ、乳白色の膜を切り裂いて飛来した矢が突き立つ。

それは痛みと驚きに身を翻して霧の中に消えた。

歩くほどに斜面は険しくなり始めた。

時折足が地面に取られ転びそうになる。

霧はまだ濃く、視界を妨げて漂っている。

朝出発してから、一度短い休憩をとり、三刻ほど歩いただろうか。

「あとのくらいで、霧を抜けられるでしょうか」

セレスティは前方を見据えていた視線をガイドへ向けた。そこには早く霧を抜けてしまいたいという思いが含まれているようだ。

朝、樹上にいたモノが何か、そして今、彼らを追ってきているのかどうか――

ラウルは肩を震わせた。

平気か、と問うようにオルビーイスが飛びながら頬に鼻先を寄せ

る。

ラウルはオルビーイスの鼻先を指の腹で撫でた。
「大丈夫だよ。空気が冷たくなってきたね。オルビーイスは寒くない？」

標高が上がっているせいで肌寒さが増している。

ぴい、と元氣よく答えが返る。

あとのどのくらいで、というセレスティの問いに、ガイドが顔を巡らせる。

「そうだな……思った以上に時間がかかっている。登山道が緩いし、まっすぐ登っていかないからな」

これで？とラウルは思ったが、口にはしない。

この山をまっすぐ登ったらどれほどきついか。斜面をぐるりと回っているような今の道は有り難かった。

ガイドが続ける。

「だが今日にはこの霧を抜けられるだろう。野営は見通しのいい場所のできるさ」

「ええ、まだあるの？」

リズリーアは頬を膨らませた。そんな様子も愛らしさが勝る。

朝、野営地を発つてからは近づく獣もなく、リズリーアもヴィルリーアも強張っていた顔が穏やかになっている。

(朝の、アレももう、どこかに行つたかな)

最初の休憩時にまたガイドが丸薬を焼き、煙を浴び直したのもある。お陰でオルビーイスが肩に降りてくれないのが寂しいが、ふよふよと周りを飛んでついてくる姿は何度もラウルの頬を弛ませた。

他愛無い会話を挟みながら、もう半刻ほど歩いていると、何となくだが霧が薄くなり始めたように思える。

樹々もまばらになり、足元も土より石が多くなってきた。

風が吹く。その風も森に入った頃より強くなっている。

ラウルは前後を見て、声をかけた。

「そろそろ一度、休憩にしましょう。お昼に」

「賛成！」

リズリーアが手を挙げる。

「ぼ、ぼくも、賛成です……」

ヴィルリーアも続き、ガイドが頷く。

「そうだな。オルビーイスがラウルに近くなってきたから、ここらでもう一度煙を浴びておこう」

うう。また遠くなってしまう。残念だ。

「水はこの先入手できる場所が無い。配分を考えて飲めよ」

「はい」

「今のうちに防寒具を着ておけ。特に双子」

「ええ。暑いし。ずっと歩いて登ってるもん。汗かいちゃって」

「風が出てきた。体温を奪われる」

「リズちゃん、汗少し引いたら着よう」

ヴィルリーアの言葉には素直に頷く。

ガイドは二人の荷物からそれぞれ中に着込む上着を取り出し、双子に手渡した。

二人が一度法衣を脱いで下に防寒着を着込むのを見ながら、ガイドはもう松明に火を灯し、例の丸薬を放り込んだ。双子をその前に座らせている。

「これ臭い」

「鼻が、つんとします……」

抗議も「我慢しろ」の一言で完封だ。

ラウルは荷物を下ろしその側によっこらせ、と腰を下ろした。

地面についたお尻の辺りからどつと疲れが立ち昇り、思わず深々と息を吐く。

「ふい……」

「だらしがないな」

そう言いつつレイノルドが斜め前にどざりと座る。

オマエ、嫌味を言いに来たなら帰れ。

「ラウル、体力は大丈夫ですか」

セレスティは手頃な岩を見つけて腰掛け、^{かぶと}冑を脱いでくつろぎながらそう尋ねた。

端正な面に浮かべた笑みがこんな時でも爽やかだ。

「いやあ、正直、結構膝にきてます。普段動かないから。セレスティこそ、鎧を着ているし辛くないですか」

「着たままひたすら歩くのは慣れていきますし」

と、伯爵家の四男らしからぬ返事が返る。

「レイノルド殿も、少しお疲れのようですね」

「お心遣い有難うございます。まだそれほど疲れてはおりません。

俺はこいつよりも鍛えてますから」

セレスティが伯爵家の四男と聞いた後は、レイノルドは礼儀正しく接している。

四男で爵位は関係なく、もう既に家を離れている、とセレスティは説明していたが、その辺がきつちりとしている、或いは砕けられないのがレイノルドだ。

それにしても態度が違うな。

「レイノルド殿の剣はかのフェムルト殿の作だとか。あの方のお名前は私の育った街でも耳にしておりました。失礼ながら、拝見してもよろしいでしょうか」

「お望みなら」

レイノルドは剣帯から剣の鞘ごと外し、セレスティへと手渡した。

おずおずと頬を赤らめる。

「か、代わりにと言ってはなんですが、そのノウムという剣、少し見せていただいても——」

「当然です。そもそもこちらはラウルからお借りしているものから」

二人は剣を交換し、じつくりたつぷりと眺め始めた。

ほお、とかふむ、とか唸りながら刃先がどうの、鉄の肌がどうの、柄の握り具合がどうの、振った時の遠心力のかかり具合がどうのと熱心に言葉を交わしている。

しばらくの間は鍛剣に役立つかと真面目に聞いていたが、

「——うん」

ラウルはひとつ頷き、ガイドを振り返った。

「ガイドさん、朝いたものの気配はまだありますか」

リズリーアとヴィルリーアが、もぐもぐと昼食を食べていた口元を止める。

（栗鼠かな？）

微笑ましさを覚えたが、ガイドの言葉にそれも押しやられた。

「気配は感じない。だが、付いて来ると考えて行動したほうがいいだろうな」

「そ——そうですね……っ、当然ですっ」

胸を一度叩いたつもりが、拳がぶれて三度くらい自分に打撃を打ち込んだ。

うう。こわい。

「登って行く以上、自分達から逃げ道を狭くしてってるようなもんだ」

「う」

「いずれは戦う場面が出てくる」

と、ガイドはこともなげに言った。

「あ、あたし、ちゃんとみんなを回復できるように準備してるからね！」

「ぼ、ぼ、僕は、今度は、風切りを唱えますから……っ」

二人は手にしていたパンを膝に下ろし、お互いの目を力強く見交わしている。

「がんばろうねっ」

「まあ、頼りにしてるぜ」

「あーっ、おじさん信じてないでしょっ」

「信じてるさ。この先法術の重要性は格段に増すだろうからな。お前さん達が必須だ」

返したガイドの声は冗談めかしていながら、二人の法術を必要とする場面が必ず出てくると、そういう予想を含んでいるように思えた。

(気を張っておかなきゃな)

ラウルは肩に一度力を込めて、それを抜いた。血が巡る。

「ほれ、さっさと昼飯を済ませちまえ」

「おじさんこそ」

「俺はもう食った」

えっ、とかいつの間に?! とかりズリーアがそれでまた騒いでいる間にも、ガイドは視線を周囲へと巡らせている。

ラウルは立ち上がった。

「ガイドさん、矢はあと何本ありますか」

「十六だな。狼の時回収できなかった」

用意した二十本中、十六本。

ガイドならばそれでも充分だろうか。

それでも、ガイドの矢にだけ頼っているわけにもいかない。「朝のヤツが追ってきた時の為に、俺たち何か——」

がさ、と、下草を鳴らす音がした。

ラウルの視線の先、ガイド達の後方。

茂みが揺れている。

「ガイドさ——」

茂みを割って現れた黒い影。

双子が同時に立ち上がる。さつとりズリーアがヴィルリーアの前に出た。

ガイドは既に弓に矢を番えて影へ向け、ラウルのすぐ後ろでセレスティとレイノルドも剣を抜き立ち上がった。

黒い影が地を這うように突進してくる。

低い位置、四つ脚、長い尾、灰色の鱗——

「と、蜥蜴——?!」

全長は一間(約3m)近い。

セレスティが地面を蹴り瞬きの間に前へ出た。双子の前だ。

突進する蜥蜴に振り下ろそうとした剣が、ガイドの声に寸前で止まる。

「待て! そいつは逃げてる!」

セレスティが剣ノクムの柄を引く。

蜥蜴はセレスティの足元をすり抜け、短い脚で驚くべき速さで走り抜けた。

ここにいる人間は彼等の獲物にはならないのか——見向きもしない。

下草を揺らす音はまだ続いている。

それに気付いてラウルが視線を戻した先、次々に——霧の中から大蜥蜴が飛び出し、休憩していた場を駆け抜ける。

霧から現れ、霧の中へ消えていく。重い足音、長い尾が地面ですれ枯葉や土を撒き散らす。

その数、十頭を超えている。

「な、何が——」

『ご主人——』

ヴァースの声と、衝撃が一緒だった。脚に蜥蜴がぶつかった。

次に浮遊感。

「ラウル！」

伸ばした手は差し伸べられた手を掴めず、足が空を搔く。

霧の中に、落ちる。

次の瞬間、背中から地面に落ち、そのままラウルは斜面を二、三間、滑り落ちた。

土、木の葉。その上を身体が滑り落ちる。

木の根があちこちぶつかる。

ものすごく痛い。

（死ぬ——）

けれど、身体はすぐに止まった。

最後のおまけとばかり、木の幹に左の肩を強^{したた}か打ちつける。

「——いっ……っ、」

『ごしゅじーん、大丈夫かー、ごしゅじーん』

ヴァースの声がやけにのんびりして聞こえる。もっと心配してくれ。いやいや、深刻な心配など必要ない、そのくらいの状況ってことだね分かる。

「ラウル！」

誰か呼んでいる。遠いけれどこの声はレイノルドだ。

ええと、うん。

声が聞こえる方が斜面の上だ、多分。

ラウルは地面に手をつけて何とか身体を起こした。

「だ、大丈夫——」

掠れた声では上までは届かないだろう。

ラウルはもう一度声を張った。

「無事だ！」

それに何と言っているのか、くぐもった声が戻る。

至る所痛い、どこも折れたりしていない、ようだ。多分。

緩い斜面だったせいで、擦り傷ができたくらいだった。多分。

幸い休憩で荷物は下ろしていたし、ヴァースはしっかりと剣帯に括られている。

身体は木の葉まみれの土まみれだが、ひとまず良かった。

「ぴい！」

必死さを含んだ響きと翼の音と共に、オルビーイスがラウルのそばに浮かび、その姿に胸の奥から安堵が湧きあがる。

こんなに心配してくれて――

かわいいかわいいかわいい。

「ぴい？」

いや、浮かれている場合ではない。

「大丈夫だよ」

そう言ってオルビーイスの首を撫で、ラウルは上を振り仰いだ。

霧の中に震んでいるものの、斜面が急なのはわかる。

どれほど滑り落ちたのかは分からないが、感覚的におそらく三、

四間（9～12 m）と言ったところか。

他よりも樹があまり生えていないようなのは、もしかしたらこの

斜面が過去に崩れてできたからなのかもしれない。

だからこそ骨折や切り傷などを負わずに済んだのかもしれない、
が。

「登るもの大変だな……」

捕まれる物も足掛かりになる物も少なすぎる。

『ご主人、どうすんだー？』

「とにかく戻らなきゃ。ええと」

周りを見回しても道らしきものは見当たらなかった。

下手に横移動したら迷いそうだ。

「やっぱりここを登る、んだろうな」

「ラウル！」

追いかけて斜面を滑り降りようとしたレイノルドの腕を、セレス
ティが掴んで引き止める。

レイノルドはつんのめった。

「何を」

「待ってくださいレイノルド。貴殿は降りるより、ここで」

「だが」

セレスティはレイノルドに、背囊から外した縄の端を手渡した。

「分かった、これで降り――」

「ここで」

ともう一度、セレスティは繰り返した。

「縄を垂らしましょう。引っ張り上げるなら支え手が上にいた方が

いい」

にこりと微笑んだ笑顔の圧が高い。

「わ、分かりました」

「俺の也使え」

ガイドから渡された縄と合わせれば、長さは六間（約18 m）に
なる。

セレスティが縄を手早く結んで繋ぎ、片側を手頃な木の幹に括り
つける。

レイノルドは二本の縄がしっかり結びついているのを確認し、斜
面に投げ下ろした。

「ラウル！ これを掴んで登ってこい！」

縄は蛇が身をくねらせるように伸びていき、霧の中に落ちる。

「ラウル！」

霧の中から手応えが返る。

「リズ、ヴィリ。側に来ておけ」

ガイドはそう言つて、静かになった周囲を見回した。

幸い大蜥蜴達の姿は消えている。

森にある音は遠くの鳥の声と、風が枝葉を揺らす音だけだ。

「何かに、驚いたんだろうが——」

ヴァースはラウルと一緒に下だったな、と、そう呟いた。

肩に当たつて落ちた縄を掴み、ラウルは息を吐いた。

三、四巻きほど手繰つたところでぴんと張る。

「ラウル、掴ん——自力——登れますか」

セレスティイの声が落ちてくる。冷静な響きに安心する。

（けど、ここを登れるかなあ。うう）

ぐい、と引つ張ればしつかりと縄が張り、硬い手応えが返つた。

斜面に足をかけ、土に靴の爪先を押し込むようにして一度身体を

浮かす。

いけ、そうだ。

「大丈夫です！ 登れます！」

想像よりは比較的容易に、ラウルは斜面を登り始めた。

『あと少し！ あと少し！』

『あ』と『と』の間に小さな『っ』が入っている。

ラウルは懸命に縄を掴み、斜面に置いた両足を踏ん張りながら登つた。

「ぐうう」

『あつと少し！ あつと少し！』

「ヴ、ヴァースが、俺の腕を、動かして、くれない、かな……っ」

『あつと少し！ あつと少し！』

あ、無理なんですね。はい。

両腕にこれまでかけたことのない負荷をかけこれまでの人生にならぬほどのありつたけの根性を絞り上げて注ぎ込み、懸命に登る。

やがて、どうにか、ようやく、斜面の上に立つ足が見えてきた。

縄を引つ張り手繰り寄せようとしているレイノルドの姿が見える。

る。

（レイ——）

視線が合うと、左手に縄をふた巻きほどして、右手を差し伸べる。

「手を伸ばせ！」

全体重両手にかけて必死に縄を掴んでいる人間が、片手を離すのにつて意外と難しいんだぞ。

と、ひとこと言いたいところだが、口を開くと泡を吹きそうだし

登りきるのが先決だ。

最後の一踏ん張り、縄を掴む手を上へ、伸ばそうとした時——

ラウルの腰でヴァースが高い音を立てた。

思わず縄から手を離しそうになり、必死に捕まる。縄ごと身体がぐらぐらと揺れた。

「な、な——なん、ヴァ……」

鋭い、警報音。

朝と同じ。

ガイドが何か言っている。

辺りが緊張に満ちている。

空気が、確かに——変わった。

「——急げ」

レイノルドがラウルに手を伸ばす。

「ラウル、早くしろ！」

「わ、分かっ——」

レイノルドの手を掴もうと上を振り仰いだラウルは、その首の角度のまま目を見開いた。

風が強く吹き、霧を押し流した。

その、奥——

レイノルドの斜め後ろの奥だ。

上——樹々の、枝の間。

女の顔がぼかりと、浮かんでいた。

7 捕食者

白い霧の中、身体に吸い付くような薄布を纏った、たおやかな女がラウル達を見ていた。

艶のない黒髪をだらりと長く伸ばし、身体の両脇の腰のあたりまで掛かっている。

(何だ——)

何かおかしい。

いや、おかしいのは当然おかしいのだ。

こんな霧の、山の中、若い女が一人で。

木の上に。

けれどおかしさは、そういうことではない。

長い髪が覆い隠している、身体の両側。

その形が——？

「レイノルド、ラウルをゆっくり引き上げろ」

姿は見えないが、ガイドの声。

低く、意識を張り巡らせている。

「セレスティ。剣は」

「抜いています」

「双子」

「え、え、ええと」

「眠り——眠り寄せ……っ」

リズリーアの、詠唱。歌う独特の響き。

女が聞き入るように首を傾げる。詠唱に揺れるように、霧が揺れる。にたりと笑った。

レイノルドが腹這いになって腕を伸ばし、ラウルの腕を掴んで斜面を引っ張り上げる。

その間でさえ、ラウルの目は女から離すことができなかった。何かがおかしい、その理由にラウルは気が付いた。

下半身がない。

(違、う——)

下半身は確かにあった。

あったが、それは一旦折れ返し、木の幹に巻きついていて、

「へ——蛇……」

上半身が人間の女、下半身が蛇なのだ。胴回りは大人が両腕で抱えるほど太く、蛇体の長さは梢と霧に隠れて窺いようがない。

上半身を覆う薄布と見えたものは、白銀に輝く鱗。

女が髪を揺らした。

ガイドの矢の弦が鳴る。

女の眉間へと真っ直ぐ走った矢を、突き立つ直前で白い腕が掴む。

違和感の正体をもう一つ、ラウルは知った。

その腕は片側に四本、合わせて八本あった。

木の枝から振り子のごとく、女の身体が逆さまに揺れて迫る。

八本の腕が広がった。

第二矢。

女の手が掴み取る。

その矢に重なるようにもう二本、影から現れ脇腹に突き立った。女が甲高い苦鳴を上げる。硝子を引っ掻くのに似たその音が耳に突き刺さる。リズリーアの詠唱が途絶えた。

セレスティが踏み込む。両手剣を下から掬い上げるように、軽々と、鋭く振った。

ノウムの刃が薄い陽光を受け、軌跡を目に残す。白い胴へ。

女の上半身が勢い良く振れる。

狙いが逸れ、けれどノウムの切先は右の腕を一本、肘から切り落とした。血が霧に撒き散らされる。

憎しみの籠った叫び。獣の咆哮というよりは、人の悲鳴のよう

な。

左の四目の腕が伸び、セレスティの頭を掴む。

金属の胄に指先がめり込む。

ガイドの矢が女の左肩に突き立つ。

矢より僅かに早く、咄嗟に金具を外し、セレスティは滑るように身を低くした。

胄が脱げる。手は鉄の胄を紙のごとく握り潰した。

しゃん。

鈴が鳴る。

『来れ、来れ、夜の帷とばりにその腕かいなを開くもの——』

リズリーアが身体の正面に掲げた杖、その先端の輪が淡く光る。

術式を組み合わせ発動させるための詠唱。

集中を高め術を強化する呪言。

ラウルの耳が聞き取ったのはこの呪言だ。

リズリーアは半ば瞳を伏せ、彼女の周りをゆるく風が取り巻いた。

『眠りよ、彼のものをその腕に』

詠唱の、その最後の一片か——

「リズちゃん！」

リズリーアは地面に倒れたその後で、突き飛ばされたことに気がついた。

女の腕が、ヴィルリーアの肩と腕を掴んでいる。

「——ヴィリ！」

ヴィルリーアの足が浮く。

ラウルはヴァースを手を駆け出した。

オルビーイスが女へと突っ込む。

セレスティが身を跳ね起こす。

女の上半身とヴィルリーアの身体は地上高く持ち上がっている。

遠い。

「止まれ！」

ガイドの声。

ガイドが矢を放つ、寸前——

蛇体がうねり、土と樹々を嵐のごとく叩いた。

リズリーアを、セレスティを、ガイドを、ラウルとレイノルドを弾く。

弾かれてラウルは樹の幹に背中から叩きつけられた。意識が一瞬遠くなる。

女はヴィルリーアを掴んだまま、霧の中へと蛇体をくねらせ消えていく。

ガイドが放った矢は霧に吸い込まれた。

誰もが、束の間——それはほんの一呼吸の間に過ぎなかったが、永遠とも感じられる間、茫然としていた。

初めに我に返ったのはリズリーアだ。

土まみれの身体を起こし、ヴィルリーアが消えた方向を見つめたまま、唇を震わせた。瞳は見開かれたまま、面からは血の気が失われている。

「は、早く……、早くヴィリを助けなきゃ！」

リズリーアは途端に駆け出した。

ガイドが腕を挿んで止める。

「落ち着け。もうここに気配がない」

そのガイドは既に矢筒を肩に掛け直し、頭巾を被り直している。

ガイドの矢筒を見て、ラウルは息を詰めた。

矢の残りはあと、十本だ。

「無闇に追いかけてもどこに行ったかわからねえし、道を外れたらただ迷うのがオチだ」

「だ——だったらどうすれば！ このまじやヴィリが、ヴィリが……」

想像に耐えきれず、リズリーアは顔を歪め大粒の涙を零した。

手が乱暴にそれを拭うが、拭っても拭っても後から零れ落ちてくる。

「やだやだ、やだ——グ、ガイドさん、お願い、ヴィリを助けて——」

「当然、助ける」

ガイドがリズリーアの頭に、撫でるように一度手を置く。

「俺の責任だ。俺が追う」

本来ならば、あれがついてきていることに気付いた時点で、引き返す判断をしておくべきだった、と。

「リズ、お前は下山しろ。ラウル、連れて行け」

「やだ！ 私のせいだもん、私がヴィリを連れてきたから……！ だから私がヴィリを探しに行く！ ヴィリの代わりに私が食べられる！ その間に」

「落ち着いてください、リズ」

セレスティがリズリーアの肩をそっと押える。

「ガイド殿、さすがに貴殿お一人では、あの蛇怪を追って倒すのは困難でしょう」

「俺はこういう場面で戦い慣れてる」

ラウルも首を振った。

「でも、援護があった方がいいですし、矢も残りの数が」

それは承知の上だと、ガイドの目が語っている。

口にはしないがガイドは、矢を向ける範囲に他者がいない方がいいと、そう考えているかもしれないとラウルは思った。

自分達が彼の矢を妨げているのかもしれないと。

だが、あの蛇の怪物をこの目で見てしまつては、ガイド一人を行かせることに到底領けなかった。

それに。

『ご主人にや、得意技があるしな』

いつも通りのヴァースの声は、一呼吸、置くきっかけになった。ヴァースの言う通り。

ラウルは改めて、声に力を込めた。

「追跡なら、俺がします」

「お前が？ どう——」

ああ、とガイドは頷いた。

応えるように、ラウルは傍らの樹の幹に手を触れた。

「樹々に尋ねれば、今なら記憶が新しいですから、確実に追えます」

オルビーンイスが密猟者達に攫われた時と状況を重ね、それからラウルははっと辺りを見回した。

「オルビーンイス!？」

いない。

斜面を登る時でさえラウルの周りを飛んでいたのに、その姿がどこにもなかった。

「オルビーンイス！」

呼ぶ声にも反応は戻らない。

胃の辺りがさっと冷たくなった。

「オル——」

「おそろくだが、あの蛇の化け物を追っていった」

そう言ったレイノルドを振り返り、ラウルはこれ以上吸えないほど息を吸い込んで——、吐き出した。

握った両手に力が籠る。

いや、力を、込める。

「じゃあ——じゃあ大丈夫だ。リズ。オルビーンイスがヴィリを守ってくれる」

絶対に。

「だってオルビーンイスは、竜なんだからね」

不安を打ち消し、敢えて希望の方を掴む。

(ヴィルリア、オルビーンイス。今行くよ)

ラウルはヴァースを鞆に収め、傍の木々の幹に手を置いた。

「——追えます」

リズリアを、ガイド、セレステイ、レイノルドを見直し、木が示した方向へと歩き出した。

蛇怪は二つの腕でぐったりとしているヴィルリーアの身体を掴み、樹の間を幹と幹を渡るように移動した。

鋼に似た黒銀に白い斑紋の混じる蛇の尾が、霧を縫って動く。

ただ蛇怪は、斜面を上へ進もうとはしなかった。

もう七十間（約210m）も登れば霧を出してしまう。

身を隠すことができなくなることに――

それから、あれ等がいることと。

安全な霧の中からは出るべきではない。

手にした獲物を掴む力が増す。獲物は気を失い固く目を閉じていたが、締め付ける力に微かに呻いた。

上々の獲物だ。

時折この山を登ってくる人間達。

ここまで登ってきた人間のほとんどは、この蛇怪が捉え、喰らった。

手足を捻ってしまえば逃げ出すこともできず、けれどしばらくは生きていく。

一匹喰らい、腹が減ったらまたもう一匹を。

先ほどの人間達は、まだ後五匹いた。そのうち、今ここに捕らえたものと同じ、柔らかそうな若いものも。

するりと大樹を巻いて這い上がる。

頭から尾まで四間（約12m）にも及ぶ蛇怪の体重を支えるほどの枝が広がり、そのうちの一本が斜面に張り出した、高さ六間（約

18m）ほどの所にある岩場に差し掛かっている。

蛇怪は枝を伝い岩場の平たい岩の上へ、ヴィルリーアを下ろした。

そこが蛇怪の巣だった。捕らえてきた獲物をここで保存し、喰らうのだ。

岩場には裂いた獲物から流れ出した血の痕がこびりつき、だがそれ

以外は石塊程度しか落ちていない。最後には丸呑みで喰らうた

め、岩場には骨の欠片も残らなかった。

今岩場に下ろした獲物の、仰向いて覗いた白い額と喉に空腹を刺

激され、赤く長い舌がちろりと揺れる。

とても旨そうだ。今、せめて脳と内臓を喰らっておこうか。獲物を呑みさえしなければ、残りの獲物達を捕える妨げにはならない。

七本の手がそれぞれ、ヴィルリーアの両手足、喉、頭を掴む。

上がった呻き声がますます食欲をそそる。

頭を掴んだ二つの手、十本の指先に、頭蓋を割ろうと力を込めた。

軋んだ音を立て、木の扉が開く。

白と淡い紫の繊細な薄布を重ねた裾を揺らし、女は小屋へ入った。

そこはラウルの鍛冶小屋だ。

絹糸に似た艶やかな銀髪を緩やかに結び上げた、たおやかな細身の女だった。窓から差す陽光に、銀髪はやや青みを帯びて見える。

足音をほとんど立てず、女は正面の壁へと室内を横切り、その前に立った。

視線の先にあるのは、ラウルの打った剣が五振り。

剣がそれぞれひとりで、ガタガタと身をゆすり出す。けれど女の視線を受け、剣はいずれも静まった。

白い面に気品のある微笑みを刷く。

その内の一振りへ、女はほっそりとした手を伸ばした。

ヴィルリーアが無事であることを信じて、ラウルはただ懸命に、樹々の囁く言葉を辿り続けた。

山道からはとつくに外れていた。蛇の特性か、樹々の記憶が語るのには、蛇行して進んでいる道筋だ。ラウル達の足取りも自然左右に何度となく振られた。

時間が取られる上に、蛇行は等間隔ではなく急に右だけへ突き進んだりしているのが厄介だ。

それでも、辿れている。

「登っていく気配がねえな」

ガイドの言葉に意識が引き戻される。

「え？」

「かと言って降りていく様子もない。あの蛇は、この霧ん中を棲家すまわにしているようだが、――何で登らねえのか」

最後の方は独り言に近い。

ガイドの指摘は明瞭ではないが、不穏さを含んでいる。

「まあそれなら、このまま追えば早い段階で巢ねに着くだろう。山をぐるっと一回りって訳でもないだろうからな」

楽観的な方を歓迎したい、とラウルは密かに思った。

「ガイド殿は、今までのような魔獣に出会でくわしたことがありますか。かつての戦いの中で」

セレスティが尋ねる。

先ほどの蛇怪との邂逅の際、^{かぶと}冑を握り潰されたせいでセレス
テの表情が見えるのはいいが、同時に防御力上の不安も覚える。

(あんな硬い鉄の冑をあつさり握り潰す奴だ)
人の頭など、それ以上に脆いだろう。

「討伐隊にいる間、退治した奴は色々いたが蛇型は無かったな。こ
こらは四つ足が多かった」

「あれは——あれが、この山の主ということはありませんか」

セレスティが問うと、少し前を歩くレイノルドが同じ考えなのか
首を巡らせる。

セレスティの問いにも頷ける。あれほど悍ましく、恐ろしい存在
なら。

だがグイドは首を振った。

「それは無いだろうな。奴はどうやら霧の中から出ようとしていな
い」

「と言うと」

「単純な話だ。霧の上にもっとヤバイものがあるのさ」

ラウルは一度、グイドを振り返った。

それがオルビーイスの親——竜か。

リズリーアは張り詰めた面でじっと前を見据え、唇を引き結び歩
いている。

時折瞬きをする以外、表情は硬く、人形のように変わらない。
けれど懸命に、感情が弾けそうになるのを堪えているのがわかっ
た。

必ず追いつくから、と気休めをかける代わりに、ラウルは何度も
木の幹に手を当て、「こっちはです」とその都度声に力を込めた。

眠るヴィルリーアの頭を掴んだ二つの手、十本の指先に、力が籠
る。

ヴィルリーアは眉根を寄せ、苦しげに呻いた。

閉じていた瞳が、うつすらと開く。

自分に伸びた白い腕、その向こうの顔——加わる痛みに、水色の
瞳に激しい恐怖が宿った。

「ひ——」

みしり。

苦鳴は声にならず、ヴィルリーアの喉の奥で塊になった。

みし。

注がれる双眸に満ちる嗜虐的な欲望。

「——ピィ！」

鋭く、だが幼い鳴き声と共に、霧の中から真っ白な塊が蛇怪の背
中へ突進した。

オルビーイスだ。

開いた顎が蛇怪の頸^{うなじ}へ喰らいつく。半ば放り出されるように、
ヴィルリーアの額を掴んでいた腕が離れる。

オルビーイスの鋭い牙が頸へ、ぐずりと食い込んだ。

蛇怪は痛みと恐怖に囚われて全身を激しく揺すった。蛇体がうねり、岩場と樹の枝を叩く。

その勢いにオルビーイスの小さな身体は弾かれ、岩場に激しくぶつかり硬い岩を砕いて、跳ねた。

「オルビー、ス……！」

蛇怪の尾が、宙に浮いたオルビーイスの身体を追いかけ更に、弾く。

オルビーイスは重なる枝葉の奥へ、叩きつけられるように消えた。

蛇怪は二本の腕で頸を抱え、五本の腕を広げて岩場に伏せて、オルビーイスが消えた先を見据えたまま、しばらくの間警戒に息を潜めていた。

押さえた首筋から鼓動に合わせ、血が滲み出ていく。

あれは竜だ。

霧の上にいるはずの。

だが、まだ幼く——あれは、蛇怪の脅威とまではならない。

蛇怪の背後で抑えた、けれど荒い呼吸が耳を捉えた。

振り向いた先で獲物が目を覚ましていて、全身を強張らせて震えている。

蛇怪は女の顔で、にたりと笑った。

まだ幼さをほんの少し残した柔らかそうな面。

恐怖に怯えて——

なんと旨そうなの。

「リ——リズちゃ……」

獲物が漏らしかけた声を防ごうと、両手で自分の口を塞ぐ。

蛇怪が長い髪を揺らし近付けば、その分獲物はしりもちをついたまま腕と足でにじり、下がる。

すぐに獲物の背中は岩場の斜面に当たり、遮られた。

伝わる恐怖が食欲を唆る。

もう一度、獲物を喰らおうと顔を寄せる。

赤い舌がチロリと獲物の肌を舐め——蛇怪は叩かれたかのように身を引いた。

嫌な匂いが鼻腔を突いたからだ。

匂いは獲物の全身に、燻したように纏いついている。

不快な、刺激臭。

それでもどうにか喰らおうと、もう一度顔を寄せたが、刺激臭がつんと鼻腔を刺し、一瞬吸い込んだそれが肺に流れ込んだ。

肺腑が掴まれ絞られるようだ。

怒りに任せて獲物を掴み、岩壁に投げ付けた。

獲物は呻き、また動かなくなった。

長い蛇体がある場でぐるりとぐるを巻く。

どうしてやろうかと思案する。

最も美味しく好ましいのは、やはり生きてそのまま血と脳髓と内臓を啜ることだ。けれどあの臭いは敵わない。

脳や内臓を喰らうのを諦め、引きちぎって乾くまで晒しておくか。

それとも待つか。

蛇怪は長い年月の中で、この人間という獲物の捕らえ方を理解していた。

一匹攫えば、何をどうしようというのか、群れの内の一人か二人は後を追ってくる者がいた。お互いに助け合おうとする者達ほどそうだ。そうでなければ我先に逃げ出し、それはそれで捕えやすいのだが――

今回もきつと追ってくる。

まだ周囲は明るく、人が行動するには十分な時刻だった。

蛇怪は黒い鱗の覆う蛇体と白い上半身、その二つともを岩場に張り付くようにして伏せた。

薄い唇から赤く細長い舌がちらちらと蠢く。

つかの間、霧だけが流れ――蛇怪はその音を捉えた。

枯葉の落ちた土を踏む音。

微かな熱と。

白い上半身をもたげ、岩場の下、霧の奥を見透かす。

白い面に笑みが浮かび、口の両端は耳まで裂け赤黒い色を覗かせた。

何と愚かなことか――

捕え、餌として貯蔵しておこう。

先ほど襲った際に矢を数本喰らい、右腕の三番目を切り落とされていた。その恨みもある。

全身の骨を砕き、蛇怪の腹で溶かされるその最後の一息まで苦しませてやらねば。

自ら餌になりにくる愚かな獲物を捕らえようと、蛇怪は岩場に差しかかる木の枝を伝った。

ラウルは何度――何十回目か、足を止めた。

次の樹を辿ろうとして、辺りを見回す。

最初のあの場所から、半刻は歩いただろうか。決して歩きやすくはないが、それなりの距離を進んだと思う。

左は切り立った岩壁が遮り、森は右手へ広がっている。

「ラウル、次は――」

レイノルドの問いを、片手を上げて半ばで押さえる。

声を立てず口の形だけで返した。

「近い」

これまで蛇怪の去った方向を指し示してくれた声が、次を示さない。

そのことが示すもの。

「この辺りが――」

言いかけて、ヴァースが微かに、ひと揺すり程度、振動したことに気付きラウルは息を潜めた。

ごく、静かな警告。

「え」

喉が鳴る。

「どうしました」

「ここが」

ヴァースはここだと、そう言っている。

近寄ろうとしたセレスティとレイノルドの足を、押さえた声が止める。

「動くな」

ガイドが何を告げているのか、三人は瞬間的に理解した。同時にガイドの矢が放たれる。ラウルの頭上へ。

「退がれ。リズを囲む」

布を擦り合わせるのに似た音。

ラウルのすぐ後ろの楡の木が梢を揺らす。

その意味に気付いて背筋が凍った。

ぼた。

頬にひと雫、血が滴り落ちる。

(血)

赤い。

身体がすつと冷えた。

誰の血だ。

(まさか)

『ゆっくり退がれ、ご主人——』

足を極力ゆっくりと引きながら、ラウルは顎を持ち上げ、樹上を見た。

見るんじやなかったと後悔する。

女の顔が枝の間に逆さまに浮かんでいる。初めに見た時も樹の上だったが、今、距離は一間ほどしかない。

その姿が、細部まで見えた。

のっぺりとした顔。青白い肌は死人を思わせる。

人の女の上半身と蛇体の下半身、それぞれ異なる色の鱗に覆われ、その鱗一枚一枚がゆっくりと動き、軀を揺らしている。

ぬめった手で喉元を掴まれるような、何とも言い難い悍ましさ。

裂けた唇から、赤く細長い舌がちろりと覗く。

落ちた沈黙は、一瞬だった。

急激に、蛇怪が上半身を伸ばし、直下にいたラウルへと七本の腕を広げた。

矢がその首に真横から突き立った。矢尻がぶつんと首の反対側に抜ける。

腕がラウルを捕えず掠め、再び樹上へと消える。

木の枝から枝を這う音。

移動している。

それよりも。

「く、首を、貫かれて死なないとか——っ」

「ラウル！」

レイノルドが戻れと叫ぶ。

ラウルはヴァースを構え、転びそうになるのを踏みとどめながら数歩下がった。

「毒でも仕込めりや良かったが——まあ毒も効くんだけ」

リズリーアを囲み、セレスティを正面中央、ラウルとレイノルドを左右に、ガイドは後方に陣取る。

ノウムとレイノルドの剣、そしてヴァース、それぞれ抜き放たれ、移動し続ける音へと切先を常に動かした。

一本の木が大きく揺れる。

——降りてくる。

ラウル達の視線の先で、それは木の幹を巻くように伝い降り、白くやや虹色の光沢を帯びた上半身を地面に降ろした。

ぺたりと腹から胸がつく。濡れたような長い黒髪が背と地面に散らばる。

顔をもたげる。

面こそ人の女だが、そこに浮かぶ笑みは到底、人が浮かべるものではない。

「来るぞ」

ガイドの声にセレスティが前に出した右足にほんの僅か体重を傾ける。

「私が、最初の突進を止めます」

セレスティの囁く声。

静寂は——わずかひと呼吸。

七本ある、それぞれの腕が船の櫂のように土を掴み、蛇怪は土の上を這い進んだ。

9 その光る

蛇怪が地を這い突進する。

七本の腕がそれぞれバラバラに動き、蛇身がうねった。

リズリーアを囲んで立つ、ラウル達へ。

セレスティは前傾を深くし、次のひと呼吸で地面を力一杯蹴つた。

三步踏み込み、突進する蛇怪との距離——間合いを潰す。

更に一步、ノウムを背負い気味に、蛇怪の正面へ満身の力を込めて振り下ろした。

蛇怪の二本の腕が振り下ろされたノウムを掴む。

勢いは死んだもののノウムの刃はそのまま掴んだ指を断ち、蛇怪の肩甲骨へ落ちた。剣の衝撃が地面を穿ち、蛇怪の後方の枝を数本断ち落とす。

「セレスティ！ 左だ！」

レイノルドの警告より早く、蛇身の尾が左からセレスティの胴を捉え、弾いた。剣が蛇怪を捉える寸前で、セレスティの大柄な身体が軽々と浮き、樹々の間に叩き付けられる。

セレスティは両手を地面につき辛うじて身を起こしている。蛇怪は蹲るセレスティへ滑るように進んだ。

「ラウル、残れ——」

「俺が行く、レイがここに！ リズとガイドさんを頼む！」

レイノルドが出る前にラウルは、ヴァースを構え駆け出した。

「こっちだ！」

蛇怪が振り向く。

腕。手指。それから頸。うなじ

刻まれ血を滴らせた傷が、走るラウルの目にも見て取れる。

(血を流してる——だから倒せる)

歌う声が聞こえる。リズリーアの。

今度こそ、術を発動させる時間を作る。

「こつちに来い！」

そのまま斜めに走る。

蛇怪は身をくねらせ、ラウルへと視線を——狙いを定めた。

蛇身が撓む。たわ

『振れー！』

ヴァースの声。腕に加わる、自分以外の力。

視界いっぱい蛇怪の姿が迫る。

ラウルは、ヴァース剣に合わせて腕を振り、白銀の刃が蛇怪へ疾った。

二本の腕が左右から掴み掛かる。

「ヴァースうッ！」

『あいよー』

のんびり、そして鋭く。

ヴァースの刃が腕を断つ。

肉を断つ慣れない感覚に、ラウルは胃が持ち上がる思いがした。

断たれた二本腕が地面へ落ちる、その重く濡れた音。

「っ」

痛みに暴れた尾が大きく振られる。リズリーア達へ。

「いけない」

追いつけない。

首だけを巡らせた先、レイノルドが迫り来る尾へ剣を斜めに振り

下ろした。

同時に、その左からセレスティが踏み込む。剣は横薙ぎに。

血を流しているが、セレスティの身体を取り巻いている淡い水色

の光は、あれは傷を癒すものだろうか。

(リズの)

ならば治癒の術が発動したのだ。

(やった——！)

二人の剣が尾を捉える。金属同士が打ち合うような音。剣は鱗を

裂いたが断つまでに至らず弾かれた。

地面に亀裂を刻んだノウムの剣が弾かれたことに驚きを覚える。

(どれだけ、硬いんだ)

尾はまだ動く。

ラウルは腰の後ろへ手を回し、帯びていた剣を引き抜いた。

「みんな、目を伏せて——フルゴル！」

白銀の剣身が煌々と輝く。

蛇怪は甲高い悲鳴を上げ、灼かれた両目を覆った。

「ラウル！ 退がれ！」

ガイドの声。

ラウルはよろめきつつも何とか、数歩下がった。

ガイドの放った矢がフルゴルの光に影を落として疾る。

二本。

ほぼ同時に蛇怪の喉——初めに喉を真横から貫いた矢と垂直に交差して突き立ち、もう一本が胸の中心に突き立つ。

蛇怪は呻き、腕で喉元を掻き毟りながら上体を逸らしてよるめいた。

「行ける、次で——」

セレスティが踏み込む。

ノウムの刃が霧を裂いて蛇怪の腹へと走ったと、ほぼ同時に——そして唐突に。

蛇怪の正面に、ヴィルリアーアが現れた。

セレスティが地面を蹴り、後方へ飛ぶことで自らの剣を抑える。

「ヴィリ！」

リズリーアの悲鳴に似た叫び。

蛇怪の尾がヴィルリアーアを巻き取り、その身体は蛇怪の正面に掲げられていた。

真横から頬を叩かれたように、ラウルは一瞬呆然とヴィルリアーアを見た。尾に胸を捕えられたまま力なくうなだれているが、胸がゆっくり上下している。

ほっとすると同時に、理解した。

「——盾——」

その意図は、まさに盾だ。

驚きは腹の底からの憤りに変わる。

全員が立ちすくんだ前で、蛇怪は尾に捕えたヴィルリアーアの身体を、勝ち誇り嘲笑うように高く掲げた。

尾が揺れ、がくん、がくんとヴィルリアーアの身体を揺さぶる。

「——やめて！」

駆け出そうとするリズリーアをレイノルドが咄嗟に抱き止める。

「ヴィリ！」

両腕を懸命に伸ばし、リズリーアは悲鳴に近い声を上げた。

「ヴィリ、ヴィリ、ヴィリ！」

ぐったりとしていたヴィルリアーアが微かに呻く。

何度か瞬きを繰り返して、重い頭を上げる。

ぼんやりとした瞳が一点を捉えた。

「——リ、リズちゃ……」

「ヴィリ！ ヴィ」

尾が更にヴィルリアーアの身体を持ち上げる。

巻きつく力が増し、ヴィルリアーアは苦しげに呻いた。鱗が擦れ合

い、軋む。

「やめてよ！ やめてよやめてやめて！ 嫌だ、ヴィリ——！」

女の顔が笑っている。

嬉々として。

リズリーアの泣き叫ぶ声に酔いしれている。

「——駄目だ、これ——」

許せない。

自分の奥底からふつつつと沸く怒り、それが全身を激しく巡る。

「そ——っ」

ラウルは左右の手に握った柄に力を込めた。

「そんな、ことで——」

言葉がうまく出てこない。

鼓動は破裂しそうなほど胸を叩く。

ヴァースが——

フルゴルが、ノウムが、剣身に白く淡い光を纏った。

「お前の思い通りになつたりしない！」

後から思い出して自分でも驚くほどの声だった。

リズリーアの瞳が、まず上がった。

直後、ラウルはヴァースを肩の上へ持ち上げ、渾身の力で、鋭く投擲した。

淡く光を纏ったまま、ヴァースの切先が霧を割り、剣身が放つ高い音が霧を震わせる。

耳を劈く音に蛇怪は硬直し、その腹にヴァースが突き立った。

「ヴィリを——、ヴィリを返して！」

リズリーアが駆け出す。

その横を矢が走り、残る蛇怪の手首を二本、同時に貫いた。直後に残る三つの手首に矢が突き立つ。

蛇怪が上体を反らし喉から苦鳴を搾り出す。

「貸せ！」

レイノルドはラウルからフルゴルを引ったくり、蛇怪へと踏み込んだ。

黒く連なる鱗へ剣を薙ぐ。反対からセレスティの剣。

フルゴルもノウムも、淡く光を纏っている。

二つの剣が、蛇体へ、深々と食い込んだ。

ヴィルリーアを捕らえる尾が断たれ、地面に落ちる。

「ヴィリ！」

駆け寄ったリズリーアはヴィルリーアに抱きつき、まだ絡む尾からその身体を引っ張り出した。

「ヴィリ、ヴィリつ、大丈夫？ 生きてる、ああ……っ怪我なんて、あたしがぜんぶ、治してあげるから……っ」

「リズ、早くこちらへ！」

セレスティが駆けてくる。

リズリーアは涙を乱暴に拭うと歯を食いしばり、力のないヴィルリーアの身体を肩に担いだ。

よろめきながら、一歩一歩足を踏み出して歩く。

そこへ、蛇怪の尾が断たれた断面の血を撒き散らしながら迫った。

「リズ——！」

間に入ったセレスティが、剣を振るう間もなく弾かれる。

尾はそのまま地面を掻いて流れ、レイノルドを鞭の如く弾く。

レイノルドは地面に身体を強く打ち、転がった。

セレスティも木の幹に叩きつけられ、次いで地面に落ちる。

「レイ！ セレスティ！」

「だ——大丈夫です」

セレスティは片手をつき身を起こし、口の中に入った土を吐き出した。その中に血の塊が混じっている。

「二人を」

ラウルは踵を返し、双子へと走った。リズリーアはヴィルリーアを庇って抱え込み、蹲っている。

蛇怪の腹に突き立ったままのヴァースを取り戻すべきか、視線を動かしたラウルは混乱して瞬きを繰り返した。

蛇怪の姿が無い。

「どこに——」

「ラウル！」

頭上に影が差した。

身体がぐくんと止まる。

腕——両腕を、後ろから逆さまに伸びた手が掴んでいる。

もう二本の腕が、頭を掴んだ。

背筋が凍る。

「ラウル！」

掴んだ手が、頭に——頭蓋に伝える力。

これから、潰されるのだと。

ヒュツと息を呑んだその瞬間、ガイドの矢が蛇怪の右目、右脇腹に突き立った。

頭を掴む手の力はほんの一瞬弛んだが、安堵する間もなくその力が増す。

杭でも押し付けられているような、信じがたい痛み。更に強くなる。割れそうだ。

「ラウル！」

呼ぶ声が遠い。

レイノルドが剣を振り下ろし、頭を掴む腕を一本断つのが見えた。

空いていたもう一本の手がレイノルドの喉を掴む。

「レ——」

逃げる。

ラウル自身の目が霞む。

ガイドが短剣を蛇怪の脇腹に突き立て、裂く。矢筒は空だ。

（ガイド、さん、もう、矢が——）

朦朧とする意識の中で、蛇怪の腹に刺さったままのヴァースの柄が見えた。

取れば。

（ヴァー……ス）

だが、手を伸ばしたくとも両腕を掴まれ、木に逆さまにぶら下がった蛇怪の腹は高い位置にあり、届かない。

腕を掴むのは片手でも力は罫り続ける。

血が目に入った。

痛くて——

ヤバい。

これは、死ぬ。

目に浮かんだのはオルビーイスの白く輝く姿だ。

(オル……)

ここに来たのはオルビーイスを帰す為だった。

結局また、約束を果たせない――

『決闘を――明日、朝六刻に』

『ヴァルビリーの枯れ園で』

ごめん。

ほんとごめん。

レイノルドとの決闘を、受け入れたくなかった。

決定的に終わると、そう思った。

だからラウルは、それを利用したのだ。

行けない理由にした。

『お前が――』

『お前が自ら、名誉の回復を放棄したんだ』

ごめん、レイ。

ごめんな、エーリック、アデラード。何にも言わずに出てきてしまった。

ごめんなさい母上。

父上――貴方の名誉を回復できなくて、ごめんなさい。

「ラウル――！」

潰れかけた声。

レイノルドの。

ごめんな――

「簡単に諦めてばかりで、ふざけるな！」

「――ぴい！」

突風が吹いた。

叩きつけるその風のあまりの冷たさに、薄れかけていたラウルの意識が急速に戻る。

木からぶら下がり逆さまになった蛇怪の、怒りと愉悦の混じり合った笑み。

その向こうに、真っ白な塊が見えた。

光る――輝くような鱗。

(オル……)

ラウルの頭を掴んでいた蛇怪の腕が、凍り付いて碎ける。

締め付ける力がふっと消え、体は地面に落ちた。

呻いたラウルの横を、黒い鱗に包まれた蛇体がすり抜けて動く。

「いけ、ない……」

蛇怪の向かう先にはリズリーアとヴィルリーアがいる。

ラウルが咄嗟に掴んだのは、腹に刺さったままのヴァースの柄だ。

「ヴァー……」

力が入り切らず、ヴァースだけが蛇怪の腹から抜けて手の中に残った。

蛇怪は八本あった腕を残り三本にまで失いあちこちから血を撒き散らしながら尚も、それだけは何としてでも喰らおうと、蹲る獲物へ腕を伸ばした。

オルビーイスがラウルの頭上で、大きく顎を開き、息を吸い込んだ。喉の奥が白く光る。

けれどその前に。

「リズちゃんに、触るな！」

上半身を起こしたヴィルリーアが、腕を振り上げ、宙に紋様を描いた。

シャン。

杖が鳴らす、澄んだ音。

描いた紋様は宙に円形の光を刻み、煌々と輝いた。

それも一瞬――

円陣から風が吹き出す。

一陣というよりは無数の刃。

『風切り』という法術だ。

詠唱は無く、法陣円を描き出すことにより、その法陣円を反映した風の刃を打ち出す。

円の直径が大きければ大きいほど刃の威力は上がるのだと、そう言っていたのはラウルの小屋にいた時、リズリーアだったか――

ヴィルリーアが作り上げた法陣円は、直径一間（約3m）。風の刃は蛇怪を包んで無数の裂傷を刻んだ。蛇怪の身体から吹き出した血が、霧を赤く染める。

威力が衰えないまま、蛇怪の後方頭上にいたオルビーイスへも走った。

「避けて、オルー！」

避ける代わりにオルビーイスは、喉の奥に溜めていた空気を、体全体を使うように吐き出した。

光に似て白く、息が迸る。

さほど大きくはなく、広がりもせず、だが正面に迫った風の刃を霧ごと凍り付けさせ、吹き散らした。

蛇怪が血を撒き散らし、蛇体をうねらせて霧の向こうに消える。

「待て――」

追いかけてしようとしたラウルの膝は地面に落ちた。

疲労と、それから頭を割られる恐怖からの解放と――腰が抜けたような状態だ。

「お、追いかけて、なくちゃ……」

膝がガクガクと笑っていて情けない。

四つん這いになって、ラウルはとにかく腕を伸ばした。

「びい！」

幼い鳴き声と共に、オルビーイスがラウルの肩に降りる。

「オルー……オルビーイス――」

丸く青い、澄んだ瞳がラウルを見つめる。

ラウルは力つき、べしやりとその場に倒れ伏した。

「良かった。良かったあ……」

頭はまだ混乱気味だが、それでもヴィルリアも、オルビーイスも無事だった。

喜びと、それから驚きと。

「うう、身体が、力入らない……」

でも助かった。

最後に現れたオルビーイスが、喉の奥から、吹きつけた――

(吹雪――?)

あれが蛇怪の腕を凍らせ、砕いてくれたおかげで。

「オルー」

「びい？」

「君、さっきの、あれ」

「氷、吹雪ってのか？」

そう言いながらガイドが横に立つ。

「まさか竜の息とはなあ。こんなに小せえのに」

心なしかオルビーイスは誇らしげに、長い首を持ち上げている。

「竜の、息――」

ラウルも物語を読んで知っている。いや、三百年前に起きた大戦でも、それから五年前の戦乱でも、その脅威を聞いた。

ただでさえ強大な竜の最大の武器だ。それは炎や風、酸、雷――

そう、吹雪も。

「オルーは、すごいねえ……」

ラウルは微笑み、それから周囲を見回した。

「ヴィリは」

「無事です。怪我はあるようですが、リズが今、治療を」

剣を鞘に収め、セレスティはリズリア達を指差した。

リズリアは抱きつくようにして、ものすごい早口で何やら術式を唱えている。ヴィルリアの身体が温かな水色の光に包まれているのがラウルからも見えた。

教えてくれたセレスティはあちこちあざを作って血を滲ませ土埃にまみれている。

(レイは)

首を巡らせ、自分の斜め後ろで座り込んでいるレイノルドを見つけて、ほっと息を吐いた。

レイノルドもあちこち血を滲ませているが、無事だ。

それぞれの様子に、たった今までの戦いの困難さと激しさが現れているようで――

「んん??」

ラウルは顔を戻しじつとセレスティを見て、目を剥いた。

ひいっ。

「セ――、セレ、セレス、セレスティっ」

「はい」

「かつ、か肩、肩、左肩――!」

セレスティの左腕は、だらりとぶら下がっていた。

「それっ、肩、は、外れてませんか!？」

「今入れます」

えっ、爽やかに微笑んで言うことですか？ えっ？

逆に顎が外れそうなラウルを他所に、セレスティは木の幹に外れた側の腕を当て、何やら怖い気合を入れた。

「ふんっ」

「ごり。」

(ヒiiiiiiiiii!!)

「おっハマったか？ 痛み止めでも飲んどけ」

「ありがとうございます」

「ちよつ、セレスティ、来て！ こつち！ ちゃんと直すから！」

「大丈夫ですよ。リズはヴィリを癒してあげてください」

「ぼ、僕は、もう、大丈夫です……」

レイノルドだけ何も言わないな、俺と同じで驚いているんだな、と見れば、レイノルドは腕を組んで感心しきりにセレスティを見ている。

「——俺、やっぱり心がよわいな……かよわいな……」

『——』

あれ？ ヴァース、ちよつと突っ込んで？

「ぴい！」

オルビーイスが長い首をラウルの頬にすり寄せる。

どうやら懸命に同意してくれているようだ。

——守る！ らうる！

うう。

本来守るのは自分の役割なのにこんなに幼い子に、とラウルは反省し、それからオルビーイスの首を撫でた。

「オルビーイス、ありがとうね。君がヴィリを守ってくれたんだね」

蛇怪の首の傷跡は、幾つも並ぶ牙が刻んだものだった。

まだ小さな。

「び」

「君は怪我はない？」

翼の下に手を入れて持ち上げ、一周ぐるりと回して確認する。

感覚が気に入ったのか、オルビーイスは尾をぱたぱた振った。

どこも負傷などは無いようだ。

『息まで吐けるとか、オルーは成長が早いんじゃないか？ すごいなー』

「ぴい！」

得意そうな様子が愛らしい。

安堵と愛おしさを覚えると、緊張がほぐれたのかようやく脚に力が戻ってきた。ラウルはよいせと立ち上がった。

途中レイノルドが腕を掴み、引き上げてくれる。

「レイも、ありがとう」

「お前に礼を言われてもな」

相変わらずとげとげしてるなあ。

昔は可愛かったのになあ。

あ、俺、レイに謝らなきゃいけない。決闘のことを——

「この剣返す」

レイノルドが差し出したのはフルゴルだ。

「ラウル、さつき剣が光ったが」

「うん。フルゴルだしね」

「そうじゃなく、お前の打った剣、三本ともだ。その喋るやつとこの剣と、セレスティ殿が持っている」

「へえ、そうだった？」

「へえ？ そうだった？」

レイノルドの声が一段低く繰り返し、眉根に皺が寄った。

ラウルは一步、後退りした。

「お前は、注意力が足りない」

「うう」

良くわからないが、怒られている。

ラウルが一步退がった分、レイノルドが一步の距離を縮める。

「いいか。お前の剣がそれぞれ同時に光った。それまで俺とセレスティ殿の剣はあの硬い鱗にほぼ弾かれていたが、剣が光った後、尾を断つことができた」

「そういえば……」

「切れ味が上がったんだ」

「そういうこともあるんだね。なるほど」

やや前傾姿勢になっていたレイノルドは、目をすがめ、身体を起こした。

「……のんびり過ぎないか」

「うん。まあ。俺も剣達のこと、正直良くわかってないしね。ヴァース、君わかる？」

『知らねー。おれ様はもともと切れ味抜群の至高の剣だからなー実力だしー』

「――話にならない」

レイノルドは盛大に――それはもう盛大に呆れ、遠慮会釈のない溜息を吐き出した。

「帰ったら原因を究明しろ。放置するな。いいな」

くるりと背を向け、もう一振りの自らの剣を布で拭って鞘にしま
う。

「わかったよ。ありがとう、レイ」

心から言ったのにじろりと睨まれた。

謝る機会を逸してしまった。

（――帰ったら、話そう）

「ラウル、レイノルド」

セレスティが呼んでいる。リズリーアの法術が傷を癒したのか、打撲や擦過傷、脱臼の影響も無いようだ。

「次、レイとラウル。こっち来て」とリズリーアが手招きしている。

ラウルは素直にリズリーアの前に立った。

法術の治癒の光が暖かく身体を包む。お湯に浸かっているような心地よさだと、そう思った。続けてレイノルドも光に包まれる。ぽかんと驚いた顔、そのままわずかに緩んだのが面白い。

「リズリーアのおかげで傷は充分癒えました」

セレスティはラウルへ、それから一行へ顔を巡らせた。

「奴を追いかけましょう。あれだけ負傷すれば逃げた先で絶命しているかもしれないが、それならばそれで確認しなくては。生きていたらまた襲ってくることも大いにあり得る。それに、これから先

他の被害を抑えるためにも今、止めを刺すべきです」

流れた沈黙は、それぞれセレスティの提案を検討するものだ。

ほんの少し前の戦いは、勝ちましたが、もう一度相対したいかと問われれば、『嫌だ』と言いたい。即答したい。

「――でも」

ラウルは瞳を上げた。

霧でわかりにくいのが、太陽はまだ天頂の、やや西にある。日が暮れるまで、充分に時間があった。

「——そうですね。俺も、今倒しておくべきだと思います」
恐ろしかったからこそだ。

ヴィルリアアが攫われて、リズリアアがどれほど心の潰れる想いをしたか。

ヴィルリアアがどれほどの恐怖を味わったか。

細い手が上がる。

「賛成」

リズリアアだ。

「ヴィリミたいに、他の人が攫われて——」

リズリアアは一度言葉を探した。「——そんなの、あつてほしくないし」

「ぼ、僕は——僕は、怖かったです。すごく」

肩を振るわせるヴィルリアアをリズリアアが抱き締める。ヴィルリアアは微笑み、柔らかな面をしっかりと上げた。

「他の人に、あんな想い、してほしくないです。僕も」

レイノルドも頷く。

「俺もセレスティ殿に賛成する」

今、セレスティを強調したね。俺も提案したんだけどね。そりゃ腰引け気味だったけどね。

あとは——

ラウルはガイドを見た。彼の判断が肝心だ。

思い返せばガイドの矢が、どれほどの確に蛇怪を捉えたか。

あの技を以てしてもまだ倒し切れなかったことに脅威と感嘆を覚える。

やはりここで、倒しておかなくてはならないと、その思いが強くなる。

「それはそう思うが——」

ガイドは肩に背負っている矢筒を振ってみせた。

「悪いがもう矢が無い」

束の間の沈黙の後、ガイド以外の全員が驚きのあまり一斉にのけ

反った。

「え!?!」

「うそ!」

「何と——」

長い尾を懸命に動かし、蛇怪は地を這い進んだ。

尾は先から三分の一ほどを断たれ、腕を五本失い、喉や胸、あちこちに受けた矢傷からも血が流れている。そして最後の風の刃が、全身に無数の傷を刻んでいた。

——逃げなくては

——遠くへ

——あの岩場には今は戻れない

——どこかに潜んで傷を癒やし

——いや、その前に、何でもいい、餌を捉えてその血肉を啜るのだ

——回復を

這い進み、周囲に獲物がいないか意識を巡らせ、視線を巡らせる。

その目が一点に止まった。

霧の奥に——血と肉の熱を感じたのだ。

土を踏む足音。

——人

渴望が膨らんだ。

血を。

痛む軀を堪え、片方残った眼にぎらつく光を宿して静かに、静かに這い寄る。獲物はただ一人、霧の立ち込める森を歩いている。仲間からはぐれ道に迷ったのか。

霧が、薄くなり始めた。

風が吹いている。

やがて蛇怪は、霧の中に一つの姿を捉えた。

やはり人だ。

人間の、女——

美味そうな。

吊り上がりかけた口の端が、どうした訳か、そのまま凍るように歪んで固まった。

蛇怪の耳を、澄んだ声が捉える。

「おや——おや、おや」

鈴を振る音に似て、柔らかく。

刃のような。

先端を細く象かたどった瀟洒な銀糸の靴が、土に落ちた枯葉を踏んだ。

「このようなところに、血塗れで——」

長い銀髪をゆるく結い上げた、美しい女だ。ラウルの鍛冶小屋に現れた。

ただそれは、つい二刻ほど前のことのはずだった。

この山中に、この短時間で、どのような技であれば辿り着くのか。

結い上げた絹糸の如き銀髪は、光の加減によって艶やかな青を帯びて見える。

同じく銀の瞳が、地に伏せた蛇怪を捉えて微笑む。

「喰ってくれと言わんばかりじゃないか」

蛇怪は怯えきり、裂けた軀で後退ろうとした。

だが痛みや出血のせいだけではなく、深い恐怖に身が強張り、いくらも退がれない。

「安心おし。お前を喰らおうという訳じゃない。そう——」
女は長い薄布の裾を引き、怯える蛇怪の前にしゃがんだ。

「ちよつとばかり面白いものをね、借りてきたんだよ」
柔らかに微笑む。

その手に握られているのは、たおやかなこの女とは全くかけ離れた印象の、女の身長を優に超える巨大で、幅広で、分厚い剣だった。

それはラウルが打った大剣、シュディアールだ。

「私はねえ、この山のケダモノどもを、ここらで一旦煤払いしておこうかと思つてねえ」

憂いを帯びて首を傾げる。

流れる声は幼な子に話しかける響き。

「何故つて？ まあお前には直接関係はないんだがね。いや、無いことはないか——」

銀色の瞳が細く、細くなる。

「ともあれ私も、腹に据えかねているからねえ」

女は立ち上がり、片手で剣を頭上へと持ち上げる。

セレスティでさえ持ち上げることの叶わなかった、鉄塊の如き剣。

女はその鉄の塊を、蹲り怯える蛇怪へ、鞭でも打つかのように軽々と振り下ろした。

矢が無い。

それでも追おうと、ラウル達はそう決めた。

ガイドの矢がもう無いことは衝撃的だったが、ヴィルリアがまだ法术を使えることと、リズリアの治癒のお陰でセレスティとレインルドの負傷がほとんど癒えていることと。

何よりヴィルリアが行くことを強く主張したのだ。

「もしリズちゃんが攫われたら——僕はその感情に、耐えられません」

今追わなかったら、他の人が同じ想いをするかもしれないから、と、もう一度、凜として繰り返した。

（ヴィルリアは怖がりだし、引つ込み思案だけど、でも自分以外の人ために強いんだな）

自分が兄になったように誇らしい。

弟のエリックとまだ十歳のアデラードを想い出す。

何も言わないで出てきたから心配はさせていないと思うが、そろそろラウルの小屋を訪ねてくる頃合いだ。

ついさつき死ぬかと思つた時は、家族の顔が走馬灯のように浮かんだ。

（必ず帰らなくちゃ。この子達も無事に。それからガイドさんも、セレスティも、レイも）

オルビーイスを——この小さく勇敢な竜を、親元に返して。肩に乗ったオルビーイスへ向けかけた視線を戻す。

ラウルは再び樹々に尋ねながら慎重に進んだ。

とは言え尋ねるまでもなく、蛇体が這った血の跡を地面に見ることが出来る。

(弱ってる。今度は倒せる)

霧が、そこだけ避けるように薄くなっていた。

蛇怪の痕跡を追っていたラウル達は、視線の先に気付いて足を止めた。

「いた——」

蹲る蛇の黒黒とした影。

手にした剣を構え、ラウルは慎重に一步、踏み出した。

「待て」

ガイドが制止する。

同時に気がついた。

蹲る蛇怪の前に誰か立っている。霧が身を取り巻いている。

女だ。

蛇怪の仲間かと思わず身を固くしたラウル達の目の前で、女は右手に挿んだ大剣を軽々と持ち上げ、振り下ろした。余りに自然で、何事もない仕草で。

蛇怪が蹲ったまま、脳天から縦に断たれる。

跳ねた尾がすぐに力を失い、蛇怪の身体は真っ二つに分かれ、血を撒き散らしながら地面に崩れた。

「な——」

今、何が起きたのか。

目にしたことが咄嗟には理解し難く、呆然としたままその動作を見つめていたラウルは、女の手に行っている大剣に気付いて目を見開いた。

(え——)

鉄の塊のようなそれ。

(あんなものを、持ち上げ——)

ラウルは更に目を剥いた。

「えっ、あれ」

「シュディアール！」

セレスティの反応が早かった。

剣を鞘に納めたかと思うと女へと駆け寄る。

女はいきなり駆け寄ってきたセレスティにも少し離れたところにいるラウル達にも、驚いた様子がない。

「失礼ながら——貴殿がお持ちのその剣は、ラウル殿が打った、シュディアールではありませんか」

「ずいと踏み込んだセレスティへ女が首を傾げる。

「剣に名前があるのかい？ 知らなかったねえ。ただ彼が打ったという剣には違いない。ちよいと使わせてもらってるよ」

「勝手に持ち出して、怒ってるかい？」

「い、いえ——」

怒るも何も。

いや、怒るといふ段階ではなく。

いやいや、何で剣を打った『ラウル』が自分だとわかったのか。

(……あ、怪しすぎる……)
怪しさ満載だ。

こんな山の中に、宮廷にでもいるような場違い感ありありの衣装を纏い、片手で軽々と、セレスティさえ持ち上げられなかったシュディアルを操る。

絶対人間じゃない。

と、見交わしたラウル達六人の目は、互いに同じ心の声があるのを確認した。

(怪しいー)

「いえーええと」

ラウルは一つ、咳払いして女を改めて観察した。

銀髪、銀の瞳が美しい。よく見れば瞳に青い虹彩が踊っている。

上品でたおやかな女性だ。

見れば見るほど——怪しい。

「ラウル、知り合いなの？」

「ううん」

リズリーアの問いに首を振る。

「ああ、違うよ。会ったことはないよねえ」

女は平然と言つてのける。

(怪しいー)

(怪しいー)

(怪しいー)

心の大合唱が止まらない。

「まあそう、紹介されたのさ」

「ボ、ボードガード親方から？」

「おい、そこは名前を出さず誰からと聞き返せよ」
グイドに突っ込まれる。

「あつ」

迂闊だった。

「そう、そのボートカアトさ」

女は柔らかく微笑んだ。

女の微笑みには蛇怪のような悍ましさは欠片も無く、ほんなりと美しく——

だが、恐い。

どこがどうとは上手く言えないが。

ともかく、女が適当過ぎてグイドも突っ込む気を失ったようだ。

「オルー、待って、危ないよ」

リズリーアがラウルの横から手を伸ばす。

何事かと振り返れば、オルビーイスはふわふわと女に近寄るところだった。

「オル……」

オルビーイスは女の肩に、ストンと降りた。

(えつ)

これには、心底驚いた。

ラウル以外誰の肩にも——いや、食事を用意するセレスティは別

だが——降らないオルビーイスが。

オルビーイスは女の顔を不思議そうに覗き込み、女は瞳を細めて微笑み返した。

「可愛らしいねえ」

すぐに女の肩から離れ、オルビーイスはラウルの肩に降りた。

ラウルに甘えるように首を擦りつける。

「ええと」

何だろう。

オルビーイスが竜だと、そんな説明をわざわざこの女にする必要はないと思うし女を警戒すべきだが、別の意味で『必要ない』と、そんなふうに見える。

何故だか——これも上手く言えないが。

「あ、あの、色々後回しになってましたが」

ラウルはまとまり切らない状況をまとめようと、女へと改めて向かい合った。

「その、蛇怪——を、倒して、いただき、ありがとうございます」

「ところでねえ」

何故か女は立ち去らず、ラウル達の間にも始めからこの一行にいたかのように立っている。

ガイドが鋭い目でジロリと睨んだが、気にする様子はない。

「この先、助け手が必要だよねえ？ 違うかい？」

微笑みは柔らかく、圧がある。

「え——いや、まあ、それはそうですが」

この蛇怪一つ取っても、ラウル達には命懸けの戦いになった。

きりふり山が危険な場所だと理解していたつもりだったが、これほど恐ろしい魔物がいるとは思ってはいなかった。

霧も抜けていない中腹でこれだ。山頂を目指して登っていけば、この先にどんな恐ろしい魔物が待ち構えていることか、想像もつかない。

「おい、ラウル。こんな怪しい奴の話聞くのか」

レイノルドが声を尖らせる。

「いきなり現れて、怪しすぎるだろう」

いきなり現れたのは君もただけだね、と、ラウルは思ったが口に出すのはやめておいた。

「私も一緒に行きたいんだけどねえ」

「却下だな」

ガイドがにべもなく言い切る。

「えー、この人強そうだし、綺麗だし、あたしは嬉しいけど」
リズリーアの言葉に女はたおやかな身体を揺らし、両手を合わせた。

「嬉しい言葉だ、可愛いお嬢さん。何、あの蛇怪程度、幾らでも喰らってあげるよ。腹ごなしにもならないけどねえ」

あれ、これはどこまで比喻だろうな？ と、ラウルは思ったが口に出すのはやめておいた。

「ラウル」

ガイドは女をまるきり無視してラウルへと向き直った。

「改めて言うておくことがある。矢が無いのは問題だ」

「——はい」

蛇怪を追うことまでは、ガイドも賛成してくれた。

けれどこの先を考えれば、状況は更に困難さを増すのは確実だ。

ガイドは蛇怪を追っている時に、蛇怪が霧の中から出ないように動いていると指摘した。

上へ——山頂の方へは向かわず。

だから霧から出た、もつと高い場所には、蛇怪すら恐れる何かがいるのだろうか。

（それが、オルビーイスの親なら）

それならばいいが。

（いや——いいか？）

オルビーイスの親だとしても、ラウル達を暖かく迎えてくれるとは限らない。

（でも、それは最初からだし）

けれど、ヴィルリーアが蛇怪に攫われて、その脅威を身をもって知った。

ラウルの考えは甘かった。

現実、実情を目の当たりにした中で——、最も頼るガイドの矢がない。

「矢が無ければお前達の護衛はできない。急所を狙って仕留められるならともかく、今回のアレじゃ自信をなくすぜ」

ガイドは頬の傷を歪め、肩をすくめた。

「残る有効な手段は毒くらいだが、混戦になると使いたくねえし、そもそも矢が無いとな。さすがにこの状況（・）では、引き返すべきと思うが」

ガイドもそう言うて、ラウルと、そして他の顔ぶれに投げかけるように視線を向けた。

「——ガイド殿の言うとおりですね」

セレスティの言葉を、女の笑み含みの声が遮った。

「おや、これはお前の矢だろうか？」

「——えっ」

まさか、矢を拾ってくれたとか——

と、ちよつと抜けたことを考えたラウルは、女の様子に目を瞬かせた。

女は片手を伸ばして手のひらを下に向け、そこにある見えないものをなぞるように、左から右へと水平に動かした。

ばらり、と。

数本の矢が地面へ落ちた。

場が静まる。

ラウルはぼかんと口を開けた。

「——え。矢？」

落ちた矢は七本。

何もない空間から溢（こぼ）れたようにしか見えなかった。

「うそ。何で何で？ 空間転位??」

「そ、創造、えと、物質創造とか……」

「そんなことできるのか。法術士か？」

「ガイド殿、これは」

ガイドは黙って片膝をつき矢を一本一本調べていたが、そう長い間では無く、一本を手に取ると女へと突き出した。

「いいや。俺の矢じゃない」

微笑みが返る。

「お前のだよ」

「確かに見た目は俺の矢と瓜二つだが、そもそもあんな風に空中から落ちてくるはずがない。怪し過ぎだ」

女はどこ吹く風で、さらりと笑った。

「お前が一番に手に取った。もうお前のものだ」

ガイドが一步、足を退く。

「クソヤバいこと言うな。恐れ」

笑ってやがるのも恐れ、と続ける。

「いらん」

女は美しい瞳で、じいっとガイドを見つめた。

「壊れず、曲がらず、矢尻も欠けない」

「そんな矢普通になえだろ。ますます俺のと違うな」

この話は終わりだと、ガイドは背を向け女の前を離れかけた。

「ラウル。とにかく今回、これ以上は進めないと、判断すべき」

「——」

「戻ってくる」

「あ？」

視線だけが女へ戻る。

陰の強いその目にも、女は握手でも求められたかのようににこやかだ。

「戻ってくるよ、その矢は」

と言った。

「——」

射れば矢は当然、失われていく。

かといって百本もの矢を担いで歩くわけにもいかない。

それが狩人にとって、一番の悩みどころだっただろう。

現時点でも。

「——」

ガイドは地面に放置したままの矢へ、視線を落とした。

「必ずお前の元に、お前が欲する限り戻る」

「——」

くるりと向きを変え、ガイドは矢の前に片膝を落とすと、七本まとめて丁寧に揃え立ち上がった。

「無駄にしちや悪い、有難く頂こう」

「ええ」

ラウルは思わず間の抜けた声を洩らした。

「さて、共に行くこと決まったことだし、互いに信頼関係を作るためにも名乗らなくてはねえ」

「どうあっても胡散臭いがな」

とガイドは変わらずにべもない。

女の言葉通り、共に行くことになった。その理由としてはガイドに矢が——すこぶる怪しいが——戻ったことと、それから女が手にしている大^{シユディアル}剣が、ラウルが触れても何も言わず、ヴァースも

『いいんじゃないの』と言っただけだったこと。

(いいのかなあ)

と思いはしたが、先ほど蛇怪をやすやすと断ってみせたことから、強力な助っ人には違いない。

何よりオルビーイスが。

ラウルはオルビーイスを見た。もうラウルの肩に戻っている。可愛い。

ではなく、オルビーイスは不思議そうに何度も女を見るのだが、警戒する様子はみせなかった。

「私は、ゲネロースウルムという」

聞きなれない響きの名に、レイノルドが眉を寄せそうになるのを堪えた、のをラウルはすっかり見た。

「失礼ながら——どちらのご出身か」

「この辺りではあるよ」

「この辺りというと」

女は鈴を振るように笑った。

「初対面の女をそう詮索するものじゃない。お前さん達の作法にはないだろう？ ついでに年齢も聞かないどくれ」

(怪しいー)

ラウルの目は思わず細くなったが、オルビーイスの顔が頬に触れ、そのまま笑みの形に変わった。

無邪気に顔を擦り付けてくる。ガイドの煙の匂いが消えたからだろうか。満足そうだ。

(可愛いー)

「可愛いねえ」

気づけば女が目の前にいた。首を伸ばし、オルビーイスを覗き込んでいる。ふわりと芳しい香りがラウルの鼻先を漂った。

「いい子だ。さすがは」

「おい」

レイノルドがラウルをぐいと押し退ける。ラウルはととつと四、五歩、よろめいて退がった。

「余り俺たちに近づくな。まだ完全に貴女を信頼した訳では無いのだからな」

押し退けるなら近寄ってきた相手を押し除けて欲しいな。

まあ、相手は女性だしな。

うん。

でも力加減はもう少しして欲しいな。

「すまないね。気をつけるよ」

微笑んで頷き、女——ゲネロースウルムは右手を軽く持ち上げた。

「優美な指先で差したのは霧の先——上方だ。山頂の方向。」

「さて、では行こうじゃないか。あと半日も登れば、山頂に着く。距離だけの話だがね」

「いいや。そろそろ日が暮れる。まずはここで休息がてら、野営する」

「そうかい？」

ガイドはちらりと女を見て、それからリズリーアとヴィルリーアに視線を向けた。

「霧から出た先の状況が分からない。休める場所があるかどうかもな。ここで一晩明かして、明日、山頂まで登りきる」

「さんせーい！」

リズリーアが明るく答え、ヴィルリーアをぎゅっと抱きしめた。

「すっかり食べてすっかり寝て、回復しなくちゃね、ヴィリ。あつ、まだ言っただけさっさつきの風切り、すごく良かったっ」

「ほ、ほ、ほんと……？ 僕、ちゃんと法術、使えてた……？」

「カッコよかったよ、さすがヴィリ！」

格好良かった、という言葉に、ヴィルリーアは嬉しそうな表情を面に広げた。

でも、とリズリーアが額を合わせる。

「あたしを守ろうとして、自分が犠牲になるとか、絶対にダメだから」

「え、ええと、でも、リズちゃんも……」

「ダメだからっ」

リズリーアはちよつと思ひ直したのか、額をつけたままヴィルリーアの瞳を覗き込んだ。

「あたしも、気をつけるから」

「うん」

「死んじゃうかと思ったんだから」

「——うん。ごめんねリズちゃん」

リズリーアの真っ直ぐな黒髪が、そろえた耳の辺りで横に揺れる。

手を伸ばし、ヴィルリーアの柔らかな同じ色の髪を撫ぜた。

「助けてくれて、ありがとう、ヴィリ」

ラウルは二人の姿を見て、改めて——肺の息を出し切るように、大きく息を吐いた。

二人が無事で、本当に良かった。

（明日で——）

明日で、役割を果たせるように、しっかりと心に誓う。

安堵と激しい戦いの疲労から、その日の野営では、自分の番が回ってきたときにゆすられてもなかなか起きられなくて苦勞した。

何とか眠い目を見開き、夜番の二番目を請け負ったラウルは、傍らに丸まって眠るオルビーイスの首の付け根辺りを、何度もそつと撫でた。

（可愛いなあ。お別れは淋しいなあ）

昼は懸命にヴィルリーアやラウルを助けてくれた。それが嬉しく、何よりオルビーイスに怪我一つなかったことにほつとした。

(竜の息も吐けるなんて、本当にオルビーイスはすごい)
とても誇らしい。

へへへ、とやや不気味な笑いを洩らす。

(将来大物になるよね、絶対)

枯れ枝を踏む足音に顔を上げる。

女——ゲネロースウルムが、樹々の間へ入っていかうとしているところだった。

「え、えっちよつと、どこに」

腰を浮かせたラウルを制するように、女は手のひらをラウルへ向けた。

「魔獣が一匹、近くに来ている」

「えっ」

ガイド達を起こさなくては——

「喰ってくる」

「えっ」

女は美しい面にたおやかな笑みを浮かべた。

「腹ごしらえと、まあお前さんたちの警護代わりさ」

さらりと。

「はい——はい？」

首が直角くらいに曲がった。

え？

この人もう、人外を隠す気が全くないのでは？

「すぐ戻るよ。気にしなくていい」

ええ——

呆気にとられている間に、女は霧の闇の中に踏み込んでいった。

銀糸の靴で枯葉を踏み、女はしばらく歩くと、足を止めた。一本の大木の前だ。

樹上を見上げる。

唇が笑みの形に吊り上がった。

「喰いに来た」

挨拶のようなその言葉は、ほとんど宣言に近い。

木の枝ががざりと揺れた。

見れば高い枝の上に、黒々とした大きな影があった。

剛毛に身を包んだ、一間(約3m)はある、巨大な猿だ。

赤く濁った三つ目と、剥きだされた牙。牙は上下に四本が虎に似

た鋭さを持ち、前歯もまた鋸に似て鋭い。長い腕は筋肉で満ち、爪

もまた、刃物の如き鋭さ。

赤い目を燃やし、巨猿は女の正面に飛び降りた。

咆哮を上げ女へ飛び掛かる。

「腹が膨れるほどじゃあないねえ」

女は飛び掛かる巨猿へ、細い腕を伸べた。

再び、上を見上げる。

今度は樹上ではなく、さらに先。

霧の向こうの——

山頂を。

唇に微笑みを浮かべる。

「ステイリア」

すぐにその面を戻すと、切り落とした頭を掴み、元来た樹々の間を野営地へと引き返した。

「ただいま」

声とともにラウルの少し先に黒い塊りが落ちる。

薪の明かりに照らされたそれを見て、ラウルは思わず魂切^{たまぎ}る悲鳴をあげそうになり、咄嗟に口を両手でふさいだ。

「ちよっ、なっ、なっ、何ですか——っ」
頭。

猿の頭だ。

昨日の朝、同じような光景を見たような気がしたが、この首はラウルの頭よりも大きかった。おそらくラウルの倍近い体長があるだろう。

三つ目をかっと思開き、剥きだした牙は長く鋭い。

「こっ、これっ、これ何!？」

「いや、私が仕事をした証拠にねえ。信用してもらうには必要だろ?」

不要!

不要!!

不要です——!!!

ラウルが口をぱくぱくとさせている間にも、女は傍らに座り、にこりと微笑んだ。

手が優し気にオルビースの首と背を撫でる。

その様子があまりに穏やかで、ラウルは何を言えbaikかわからないまま、口を何度も開け閉めしつつ、ガイドとの交代時間を迎えた。

翌朝。

目を覚ましてアレを見たりズリーアとヴィルリーアの悲鳴が、野営地から霧の中に響き渡った。

リズリーアとヴィルリーアの悲鳴二重奏で、きりふり山での三日目は始まった。

あの魔猿の首でもう一つギョツとしたのは、オルビーイスが嬉々として首にかじりつこうとしたことだ。

思わず止めてしまったが――

（本来オルビーイスの食性ってあそこらへんも含むんだろうし、止めなくても良かったかな。お腹空くもんね、食い尽くし系だもんね。食べたかったなら食べさせて――いやいや、お腹を壊しちゃうかもしれない）

オルビーイスには昨日途中で獲った兔で我慢してもらったが、大猿の首に未練があったのかきよろきよろし、その後は脚でやたらあちこちを搔いていた。

朝食を済ませた一行は霧が流れる道を、少しづつ登っていく。

「ああいうのホント、いいから！ 持ってこなくていいから！」

「そうかい？ 私が仕事したことが分かりやすいと思っただんけどねえ」

「分かりやすいとかいいから！」

リズリーアが懸命に抗議している。

ラウルも心から同意していた。

（やめてほしい）

心臓に悪いから。

「ははは」

先頭を歩くセレスティが朗らかに笑う。

顔が良いので爽やかさが二割り増しだ、が。

「そう言えば私の生家で飼っていた猫が、よく鼠や小鳥を取ってました。朝、起こされると枕元に置かれているんですよ。褒めろと、こう言うんですね。懐かしい」

「鼠じゃないし！ そもそも猫は可愛いし！」

「私は可愛くないかい？」

「ゲネ姉様は可愛いとかじゃ――」

リズリーアはふと口を閉ざして眉を寄せ、女をそっと見上げた。

「――えつともしかして、褒めて欲しいとか……？」

「リ、リズちゃん」

「おや、褒めてくれるのかい？ それは嬉しいねえ」

微笑みは一瞬、無邪気さを滲ませた。

「もう二、三匹、持ってくれば良かったかね」

「ぎやっ、不要だし！」

リズリーアは黒髪を力一杯振った。

「魔獣を退治してくれたのは嬉しいけどつ、ほんとにほんとにほんとに、持ってこなくていいからっ！」

「ところで」

改まり、セレスティはリズリーアに微笑んで、女に並んだ。

ラウルはセレスティの動きを目で追った。

（あー）

「ゲネロースウルム殿、一つ、お尋ねしてもよろしいでしょうか」

「構わないよ。私に答えられることならねえ」

「はい。そのお手元の」

と、セレスティは女が手にしている大剣を指差した。

(やっぱりー)

「貴方がラウルの工房の中から、その剣を選んだ理由を、お聞きしたいのです」

「ああ、この剣かい？」

ひよい、と危うげもなく、大剣をセレスティとの間に持ち上げる。

なお歩いている時は左手に、杖でも下げるように提げている。切先を後ろへ向ければ後続のラウル達が危険なので、刃は前に。

前に重心があると持ちにくいと思うのだが、気にしていなさそうだ。そもそもシュディアルの重量も。

「他の剣も悪くはないんだが、私には頼りなさ過ぎてね」と笑って言う。

「その点これはいい塩梅だ」

(いいんだー)

新鮮な評価だ。

自分の仕事を認めらるのほどこかくすぐったい。

(あれでいいんだー)

「撫で斬るにはもう少し重量が欲しいところだが」
(ええー)

もつと重くていいんだー

「ラウル。頭を人の基準に戻しとけ」

ガイドが後ろからボソリと突っ込む。

(はっ)

セレスティは頷いた。

「他の剣達も素晴らしい出来ですよ。このノウムも切れ味が他に類を見ません。しかし貴女がシュディアルを選ばれたお気持ち、よくわかります」

熱く語り始めた。

「大剣を自在に振るうことは剣を扱う者として、一度ならずと憧れを抱くものです」

そうなんだー

「大剣が空を切り裂き敵を撫で斬る様は、想像するだに心が踊ります。昨日の貴方の所作はまさに常日頃私が憧れていた姿でした。私もシュディアルを扱いたいと手にしましたが、まだ私には扱いきれず、己の未熟さをつくづく思い知らされた次第です」

未熟云々の問題だろうかー

「恥ずかしながら持ち上げることさえ叶わず……：しかしいずれは！私も心身を鍛え上げ、自らの力でシュディアルを扱ってみせるつもりです」

まだ諦めてなかったのですかー

ていうか貴方の目的は王の御前試合でしょー

「そうか。ではお前に私の腕をやるうかね？」
なるほど腕をー

……

——何て？

女はにこりと笑った。

腕を……

——つこつ

こツツわ！

えっ、腕つてもしかしてこの人切つてもまた生えてくる派とかなの？ 生えてくる派というより生えてくる属？

——いやこっわ！！！！

「だめだめ、何かだめ！」

リズリーアがセレスティの腕を引く。

「腕なんかもちやだめだからね！ セレスティ！ 絶対ダメだから！」

「そうかい？ セレスティの意志次第だがねえ」

「ダメなの！」

セレスティを庇うように前に出て、精一杯両腕を広げる。

そのリズリーアの前に出たのはヴィルリーアだ。両腕を広げた。

「ヴィリ」

オルビーイスが二人の真似をして、ラウルの顔の前で翼を広げ

る。「あ、ちよつと見えないからね、オル」と、ラウルはオルビーイスの翼の下に手を入れ、前に抱えた。

(あれ、なんか、感触)

ごわつとした。

「あ、あの、お気持ちは……でも、ぼ、僕も、そういうのは、ちよつと、良くないって、思……」

ヴィルリーアは大きな水色の瞳に涙を滲ませながらも、懸命に頭ひとつ高い位置にある女の顔を見上げている。

「そうかい」

気を悪くした様子もなく、三度そう言い

「じゃあ次はしないよ」

ゲネロースウルムは艶やかな笑みを零した。

「怖え」

ラウルの後ろでガイドが呟いた。

変化は唐突だった。

野営地を発って半刻ほど登り続けただろうか。

強い風が吹いた。

先頭を歩くセレスティが「おお」と声を上げる。

冷たい風だと、そう思った次の一歩目で、ラウルは目の前の景色が急速に変わって行くのを見た。

「霧が、晴れる——」

陽光を含みつつも白く視界を遮っていた霧が、風に吹き散らされ急速に薄れて行く。

この二日間、ラウル達を取り巻いていた霧が。

永遠に晴れることはないのでは無いかと思っていた、霧が——

風が肌に冷たい。霧の中は暖かかったのだと、そう思った。

霧に慣れ親しんでいた目に陽光が眩しい。キラキラと陽光に舞っているのは、何だろう。

それまで周囲を濃く取り囲んでいた樹々は、背後の霧に飲み込まれるように後退した。

左右、そして視線の先は山肌が剥き出しになり、大小様々な岩だけが転がり連なっている。

世界が一変したような。

「ここからが、中腹——」

麓に広がるくらがり森から、およそ七百間（約2100m）辺りで霧を抜けるだろうとガイドは言っていた。

ゆつくりとはあるが確実に、この高所まで登ってきたのだ。

ラウルの肩にいたオルビーイスがすうつと空へ、吸い込まれるように上がる。

「オルー……！」

一瞬、そのまま青い空に溶けていきそうに思え、ラウルは手を伸ばした。

すぐにオルビーイスはくると旋回し、ラウルの伸ばした腕に戻った。

その重み。

オルビーイスが肩に乗り、首を自分の背に巡らせてかりかり齧っている。

「痒いの？ 掻いてあげよう」

背中を掻いてやるとオルビーイスは気持ちよさそうだ。

リズリーアがオルビーイスの動きを追った瞳を空に残し、水色のそれを見開いた。

「ねえ、雪が空に舞ってる。降ってないのに」

「風花かざはなだな。積もった雪が風で吹き散らされてるんだ」

リズリーアはキラキラと光を舞わせている空から、横を抜けて歩くガイドへと顔を移した。

「風花——」

また瞳を空へ戻す。

「すぐくキレイ。ねえヴィリ」

「うん——」

見張った空色の瞳を見て、ガイドは軽く笑った。

「ここらは雪が溶けてるが、もう少し登りゃあ足元は雪で覆われている。山頂近くは凍ってるだろうな」

遥かな山頂を背に振り返る。

「さて、ここらで七百間だ、ラウル」

「七百間——」

ラウルは自分の目を輝いているのを感じた。

七百間。

歩いてなら半刻しかかからない距離だが、ここまで来るのが長かった。

「みんな——中腹まできた——霧を抜けたんだ」

色んなことがあったが、抜けてきた——

その実感が

「あと半分？」

リズリーアがちよつと情け無い声を上げ、ラウルは現実を引き戻され小さく呻いた。

「そ、そうだった……標高千四百間だっけ……」

山頂、ヴィルリーア曰く千三百七十三間（約4,120m）の、いまだ半ば過ぎでしかないのだ。

竜——きりふり山の主が住んでいると言われるのは山頂だ。

今は空が青く澄んで晴れ、目指すその山頂を目視でもくつきりと見ることができた。

ごつごつとした岩肌の斜面は、あと三百間（約300m）ほどは比較的緩やかで、その先は斧で薪を割ったかのように鋭く切り立って見える。

「うわあ。登れるかな……」

「行くしかないよねっ」

リズリーアが右手の杖をしゃらんと鳴らす。細い首筋に風に煽られた黒髪が舞う。左手はしっかりと、ヴィルリーアの右手を握っている。

ヴィルリーアもこくりと頷いた。

「行こう、リズちゃん」

ラウルは二人を眩しく眺め、それから一度、今抜けてきた背後へ視線を移した。

背後には誘うように霧が広がっている。その濃厚な乳白色。

戻れば飲み込まれて溶けてしまいそうに思えた。

肩によじ登ったオルビーイスの頬を指の背で撫でる。白い鱗は硬質でひんやりしている。

そう言えば、とラウルはオルビーイスを見つめた。

きりよせ川に卵のまままで浮かんでいたということは、オルビーイスはこの斜面を山頂の巣から卵で転がり落ちてきたのだろう。

（きつとすごい勢いで転がったから、目が回っただろうなあ）

オルビーイスは首の辺りをカリカリ搔いていて、のんびりした様子が微笑ましい。

「——」

いや。

こんな斜面をずつと転がり落ちたらいくら何でも殻が途中で砕けると思う。えらく硬かったとは言えラウルの鑿のみでラウルの力で割ることができたくらいだ。

（何かに卵ごと攫われて、運ばれたのかも）

そう思うと、必ず、オルビーイスを返そうと想いを新たにす。

「行きましょう。きつと今日で、山頂に届きます」

ゲネロースウルムは彼女自身が口にした通り、見事に一行を護衛した。

途中出現した一間半(約1.5m)もの巨大芋虫をシユデアールで一刀両断し、水場かと思った粘着的流動体を岩ごと削り取り、立ち上がれば一間はあろうかという大熊を断った。

巨大な食人花を断ち、岩猪——その名の通り、岩のような硬い表皮で覆われた猪だ——の群れを薙ぎ払った。

「お、多くないですか？」

魔獣。

『ここらまではな』

魔獣が現れる都度ビクビクハラハラしているラウルと対照的に、ヴァースはのんびりしたものだ。

まあ剣だし。

『しかしなかなかすげーな、あのお——す……』

ゲネロースウルムの銀の目がちらりとヴァースへ落ちる。

『うへえ怖い』

何となくヴァースが首をすくめた気がした。剣だが。

「……」

「ゲネ姉さまが全部倒してくれるからすっごい楽」

リズリーアは朝方の件すっかり忘れたのか、革靴の靴底でくるりと回った。六枚の布を合わせた膝丈の外套が風を含んで広がる。

巨大芋虫が出た時は卒倒せんばかりの悲鳴を上げたリズリーアは、あつさり排除してくれたゲネロースウルムにすっかり懐いている。

しかしリズリーアの愛称の選び方はどんなものだろう。

「うん、僕も……」

とても安心です、とヴィルリーアが言うと、セレスティが整った面をやや傾げた。

「私は少々、物足りないというか——いずれも剣の腕を磨くため、自ら戦いたかったのが本音です」

セレスティは来年の王都での御前試合を目指しているのだ。腕を上げるための今回の登山だ。

ラウルはリズリーアと同じ思いだし、何なら一緒に悲鳴を上げかけたのをリズリーアの悲鳴で誤魔化したのだが、セレスティとしてはそういう感想になるのも頷ける。

とは言えセレスティも昨日の戦いでそれなりの負傷をしたのだが、そこら辺は特に厭わないようだった。

「まあ役に立つじゃないか。連れて来て良かったな」

とレイノルドは相変わらずツンツンしている。

ゲネロースウルムが魔獣を倒すのを感じたように見ていたのに。素直じゃないなあ。

それから。

一番、不満そうなのは——

ラウルはグイドを見た。

「矢の使い所が無え」

ぼそりと呟いている。

(ですよね……)

新たに手に入れた矢を試してみたいのだろう。

弓を構える前にゲネロースウルムが全て薙ぎ払ってしまうので、まだ一度もあの(怪しい)矢を打っていないかった。

先頭を歩いていたゲネロースウルムはガイドへ首を巡らせ、微笑んだ。

「期待してくれているようで嬉しいねえ。なら次の獲物はお前に任せよう。何、こんな場所だ、機会はすぐに来るよ」

「そんなんじゃないよ」

ガイドは眉を顰めて見せたが、彼女の言葉は、すぐに現実になった。

「寝ちゃった」

オルビーイスはラウルの肩に降りたまま、首と尾を前と後ろに垂らし、すっかり眠っている。

「かわいいなあ」

「大丈夫か、それ」

ガイドが呆れた口調で目を細める。

「へへへ、大丈夫です。気持ちよさそうなので」

「野生に帰れるのか」

「た——」

多分。

いやきつと。

霧を抜けてから更に一刻、歩いただろうか。

とは言え斜面は色が灰色と黒か白のまだらばかりで遠目からはなだらかに見えたが、いざ近づいてみると容易に越えられない段差が少なくなかった。進むのも休み休みで距離が稼げない。

それでも、ラウル達一行は、目的地の山頂へ、ゆっくり、近づいていった。

やがて。

それまで道と言えるものは無い斜面が続いていたところに、背の高い岩が転がり始めた。

岩を縫って歩いているうちに、気付けば岩の間をくねって進む狭い道の中にラウル達はいた。

岩が一番高いところで二間ほどもあり、仰げば青い空が川のように見える。

「ええと、このまま進んで、大丈夫ですか」

そう口にしたものの、戻っても別の道があるかと言われれば、無さそうだと思う。岩の上によじ登るのなら話は別だが、それ以外はどうかやってもこの一本の道に導かれるような岩の作りだったからだ。

「剣が使いにくいのが難点ですね」

セレスティが首を巡らせ、手にしたノウムの剣先を左右に揺らしてみる。セレスティの腕が伸び切る前に剣先は岩の壁に遮られた。

レイノルドが手を伸ばし岩壁を軽く叩く。

「動きが制限されて厄介だな、剣には」

『ノウムなら岩ごと斬れるぜー』

「そうかもしれません。しかしそうになると、今度は岩が崩れてくるのが怖い」

そんな会話を交わしながらも、岩の間を四十間ほど進んだ頃、ヴィルリアアが「あつ」と、斜め上を指さした。

「あ、あれ……」

「どうしたの？」

ヴィルリアアが顔を寄せ、ヴィルリアアの指先を辿る。

「あ」

ヴィルリアアの眩きと同時にラウルも気がついた。空が眩しく視認し難いが、何か光るものがある。よく見ようと眉を寄せる。

一つではなく、点でもない。長く、岩の間を渡る――

「――あ、あれって」

「糸ですね」

セレスティの声に緊張が含まれた。

「蜘蛛の糸、でしょうか」

岩と岩とを伝い、銀色の糸が幾つも交差していた。

視線を奥に向ければ、交差の本数は無数に増え、岩の間の道に影を落とすほど重なり合っている。

「えっ、ヤダっ、クモ？ ヤダ無理」

ヴィルリアアは頬を強張らせて後退った。

「戻――」

「リズ、足元気をつけて」

ラウルはヴィルリアアを下がらせようと、狭い道を右に寄った。体が斜め倒れそうになり、手を伸ばして岩壁で支える。

ビィ……ン……

手のひらの下で何かが、振動した。

「あ」

まずい。

ラウルの手が触れて――押さえているのは、細い糸だ。

そう。

蜘蛛の糸。

蜘蛛の糸といってもこれは髪の毛二本ほどの太さがある。

「ごめん！」

慌てて離れた手が粘つく糸を引く。

「動くなラウル、この馬鹿！」

馬鹿とはひどいよレイノルド。

と、思ったが――

ビィィィ……ン

糸は明瞭にその振動を伝えた。

道の先を複層的に覆う糸へ、振動が伝わっていくのが、目に見える。

うん。

俺が悪い。

「ごめんなさい！」

声が終わる前に――

糸の檻の奥から、ラウルが生んだ振動以上の振動が返った。

ぞわりと。

何が来るかなど、もはや全くもって、火を見るよりも明らかだ。

蜘蛛――

「ひいひい」

リズリーアが消え入りそうな声を出し、ヴィルリーアが肩を抱えて支える。リズリーアの代わりに振動する巢の奥を睨んだ。

「リズちゃん、あんまり見ちゃダメ」

「ヴィ、ヴィリだって、く——クモ苦手」

「平気だよ」

ヴィルリーアは一つ、ゆっくりと息を吸い、ゆっくりと吐いた。

水色の瞳は連なる岩の道の、奥へ、据えられている。

「あ、あんな大きいと、なんて言うかも……」

「お、大きい?!」

「落ち着いてね。リズちゃんは目を閉じてて」

ラウルは肩から落ちないようにオルビーイスを咄嗟に押さえた。

一匹。

もうすぐ先の、糸の中にいる。その黒々とした影。

「——でかい」

レイノルドが唸る。

姿を現した蜘蛛は、脚を含めれば全長八尺(240cm)はあった。

まるまると膨らんだ腹は茶と黒と赤のまだら。刃のように鋭い顎

と、その上に連なる八つの赤い目。

ざわり。

ざわり。

ざわり。

糸が揺れ、振動し、その都度光る赤い目が増す。

はじめの数匹は数えられたが、蜘蛛の数はあつという間に十を超

えた。

「——こ、これは、ちょっと」

気配を感じて振り仰げば、左右の岩の上に黒々とした影が落ちて
いる。

背後の岩の上も。

空にも。

「すっかり、囲まれてしまいました」

セレスティがノウムを手をに囁く。

その言葉どおり、ラウル達はほんの僅かな時間で大蜘蛛の群れに

ぐるりと囲まれていた。

「双子を中に守れ」

ガイドの声にラウルは二人の右に立った。前にセレスティ、左に

レイノルド、後ろにガイド。自然と定着した陣形だ。

セレスティがノウムを斜め下に構える。

正面中央の一匹が、体をゆすった。

振動が張り巡らされた糸を伝っていく。

ビィィィ……ン

糸が揺れる。揺れる。

ビィィィン

揺れる。

ビィィィン

ひときわ——

(まずい)

大きく。

ビィィン

次の瞬間——

無数の蜘蛛は、一斉に糸を吐いた。

真っ白に、蜘蛛の群れを覆い隠すほどの厚い糸の層。頭上から膜を広げたように降り注いでくる。

セレスティが剣を振り上げかけ、その刃を細い手が止めた。

ゲネロースウルムだ。

「危な——素手で——」

途端に蒼白になったセレスティに頓着せず、ノウムを後ろ手で押しやり、ゲネロースウルムが前へ出る。

岩に狭められた頭上から降り注ぐ糸へ、シュディアールの一閃が走った。

切先が弧を描き、細い道を斜めに走る。

糸を絶たれ、蜘蛛の重い躯が岩壁を滑り落ちた。

「ぎゃー!!!」

リズリーアが悲鳴を上げた。

どすると、ゲネロースウルムはシュディアールを身体の正面に盾のごとく立てた。正面から近づく蜘蛛の動きが止まる。

「ここで試すといい」

女の赤い唇が微笑みながら言葉を綴る。

誰に言ったのか、ラウルは無意識に後ろを見た。

同時に視界を矢が疾る。

糸を失った蜘蛛の群れへ、ガイドが放った三本の矢が、空を切り裂き、貫き、突き立った。合わせて六匹。

「いいね——」

女が微笑む。

ラウルはガイドが不満げに眉を顰めたのを見た。

(ガイドさん——?)

ガイドは第二射を番^ぶえている。三本。右手の小指にもう一本を挟んでいる。

次に放たれた矢はこれまで通り正確な射線で、三匹の蜘蛛に突き立った。

そのまま貫く。

後方にいた一匹、その奥の一匹、更にもう二匹。

ラウルをはじめ全員が、矢の行方を目で追う。

合計六本の矢はそれぞれ四、五匹を貫くと、勢いを殺さないまま、方向を変えた。急上昇し、鋭利な放物線を描いて、ガイドの足元の岩場に突き立つ。

既にガイドは七本目を放ち、足元に戻っていた三本の矢を躊躇なく抜くと、流れるような動作で放った。

二度、それを繰り返した時には、岩場の上の蜘蛛はほとんどが倒れ伏し、僅かに残った数匹は姿を消していた。

時間にしてほんの数呼吸ほどでしかない。

あれだけいた蜘蛛が、ラウル達の至近に一匹も近づくことなく。

「何という——」

剣を振るう間もなかったセレスティが、抜くだけ抜いていたノウムを鞘に戻し、青い目を見張った。

「たった七本の矢で、三十近い相手を、全て」

矢が放たれ戻り、そして放たれる。

一瞬の停滞もない動きだった。

「素晴らしい威力です。それだけではなく、能力、というべきでしょうか」

「——確かにな」

ガイドは弓を握っていた左手を、何度か握り、開いた。

「ガイド殿の技術と、その矢。貴殿の名声がますます」

そこまで言っただけ首を傾げる。

「どうかされましたか。問題が」

「ガイドさん」

ガイドが眉を擡めたのを見ていたラウルもガイドへ近寄る。

「もしかして、弓が、矢についていけないのでは」

「さすがに鍛冶師の視点だ。見た通り矢に弓が負けてる。イチイ主体のを持ってくりや良かったな」

「幾つかあるんですか」

ラウルに頷く。

「もうちょい強度と弾力が上がる。今回は森で取り回しがききやすいのを持って来たんだが。いくら矢が戻っても、早い段階でこっちがイカれるかもしれねえ」

なかなか深刻な問題だ。

無限に射ることができる矢を手にしても、それを打ち出す弓が壊れてしまっただけは。

「ガイド殿の弓は我々の生命線ですからね……」

口元に手を当て唸るセレスティの背中から、ヴィルリアアが顔を覗かせる。

「あ、あの……」

両手に杖を握りしめ、おずおずとガイドを見た。

「僕、『鋼鉄』を習得してます」

「鋼鉄？」

ラウルがヴィルリアアへ首を傾けると、ヴィルリアアは頬を赤くして、首をすくめた。

「あの、ええと、鋼鉄というのは、その……」

「強化だよ。ね、ヴィリ」

リズリアアがヴィルリアアに並んで代わりに胸を張る。頭巾を深くに被り、周囲に転がっている蜘蛛の死骸は目に入れまいと首を不自然に逸らしている。

「ヴィリは武器とか鎧の強化ができるの。使えるってすごいんだよ。褒めて褒めて」

「すごいな、ヴィリは」

そう言うとりズリアアの方が嬉しそうな顔をした。

「でしよでしよ」

「素晴らしい。この剣がますます切れ味を増すと言うことですか。

ぜひその術をノウムに」

セレスティが瞳を輝かせ、レイノルドはやや言いにくそうに

「武器が心許なかった」

と言った。

そりゃあ後から来た君は軽装だもんね。何が目的かちゃんと把握しないでくるから。

「若いのに、ラウルよりもずっと役に立つな」

一言多いんだよ君は。

『ご主人の能力は偏ってるから』

君も一言多いよ。

「びい！」

あ、オルビーイス起きた。

「びいびい！」

ありがとう、オルビーイス。元気です。

ヴィルリーアによると武器強化の法術は、掛けてから半刻しか保たないらしい。

加えて一回の詠唱につき、対象になるのは一つの武器か鎧だけ。今のヴィルリーアでは、一日に最大五回しか使えない。五回は他の法術を使わなかった場合の回数だ。

「鋼鉄もいい術だが、お前さん達のどちらか、風は扱えないのかい？」

ゲネロースウルムはリズリーアとヴィルリーアへ、首を傾けた。

銀髪が今は陽光を含んで輝き、一層その姿を人とは違うものに見せている。

「風切り！ ヴイリが使えるよ」

リズリーアが得意そうに胸を張る。

ゲネロースウルムが双眸を細めた。

「それもいいが私のお勧めは、颯風くふうほどの風さ。一带全てを吹き払う」

「そ、それは、上位の術式です……僕には、まだまだ、ぜんぜん」

「これをあげるよ」

ラウルはまたゲネロースウルムが何も無いところから何かを取り出すのかと思ったが、取り出したのは長い袖の中からだった。

（え、いや、あそこも物が入るところじゃないのでは？）

細い巻物だ。

差し出されたそれをヴィルリーアはおずおずと受け取った。

「あの」

「颯風、或いは山嵐。好きに名付ければいいが、お前さんが使っておくれ」

「あ、ありがとうございます。きっと、もっと、この旅で経験を積んで——」

「なに、すぐに使えるさ」

そう言い、ゲネロースウルムは「え、えっ」と狼狽しているヴィルリーアに、にこりと微笑んだ。

ラウル達は狭い岩場をくねりながら進み、ようやくそこを抜けた。

魔獣との遭遇がなくなった。

一刻ほど前からだろうか。

兎や岩鼠といった小動物もだ。魔獣はいいが、食糧のためには小動物くらいは出てきて欲しいところなのに影も見ない。

高所まで上がってきたからかもしれない。自分達がいる位置を示す強く冷たい風だけが、石や岩が転がる斜面を吹き抜けた。

「二日かけて登ってきて——時間がかかりましたが、その分身体が慣れて助かっているのかもしれないね」

「そう思います」

ラウルはセレスティに頷いた。

「千四百間まで一気に登ったら、多分高山病ってやつになりますし。今は、標高——千間（約3000m）くらいまで行きましたかね」

「せいぜい八百間（約2400m）といったところだよ」

ゲネロースウルムがあっさり希望を打ち砕いて微笑む。

うう。

「ゲネロースウルムさん。もう少しお手柔らかに、希望を持たせてくれると」

ゲネ——言いくいなし。書きにくいしな。

リズムみたいにゲネ姉様で——

いや言いくいなし。

ゲネお姉様なら——

いっそお姉様——

「本当のことだからね。この辺りからもっと厳しさが増してくる」「そうは言ってもお姉様」

五つの視線が一斉に自分に突き刺さったのでラウルはこの呼称を使わないことにした。

『お姉様——』

繰り返さんでよろしい。

「びいびい」

オルビーイスが首を振っている。

オルビーイスにも呆れられてしまっただろうか。

あ、すりすりしてくれた。

「良かった」

両手で頭を何度もぐるぐると撫でている。

「かわいい」

「心の中がダダ漏れだね」

リズムリーアが嬉しそうだ。良かった。

「山頂がまだずっと先なのはわかりました。それで、ちょっと気になっっているのが、生物の気配がなくなってきたような」

「この辺りはね」

「もしかして、主の棲家に近付いているからとか——」

ガイドが言っていた、もっと恐ろしい存在。

「主は山頂だよ。彼女はそこに棲んでいる」

彼女——

さらりと口にしたその言葉をどう捉えればいいか。

（知り合いですか？）

ラウルは別のことを尋ねた。

「きりふり山の主は、この子の母親ですか？」

ゲネロースウルムは切れ長の美しい瞳で、ラウルの目を覗き込むように見つめた。

「そうだね。その子と同じ、白竜だ」

その瞳をオルビーイスへと向ける。

「断言しやがるな。何でそんなに詳しい。何でそんな簡単に俺達に教える」

グイドの低い声にも掴みどころのない微笑みが返る。

「知りたいから聞いたのだろう？」

人を食ったような、という表現はこう言う時に使うのだろうか、とラウルは思った。

(いや、何か人も喰いそうだけれども)

不快さがあるわけではない。

正直にいえば怖い。

ただ、ヴァースもオルビーイスも、特に警戒はしていない。

だからラウルは、導かれるままについて行ったのだ。

気付けば。

辺りを再び霧が覆い始めていた。

つい数呼吸前までは視界を遮るものなど、雲一つもなかったのに。

滑りやすい足元に気を取られがちだったこともあるが、六人はそれぞれ顔を上げ、驚いた声を出した。

「霧——？ いつの間に」

午前中まで抜けてきたような、濃密なそれとは違う。

肌に触れると細かな水滴を作る。

白い幕は風に乗る、するすると周囲を流れて行く。

「霧っていうより雲だな。流れが早い」

「雲？」

「えー。雲の中つてもっと、ふわふわしてるんだと思ってた」

「雲はとて小さい水の粒が集まったものなんだよ。だから雲があったら吹雪を呼ぶ法術とか、すごく楽になるみたい。リズちゃんの系統でも、『水創造』の原理で習ったと思うよ」

「な——習ったかもしれないし、習ってないかもしれないもんね」

「少し寄れ」

グイドが促す。

「午前中までとは違って道らしい道がない。うっかりするとはぐれる」

霧は濃くなり薄くなり、ラウル達を撫でて流れていく。

その中を、銀糸の服の裾を歩むことに柔らかくひるがえし、足を取られやすい小石を気にすることもなく、ゲネロースウルムだけが軽々と歩みを進めた。ラウル達は小石で時々脚を滑らせながら、といった具合だ。

斜面も角度を増していて、余計滑りやすく体力を削られる。

(早く、山頂についてほしいなあ……)

この山に入って何度そう思ったことか。

きりふり山の情報がほとんど無かったのもあるが、それにしても旅がこんなに長くかかるとは思わなかった。

もう一生分動いたかもしれない。

(と)いうことは、これ以上動くと一生分以上を超えてしまうわけだから、これ以上動いてはいけないのでは)

「ラウル」

ひいひいと、足元に集中していたラウルはセレスティの声によく顎を上げた。

セレスティが少し先の斜面を示している。

霧の中にぼんやりと、白い何かが落ちている。ようだ。

「何、でしょう」

近づいていくと、それが何かすぐに分かった。

「うわっ」

「骨ですね。犬くらいの大きさか」

「骨？ ひえ」

「あの、あそこにも……」

ヴィルリアが指差した先を見て、ラウルは思わず呻いた。

束の間薄くなった霧の中、斜面に同じく白い骨が、点々と転がっている。

「うわあ」

それは石塊いしくれしかなかった荒涼とした光景を、一層寒々しく仕立てていた。

「なんか、やだな。動物、全然いなかったのに」

リズリーアの声も小さい。

「喰われた跡がある。獣にか。おそらくこれ全部同じ系統の歯型だろう」

「ちよっと、怖いこと言わないでよ」

「事実だ。警戒しなきゃならん、誤魔化しても意味がない」

「そうだけどお」

(そうだけどお)

「ここを縄張りにしていた群れが喰われたか、ここまで引きずられてきて喰われたか——骨の種類がまちまちだから後者だな。随分と大喰らいだ」

「怖いこと言わないでよお」

(怖いこと言わないでよお)

ガイドの言葉どおり、骨には牙の跡が薄ら残り、そして種類は様々だということがラウルの目にもわかる。

肉は綺麗に食い尽くし、骨も時々砕かれ欠損していた。

「け、警戒しないとですね。ヴァース、近くに魔獣とかの気配は？」

『あるぞ』

「えっ」

えっ。

無い、と返るのを期待していた。

「えっ、ある？」

『あるぞー。まあでも近くないけどなー』

近くない、というのが安心していいのかわからない。

「近くないからと安心はできません。この辺りは早めに抜けた方がいいですね」

セレスティは周囲を見まわし、ガイドを見た。

「抜けるって言っても明確な道がある訳じゃないしな。とりあえず上を目指すしかない」

再び歩き出し、四半刻も経たないうちに、辺りは山羊の乳のような乳白色に染まっていた。

「雲って、こんな感じになるもの？」
濃すぎる。

ラウル達はかなり固まって歩いてきた。

先頭に行くゲネロースウルムの姿は白い世界に今にも溶けそうだ。

ここではぐれたら——

「方向は合ってるのか？」

ガイドの問いに、端的な言葉が返る。

「合っているよ」

その声は滲むように拡散し、霧が答えたかのように思えた。

遠くで雷鳴が響いた。

靴底が脆いものを踏み、がくと身体が落ちる。

「わっ」

骨だ。

動物の骨でも踏んでしまったことに申し訳なさを覚え、ラウルは

一度目を伏せた。

目を閉じたのはほんの一呼吸程度でさえなく——

ぱしんと、オルビーイスの尾が背中中で跳ねる。

「——え」

顔を上げたら周りには、誰もいなかった。

「え……」

誰もいない。

ぐるりと見回す。

霧が濃くまとわりついているせいか。

足音も声も聞こえない。

ここにいるのはラウルと、オルビーイス、ヴァースだけ。

「——グ、ガイドさん！ セレステイ！？」

息を止め耳を澄ませたが答えは無い。

「リズ、ヴィリー——」

辺りは真っ白で、いるのは自分一人。

「レイノルド！ おーい！ 聞こえたら返事してくれ！」

強い風が吹いた。

霧が重く動く。

雷鳴が遠く鳴る。

どこかで——、それは雷鳴よりももっと近い場所で、轟く音が聞こえた。

雷鳴は一度だけだったが、轟く音はずっと響いている。

（何だ？ 水の音——川？ いや）

滝。

いつの間に、とまた思う。先程までセレステイ達と歩いてきた時は、滝の音など聞こえていなかった。

どこかに滝があるのなら、立ち込める霧で辺りが確認しにくい分、うっかり滝壺に足を滑らせないように気をつけなくては。

(うう、みんなどこにいるんだろう)

フルゴルなら目印になって見つけてもらいやすい思ったが、レイノルドに貸していた。

(でも目眩しもできるし、レイが持つてるなら安心だ)

レイノルドが使えばその光で、彼等の位置が分かるかもしれない。分かるはず。

(使ってくれるといいけど)

自分一人が逸れたのだろうか。もしかしてみんなばらばらに？

探しているだろうか。

「——ええと、ゲネ」

『ご主人、前——』

ヴァースの声は低く、囁くほどだ。

こんな警告の仕方をする時は——

相手を刺激したくない時。

(近いん、だ)

ヴァースを引き抜く。

そっと、なるべく足音を立てないように膝をやや屈め、歩く。

肌を撫でるひんやりとした霧が不安を纏いつかせるようだ。早く合流したかった。

ゆらりと。

右前方に影が揺れた。

はっと顔を向ける。

人影。

「そこに、誰か——」

ラウルは駆け出し

『ご主人！』

鋭い声に、つんのめった。

「え」

ヴァースを見て、視線を正面へ戻す。

人影はもう、そこにいた。

いや、それは人影(・・)と、言えるかどうか——

顔はラウルの、三尺(約90cm)も上にあつた。ラウル自身六尺

(180cm) 近いから、九尺はある。

血走ったような目と、目が合った。

一本一本が針金に似た土色の毛が全身を厚く覆っている。

剥き出した牙が見え、次に生臭い息が鼻先へ漂った。低く湧き起

こるような唸り声。

オルビイスがラウルの肩に伏せる。

ラウルはオルビイスを遠ざけようと左肩を斜めに引いた。

「く、熊——」

それとも猿。

どちらともつかない。

ただ、全身に張り巡らされた筋肉は人間の鍛えられるそれを軽く凌駕し、腕の一振りでも容易く骨が砕かれると、そう思った。

唸り声。

獲物を狙い据えられたその双眼には、ラウルが理解できる光はない。

『ご主人——腹から顎へ、おれ様を思い切り切り上げたら——』

ヴァースが囁く。

ラウルはヴァースの柄を両手で握り締めた。

『逃げる！』

ヴァースが振動する。

指示通り振ろうとした、その時だ。

立ちほだかっていた魔獣の頭が、消えた。

「えっ」

ラウルはヴァースを握ったまま、二歩、後ろへよろめいた。

「何が——」

文字通り、首から上が丸まると消えている。

ラウルはまだヴァースを振ってもいない。

認識は瞬きの間だった。

頭のあった位置に、残った身体——首から、血が吹き出した。

霧を紅く染める。

ヴァースが大きな声で何か言っている。

もう一つの瞬きの間に、目の前の魔獣はぐらりと倒れた。

ラウルの方へ。

咄嗟に避けたラウルは、そのまま足をもつれさせて尻もちをついた。

すぐ横へ、魔獣の軀が倒れる。

手の甲に生暖かいものが当たり、ラウルは迫り上がる声を無理矢

理堪えた。

臓物——こぼれ出た内臓だ。

それから広がっていく血溜まり。

魔獣は背中を背骨ごと割られていた。

「何」

何が。

死んだはずの魔獣の身体がずると動く。

霧の奥の、何者かが魔獣の足を掴み、引き摺っているのだ。

ヴァースが叫んでいる。

『逃げる！』

蛇怪の時くらい必死だ。あの時以上に。

それはそうだ。

たった今、ラウルなどひと撫でて殺せそうな魔獣が、それこそひと撫でて、首を失い内臓を撒き散らした。

ならそれをしたのは、この魔獣以上のものではない。

『逃げる！』

「うん、に、逃げたいよ」

でも、腰が抜けててね？ ははは

『ご主人！』

右腕がぐんと振り上がる。肩が外れるかと思った。

振り上がったヴァースの刃、剣の側身が硬いものを捉える。その

まま固定された。

牙。

ずらりと並んだ牙が、剣身をがっちりと捕らえている。

女の顔。

背筋が凍る。

（蛇怪——?!）

違う。

だが違うとわかってても安堵などある訳がなく、眼にした異容に身体は一層強張った。

長く鱗の連なった首は同じだ。

その先の軀は、蛇ではなく獣。

書物で見たことのある、獅子という生き物に近い。

胸には人に似た二対の乳房、背に分厚い翼。

細く布を擦るような音に目を向ければ、長い尾の先端で、蛇の頭がしゅるしゅると舌を震わせているのが見えた。

「なん……」

何だ、これは。

ヴァースの柄を握る手が震えている。

人面獣の顎がヴァースの剣身を捕らえているせいで、腕を突き出したまま動けない。

そして動いたら、その瞬間に腕ごと頭を持っていかれると、そう思った。

先ほどの魔獣のように。

均衡を破ったのは。

肩に伏せていたオルビーイスが、身を細かに震わせたかと思う

と、飛び出した。

ラウルの肩に爪の痕が残る。

「オル……」

人面獣の首に喰りを上げて喰らいつく。

それはラウルが、初めて眼にする獰猛な姿だった。

ラウルの肩でくつろぎ、手のひらの感触に目を細める様とは全く異なる。

怒り――

オルビーイスの顎は人面獣の首よりもお頼りなく、だが鱗を貫いて突き立つ。

人面獣は啞えていたヴァースを放し、首を仰げ反らせた。

「ヴァ、ヴァ、ヴァースッ、無事か！？」

『何てことねー！ それより』

オルビーイスだ。

人面獣の太い前脚が振り上がる。振り回した長い爪が闇雲に空を割り、地面を穿った。

女の顔が苦悶に歪んでいる。

「オルー！」

ラウルはヴァースを構え、暴れる人面獣とオルビーイスの姿を忙しなく目で追った。

その都度ヴァースの切先を向けるが、踏み込みどころがわからない。

オルビーイスは我を忘れ、爪を突き立て喰り、喰らいついていく。

このままではいけないと、その考えが唐突にラウルを打った。

駄目だ。

「オルー！ 戻れ！」

オルビーイスはびっくりと反応し――

その瞬間、人面獣は激しく身をゆすった。

喰らい付いていたオルビーイスの牙が外れて放り出される。

駆け寄ろうとしたラウルの目の前で、振り下ろされた人面獣の爪が、オルビーイスの腹を、裂いた。

「オルー!!!」

全身の血が一気に下がった気がした。

オルビーイスは弾かれ、ラウルの右斜め前へ、霧の中に消える。負傷の状態もわからない。

「オルー！」

追いかけてようとしたラウルの前を人面獣が塞いだ。

咄嗟に飛び退き、ヴァースを構え、突っ込んだ。

「どけっ！」

『汝、打つもの覆うもの その身に鉄をまどえ

剣は山を砕き

弓矢は空を貫き

鎧と盾は竜の息を防げ』

詠唱と共に杖が鈴を鳴らす。

しゃん。

『鋼鉄』

三度目の詠唱がセレスティの鎧を彩り、全身が淡く光を帯びる。

年季の入った金板かいたの胴と腰当て、革の肩当てと籠手に長い編み

上げ靴。

強化の法術だ。

剣に用いれば剣を、鎧に用いれば鎧を、強化する。

「有難い」

「順番最後になって、すみません」

そう言うヴィルリアはガイドの弓、レイノルドの防具の強化と術式の連続詠唱を行い、肩を息で揺らしている。

その肩を一度ぐっと押さえ、ヴィルリアに微笑むとセレスティは躊躇なく駆け出した。

グイドの放った矢がセレスティの脇を抜け、正面にいた人面獣の額に突き立つ。

前脚を振り上げていた人面獣は巨体ごと、どうと地面に倒れた。既に二体目だ。

それを踏み越えて跳ぶ。

人面獣の背。

その向こうにレイノルド。『鋼鉄』が掛かっているながらも、もうその腕や肩に幾筋か血が滴り落ちている。

「左へ！」

レイノルドへと叫び、セレスティは振り返る人面獣の首へ、ノウムの刃を叩きつけた。

刃は人面獣の首から右脇へ、一刀に切り裂く。そのまま衝撃が、地面に深く亀裂を穿つ。

振り返ろうとした瞬間、背中に重い衝撃を受けた。魔獣の前脚が背を叩いたのだ。一瞬呼吸が止まり、息が詰まる。

「セレスティ！ そのまま！」

リズリーアの声、直後にリズリーアの放った光球がセレスティの背後で膨れ、拡散した。

目を焼かれ軋る声を上げる人面獣——四体目へ、セレスティは気合いを吐き剣を縦に擲い上げた。背中が鈍く痛みを訴えるのを無視する。

反対からレイノルドの剣が胴を薙ぐ。

十字に断たれ、人面獣の軀は斜面に倒れ、滑り落ちた。

肺に溜めた息を吐き出し、セレスティは辺りを見回した。

「これで、最後のようです」

霧の中から不意に現れた有翼の人面獣は、四体とも倒れて動かない。

「大丈夫ですか、レイノルド殿」

「問題ありません。貴殿は」

「背中を叩かれましたが、特には。ヴィルリーアの『鋼鉄』のお陰です」

肩を動かして見せて微笑み、すぐに表情を戻してセレスティは辺りを見回した。

「急いでラウルを探しましょう。同じように魔獣と遭遇していないかが心配です」

「ふらふらしているからだ」とレイノルドが悪態をついている。

セレスティはレイノルドの背を軽く叩いた。

「ヴァースもオルビーイスもいる、大丈夫ですよ」

「何が——」

「セレスティ、レイ、怪我の治癒」

駆け寄ったリズリーアにセレスティが首を振る。

「まだ大丈夫です、リズ。詠唱できる数は限られるのでしょ？」

「私のほうこそ、まだ大丈夫だけど」

でも治癒は一人につきあと二回くらいだ、とリズリーアは顎を引いた。

「そうだね、わかった」

「ラウルの状況がわかってから、効果的に使いましょ」

頷き、セレスティは霧の先を見た。

今の戦いとまるで無関係に、ゲネロースウルムが立っている。

「ゲネロースウルム殿。ラウルの居場所は分かりますか」

「ああ——」

細身の身体がまとう銀色の薄布がゆらりと揺れる。

「こっちだよ」

と、ゲネロースウルムは霧の中で薄く微笑んだ。

「オルビーイス！　オルビーイス！」

ラウルは血の滴る剣を右手に下げたまま、オルビーイスが飛ばされた方へと駆けた。

足元の小石が踏むごとに滑って走りにくい。

右肩が熱い。がむしゃらに人面獣の右前脚を断ち、だが左の爪で右肩を裂かれた。

ヴァースが動いて左の前脚を払い——

その後追ってくる気配はない。

「オルー！　どこだ!？」

魔獣の爪で腹を割かれたように見えた。

鼓動がラウルの身体の中で激しく鳴っている。

頭がくらくらした。

『ご主人』

「ヴァース、君はオルビーイスがどこに行ったか、分かるんじゃないか？　どこに」

『落ち着け』

握った手から直接響くような声が、^{たかぶ}昂っていたラウルの精神を

抑えた。

『ご主人、おれ様の言うとおりに進め』

何とか冷静さが戻る。

ヴァースの真剣な声には必ず理由があるのだ。

「う、うん——わかった、すまない」

『滝の音がするだろう。下手をしたら落ちるかもしれない』

「う、うん」

滝の音がまた耳に入るようになり、腹の底がスツと冷えた。

どれほどの高さかわからないが、音から想像する滝は、空から麓の地面へと落ちて行くようにすら思える。足を滑らせたらただでは済まないだろう。

湿った小石に足を取られて転びそうになりながらも進むラウルを導き、ヴァースの剣先が動いて方向を示す。

『もう少し先だ』

走る方向に滝があるのか、轟く音はもう、全身を包むまでになっている。

呼吸をすること、口の中に水を感じるようになってきた。

『まっすぐ——ちよい右。あと一歩』

もう一度、オルビーイスの名を叫ぼうとした時、ラウルはほんの少し先の地面の上に倒れている小さな竜の姿を捉えた。

「オルー！」

駆け寄り、膝をつく。

「オルー！」

ぐったりとしたオルビーイスを抱え上げ、ラウルは思わず短い叫びを上げた。

オルビーイスの白い艶やかな鱗が、胸から腹にかけて裂けていく。
頭が真っ白になった。

「オルー！ オルビーイス！ 大丈夫か!? オルー！」
何度呼びかけても目を開けない。

それがどう言うことか——

「まさか、まさか」

冷たい鱗の奥から、鼓動を感じない。

「まさか——オルビーイス！」

「ラウル?! ラウルか?!」

二つの光がラウルの目に映った。

駆ける足音。すぐに霧を払ってレイノルドが姿を現した。

「ラウル！」

右手の掲げた剣が光を放っている。

もう一つの光も、すぐにリズリーアの杖だとわかった。

「この馬鹿、ふらふらと——」

レイノルドは途中で言葉を飲み込み、ふいに狼狽えた。

「ど、ど、どう——どうしたんだ」

「えっ、どうしたのレイ」

リズリーアが駆け寄り狼狽えているレイノルドを見て、慌ててラウルを見た。

「ラウルがどうか——泣いてるっ」

リズリーアは涙を流しているラウルに驚き、それからその腕に抱えられたオルビーイスに気が付いた。

柔らかな輪郭の頬がさっと強張る。

「オルビーイス……? ヤダ、ラウル、まさか」

ラウルの横にしゃがみ込み、オルビーイスの背に手を触れた。
その手をぎゅっと握る。

「……っ 今、今治癒の法术をかけてあげるから！」

杖の鈴を鳴らし、リズリーアが早い詠唱を紡ぐ。

柔らかな光がぐったりとしたオルビーイスの身体を包む間も、そして光が白い軀に吸い込まれ消えてからも、ラウルはオルビーイスを庇うように抱き抱え、俯いていた。

リズリーアは二度、治癒の術式を唱え——

大きく、深く、溜めていた息を吐きだした。

「リズちゃん——」

「うそ。こんなのって……。私たち、何のために——」

ヴィルリーアが震えるリズリーアの肩を抱える。

「まさか。オルビーイスは竜です。小さくてもとても頑丈だ。そう

でしょう」

セレスティは俯くラウルの前に膝をついて覗き込み、その鱗に触れて——、口を嚙んだ。

ガイドは無言でその様子を見下ろしていたが、ふと、首を巡らせ後ろを振り返った。

そこに、ゲネロースウルムが立っている。

普段とまるで変わらさず——いや、どこか驚いたように、銀の双眸をほんの僅か、見開いている。

「おい」

ガイドの呼び掛けに、美しい瞳を上げる。

「お前がここに来た目的は、達成できるのか」

ゲネロースウルムは、ゆっくりと笑みを広げ、何か言葉を綴った。

「――」

それは周囲から沸き起こった幾つもの咆哮に掻き消された。

グイド、セステイ、レイノルドがさっと身構える。

リズリーアとヴィルリーアも杖を立て、背中合わせに立ち上がった。

ラウルはまだオルビーイスを抱えたまま、ただ虚ろに顔を上げた。

地面に置かれたままのヴァースが振動している。

『囲まれてる——ご主人』

周囲を包んでいた霧が、そこだけ後退したように薄くなった。

まず耳については水の轟き。

一行は、今自分達が立っている場所がどこかを理解した。

右側、ほんの間ほどしかないその先は、深い亀裂が穿たれたように落ちていた。

断層。絶壁。

光の届かないそこから、落ちて行く水の音が轟いている。

もうもうと湧き起こる水飛沫が霧を作り出していた。

それから。

『さすがに、まずそうだぜー』

ヴァースの言葉も、ラウルはまだ思考が漂ったまま聞いていた。

自分達を囲む、人面獣の群れ。

人の顔に灯る双眸は無機質でいて、獐猛さと獲物を裂き血肉を喰らうことへの舌なめずりを思わせる。

「抜け道はありません」

セステイが低く声を押し出す。

右側は絶壁、正面と左と後方とに、十数体の人面獣が囲んでいた。

一匹が一人、自分達を引き裂いても足りないな、と、ラウルはぼんやりと思った。

ここで終わり――

(でももう、オルビーイスも死んでしまった)

この旅は無意味になってしまった。

あとはせめて――

ラウルはオルビーイスの小さな軀を名残惜しく下ろし、ヴァースを掴むとふらふらと立ち上がった。

せめて。

「みんなは、俺が喰われている間に逃げてください」

「――はあ?！」

「何言ってる――」

「オルビーイスを、連れて帰ってほしい。食べるのが好きだから、たくさん美味しいものを供えてあげて」

ラウルは微笑み、レイノルドの手からフルゴルを引ったくり奪うと頭上に掲げた。

「ラウ」

「目を閉じて! ——フルゴル、光れ! 太陽よりも!」

煌々と、天頂の太陽の如くフルゴルが光る。そこにいる全てのものの影を黒々と霧の中に落とした。

人面獣が咆哮を上げ身を振る。

「ヴァース、フルゴル、俺に付き合って！」

ラウルは斜め左前を塞いでいた人面獣へ、ヴァースを振り翳して突っ込んだ。

まだ目が眩んでいる間に剣を振り下ろす。

前脚を断つ。

更に奥に突き進み、右にいた人面獣へ剣を薙ぐ。

フルゴルは煌々と光り続けている。

「こつちだ！ 俺を追って来い！」

倒しきれはしないが、それでもラウルに注意を引きつけ、そしてここから離れば目的は果たせる。

自分がセレスティを、ガイドを、リズリーアとヴィルリーアを、そしてレイノルドまでここに連れて来てしまったのだから、自分が責任を果たさなければ。

爪と牙が迫る。どれもまるで杭のように太く鋭い。

何とか躲したが、左肩と右上腕の肉が抉れた。

痛い。

でも。

喰らいつかれて引き倒される前に、少しでも。

フルゴルを掲げ、ヴァースを振るう。

少しでも。

何かがふくらはぎに喰いついた。

見れば蛇——人面獣の尾の先端にある蛇の頭だ。

くらりと目が回った。

足を踏ん張る。

彼等が逃げる時間を。

少しでも——

意識が、落ちる。

「ラウル！」

叩かれたように目を見開いた。

ラウルの目の前に立ったレイノルドの肩に、杭のように鋭い鉤爪が、突き立っている。

「ふざけるなこの、大馬鹿が！」

「——レ、レイ！」

爪が突き立ったままレイノルドの身体が引きずられ、空へと浮く。その向こうで翼を鳴らす人面の魔獣。

意識せず、ただ身体が動く。

ヴァースを握った腕が動き、剣はレイノルドを掴む脚を断った。

血飛沫が舞い、魔獣が空へ戻る。

ラウルは懸命に腕を伸ばし、落ちるレイノルドの身体を抱えた。

「レイ！ レ——」

「レイ！」

レイノルドの腕を掴み、そのまま斜面を転がる。レイノルドの身体を何とか、抱え込んだ。

岩に遮られ、強かに叩きつけられる。代わりに落下は止まった。

頭を起こそうとして虚しく、意識が遠のく。

「行きたくない……」

一晩ずっと、悩んで、悩んで、悩んで——
気持ちはやはり、“行きたくない”だった。
ただその一言だ。

(レイと決闘なんて、無理だ)

エーリックやアデラードと変わらない。実の兄弟のように育った。

乗馬だって教えたし、氷の上の滑り方も、雪合戦の効果的な投げ方も教えた。

剣だって最初はラウルが教えたのだ。ほんの少しの間だったが、息を切らしながらラウルを追いかけてくる姿が愛おしかった。

(最近かわいく無……いや)

決闘。

もう国内では廃れた風習だが、こうした端も端の街ではいまだに残っていた。

決闘で物事を決めるなど、悪しき風習だと思う。

怪我だけならばまだいいが、命を落とす事すらあるのだ。

そしてそれを、より美談とするのだ。

世間が。

『決闘を——明日、朝六刻に』

『ヴァルビリーの枯れ園で』

(レイを――)

劍の腕で敵うわけがない。

まともにやったら死んでしまう。

嫌だ。

レイノルドを、人殺しになんてしたくない。

窓の格子戸の隙間が、淡い光を滲ませる。

夜が明けようとしている。

約束の場所に、約束の時間に間に合うためには、もう館を出なくてはいけない。

馬が既に引き出されていた。

十一月の初め、太陽は昇りかけたばかりで、ラウルの立つ玄関先まで陽射しは届かない。風がなく、ただ空気は冷え切っていた。

腰に帯びた劍の鞘が布越しにも冷たい。

エーリックとアデラードの姿が無いことにほっとした。二人には決闘のことを絶対伝えないで欲しいと、家の者達に固く頼んだのだ。

ただ。

ラウルはそつと息を吸い、足を止めた。

「――母上」

母アンナが、引き出された馬の斜め前に身支度を整えた姿で立っている。

両手を前に揃え、背筋をぴんと張り、綻び一つないその姿で、まだ玄関階段の上にいるラウルを見上げている。

ただ一言――

「お父様の汚名を雪ぎなさい」

ラウルは返す言葉を――、飲み込み、階段を降りて母の前に立った。

父――彼女の夫が亡くなってから頬が目に見えて瘦け、生来のたおやかな印象にきつさを加えている。柔らかな栗色の髪も艶を失い、灰色の瞳は暗く沈んでいる。

柔らかく笑っていて欲しかった。

そんな言葉を言わせたくはなかった。

「――行ってきます」

それだけを口にして、ラウルは馬の手綱を掴んだ。

ヴァルビリーの庭園は、オーランド子爵家の館のあるロッソの街から馬で半刻ほど、農道や森の中の道を進んだ先にある。

ラウルの祖父である先代のオーランド子爵が整えた庭園で、かつては狩猟の時期に大勢が集まり、園遊会などが開かれた。

狩猟の時期以外は一般に開放されていて、周辺の領民にも親しまれている。

小さな丘を中心として、丘の上に東屋があり、植え込みや花壇の間を小川が流れ、広場に噴水がある。

春になれば花々が爛漫と咲き誇る庭園も、冬の入り口のこの時期は閑散としているはずだ。

憂鬱な思いを抱えたまま、ラウルは半分上の空で馬を進めた。ずっと考えているのは、この決闘をどうにか回避できないかということばかりだ。

レイノルドを説得できないか。

誰か、おそらく見届けに集まってくるだろう街の人々に止めてもらうとか。

急に大雨が降ってくれたら。
誰かがラウルを急ぎの要件で呼びにきてくれないだろうか。

何なら、自分が怪我をすれば。
ラウルは地面を見た。

ここで落馬して――
腕の一本でも折れば。

こんなゆるい速度では擦り傷程度で済んでしまう。
馬を思い切り走らせて――

手綱と鎧から、両手両足を浮かせる。

それだけ。

「よ――よし」

もう道は森の中に入っている。この森を抜けて少ししたら、ヴァルビリーの庭園だ。

辺りを見回す。道の前後には誰の姿も無い。
落馬の痛みを想像して鼓動が早く、息苦しくなったが、それで

も、今――
やらなければ。
着く前に。

「やるしか、ない」

手綱を握り、馬を走らせようとしたその時だ。
叫ぶ声が聞こえた。

「えっ」
森の中、今いる道の右手側からだ。

「助け――」
悲鳴に近い声。

ラウルは馬を降り、道から外れて森の中に踏み入った。
「どこですか！」

人影が樹々の間に動いた。掠れた声が返る。
「助けてくれ！ 罌に、足が取られて」

「今行きます！ 無理に動かないで！」
叫び返しラウルは馬の鞍から鞆を掴んで人影へと走った。

太い樹の根元に蹲っていたのは、三十歳を過ぎたくらいの小太りの男だ。樹を伐りに来たのだろうか、手斧が下草の上に落ちてい

る。

彼の足首を捉えているのは獣を捉えるための鉄製の罾だ。半円の鉄の輪を蝶番とバネで円形に広げて草むらに隠し、踏み込んだ獣の脚を内側に並んだ歯が噛むように捉える、虎鋏と呼ばれるものだった。

鉄の歯が男の足首に食い込んでいる。

呻く男のそばに膝をつき、手早く両手に布を巻きつけるとラウルは閉じた鉄の輪に手をかけた。

「動かないで——今外しますから」

バネが固いことを覚悟しつつ、ラウルは両手に力を込め——思わず身体が前のめりになって下草の上に右肩から倒れた。

「えっ」

バネが、軽すぎた。

思い切り力を込めたら軽すぎたせいで体勢を崩したのだ。

「え、何——」

驚いて起きあがろうとした時、首筋にヒヤリとしたものが当たった。

「動くなよ」

目を動かし、それが手斧の刃だと見て取る。

「な——」

「お前にはここにいてももらえてよ。そうだな、昼ぐらいまでか」

「誰だ……」

違う。

誰に。

問う間もなく、ラウルの後頭部を石のように硬いものが打った。痛み。

意識が遠のく。

何とか伸ばした指先が、男が腰に括っていた袋を掴んだ。硬質な何かに触れ合う音が袋の中で鳴る。

指先から、声が流れ込んだ。

——前金だ

——ラウルを、決闘前に

聞き覚えがある。

(セルゲイ、叔父上——)

意識は、そのまま灰色の闇に沈んだ。

目を覚ました時、ラウルは森の中に倒れていた。先ほどの大樹の下だ。

男の姿はなかった。

畏の跡もない。

馬は道の脇の木に繋がれ、のんびりと草を食^はんでいた。

陽は樹木のでっぺんから陽射しを落とし、正午辺りだとわかった。

ラウルは心から、ほっとした。

「ラウル――おいラウル！」

頬を叩かれて目が覚めた。

「なっ」

何が?!

頬がじんわり後から痛い。

「ラウル！」

もう一度振り下ろされる気配に、ラウルは咄嗟に首を捻って避けた。

目の前で拳が空を切る。

振り下ろしたのはレイノルドだ。体重こそかけていないものの、転がったラウルを跨いでいる。

「レイ――」

「チッ」

え。

今、舌打ちした?

「今、舌打ちした?」

「してない」

いやいやしたよね? しつかり聞こえたもんね?

何かすごい眉顰めてるしね?

「気付いて良かった。立て」

ラウルは首を起こし、呻いた。

ズキズキと身体のあちこちが痛む。
なぜ今この状況なのか、記憶をたぐった。
そう。

「決闘——」

「何だ？」

「俺、君と決闘を——？」

レイノルドも肩に怪我をしている。

「避けたつもりなのに——」

「その通りだ。知ってる」

「え」

レイノルドは手を伸ばし、ラウルの右肩を掴むとぐいと引いた。
痛い。

「だが今はそれどころじゃない。立て」

「え」

咆哮が響いた。

ほんの少し離れた場所。

混乱しかけた意識が、すぐに現実を取り戻す。

ここはきりふり山だ。

ラウルだけではなく、セレスティ、リズリーアとヴィルリーア、
ガイド、それからレイノルド。

ヴァース、フルゴル、ノウム。

「みんなは!?」

オルビーイスは。

飛び起き、走った痛みにもた顔を歪める。見れば左肩と右腕上腕
に深い傷を負っている。

確か足も尾の蛇に咬まれたはずだ。ズキズキと重苦しい痛みと熱
を感じるが、見たくないので確認はしなかった。

周囲は霧に包まれ、人面獣の姿は見えない。

さっきの場所をもっと上——ラウル達が滑り落ちてきた、斜面の
上だ。何かがぶつかるような物音と人の声。ガイドの声だとわか
る。

腹の底を震わせるような咆哮が響いた。

「戻らなきゃ。レイ、君は」

「問題ない」

そう言ったレイノルドも傷を負っている。右肩は服が三筋に裂
け、血が袖口から滴っていた。

「ごめ——」

半ばで口を引き結び、ラウルは立ち上がった。頭の上あたりにあ
ったヴァースを掴む。

フルゴルはと見れば、もうレイノルドが掴んでいた。

また咆哮。先ほどとは異なる位置から上がった。

「戻ろぞ」

踏み出したレイノルドが身体を傾がせ、ラウルは右肩を入れて支
えた。ずしりとかかった体重が、すぐ軽くなる。

「余計なことしないでいい」

言われたがラウルはもう一度、レイノルドの身体を支えた。

「君は無茶するから。小さい頃も無理に登った木から落っこちて怪
我したりして」

「兄貴面するな」

「前は素直で可愛かったのに、これも成長だねえ」

「聞いてんのか？」

数歩歩いた時、丸い光が前方の霧の中に灯った。

鈴が鳴る。

澄んだ、軽やかなその音。

もう一度。

しゃらん。

『——来れ、来れ、夜の帷とほりにその腕かいなを開くもの』

『眠りよ、彼のものをその腕いだに抱け』

杖の先端に揺れる鈴が、澄んだ、歌声を思わせる音色を揺らす。

『深ヒユブノースカウロき眠りをこころへ』

リズリーアは杖で頭上に円を描いた。

朝露が降り注ぐように、杖から振り撒かれた淡い光の粒が、リズリーア達を囲む人面獣の群れへ注ぐ。

朝露に香る花を思わせる芳しい風が流れる。

七頭いた人面獣は全て、その場に蹲るように倒れた。

両手で力一杯杖を握りしめていたリズリーアは、一呼吸置いて、そっと周囲を見まわした。

「——はああ」

全身の力を抜いて、その場にへたり込む。

「効いた——っ」

「リズちゃん、すごいよ」

興奮した様子で飛びつくヴィルリーアを受け止め、

「ヴィリの風切りがあつたから」

ぎゅうつと抱きしめて、リズリーアは視線を巡らせた。

ヴィルリーアが『風切り』を唱えて人面獣の足を止め、ガイドが二体、セレスティも一体、牽制に動いた。

それを利用してリズリーアは、長い呪言を唱えられたのだ。

「おじさん、セレスティ、怪我は」

「俺は無い」

「私も、幸いかすり傷程度で済んでいます」

ガイドは言った通り負傷はなく、矢も既に矢筒と手元に戻っている。セレスティはところどころ血を滲ませてはいるものの、目立つた負傷はなかった。

「良かった。ラウル達は」

斜面の方へ首を巡らせかけ、先に声がかかった。

「みんな——！」

霧を掻き分けるように、ラウルとレイノルドが斜面を登ってくるところだ。

「ラウル！ レイノルド！ 無事だった——じゃない、怪我！ 結構ひどい！」

リズリーアは駆け寄り、

「骨折は？ 無い？ 良かった座って！」

二人を座らせて治療の法术を素早く口ずさんだ。

暖かな光が二人を包む間も、ガイドがラウルの前に立った。厳しい目に見下ろされ、ラウルは治療を受けながらその場で姿勢を正した。

叱責は甘んじて受けなければ。

冷静になれば愚かな行為だと、つくづく恥ずかしい。

「ラウル——」

「待ってください、ガイド殿」

ガイドを左腕でやんわり制し、セレスティがラウルの前に立つ。

「ラウル」

セレスティの声も初めて聞くほど厳しい。

ラウルはセレスティの青い瞳を見上げた。

「貴方の先ほどの行為は決して褒められません。特に我々は、皆一人ひとりが同じ目的のもと、一人ひとりが意志を持って共に行動しているからこそ。貴方の行動はその私達を信用していないと、そう言われているように感じさせてしまう」

「そんなつもりはないです！」

ラウルは慌てて首を振った。

「絶対」

セレスティを、ガイドを、リズリーアとヴィルリーアを見つめ、ラウルは深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。みなさんを、侮辱することになってしまった」

「お前は視野が狭いんだ。昔から」

レイノルドへ返す言葉も無い。

「あたしは、ラウルはおバカだと思うし」

「リ、リズちゃん」

黒い法衣の頭巾はすっかり背中中落として愛らしい面を持ち上げ、リズリーアはほっそりした両手を腰に当てた。

「あたしもやっぱりちよつと怒ってるけど、でも、無事に戻ってきてくれたから、それでいいよ」

「僕も、し、心配、しました……っ」

頭巾の下で頬が赤く染まる。

「まあそういうことだ」

ガイドが呆れを含んで見下ろす。

「ごめ——」

ラウルは彼等の前に深々と頭を下げた。

「ありがとうございます」

「ラウル」

リズリーアが頭巾に入れていたオルビィスを抱き抱え、ラウルへと、そつと差し出した。

「オルビィスはラウルが連れて行ってあげなきゃ」

「——うん。そうだ」

オルビィスを抱き上げ、力を失ったその軀を抱きしめる。

「そうだね」

親許に帰してあげたかった。それが心残りだ。

「どうする、ラウル。お前とレイノルドの傷も完全に治ったとは言えないだろう」

問われ、ラウルはガイドを見上げ、それから白い鱗へと瞳を落とした。

動かないオルビーイスの鱗を撫でる。

セレスティが背に当てた手の、暖かさ。

布越しに伝わる温度に、彼等が生きていることを実感する。そのセレスティも傷を負っている。

顔を上げ、ラウルは六人へ、それぞれ視線を巡らせた。

「すぐに下山しましょう。もうこれ以上、危険なことではできません」

人面獣達が眠っている間に、ここを離れなければ。追って来れないところまで。

そう決めたらもう停滞してる暇はない。

ラウル達は、まずこの霧を抜けることを目指し、斜面を降り始めた。

道もなく方角は明確ではなかったが、登っている時は太陽が山の右側にあり近くに溪谷はなかった。

太陽を左に見ながら溪谷を背にするように進む。

滝の音が周囲に轟き、霧は中々薄くならず、手足に絡みつくように思える。一行は黙々と、つまづきやすい足元に注意を凝らしながら歩いた。

降り始めて四半刻ほどは経っただろうか。そんなに長く歩いてはいない。

(けど)

ラウルは——ラウルだけではなくおそらく全員が、焦りと不安を覚えていただろう。

霧は全く薄くならない。

そして、轟く滝の音は、すぐ背後にあるように響いている。

(進んでるのか、これ——)

同じ場所をぐるぐると歩いているような。

先頭に行くセレスティの歩調も、時折踏み出すのを迷うように乱れる。

「——あの、ガイドさん」

セレスティのすぐ後ろを歩くガイドの背へ、ラウルは恐る恐る声をかけた。

「俺達、降りてますかね……」

ガイドがびたりと立ち止まる。

「あつ、いや、貴方の案内に疑問があるとかではなくっ」

振り返ったガイドは、左腕をすつと上げた。

「ガイドさん？」

ガイドの険しい目がラウルを射竦める。

構えた弓——番えた一本の矢を。

「えっガイドさ」

いや、ラウルをではなく——

「俺達をここへ誘い込んだ、目的は何だ」

一番最後を歩いていたゲネロースウルムへ。

矢を向けられていることなど気にもせず、微笑んで立っている。

「誘い込んだ——？ 違うよ。これが効果的な道順だ。お前達の目的を果たす為のね。まあまだ、踏むべき手順があるのだが」

「命が対価の道順か。そもそも俺達の目的？ 違うな」

「ガイドさ」

「お前自身の目的の為だ」

そのままゲネロースウルムを射るかと思えたが、ガイドは矢筒から二本の矢を取り出し、最初の矢を番えたまま小指と人差し指の腹に挟むと、再び弓を持ち上げた。

ラウルの右手の下で、ヴァースが振動する。

「セレストイ、レイノルド、ラウル、剣を構えろ。まだ来る」

ゲネロースウルムは微笑んでいる。

ガイドは忌々しそうに視線を外し、双眸を細めた。

「ここは巢だ——」

降りようとしていた方向、霧の奥で、小石を踏む音が聞こえた。

足音。一つではない。

振り返る前に右側で。

左も。

それから、後方——

「囲まれています」

「きよ、強化を……」

『鋼鉄』を唱えようとしたヴィルリアをガイドが止める。

「あと何度も使えないだろう。攻撃系に徹してくれ」

ヴィルリアははっとして、頷いた。

「——は、はい」

「ヴィリ、あと幾つ」

ヴィルリアと背中合わせに立ち、リズリーアが尋ねる。

「た、多分、光の矢と、風切り、一回ずつくらい……」

少ない。

リズリーアは精一杯の笑みを広げ、両手を握った。

「じゅ、充分だよ！ あたしは治癒ならあと七回くらい使えるし、光球とか、障壁、あとまだ眠り寄せも使えるもん。ヴィリと合わせれば、充分戦えるよ」

音は霧の向こうから、次第に、確実に、近付いてくる。

ヴァースの柄の振動が、静まった。

『来るぞ、ご主人——』

次の瞬間、霧が一斉に咆哮を上げた。

咆哮はラウル達の周囲を壁の如く取り巻き、響いた。霧の中から影が躍り出る。大岩が転がり出たかのようなのだ。

ガイドが矢を放つ。呼吸を置かず四方へ五連続、五矢。

一の矢が正面の人面獣の右目に突き立った。

人面獣はよろめき——だがまだ動く。空気ごと押し突進し、前脚を振り下ろした。

セレスティが踏み出し、ノウムを下方から振り上げる。ノウムの刃が右の前脚を断ち、肘から先を失った脚が地面を叩く。

ノウムを肩口に構え更に踏み込んだセレスティは、人面獣へ横薙ぎを入れる直前で、左脚に弾かれた。

金板の銅鎧が音を立てて凹む。

人面獣が翼を震わせ飛ぶ。

セレスティの目の前にあるのは後脚の爪と、蛇の尾。

レイノルドの前には二頭、矢が胸と喉を貫いている。

フルゴルを縦に構え、「光れ」

告げて二頭へと突っ込んだ。フルゴルの光が背後に長い影を落とす。

レイノルドは二頭の間に踏み込み、右の二頭へ剣を斜めに斬り下ろした。左足で地面を蹴って反転し、もう一頭を斬り上げる。フルゴルの刃が左肩口の肉を裂く。

硬い感触は分厚い体毛と筋肉の鎧で覆われているからだとわかる。

刃を受けながらレイノルドに据えられた二頭の顔——男と女、それぞれの顔が笑った。

『フォス光よ エヴェロス矢となれ』

短い詠唱に続き、ヴィルリアアが空中に描いた法陣円が五本の光の矢を次々と射出する。

光の矢は白い軌跡を残しながら敵へと疾った。

五体の人面獣をそれぞれ捉え、三間もの距離を後方へ弾く。

「やったあ！」

リズリアアが跳ねる。

第一段階で習得する『光の矢』が生み出す矢は通常三本、だがヴィルリアアが生み出す矢は五本だ。

声を弾ませたリズリアアは背中に触れた重みに、さっと腕を伸ばした。よろめいたヴィルリアアの身体を両腕で支える。

「ヴィリ、大丈夫?!」

細い肩が抑えがちに、けれど大きく揺れている。

連続で法術を行使して、疲労が溜まっている。

それにもう、ヴィルリアアが使える法術は、おそらく今の光の矢を二回か、風切りを一回か。

「ヴィリ、休んで。今治癒を」

はっと顔を上げる。

たった今光の矢が撃った五頭を飲み込んだ霧の奥から、雷鳴に似た唸りと共に新たな個体がぬうっと現れる。三体。影はまだ続いている。

「っ」

リズリーアは杖を立てた。

自分に使える法術。

治癒光球浄化障壁眠り寄せ――

『障壁』を――」

唱えかけた唇をきゅつと結ぶ。

第一段階で覚える、初歩でありながら強固な結界術だが、物理攻撃を遮断できる一方、自らも同様でただそこに止まるしかない。

その上持続時間は今のリズリーアでは半刻にも満たない。

「ダメ、意味がない――」

腕の骨が折れるかと思うほどの衝撃があった。

ヴァースの刃が振り下ろされた魔獣の爪を捉え、ラウルの頭上で止めている。

鋭く長い鉤爪がすぐそこにある。

(鎌みたいだ)

それが三つ。

突っ張った腕が震える。

少しでも力を抜けば、身体が四つに裂かれるだろう。

「っ」

『ご主人、前に三步踏み込め』

前に？

「む……」

無理だ。

力を抜いた瞬間、死ぬ。

『いいから。おれ様にまかせろ。踏み込んで剣を背中に流せ、

今！』

畳み掛ける声に押され、ラウルは蹠踉めきながらどうにか踏み込んだ。

頭上で辛うじて均衡を保っていた剣が揺らぎ、落ちる鉤爪が自分の頭を割るのを覚悟する。

だが、そうなる前にヴァース剣は独りでに動き、鉤爪を滑らせ斜め後ろ

へ流した。

目の前に魔獣の腹部がある。

『左に回転！』

引っ張られかつ半ば強引に、ラウルは身を捻った。

鉤爪から外れた剣が、人面獣の腹へ流れ、裂く。

苦鳴の籠った咆哮が耳を突く。

闇雲に振り回される鉤爪をヴァースの剣身が流し、躲していく。

掻い潜って斬り裂く。

(すごい)

自分の身体ながら、もはや他人ごとのようだ。

気付けば人面獣はラウルの前の地面に倒れていた。
(すごい、ヴァース)

ヴァースがいればここを抜られるかもしれない。

(セレスティか、レイノルドに、ヴァースを)

もつと使い慣れた者が持てば

「セレスティ！ レイ！」

リズリーアの悲鳴に近い声に、ラウルは我に帰った。

途端に足がもつれ、ごつごつした地面に転がる。

「いつ」

とにかく飛び起き、剣を構え、辺りを見回す。

数頭の人面獣の間に、セレスティとレイノルドが見えた。

セレスティは蹲り、レイノルドは仰向けに倒れている。

意識があるのかどうか。

「えっ、え——」

血の気が急速に引いた。

二人は。

「ラウル！」

グイドの姿が見えた。

安堵しかけ、再び血を凍らせる。

グイドは弓を持っていない。手にしているのは短剣だ。

「グイドさん！」

まさか、弓が折れて——

「ラウル、無事で」

セレスティがどうにか立ち上がる。

ノウムを左手に構え、右手はだらりと垂れていた。血が滴っている。

倒れたままのレイノルドへ、人面獣が近づく。二頭。

セレスティの前に二頭。その向こうに一頭。

背後で石を踏む足音がする。おそらく二頭以上。

「——」

レイノルドは倒れたまま動かない。人面獣の牙がレイノルドを裂

こうと喉元に降りていく。

その動きがわざとらしいほどにゆっくりに見えた。

「レイ——」

杖が鳴る。

ヴィルリーアだ。蹲りかけていた身体を起こし、指先で宙に法陣

円を描いた。

風が湧き起こる。

『風切り』の、風の刃。

無数に吹き出した刃がレイノルドの前の二頭を取り巻き、裂い

た。

致命傷にはならず、だが人面の獣は顔を歪ませ後退した。

「ヴィリ！」

リズリーアが倒れかけたヴィルリーアを抱き止める。

「ヴィ……」

『雷よ——』

「えっ」

驚いたのはリズリーアだ。抱えたヴィルリーアを見つめる。

杖を立て、顔を上げて魔獣を睨んでいる蒼白な顔を。

もう、限界のはずだ。これ以上。

それにヴィルリアは、それを習得していなかった――

20 共鳴

『ラヴノスエ
雷よ 撃て』

雷撃。

「うそ――」

杖の全体が光を帯び、鈴の付いた頂点へと流れ集まる。
杖の頂点を起点に、金色の光が迸る。

正面にいた人面獣三体が、一直線に走った雷撃に貫かれ、巨体はその場に崩れ落ちた。

「雷撃……っ、ヴィリリ――すごい」

ヴィルリアがまだ習得できていなかった、中級第五段階の法術だ。

攻撃系統の法術では、中級最大の威力を誇るが、その分体力を削る。

リズリアは驚きと、それから胸の中に灯る熱を覚えた。

使える法術を立て続けに使いきくし、そもそもヴィルリアは限界だったはずなのに。

ヴィルリアは力を失い、リズリアの腕の中でぐったりしている。

「ヴィリリ」

唇を引き結び、顔を上げる。

取り囲んでいた五体は雷撃を恐れ、じりじりと退がっている。自分が行動するのなら、今だ。

「今のうちに、みんな、レイのそばに！ 障壁を張るから！」

リズリアはヴィルリアを抱え、引きずるように歩いた。すぐにガイドがヴィルリアを抱え上げる。

ラウルは駆け寄り、レイノルドの状態を覗き込んだ。

「レイ——！」

あちこちに傷を負っているが、ラウルを庇った時の肩の傷が最も深い。服に滲んだ血が傷ましい。

だが、胸はゆっくりと規則的に上下していて、その緩やかさにはほんの少し救われた。

「レイ……」

「セステイ、来て！」

剣を杖代わりに、セステイが歩み寄る。

その背後を遠巻きに、雷撃を恐れた人面獣達が視線を注いでいる。霧の向こうに引くこともなく。

「ごめん、セステイ、レイ、治療をしてあげたいけど——攻撃、避けるのに障壁を、張るから」

「大丈夫です。気にしないでください」

セステイが穏やかに微笑む。

リズリーアは泣きそうな顔をした。

「ごめん。あたしの障壁、ただその中にいるだけ、けど——っ」
顔を振り、杖を立てた。

その段になってリズリーアははっと、瞳を見開いた。

「ゲネ姉様、どこ」

「混戦になってから姿がない。気に病むな」

グイドの声は平坦な分、憤りを宿している。

「で、でも——」

リズリーアは首を巡らせた。

「姉様！ 聞こえたら来て！ 障壁を作るから！」

『その辺りにやいる。気にすんなー』

ヴァースの呑気な声。

『来るぞ』

遠巻きに引いていた人面獣の一頭が、身体を揺らし前脚を進める。

他の個体も揺れる。

地面を蹴る。

ラウルはヴァースを構えた。

『我が四方に光よ立て』

人面獣の振り下ろした爪が目前に迫り——

寸前で立ち上がった光——それは壁と言うべきものだ——が、爪を阻み、弾く。

見回せばラウル達の周りを、光の壁がぐるりと巡っていた。

光の壁に遮られ、人面獣はそれ以上近寄ることができないでいる。

ラウルは状況を見て取り、肩に張り詰めていた力を抜いた。

「——リズ、すごいな。ありがとう。おかげで助かった——」

「ち、ち、違うもん……」

リズリーアが杖を立て、両手でしっかりとそれを握っている。

普段愛らしい頬は悲壮に眉根を寄せ、薄っすらと涙を滲ませている。

「あたしの障壁は、ただ防ぐだけなの。ここから動けないし、中からだって何も、できないし、っ、あ、あたし」

杖を握る両手の指は、力を込め過ぎて白い。

「あたしの力じゃぜんぜんっ、し、四半刻しか、保たないし——

っ」

ラウルは意識のないレイノルドを見つめ、それから顔を上げた。

「じゃあ、いまは休息して、力を溜めよう」

見開いた水色の瞳に微笑む。

「リズとヴィリがいてくれたから、みんな生きてる。あと、ちょっと頼り過ぎて申し訳ないけど、この状態で治癒を使えたら、セレスティやレイノルドを癒して欲しいな」

「——でっ、できる……っ」

リズリーアは手の甲で乱暴に涙を拭い、レイノルドの傍らにしやがんだ。

「先にレイね。二回かける。それからセレスティ」

暖かな光がラウル達の面を照らす。

「ガイドさん、セレスティ」

二人の視線を受け、ラウルはヴァースをしっかりと手に握った。

ヴァースの柄から返る確たる手応え。

「俺もう、さつきみたいいな馬鹿はやりません」

「そうしてくれ」

「全くです」

あ、容赦ない。レイノルドが寝てて良かった。

「ラウル。オルビーイスを」

ガイドがオルビーイスをラウルへと手渡す。

受け取った腕の中に確かな重さを感じ、ラウルは束の間オルビーイスの軀を抱きしめた。

(オルー)

一つ息を零す。

顔をしっかりと、上げた。

「これから、全力でここを抜けます。力を貸してください」

「弓は折れたぞ」

ぐう。

「私の右腕も折れていますね」

ぐ……

え？

嘘でしょ?!

平然と付け加えることですか?!

レイノルドの胸に手を当てながら、リズが目を剥いて凄じ勢いで顔を跳ね上げた。

「治す！ あたしが治すからね！ そこいて！」

「セレスティ、座っ」

どっ、と——

空間が揺れた。

「何だっ」

目をやった先、光る壁のすぐ向こうに、男の顔があった。笑っている。

人面獣。

すうつと引き——

再び、空間に衝撃音が走る。

嵐で折れた木の枝が壁に打ち当たったように、激しい音。びりびりと障壁が震えた。

「ちよっ」

人面獣が突進し、障壁に体当たりしている。

一体だけではなく、次々と。

ずしん。

ずしん。

体当たりを繰り返す毎に光る障壁は、頼りない硝子窓のように震えた。

人面獣は首を捻って肩から衝突するのだが、視線だけはラウル達に向けられていて、それが滑稽で余計に悍ましさを増している。

ずしん。

ずしん。

ずしん。

ずしん。

ずしん。

この障壁が切れば、後は引き裂かれ、生きながら喰われるだけだ。

リズリーアはセレスティへの施術を終え、再び自分の杖と、気を失っているヴィルリーアを腕に掻き寄せた。

「で、転位が、あたしに使えれば——」

リズリーアは今にも弾けそうな障壁を見つめ、唇を噛み締めた。

「転位？」

「ここから、別のところに移動できるの。例えばラウルの小屋とか」

「それは、すごいね」

「できないの。転位は、第九段階の高等術式だから」

これだけの人数を安全に転位させようとすれば、更に高い技術を習得し、技と精神を鍛錬し、経験を重ねなくては到底できないのだ、と。

「でも、母様だったら」

衝撃が加わる。

空間が震える。

「ごめんなさい。切れる」

リズリーアは水色の瞳で、ラウル達を見た。

セレスティもレイノルドもラウルも傷を負っている。

ガイドの弓は折れてしまった。

ヴィルリーアは意識を失ったままだ。

「あたし、もっと修練を重ねて、力をつけなきゃいけなかった」

ラウルは自分の手に視線を落とした。

リズリーアが悔いる程にも、ラウルの手には力はない。

「あたしが、来たいって言わなければ——ヴィリは」

障壁の振動。

「ごめんなさい……あたしが」

「俺達が認めた。この旅でお前は充分良くやっている」

ガイドをさっと振り返る。

「で、でも」

「私の腕の骨折を治してくれました。骨折を治す術はまだ完全じゃないと言っていたでしょう？ リズリーアの力は確かです。この旅で成長している。ヴィルリーアも」

「で——も」

「さっきも言ったよ、リズ」

ラウルはリズリーアを見上げ、微笑んだ。

「リズ達は俺を助けてくれた。だから、今度は俺がみんなを連れて帰る番だ」

オルビーイスを抱えていて、トリズリーアへ手渡し、立ち上がったヴァースを構える。

まるで歴戦の戦士のように。

大した力もないくせに、腕も脚も少しも震えていないことが何だか可笑しい。

「絶対に、帰ろう」

何度目かも覚えていない衝突音。

もう、障壁の光が薄れている。

切り抜ける為の有効な手段は無い。

それでも、帰れると、ラウルは明確な根拠もないままに強く、そう思っていた。

ヴァースの柄がなんだか暖かい。

澄んだ音がどこかで鳴っている。管楽器が歌うような。

気付けばそれは、ラウルの手の中から鳴っているのだ。

そして、セレスティの手にしたノウムからも。

レイノルドの傍らに置かれたフルゴルからも。

剣が鳴っている。

共鳴している。

光が、三つの剣身の内側から透けるように差した。

「ヴァース、フルゴル、ノウム——」

力を貸してほしい。

「ガイドさん、レイノルドを起せますか」

「起きた」

ガイドではなく、聞き慣れた声が返る。

ラウルは笑みを浮かべた。

「良かった。さっそく悪いけど、動けるなら手伝ってくれよ」

「人使いが、荒いな——」

視界の端に構えたフルゴルの剣身が見える。

ずしん、と。

ラウルの正面に人面獣の笑みが突進する。貪欲な目。

(割れる)

障壁が消えた瞬間、まずは剣を突き出す。

一体でも多く。

覚悟を決め、ヴァースの切先を突き出そうと柄を握り直した、その時に背後で驚きの声が上がった。

リズリーアの声が震えて届く。

「ラウル——オルビーイスが……」

リズリーアの声に慌てて振り返ったラウルは、横たえていたオルビースを視界に捉え、その瞳を見開いた。

真つ白だったオルビースの軀は中身を失った紙風船のように、くしゃりと地面に、リズリーアの膝の前に落ちていく。

「オー——ルビース……」

何が起きたか一瞬、掴めず、だが頭の芯が理解していた。

半透明な——

抜け殻。

「ラウル、前を向け！ 障壁が切れるぞ——！」

顔を戻した目の前、障壁に張り付いた人面と、向かい合った。

頬を裂くように吊り上がった嘲笑。

「っ」

リズリーアの張った障壁が、蠟燭の最後の揺らぎに似て、一瞬光を膨らませた。

弾ける。

剣が鳴る。共鳴。

『ご主人——！』

ラウルはヴァースを構えたまま踏み込み、人面獣の額へ突き出した。

ラウルと三角形を描くように、セレスティ、レイノルドが剣を振り抜く。

ヴァースの切先は捉えた額を貫き、ノウムは余波で地面ごと人面獣の軀を断ち、フルゴルが輝き裂いた魔獣の向こうにいた数頭へ光を突き刺す。

同時に——

空から吹き下ろした風——風というには質量を有した塊が、ラウル達の周辺を渦巻き巡った。

凍る感覚が遅れて肌に届く。

十頭近くいた人面の魔獣は、瞬きの間に氷の彫像と化した。ラウル達以外、ここに動くものがいたことが嘘だったかのように。

ラウルは息をのみ、だが、驚いてはいなかった。

驚きではなく、心の奥底からゆっくりと湧き起こる感情がある。

風が髪を煽り頬を撫でる。

翼の音。

ふわりと——

ラウルの肩に降りたのは——、白い竜だ。

「オル——！」

喜びに声を上げ、それからラウルは思わずよろめいた。

「ちよっ……っ、重っ」

足を滑らせ尻餅をつく。

小石がなかなか痛かったが、それも意識に残らず、ラウルは腕を伸ばしてオルビースを抱きしめた。

「オル——！ オル——、オル——、オル——、オル——！」

冷えた艶やかな鱗の、確かな手応え。

長い首を巻きつける、いつもの仕草。

一回り、大きくなっただろうか。

「ピー」

甘えて鳴いた声がやや低く、それが少し可笑しかった。

「はは……」

喉が震える。

良かった。

「生きてたんだね、君——」

良かった。

本当に。

「——良かった……」

頬を涙が伝い、溢れる。オルビーイスの舌がぺろと舐めるのがくすぐったい。

「オルーってば」

『ご主人』

「喜んでるところ悪いが、まだ安心できない状況だ」

はっとして、ラウルは顔を上げた。

喜びにすっかり気が逸れていたが、まだ危機を脱していないのだ。

「増えてる」

震える声はリズリーアのもの。

ラウルはオルビーイスを肩へ移らせ、ヴァースを構えなおした。

まるで意識を安堵と喜びから不安と絶望へ、長い瓶の中に入れて

乱暴に振られているかのようだ。

周囲を囲む霧の中から、更に。

人面獣が集まってくる。

先ほどよりもずっと多く、おそらく二十頭近い。

「まだ——」

「嘘でしょ」

ぎし、と何かが擦れる音がして目を向けた。

オルビーイスの吐いた息吹きで凍りついた人面獣の足元に、光る何かが幾つも散らばり落ちていく。

氷の欠片。

ぎし、と再び氷の彫像が軋む。

光るかけらが落ちる。

「レイ、あれ、氷、割れかけてる……？」

「いちいち確認するな」

『割れかけてるな——。それにヤバイぜー、気配がまだある』

ヴァースが有り難くないことを言う。

「も、もう何度も覚悟決め過ぎて、覚悟在庫切れなんだけど」

「お前の剣だったら有り余ってるんだけどな」

一言多いんだよ君は。

ガイドが心底うんざりしたように息を吐く。

「どれだけいやがるんだ。そもそもきりふり山には、こいつらの存在は」

「巢だからねえ」

答えたのは楽器的な美しい響きだ。

「おま」

「姉様！」

いつ現れたのか、それまでどこにいたのか、ゲネロースウルムがラウル達の間に立っていた。

ガイドが視線を魔獣達に向けたまま短剣の切先を、ゲネロースウルムへと据える。

「お前は、何の為に――」

「私はこの巢を、探していたんだよ。常に霧の中に隠し惑わすから」

柔らかに微笑み、ガイドの向けた短剣へ近付くと、その横を抜けた。

ラウルは人面獣の様子が変わったことに気が付いた。
強い警戒。

困んだ輪を縮めるどころか、僅かに退いている。

彼等が警戒しているのは間違はなくゲネロースウルムの存在だ。

ゲネロースウルムはリズリーアの前へ立つと、まだ瞳を閉じているヴィルリーアを覗き込んだ。

「ヴィルリーア」

ヴィルリーアはふっと目を覚ました。

「――ここ――、僕は……」

「ゲネ姉様！」

リズリーアの抗議含みの声に微笑む。

「大丈夫だよ」

思わず納得してしまうほどの優しく誠実な響き。

「ねえ、ヴィルリーア。お前はリズリーアを助けたいだろうか？」

ヴィルリーアは視線だけを持ち上げ、さらりと流れ落ちる絹糸の如き銀髪と、美しく微笑む面を見た。

戸惑いながらも、ヴィルリーアがはっきりと頷く。

「助けたいです。何をすればいいですか」

「ヴィリっ」

「さつき渡した巻物を。今がちょうど使い所だ」

ヴィルリーアを助け起こすと、背後を支えるように立ち両肩に手を置く。

「えっ、で、でも、無理です、あんな大きな」

「できるさ」

ゲネロースウルムは微笑み、耳に唇を寄せ囁いた。

「できなければみんな死んでしまうよ」

「――っ」

「私の後に続いて唱えるといい」

おずおずと巻物を取り出すヴィルリーアの右腕に、背中から伸ばした腕を添わせる。

手のひらで杖を握る右拳を包んだ。

銀の鈴が滲むように光を含む。

『風よ』

ヴィルリーアはゲネロースウルムが囁く微かな声を拾い、繰り返した。

『か――風よ』

ゲネロースウルムの声に一拍遅れ、ヴィルリーアの詠唱が重なる。

『麦を鳴らし、花を芽吹かせ、樹々を揺らし、水面を波うたせるもの』

『地を巡り、空を回し、全てを払い、拭い、清めるもの』

ヴィルリーアの身体を取り巻き、風が吹き上がる。白い法衣をはためかせる。

ラウル達は——リズリーアも——ただ息を呑んでそれを見つめていた。

ゲネロースウルの視線は正面に、取り囲む人面獣達に向けられている。笑みを浮かべ。

人面獣の群れには瞬きの動きすらない。詠唱は続く。

『命を運び、終焉を運び、途切れぬ連環をなすもの』

その猛き尊たつとき息吹きよ』

ヴィルリーアは何か足元から膨れ上がるのを感じた。

それは力だ。

ヴィルリーアには制御しきれない、何か。

人の業わざには収まらない何か。

恐ろしい、それ——

こんな力は無理だ、という意思に反し、ヴィルリーアの口から零れ落ちたのは、ゲネロースウルの綴る言葉。

詠唱、呪言のどれとも異なる、初めて聞く響き。まるで自分ではない。

『アイエーティウラム永遠を巡らせるもの』

全身を千々に吹き散らされると、そう思った。恐ろしかった。

『息吹きよ、ここに秘したるものを吹き現わせ』

突風ですら表現しきれない——

全てを薙ぎ倒し運び去ると思えるほどの、激しい風が吹き荒れた。

荒涼とした山肌を削り、巻き取るように。

『ご主人、おれを地面に突き立てろ！』

意味を考える間もなく、ヴァースの声に叩かれるように、ラウルは夢中で剣を突き立てた。

「みんなも、剣を——！」

レイノルドがフルゴルを突き立て、片手でガイドの腕を掴み地に伏せる。

セレスティは双子を抱え、ノウムを深々と斜面に突き立てた。

地表を剥がすが如き風が山肌を吹き荒れる。
小石が吹雪の如く舞い、一抱えもある岩が浮き上がった。

遙か――

きりふり山から二千里離れた、王都で。

若き王は黄金の瞳を上げた。

北東の方角へ。

王の僅かな気配の変化に気付いたのは、控えていた近衛師団総将だ。

「陛下――？」

王の瞳はじつと、ただ執務室の東の壁、一面を埋め尽くす書物に向けられているようにも見える。

「如何なさいましたか」

すぐに柔らかな銀髪を揺らす。柔らかな髪は室内に差す淡い陽光を纏っている。

「ああ。いや――。大事ない」

風が膨れたが、もう消えた、と。

「風――」

眩きその響きに、若き王は注がれる双眸を見つめ返した。

安心させるように笑う。

十二歳を迎えてふた月、まだ柔らかさを残しながらも日々備わっていく風格は、着実に前王へと近付いている。全てを見通すと言われた双眸も。

「北東の山の、いずれかだ」

「調査致しますか」

「ふむ。それ、自体に意志は感じられなかった。彼の風を見たそなたの目で、この瞬間、確かめていたら判断はつきやすかったのであるうが」

王は首を傾げ、彼の剣士へ微笑み、頷いた。

「まあ私の見たところ、そなたが憂えるものではないだろう」

22 狡猾

ヴィルリーアの——ゲネロースウラムの詠唱が呼び起こした激しい風が大岩すら持ち上げ、吹き飛ばす。

人面獣が一頭、岩に頭を砕かれ、斜面を転がり落ちていく。吹き荒れる風の激しさに、回避の動作すら叶わない。

ラウル達はそれぞれ地面に剣を突き立て、必死で伏せていた。身体を掠め石や岩が飛んでいく度寿命が縮まる。

目を強く閉じ、三十か、四十を数えただろうか。

実際にはもっと短かったかもしれない。

辺りは無音になった。

耳が痛いほどだ。

ラウルはそっと目を開け、ぼやけた視界に地面を捉え、それからおそるおそる顔を上げた。

真っ白だった。

輝くばかりの白。

ただ一つ、ぼんやりとした影——

目が痛いほどの白の中に、一人、ゲネロースウラムだけが悠然と立っている。

「——痛」

力を込め過ぎて強張った身を起こし、ラウルは、真っ白に見えたのは強い陽光が降り注いでいるからだど気がついた。

霧がない。

あの強い風に全て吹き飛ばされてしまった。

そしてまた、もう一つ。

きりふり山の山頂で、伏せられていた青い双眸が開いた。

憂いに満ちていた岩屋に、キンと凍る風が吹き込む。

白竜は長い首をもたげ身を起こし、真新しい雪原の如き翼を震わせる。

ずっと寄り添っていた、割れてしまった二つの卵の殻を見下ろ

し、白竜は飛び立つために岩谷の出口へと進んだ。

それから。

「——きりふり山」

日頃、麓のくらがり森から見上げていたきりふり山の山頂が、左斜め奥にある。

「え？」

首を巡らせれば今いる斜面の山頂は少し低く、きりふり山の山頂を背後に背負っている。

ならば自分達が今いる、ここは。

「きりふり山じゃない?!」

「嘘お！」

「何と」

リズリーアやセレスティの声が重なる中、思考がまとまる前に、ラウルは独り立つゲネロースウルムを見た。

ガイドが身体を起こし、驚いた顔で——そしてどこか確信的に、ゲネロースウルムへと視線を向けていた。

きりふり山を登っていたはずなのに、いつの間にか、おそらく、隣の山へと移動していた。

今朝、霧を抜けた時は確かに、きりふり山の斜面だった。

案内したのは。

「——何のつもりだ」

低く、問い糺したのはやはりガイドだ。

先ほどの風など心地よい微風だったとでもいうように、ゲネロースウルムは涼しげに微笑み返す。

「すぐに分かるよ。だが今はそれどころではないだろう？」

微かに光る眼差しを向けた先——、地面に伏せていた人面獣達が、身を起こしている。

ざっと見た数は二十頭近い。

烈風に巻かれ本能的に怯えていた魔獣達も、まだ獲物が自分達の輪の中にいることに気がついたようだ。

低い唸り声が湧き起こる。

「ヴァ、ヴァース」

『うおー、派手な風だったけど状況何も改善してねえなー』

呑気だね!?! と言いたくなる声が返るが、ラウルの腕はヴァースを握りすつと持ち上がった。

ヴァースの言うように、あの風が魔獣達を全て吹き飛ばしてくれていれば良かったのに。

「チツ」

ガイドの舌打ちが代弁している。

「何の為の風だ。腹が立つ」

ガイドのぼやきを笑い、ゲネロースウルムは一步、前へ進み出した。

輪を縮めようとしていた群れは、圧されその輪を再び広げた。

魔獣達は目に見えて、ゲネロースウルムを恐れている。

当人はどこか——空を、見上げていた。

青く澄み渡った空を。

「ゲ、ゲネロースウルムさん、力を貸してください」

お食事の時間では？

「ゲネ姉様」

お姉様。

「私の目的は果たした。これ以上は具合が悪くてねえ。これで私は消えるよ」

「えっ」

「姉様？」

お姉様?!

ゲネロースウルムの身体が揺らぐ。

唇が淡く笑みを刷く。

身にまとう瀟洒な絹が揺れる。

「待て！」

ガイドが矢を掴み、鋭く投擲する。

地面に突き立った時には、ゲネロースウルムは空へ舞い上がっていった。

青い空の中、その姿が変わる。

砂の城が崩れるように溶け、砂が広がるように広がる。

長い尾。

長い首。

二対の翼。

はがねだま
鋼玉のような、灰黒色の艶やかな鱗。

「竜——?!」

見上げる空を翼が埋め尽くす。

「何て、大きすぎだ」

十間（約30m）は優に超えるだろう、巨大な竜だ。

人面獣達が一斉に伏せる。

竜は翼にぐうっと風を掴み、音を立てて旋回した。

「びー!!!」

ラウルの肩で、オルビースが高い声を上げる。ラウルの心の中にオルビースの驚きと興奮が伝わってくる。

——あれはなに?!

まんまるに見開いた水色の瞳へ、鉄色の竜の銀色の双眸が束の間注がれた。

翼は止まることなく——

鉄色の竜は山脈の連なる東の方角へと飛び去って行く。

「ピー! ピイピイピイ!!!」

オルビースが興奮し、ラウルの肩の上で飛び跳ねている。尻尾が背中にバシバシ当たってちよつと痛い。

「お、落ち着いて」

——あれはなに、あれはなに、あれはなに!?

「りゅ、竜だよ」

——竜!

「君と同じ」

——おなじ!

自分と? と繰り返し竜が消えた空とラウルを見る。

驚き興奮している愛らしさにラウルは状況を忘れて微笑ましくなった。

「うんうん。そうそう。でも、でもね」

今は、詳しく教えてあげている暇がない。

「まず、目の前の人面獣を何とかしないとね……っ」

『うおー、派手なご登場だったけど、ご主人達にとっちゃ状況何も改善してねえな』

うん。

その通りだよヴァース君。的確な指摘ありがとう。

竜の出現に恐怖し身を固めていた人面獣は、今はもう身を起こして改めてラウル達を取り囲んでいる。

彼等に竜は脅威だったが、ラウル達は依然として餌だ。

ゲネロースウルムがいなくなった今、もう形勢をひっくり返す術が思いつかない。

「と、とりあえず、仕切り直して、みんな、この場をなんとか切り抜け——」

空が翳った。

空が翳る。

落ちた足元への影に気付き、ラウル達は空を見上げた。

今にも襲い掛からんとしていた人面獣の群れさえも。

風が煽る。

見上げた空を切り裂いたのは、翼。

ゲネロースウルムが戻ったのかと思いき、陽光を弾くその鱗の色が異なることに気付く。

「——白……」

白い鱗。雪のような。

ラウルは知らず手を伸ばし、肩の上のオルビースの鱗に触れた。

「白竜、だ」

頭から尾までは二間（約6m）、空に広げた両の翼は四間（約12m）に近い。

つい先ほど目にした鉄色の竜からすれば小さいとさえ思えるが、紺碧の空を背に陽光を受けて輝く姿は、触れ難い威厳を従えている。

「あれが、主——」

きりふり山の、白竜——

白竜が頭上を旋回する。

翼が煽る風が全身を叩く。

ゲネロースウルムを見た時とはまた異なる畏怖。

二十頭近い人面獣の群れは再び退き、警戒に身を伏せた。白竜が首を巡らせる。

ラウルはその白い鱗と空色の双眸を見つめた。確信している。

オルビーイスの親だ。母竜。

ラウルはオルビーイスを肩に乗せたまま、一步踏み出しかけた。声が落ちた。

——ここにあつたか

ヒヤリとする響きだった。

直接音を発したわけではない。

頭の奥に自然と伝わる意識。

双眸が炯々と光る。

白竜は空をゆるりと旋回し、露わになった山肌を睥睨した。

二十頭もの人面の獣を。

岩肌と、そこに転がる骨。

無惨に割れた卵を思わせる。

青い双眸が怒りを灯した。

ラウルは白竜につられて視線を巡らせ、改めて、陽の光に照らし出された山肌に、戦慄した。

先ほどまで霧に包まれていたことを感謝すらした。

目にしていたら絶望で、剣を持つ手は動かなかったかもしれない。やはりここは人面獣の群れの巣なのだ。

散らばる白い骨。

様々な獣、魔獣。

人骨も。

(髪の毛——)

引き裂かれた衣類はまだ新しい。

親子。

子供はまだ本当に幼いのがわかる。

こんなところまでこんな親子は来ないだろう。どこで攫われてきたか。

たか。

自分達の骸もその中に加わるところだったという恐怖より、憐れみと無力さが勝った。

竜の両翼が煽る風がラウルの髪を煽る。

ラウルは再び頭上を振り仰いだ。

肌に触れる空気が冷えた。

——全て

声。

(——これは)

駄目だ。

これは駄目だと、確証もなく、そう思った。

理由は意思として形作らないが。

(いけない)

白竜はラウル達を見ていない。

爛爛と燃え立つ双眸に映しているのは、山肌に張り付く人面獣の群れだけだ。

そこに滲む冷えた怒り。

内側にどれほどの凍る奔流が流れているのか。

——滅ぼしてくれる

谷底からの突風に似て、激しい怒りが吹き上がる。

それがラウル達の身を縛り、声を奪う。

ここに居る全ての生命を恐怖で縛る。

それでも瞳は、白竜が全身に纏う威厳と美しさに見惚れてしま
う。

白竜は鋭い牙がずらりと並んだ顎あぎとを開き、そこへ空気を呼び込
んだ。

大気がキンと冷える。

ひと呼吸ごと、気温が下がっていく。

(駄目だ、俺達、ここで死ぬ)

次に吹き荒れるのは、竜の息吹き。

オルビーイスの息は人面獣を凍り付かせた。

母ならば、その息もおそらく氷。

(失敗しちゃったなあ)

ただ淡々と、そう思った。

(俺一人で来るんだって——あ)

肩に視線を下す。

オルビーイスは白い鱗の連なる首を精一杯伸ばし、さきほどと同
様目を丸くして空の白竜を見上げている。

オルビーイスは、竜の息吹を耐えるだろうか。

せつかく会えたのに。

「——オ」

『オルー！』

ヴァースが叫ぶ。

『母ちゃんだぞ！』

瞬きほどの空白の後、ラウルの肩からオルビーイスが飛び出し
た。

「。パイ！」

今まさに死の息を放たんとしている白竜の視線の前に飛び込む。

ラウルは届かない手を伸ばした。

「オルビーイス！」

「。パイ！」

オルビーイスは小さな——白竜に比べれば葉っぱのひとひらほどに小さな翼を、懸命に広げた。

——おかあさん！

ラウルはあの日のこと思い出した。

くらがり森の中、きりよせ川の川辺で、卵を拾った日を。

割れた卵から転がり出てきた小さな竜。

懸命に、叫んだ呼び声。

”おかあさん“

母を求める声。

だからラウルは、ここへ来たのだ。

オルビーイスを、母親に合わせるために——

白竜の青い双眸が小さな小さな竜を捉える。

その存在を確かに認めた。

——おまえは

喉元まで膨れ上がっていた光が、一段、光度を落とした。

太陽を背に一点で羽ばたきながら、鼻先をオルビーイスへと寄せ
る。

真っ白な鱗は同じ。

——私の子

——生きていてくれたのか

ラウルの耳に、そう届いた。

安堵と、驚きと。

深い、湧き起こるような喜び。

帰ったのだ。ようやく。

空に溶けるような二つの白い影を、ラウルはただ見上げていた。

——失ったと——、そう思っていた……

不意に起こった風に押され、ラウルは思わずよろめいた。

二十頭もの人面獣が一斉に、地上から飛び立った風に押されたの
だ。

空の中で人面獣は円を描き白竜を取り囲んだ。

二者が対立しているのだと、改めて分かる。

白竜がこの場所に現れた理由は。

「ええと」

それから、おそらくだが——ゲネロースウルムがここへラウル達
を呼び込んだ理由。

「霧を払ってあいつを呼び寄せたのか」

グイドが独り言に近く呟く。

「——そうです、たぶん」

オルビーイスの母親を、ここへ呼ぶためだ。

何でそんなまどろっこしいことをするのか、分からないが。

二者の煽る風が見上げて立つラウル達を左右に押すようだ。

白竜の全長は二間(約6m)あるが、人面獣もそれぞれが一間近い。それが二十頭も周囲を囲めば、白竜でさえ形成不利に思えた。

「あっ」

オルビーイスが白竜の前に飛び出した、と思った瞬間、かっとその顎を開いた。

白い塊と思える息が流れ出し、正面にいた人面獣を一頭、薄い氷が包む。

氷の息吹を受けた一頭はラウル達の斜め前へと落下した。

同時に氷も砕け、身を起こす。

飛び立とうとしたその翼を、セレスティの剣の一閃が断った。更に剣を返し、首に突き立てる。

主戦場は依然として空だ。

人面獣の囲みが再び縮まる。

だが白竜は人面獣を見ず、驚いた眼差しをオルビーイスへ向けていた。

——まさか、もう息吹きを吐けるとは

そう言うと、白竜は頭を高く持ち上げ、ゆるりと揺らした。

ラウルにそれは、微笑んでいるように思えた。

幼い子どもの他愛のない仕草に微笑むように。

——見てごらん

告げて、白竜は再び、喉の奥に風を呼び込んだ。

光が喉に透けるように集まる。

肌を凍らせる威圧。

——我等の息は、こう吐くのだ

光条に似て、白く輝く氷風が迸る。

取り囲む魔獣の群れへ、白竜の息吹はぐるりと巡った。

地上のラウル達へさえ、冷気が質量を持って肌を叩く。

白竜の息吹を受けた人面獣の群れは、真つ白な大理石を彫り上げたかの如く凍りつき、次の瞬間、粉々に砕けた。

第5章

帰る

1 小竜、でんせつを目指す

ほんのひと呼吸前まで空を埋めていた魔獣達の姿は、拭い去ったように消えている。

空は青く、その色も落ちていく西陽に地平からほんのりと染まり始め、どことなく、懐かしさを覚えさせた。

(ああ、帰らなきやなあ)

あの小屋に。もう三日も空けてしまった。

剣達も待っている。なかなか帰らないから心配しているだろうか。

(リトストスが拗ねてそうだなあ)

空の中に、真っ白な竜が浮かんでいる。

白竜は一度翼を動かし、翼に風を囲いながらゆるい斜面に降りた。ラウル達から三間と離れていない。

間近で見れば、二間もの体軀はそれだけで気圧される。

ただそれよりも、その姿や鱗の美しさにラウルは心を打たれた。

白竜は長い首を弓なりに傾け、自分の肩にいる小さな存在を、その存在を確かめるように覗き込んでいる。

「オルーの、お母さんなんだね」

そばに寄ったリズリーアが潤んだ声でそう言った。首を向ければ目元に滲んだ涙を指の背で拭っている。

「良かった——、お母さんにまた、会えて……」

「リズちゃん」

「ヴェイリ——ごめんね」

ヴェイリリーアが両腕を伸ばしリズリーアを抱き締める。

「母様と父様に、会いたいね」

と、そう言った。

「すぐに会えますよ。貴方達がまっすぐ、家に帰るのなら」

セレスティが微笑んで、背を反らして身体をうんと伸ばす。

「どうだかな。まだ体力がありそうだけど、こいつらは」

ガイドも肉の薄い頬にほんの少し、笑みを見せている。

(何だか、いいな——)

ラウルは胸の内に暖かいものが灯るのを感じ、傍らに立って白竜を見つめているレイノルドへ視線を向けた。

「レイ——」

レイノルドの肩を叩こうとした手が、すかっと空振った。

「……」

めげずにもう一度、肩に手を伸ばしてすかっと空振る。

「……」

「びい！」

オルビーイスの声に視線を戻す。

オルビーイスは白竜の肩の周りをくるくると周り、長い首をよじ登り、翼を広げて飛んで、白竜の双眸の前に浮かんだ。

その様子に改めて心に浮かぶのは、驚きと、喜びと、それから、胸の奥がツンとくるような温もり。

ようやく。

(オルー。お母さんと会えて、良かったね)

白竜が鼻先を寄せ、小さな鼻先に触れる。

『私の子——』

それは音ではなく、直接心に響くようだった。

双眸は西陽に照らされた空を背にし、濃く青く見える。

『そなたが無事でいてくれて、どれほど嬉しいか』

深く、それでいて柔らかさのある響きだ。

『あの時、岩屋から落ちてしまったのだね。そなたを見失ってしまった母を許しておくれ』

白竜は長い首を巡らせ、オルビースをその内側に包んだ。

『どうあっても探しに行けば良かった。怪我はなかったのか。空腹ではなかったか。身を休める場所はあったのか』

「あの」

おい、とレイノルドが肩を掴んだが、ラウルは一步踏み出して白竜を見上げた。

首がゆるりと巡る。

注がれた瞳を受ける。

先ほどの戦いの時よりもずっと柔らかな光だ。

「私は、麓ののくらがり森に暮らす、鍛冶師で、ラウル・オーランドと言います」

セレスティがレイノルドをまあまあ、大丈夫ですよと宥め、レイノルドはやや口を尖らせながらもおとなしく一歩下がった。

「オルー、いえ、その子を私が見つけた時、まだ卵の殻の中にいました。殻は少し欠けていましたけど、やはり竜の卵だけあって、相当硬かったというか。けど殻を割って出た後はすぐ、元気にごはんを食べてくれました」

白竜が身体を揺らす。

『そなたがこの子の命を助けてくれたのか。感謝する』

「あ、いえ、私は、何も。ちょっと凍えかけてましたが、怪我も何もなかったですし、きりよせ川——あ、麓を流れてる川ですが、ここに卵のまま浮かんでたんです」

閉じていた翼がほんの僅か浮く。

『——何と言った』

「えっ」

ラウルは狼狽えた。

マズイことを言いましたかっ

凍ってたこととかっ

川に浮かんでたこととかっ

『きりよせ川と？』

川つ、川ですかっ

川がマズイですかっ!?

「はっ、はいその、川に——卵が、浮かんでおりましてっ」

『きりふり山の斜面を、きりよせ川——麓まで、転がり落ちていたと——？』

「びい！」

オルビースが元気な声を上げる。

肯定らしい。

『まさか——、そなた、それで無傷だったとは』

間があった。

言葉を探したようだ。

ややあって、白竜はしみじみと呟いた。

『どれほど頑丈なのだ』

「え、そ、そうなんですか？ 竜なら普通なのかと」

『さすがに一里（約3000m）以上を転がり落ちて無傷な者はそうそう無い』

言われると確かに。

そうそう無いって言うか、まあ無いよな。

と言うかどんなふう転がり落ちてきたのだろう。想像がつかない。

ともかく、きりふり山の主である母竜が驚く頑丈さとは――

さすがオルビース。へへ。

『そもそも自らの翼で飛ぶことを覚えるまで、通常は一月はかかるものだが』

「その日のうちに飛んできました」

さすがオルビース。へへへ。

『自分で狩りができるようになるまで、ふた月であろうか』

「三日後くらいには俺より上手に兎を獲ってました」

さすがオルビース。へへへ。

『先ほど息吹を吐いたが――本来なら吐き方を学ぶまでに半年、命を奪えるほどのものとなると、数年は必要だ』

「あ、それはちよびつとですね、ちよびつと吹けてましたよね。すぐ氷砕けちゃいましたけど凍りましたし。すっごい頑張ったんですね、へへ」

『――』

ラウルの相槌を聞き、白竜は束の間黙りこくった。

「それに、本当に良く食べて良く食べて良く食べて――ついさっき脱皮したところですが、この調子だときつとすごく大きくなると思います。まあ食糧庫在庫切れ俺の懐も在庫切れっていいですか」

「おいラウル」

何だねレイ。

また俺の剣なら在庫山積みとかいいたいのかね。

「少し黙れ」

睨んでくるレイノルドの傍らで、セレスティが白竜を手で示す。

ん？ セレスティまで。

何だろう。

白竜が固まっている？

見上げた白竜は少し長いと思える間じつとオルビースを見つめていたが、しみじみと声を落とした。

『なんとも、驚かせられる――』

ゆるく首を振る仕草は、人と似て親しみを覚える。

『そんなにも頑丈で色々と成長が早いのなら、お前は伝説の竜になれるかもしれないねえ』

「伝説――？」

オルビースは空色の瞳をぱちりと瞬かせ、白竜の肩周りをくりりと回った。

――でんせつ……！

白竜は長い首を曲げ、オルビースに鼻先を寄せた。

瞳を細める。

『そうさ。そこに辿り着くには、遥かに遠い道のりだが。特に生まれたばかりのそなたには』

――でんせつ

空中で飛び跳ねる。

『今は二竜』

——なる！ 伝説、なる！

翼を広げ、空へと一直線に舞い上がる。青い空の中を真つ白な躰が陽光を受けてくるくる回る。

「オルー！ 目が回っちゃうよ！」

あまりに回るのではらはらと見上げたラウルの身体を、空気が叩いた。

「うわ」

空気、と思えたそれは、笑い声だ。

白竜が首を逸らし、笑っている。

『そうか——、お前は彼の竜達の一角になるか』

「びっくりしたー」

リズリーアが胸を押さえ、ほっと息を吐いている。

「またなんか問題起きたかと思っちゃった」

「私も、新手の魔獣かと」

とセレスティも剣から手を離し頷いている。

「嬉しそうだね、オルーのお母さん」

ヴィルリーアが言い、リズリーアはヴィルリーアに抱きついた。

「良かったよね！」

全身を震わせる白竜の笑い声を聞きながら、ラウルは、ここ数日の険しい旅を思い浮かべた。

危険なことが多かったが、進んで来ることができた。

ここに辿り着けて、本当に、良かったと思う。

（——これで）

『鍛冶師よ』

声が落ち、ラウルはさっと背筋を伸ばした。

「は——はいっ」

白竜の顔がラウルの前に降りる。

青い双眸は空を写したようで、深く澄んで美しかった。

『改めて礼を言おう。この子を助けてくれて、感謝する。心から。』

そなたが居なければ、私はこの子と再び会うことはなかっただろう

「——そんな。俺は、」

改まって言われると、ラウル自身は大したことをしていないのに照れ臭い。

「ここにいるみんなが、ここまで来るために力を尽くしてくれました。それにオルー、は、強いので、俺がいなくてもきつと、貴方のもとに帰っていたと思います」

白竜が双眸を細める。

『オルー』

「あつ。オルーというのは、オルビーイスと——」

深々と頭を下げる。

「か、勝手に名前つけちゃってすみません！」

伏せた頭を上げ——かけて、背中にどすんと重みを感じた。

「ぐえっ」

オルビーイスが背中に降りている。

よじ登り、肩に乗ったのだが、その重みにラウルはちよつとよろめいた。

脱皮により、やはり一回りは大きく重くなったようだ。

『オルビーイス——宝玉になぞらえた名だ。良い名で呼んでくれた。その名の通り、この子は我が宝玉だ』

白竜は小さなオルビーイスの額に、その鼻先で触れた。
『それでは、そなたの名は、オルビーイスウルムとしよう』

2 いのちに連なるもの

『それでは、そなたの名は、オルビーイスウルムとしよう』
白竜の声は慈しみに満ち、我が子の健やかな成長を願う、祈りのようだった。

自分のつけた仮の名を認めて、本当の名前としてくれたことへの喜びが、間違いではなかったのだという想いが、ラウルの胸にじわりと浮かぶ。

「オルビーイスウルム——」

とても良い響きだ。

オルビーイスも嬉しそうにくるくる回っている。

「——ウルム」

あ。

ラウルは「あの」とまた手を上げた。

「その、ウルムっていうのは、どのような意味でしょう」
瞬きが一つ返る。

『我らの名に用いる。『ウルム』とはそなたらの概念で言うならば、『生命に連なるもの』を意味していよう』

「生命——」

生命に連なるもの。

オルビーイスを見つめる。

空色の瞳。

『合わないかね？』

「ぜんぜん！ 似合ってます！ とつても！ 高貴さが増した感じ
します！」

ラウルは両手を上げ、首を縦に振った。

「ええと、その、ウルム……」

もう一つ気になっていたのは、さきほどヴィルリアの——ゲネ
ロースウルムの詠唱で聞こえた、アイ——アイ、なんとか、ウル
ム。

そもそも、ゲネロースウルムが、あの鉄色の竜が、そう名乗って
いた。

『やけに気にするが』

「はい、いえ、実はついさっきまでいた女性が、ゲネロースウルム
と名乗って」

「びい」

オルビーイスは首を振った後、うんうん、と頷いている。

「そう、その人も実は竜で。鋼玉みたいな色の鱗の」

「びい！」

ラウルは白竜を見上げ、口を噤んだ。

白竜の青い瞳がラウルへと落ちている。

ずうっと、空気が重くなった、気がした。

『——誰だと……？』

ひい。

低い。

声が低い。

温度も低い。

え？ 問題あり……？

『もう一度——そなたは今、誰と言った』

「ゲツ、ゲネロースウルム、さん、です……銀髪の、女性……」
だんだん口の中に消えて行く。

白竜が纏った空気——圧力に、ラウルは真剣に、ここで死んじや
うのではないかと思った。

(こっ——)

怖い。

怖い怖い怖い。

怖い。

一瞬にして人が畏れる竜そのものになった。怖い。

(何か、今にも、竜の息吹きそうな感じ……!?)

ややあつて。

辺りを凍らせる怒りは身を潜めた。

息吹を吐く代わりに、白竜は苛立ちを吐き出すように言葉を吐い
た。

『ゲネロースウルム高 潔 と名乗っただと?』

二つの響きが重なって聞こえた。

「え、ち、違うのですか……俺はそういうの知りませんが……意
味までは……」

高潔って意味なんですね。

高潔——

『面の皮の厚い。あれのどこが高潔なものか。あれはドロースガラム狡 猾だ』

狡猾。

ぴ

「ぴったりだな。名は体を表すか、体が名を導くか」

ガイドさん。

そんなはずつきり、と苦笑しつつ、ラウルはもう一つ首を傾げた。

「あの、ご存知ということは、あの女性とあなた方とのご関係は、あるんでしょうか……。行動はよくわからない人——竜でしたが、オルビーイスを助けに来てくれたのは確かです。たぶん」

白竜は不機嫌そうに黙った。

「あつ、あのもちろん、無理にはないので、」

『この子の父だ』

今度はラウルが束の間固まった。

後ろのガイド達もだ。

「——はい？」

首をガクンと傾ける。

「今なんと」

『この子の父だ。不本意ながらね』

——

——

お兄様でしたか。

「姉様じゃなかったんだね」

「——そうなんだ」

頬を緩めふわりと笑ったヴィルリアを、リズリアはぎゅっと抱きしめている。

『あの鉄砂竜めは、今頃になって現れて、好き放題気まぐればかりしおる』

何というか、文句がいっぱいありそうだ。

ガイドと一晩語り明かせるかもしれない。おそらくガイドが聞き役に回るだろうが。

とは言えあまりご家庭のことに嘴を突っ込むのはやめておいて、ラウルはもう一つ、はい、と手を挙げた。

「あの、アイ——アイなんとかウルムというのは、貴方のことですか」

「アイエーティウルムです、ラウルさん」

ヴィルリアが補足してくれる。

「あ、そうです。アイエーティウルム、さんは、貴方のお名前ですか？」

白竜はまた驚いている。

竜が驚くとか、そうそうないのではないか。

『——違う』

と、ひと呼吸後、白竜はそう言った。

返る眼差しは今度は興味深そうだ。

『それもあの狡猾めから聞いたのかね』

「え、えつと、ゲネ……ドロ……、その、教えてもらった風の法術の、術式に組み込まれて、いました……」

とヴィルリアが口籠もりながらも答える。

『ふむ』

白竜は一つ頷いた。

長い首を持ち上げる。

その先にはどこまでも丸く覆う天蓋。

『アイエーティウルムはそなたらで言うところの、風竜の名——かつて風を司る者であった。今は滅びた、我等が祖に連なる者の、ひとつだ』

「風竜って」

リズリーアが口元を押さえる。

「あの、四竜の？」

この国には四竜と呼ばれる強大な竜がいる。

南の赤竜。

北の黒竜。

東の地竜。

西の風竜。

人が勝手に名付けたのだが、
いる、というのも少し違う。

今は赤竜と、地竜。

黒竜と風竜は、『空位』だ。いわゆる。

『永く生きれば崩れるものだ』

そう言った白竜の声の響きは、どこか憂いを帯びていた。

(崩れる——何のことだろう)

見上げてでも瞳の色からは理由を伺えない。

『今はそこに座せるものは無いが、いずれその役割も継がれよう。』

この子はそれを目指すのかも知れないねえ』

「びい！」

——なる！

と、オルビーイスは元気いっぱいだ。

いずれ本当に、なってしまうのかも知れない。

伝説と呼ばれる竜に。

ラウルは、改めて、オルビーイスと向き直った。

ゆっくり一つ、深呼吸する。

さあ。

お別れだ。

オルビーイスもラウルと向き合い、空色の丸い瞳をぱちりと瞬かせた。

「オルビーイス。よかったね、お母さんと会えた」

澄んだ空の水色。

やや翳ってきた夕焼けの空を背負った、藍色。

夜の空と同じ、濃紺。

くるくると変わる瞳の色が美しく、愛おしい。

「君は色々と驚かされることが多くて、実際君のお母さんも驚いてたし、そうそう一番驚いてたのは竜の息吹をもう吐けることよりも、君が卵ごと、きりふり山の斜面をずつと転がり落ちてきたこと

だったね。俺も言われてみればそれが一番驚異的かも。だって想像してご覧よ、君は卵の殻の中であっちこっち」

何を言おうとしているのか、自分でもまとまりがなくなってきた。

ええと、オルビーイスを母の元に戻すために、このきりふり山――

3 ラウル、家に帰る

(今いるのは別の山か)
を遙々登ってきた。

「この旅で俺たちを、すごくたくさん助けてくれたね。まだこんなに小さいのに」

ここまで色々な苦勞をして、周りに迷惑をかけて、助けてもらって、今、目的を果たして。

今。

「――ありがとう」

会えて良かった。

心からそう思う。

心から願う。

「今度こそお母さんと、幸せに暮らすんだよ」

オルビーイスは翼を広げ、元気一杯に、

「びい！」

と鳴いた。

扉を開ける。

五月の日差しは思っている以上に熱を持ち、四日間も締め切っていた小屋の中はむわんと暑い。

ラウルは一步――足音を忍ばせ、鍛冶小屋に踏み込んだ。

「み、みんな――？」

剣達――？

「帰ったよ――」

と、声を発する前に、二歩目で激しい振動と共に壁に掛けていた剣達はがらがらと床に飛び降りた。

どすん。

「あああ」

最後に――まったくもってそうとしか言えないが最後に、リトスリトスが先に重なり合った剣達の上に落ちる。

『土をつけたくないんだな――。リトらしいな――』

「落ちなきや、よくないかな……？」

また掛け直さなくては、とため息を吐いたラウルの横をセレステイがざつと抜ける。

「シュダイアール！ 帰ってきてますね！」

セレスステイが食い気味に駆け寄り、倒れたシュダイアールの柄へ両手を伸ばす。

「あ、ほんとです……ここに来たんでしょうか」

「また来て欲しいね！」

とリズリーアは屈託がない。

シュディアルに近寄ったセレスティは大剣を肩に担ぎ起こした。

「――」

両足を踏ん張り、両腕の筋肉を漲らせ、自分の身体ごと持ち上げると、再び壁に立てかけた。

「おお。前より楽に持ち上がるようになったんじゃないか？」
と言ったのはガイドだ。

「そうでしょうか！」

息を切らしセレスティが頬を紅潮させる。

「しかしまだまだ、ゲネロースウルム殿のようには」

「それは」

そうだと思う。竜だし。

あれ、そう言えば、セレスティに腕をやるうとか言ってたけど、竜の腕ってことかなあの人。こわい。

『ドローズガムだってよー』

「ははは。いずれにしても、私には憧れる存在です」

「やめとけて」

「あたしは好きだな！ ドロ兄様」

「切り替え早えな」

「ね、ヴィリ」

「ぼ、ぼ、僕は、まだ、こわいと思う、けど――」

賑やかな声に微笑み、ラウルは他の剣を拾おうと手を伸ばした。傍から伸びた手がリトスリトスを持ち上げる。

リトスリトスの優美な剣身が喜びの振動を一つ、鳴らしたので、手の主はセレスティだとラウルは首を向けた。

「有難う、セレーー、あれ、レイ」

ちよつと驚いた。

何せリトスリトスがはしゃいでいる。

(そうか、面喰いなのか)

華やぐリトスリトスをひとまず置いておいて、ラウルはレイノルドに改めて礼を述べた。

「有難う、レイ」

「気安く呼ぶな」

「有難う、レイノルド」

「そうじゃない」

「レイノルドさん」

「違う！」

イライラと返しつつレイノルドはさっさと剣を掛け直し、ラウルと向き合った。

剣を掛けている壁を手のひらでバン、と叩く。

「改めて言うが、ラウル。いつまでもこんなところで剣を打っていないで街に戻れ」

「改めてって、今までそう言ったことあったっけか」

「あっただろ――っ、いやっ、そんなの今はどうでもいいっ」

バンバン。

「あっ、そんなに叩いちゃまた落ちちゃうよ、剣。まあ俺の剣は確かに、一般には流通しにくいとか常人には扱いにくいとかちよつと理解されにくいとか天才ならではの孤高とか」

「自己肯定感嫌な感じで上がったな。じゃない」
バンバンバン。

レイノルドは苛立ちを壁にぶつけている。

「壁がやめて欲しいって」

レイノルドはラウルを睨み、壁を見て、忌々しそうに手を下ろした。下ろす前に一度壁を撫でる。

「へへへ」

愛いやつだ。

「何だ、気色悪い」

「へへへ」

すごい睨んでくる。

その一点から発火しそうだ。目力強いな、レイ。

『ご主人、ちょっとこわいぞー』

えっ、こわいって誰？

俺？

「ラウル」

底冷えした声に、ラウルはようやく、これ以上はまずいと顔を引き締めた。

悪い癖だ。

その場を誤魔化そうとする癖。

逃げ。

向き合わなくてはだめだ。

レイノルドと。

あの時の。

「俺の父が何をした」

意表を突かれ、ラウルは浮かぶ言葉を失ってレイノルドを見た。いつの間にか小屋の中は静かで、セステイヤリズリーアとヴイリリーア、そしてガイドも、睨み合うように向かい合っている二人に視線を注いでいる。

「え、いや——何って」
何を。

——最後まで愚かだった。

——だから死んだ。当然の結果だ。

「ラウル。俺の父がお前に——伯父上に」

「違う！」

自分で思ったよりも強い声だった。

レイノルドが驚いた顔でラウルを見ている。

どうしてもその先は言わせたくなかった。不確定な疑問だ。

いや、疑問ですらない。違う。

『俺の父は伯父上に、何をした』

そんな言葉をレイノルドが口にしてはいけない。

ただの疑念だったとしてもだ。

「違うよ、レイノルド」

ゆっくり、区切るように、そう告げた。

告げればそう、それは確かに思える。

あれほど助け合っていたセルゲイ叔父が、ラウルの父に——自分の兄に、何かするとはラウルには思えなかった。

セルゲイの手帳から聞こえたあの声に、初めのほんの僅かな間、疑わなかった訳ではない。

けれどやはりラウルには、そうは思えなかった。

幼い頃から共にいた、叔父の顔が浮かべば浮かぶほど。

「何が違う。ラウル。じゃあ何だ、お前がこの森に甘んじて引っ込んでいる理由は。正統な流れなら、嫡嗣がいるのに父さんに爵位が移るはずがない。何か手を加えない限り——」

「レイ。俺の態度が君に疑念を与えたのだとしたら、その原因は俺にあるんだよ」

レイノルドは一瞬、目を見開いた。

「——何だそれっ」

あ。

レイだ。

子供の頃のレイ。

よく泣いてたなあ。

「ラウル」

今は怒ってるけど。

最近いつも怒ってる。

「いつともいつも、のらくらと逃げ回りやがって」

「いやあ、逃げ回るとか」

のらくら？

「そう言うんじゃないんだけど、いや、逃げ回ってるのはそう」

そう。

「俺は逃げたから——君との決闘を」

逃げた。

当日、邪魔が入ったのをいいことに。

「君と決闘しなかったことを、俺は喜んだ。だって君に殺されたくないし、君に殺させたくもない。だからここに暮らすことになったのを、俺は喜んで受け入れている。誇らしいくらいだ。まあ正直、街より性に合ってるっていうか——」

母上がいるキルセン村より、心穏やかというか——

「それを今まで、君に一つの説明もしてこなかった。気に掛かったことなら、それだ。ずっと。今更だけど、謝罪させて欲しい」

ラウルは深く頭を下げた。

「——ごめん」

「おま——」

レイノルドはどん、と右足を一步踏み出した。

「お前が先に謝んなっ！」

「レイ」

「俺が謝ろうとしてたんだ！」

じつと俯いたまま、両拳を身体の脇で強く固めている。

「お、俺が——っ、あの決闘で俺がっ、お前に、詫びたかったのに

……っ」

「レイ——」

跳ね上げた顔の目元に、薄っすらと涙が滲んでいる。

「おおおかやろう！」

「おお……」

おお。

「レイって、見かけよりずっと子供っぽいんだね」

リズリーアが核心を突いてしまい、レイノルドが顔を引き攣らせて振り返った。

「あつ、ごめん！ 気にしてた？」

リズ。

ラウルはレイノルドを見て、口元を綻ばせた。

いいぞ、リズ。

何だか本当にこの目の前のレイノルドは、子供の頃の彼の面影のまま。

馬を走らせるのが速すぎると、涙を堪えて訴えた――

「レイ――」

胸に込み上げた暖かさに、ラウルは両腕を広げてレイノルドに近づいた。

お兄ちゃんだよ。

抱きしめようとした腕がすかっと空を切る。

「――」

「――」

「レイ」

「気安く呼ぶな」

あれ？

今の流れは昔の關係に戻る流れでは？

「とにかく、昨日も言ったがお前が決闘をすっぽかした理由なんてとっくに知ってる」

「そうなんだ」

レイノルドの眉根がびくりと震える。

「――そんなことで俺は怒ってない」

「えつ、そうなんだ」

「ラウル」

口を挟んだのはガイドだ。

ラウルに向けた目がちよつと――いや、それなりに、だいぶ、呆れを含んでいる。

「お前はしばらく黙ったほうがいい」

えつ。

「レイノルドの話を受け。黙ってだ」

「……はい」

しおしおと、ラウルはレイノルドにもう一度向き直った。

「――」

レイノルドは口を何度か開け閉めしていたが、放り投げるように言った。

「それだけだっ」

ふい、と横を向く。

「――」

「――」

「――」

「――ずっと、誤解をさせたままで悪かった」

レイノルドはぼそりと、くぐもった声を出した。

「――」

「謝ろうと思って、言い出せなかった。今までずっと嫌な想いをさせてたと思う」

「――」

そっぽを向いたままレイノルドはしばらく黙っていたが、やがて拳を震わせ、きつとラウルを睨んだ。

「何とか言えっ。寝てんのか！」
うう。

頑張っ黙って聞いてたのに。

「ごめんな、レイ」

「だから謝るなど」

「嫌な想いをさせていたのは、俺の方だと思ってた」

申し訳なかった。

右手を差し伸べる。

「有難う。——嬉しいよ」

二年。

二年もの間、お互い言葉が足りずれ違っていた。

ラウルは手を差し出したまま、レイノルドが手を伸ばすのを待った。

待った。

レイノルドはしばらく迷いをみせていたものの、やがて息を吐

き、ラウルが差し出した手を握った。

「レイ」

胸の中に、暖かな何かの塊が湧き起こる。

「これから、前みたいに助け合っ、俺た——痛い！」

「今日のところは休んでいってください」

昨日の夕刻にオルビーイスと白竜と別れ——ラウルは小屋を出て一行にそう声をかけながら足もとの小石に躓いた——、一晩また山中で過ごしてから下山した。

この小屋に辿り着いた時には、もう正午を過ぎていた。実に五日ぶりに戻ってきたことになる。

「お風呂沸かして、それから早めの食事にして」

ラウルは張り出していた木の枝に額をぶつけた。

「あてっ、ゆっくり寝て身体を休めましょう」

「俺はこれで帰る。早いとこ慣れた寝床で寝たい」

ガイドは既に小屋の前の小道を森へ向かおうとしている。

「そんなあガイドさん、お礼させてください」

ガイドの袖を掴む。

「あ、もちろん正式なお礼は後からきちんとお支払いしますし」

「いらん気を回すな。お前の剣が売れない限りは無理だろうからな」

「うう、保証できない」

気を取り直し、ガイドの前に回る。

せめて今できるお礼をさせて欲しい。

「なら尚更、賑やかにばあっと、お風呂と食事だけでも」

「賑やかに風呂？」

というレイノルドの突っ込みを背景に、ガイドはじっとラウルを見た。とても深い眼差しだ。

何だろう。

「ガイド殿」

セレストイが目配せしている。

何だろう。

「おじさん」

リズリーアが袖を引く。

何だろう。

「仕方ねえな」

「有難うございます」

レイまで。

何だろう。

ぱあつとがダメだったのかな。でもしめやかにもちよつとな。

何にしろガイドが残ってくれるのは嬉しい。

「リズリーア、ヴィルリーア、君達は大丈夫？」

「当然！ まずお風呂！」

「僕も……」

リズリーアが飛び跳ね、着地するまでの間に小道を低い声が地を這った。

「リイズウウウー」

「びゃっ」

「ヴィーイイイー」

「きゃあっ」

振り返った先、森の入り口に一人の女性が立っている。

四十歳前後、膝下までの青灰色の外套の裾が今風を受けたように揺れている。

長い黒髪を後ろに一つ、すっきりとまとめていて、理知的な面差しはそう、リズリーアとヴィルリーアに良く似ている、ような。

水色の瞳の、まなじり 眦がキリキリ吊り上がっている。

ついさっきガイドを引き止めた時にはそこにいなかった。

女性は双子目掛けて小道を歩き、両手を伸ばして二人の後ろ襟をそれぞれ掴んだ。

「あんた達い……っ！！！！」

あつ。

「母さま！」

「ど、どうしてここに」

「あわわわわ」

「ボードガードさんに聞いて、心臓止まるかと思ったわよ！」

「帰るの月末じゃ」

「学会が……」

「あわわわわ」

「帰りを早めたの！ 貴方達が何かやらかしてやしないかと心配だったから！ そしたら案の定！」

「案の定だなんて母さまってば」

「あ、あ、あの、お母さん」

「あわわわわ」

「ん？」

三人の目がラウルへ向いた。

ラウルは右へ左へ、ずつと行ったり来たりしている。

「あわわわわ」

双子の母——グイドが名前を挙げていた法術士、クリスタリア・トルムへ、ラウルは深々と頭を下げ、二人を今回の旅へ連れて行ったことを詫びた。

「いいえ、あなた方には余計なご負担をお掛けしました」

クリスタリアは微笑み——つつ、まだ双子の首根っこを掴んでいる。

リズリーアもヴィルリーアも、特にリズリーアは親に回収されていく子猫のようだ。

「この子供には帰ってから、私と夫から、みっちりとお説教しておきます。さ、帰るわよ」

ふふふ。と。

微笑んでいるが怖い。

とてもお怒りになっている。

「あ、あの、本当に、責任は俺にありまして」

ラウルがまた頭を下げる前にリズが首根っこを掴まれたまま首をうんと伸ばした。

「違うよ！ あたし達が勝手に押しかけて、無理やり着いて行ったんだもん！」

リズリーアは母の顔を見上げ、両手をお願いの形に組んだ。

「母さま、お願い。帰ったらきちんと反省して、術書の複写十巻でも二十巻でもするから。もっとって言うならもっとするから。だからあと一晩、ここにいていいでしょう？」

熱心に詰め寄る様が予想外だったのか、クリスタリアが一瞬怯んだのが面白い。

すぐに持ち直し、リズリーアの頬を両手で挟んだ。

「いい訳ないでしょーが！ 貴方達ねえつ、帰ってみたらいなくて、どれだけ心配したと思ってるの。お父さんだって、急遽王都からこっちへ向かってるわ」

「お、お母さん」

ヴィルリーアが袖を摘む。

「貴方も」

と言いかけて、クリスタリアは口を閉ざした。

ヴィルリーアはまっすぐ顔を上げていく。

「ええと、お母さん。これから、お別れ会なんだ」

母の顔をじつと見上げる。

ヴィルリーアが苦手な言葉を懸命に紡いでいるのがわかる。

「皆さんに、すごく助けてもらって、僕達、それに、たくさん頑張ったし、それに、オルビーイスが帰っちゃって、ラウルさん寂しいから——」

じわあ、と、ラウルは目頭が熱くなるのを感じた。

そんな、ヴィリ、俺なら全然大丈夫だよ。

でもその気持が本当に嬉しいな。

「だから、みんなで、一緒に過ごしたい、んだ」

「ヴィリ——」

クリスタリアは水色の瞳を、その間ずっと我が子に向けていた。ほんの少し、ヴィルリアが話していた時間よりも長く我が子を見つめ、それからにこりと微笑んだ。

「何だか、貴方もずっと成長したのね、ヴィリ——」

全員順繰りに風呂を済ませて旅で被りまくった砂埃やらを落とす。居間はクリスタリアも加えた七人で、狭いほどに賑わっている。ラウルが手伝いセレスティが拵えた、干し肉の香草煮込みと焼き野菜を中心に、^{パン}麵と薄く切った^{チーズ}乾酪、酢漬けや果実煮の瓶、葡萄酒が並ぶ。

「——」
「ラウル？」

セレスティが両手に香草煮込みを注いだ深皿を持ち、立ち止まって左右を見ているラウルの顔を覗き込む。

「あ、いえ、何でもありませんよ、何でも。すごくいい匂いです。温かいうちに食べましょう！」

さっと足を踏み出し——た爪先が床の敷物に引っかかり、ラウルは手から大皿を滑らせてしまった。

「うわ」

宙を舞いかけた大皿をいつの間にか立ち上がったガイドの右手が受け止め、伸ばした左手で傾いたラウルの胸を押さえる。

「す、す、すみません、ガイドさん！」

「おじさんやっぱすごい」

歓声を上げたリズリーアの頬を、クリスタリアがふにと摘んだ。

「リズ。ガイドさんと呼びなさい。とても実力と功績のある人よ」

「それね、ほんとにスゴイんだよ母さま。ほんとに矢を三本同時に打って狙い通り当てちゃうの！」

「それは見たかったわね。でもリズ」

「はい！」

ガイドさんと呼びます、とリズリーアが背筋を伸ばす。

「おっさんのままで構わん、無理してもどうせすぐ戻る」

「いいって」

「リズ」

「ラウルさん、大丈夫でしょうか……」

レイノルドはヴィルリアを見て、

「気にしないでいいさ」

皿を取りに戻った台所の入り口へ視線を移した。

「俺、あの時不思議と何とかなるって、思ってたんだよね」

ラウルは拳を振り上げた。

お腹もいっぱいになり、程よく葡萄酒が回っている。

「あの時っていつ？」

「ほら、人面獣に囲まれて」

「何度も囲まれたがどの時ことだ？」

「リズが『障壁』を張ってくれた時です。あれが切れそうになった辺りで、俺たち絶体絶命だったじゃないですか。でも俺、あの時不思議と、何とかなるっていうか、妙に安心してたっていうか」

レイノルドが眉根に皺を刻む。

「お前のあれは、単に開き直ったって言うんだからな」

「え」

「みんな覚悟決めてたぞ」

「そうなの？」

「そうなの？ だ……？」

レイノルドが右手を伸ばし、ラウルの頬を摘んで吊り上げる。

「いて、いて、いて、レイ」

「反省しろ。死ぬほど反省しろ。地の底まで反省しろ」

「レイノルド殿、反省する必要があるのはその前のラウルの行動ですよ。一人で突っ込んで行ってしまったところですよ」

「あ、あれはもう、あの場で反省したっていうか、みんな許してくれたっていうか」

「めり込んで反省しろ」

レイノルドがほっぺたをぐいぐい引っ張るから形が変わってしま
いそうだ。

「分かった、分かったからレイ！ 俺っ、反省踊りするから！」

「反省お、はぁ？ 何を意味わからんっておい、立つな！ 踊るな！ 狭いっ！」

「レイ、ほら一緒に踊ろう。昔村祭りに行って踊ったよねー」

「やめろ、巻き込むな！」

レイノルドと肩を組み、ラウルは身体をふらふら揺らしつつ脚を交互に振り上げた。

『ご主人ー。俺も俺もー』

「いーぞヴァースー、レイ、ほら、一緒にヴァースの柄持ってー」

「あれは酔っ払ってんのか？」

ガイドは葡萄酒を口元に運びつつ、呆れを隠さない目を向けた。

「そのようです」

とセレスティが微笑ましく見つめる。

「お前止める転けるっ」

ラウルが笑い声を上げ、可哀想なレイノルドを巻き込んで腹から倒れる。

二人して並列に床にびたんと倒れた格好だ。

「おーっ、前……っ」

怒りに震えつつ起き上がったレイノルドの横で、ラウルは腹這いになったままぴたりと動きを止めた。

室内に沈黙が落ちる。

視線は倒れているラウルへ集中した。

「……う」

「ラウル？ おい、ラ」

レイノルドの手が肩に触れる前に、ラウルはぶるぶると肩を震わせ始めた。

「ううう」

呻き声も。

「ラ」

「ううわあああああ！」

全てに濁点が付いた嗚咽を発し、ラウルはその場に更にめり込み
そうに突っ伏した。

「オルウウウ！」

ウおうるううう、と聞こえた。

レイノルドが眉根に深い縦皺を刻む。

ガイドやセレスティが酒を飲む手を止め、クリスタリアはさりげ
なく双子の側に寄り、壁に立て掛けている杖を確認した。

『あー、問題ないぞー。ご主人、言動はアレだが人畜無害だから
ー』

「あら良かった。飛ばす先をどこにしようかちよつと迷ったの」

「転位かよ」

「オルビーイスウウうううう」

オルビーイスの名を呼び、ラウルは床に突っ伏したままさめざめ
と泣き始めた。

「おい。ラウル、少し」

レイノルドが手をどこに持って行ったらいいのか、おろおろとラ
ウルと手を見比べる。

「おオルウウううぐええええ」

「ラウ」

「あ、あたしも寂しくなっちゃったっ」

リズリーアがじわりと目に涙を滲ませる。

確かに五日前、ここに居た存在がもう居ない。

元気でいると分かっている。

「リズちゃん」

「つ……、うああああん」

リズリーアがラウルへ膝でにじり寄り、その両手を握る。

「オルビーイス……っ」

ラウルはその手を握り返した。ヴィルリーアがリズリーアの背を
さする。

「リズちゃん、元気出して」

「オルビーイスう……」

「リズちゃん」

「元気でやれよおおオルウウウうう」

「ラウルさん、オルビーイスはきつと元気で大きくなって、伝説の
竜になりますよ」

「オルビーイスウウうううう」

「ラウル」

リズリーアが握る手に力を込める。

「オルーは、オルーは離れてもラウルのこと、いつも考えてるよ。
だってオルー、ラウルのこと大好きだったもん」

「オルビーイスウウうううぐええ、ぐええっ」

ありがとう、ありがとう、とラウルはぼろぼろ泣きながら二人と
固く抱き合った。

「やっぱ帰りや良かったな」

ガイドが苦笑混じりの笑みを口元に浮かべ、微笑むセレスティへ
葡萄酒の瓶を傾けた。

二頭の竜が、抜けるように青い空を、真っ白な鱗の軌跡を重ねて心地良さそうに飛んでいる夢を見た。

ラウルは鳥の囀りで目を覚ました。

室内は鎧戸の隙間から差し込む細い光だけでまだ薄暗く、静かだ。

起き上がり、まだぼうっとした頭で居間を見回す。

セステイとレイノルドが雑魚寝をしていて、ガイドの姿はない。もう起きているのかな、と玄関に目を向けた。

寝室にも物音はないからリズリーアとヴィルリーア、クリスタリアはまだ寝室で寝ているのだろう。

ラウルは額に手を当てた。

「うう、あたまいたい……」

動かすと痛むし、目の周りもごわついている。

「昨日……うう、昨日……」

記憶を辿りつつ、ラウルはまだ寝ている二人を踏まないように歩き、玄関をよるめき出た。

「目が覚めたか」

井戸端にいたガイドの声が掛かる。

「おはようございます……」

ラウルの様子を見てガイドは口元だけで笑った。昨日延々と葡萄酒を飲んでいたと思うが、全く影響が無さそうに見える。

今は石を積んだ井戸の淵に腰掛け、湿らせた布で矢の手入れをしている。

「それ、あの、ゲネ——ドロースガラムさんの」

七本の矢はそのまま、ガイドの手元に残されている。

それから、その脇に置かれた白い短弓。

白竜がオルビースを助け連れてきた札にと、それぞれにくれたものの一つだ。

『生憎私は宝物を溜め込む趣味がない。満足な札もできないが』

白竜はそう言って、深く青い双眸をラウル達へと向けた。

『そなたらの望むものを一つ、言うといい』

初めは戸惑いしつつも顔を見合わせ、初めに進み出たのはガイドだ。

「札を得る為に来た訳じゃない。目的の達成どころか命も危うかったところを助けて頂いた。何よりそれが我々への返礼だ」

『狩人よ。その矢、ドロースガラムのものだろう』

白竜がガイドの背の矢筒に両眼を細める。

ふん、と鼻息を吹く。勢いで髪がちよつと煽られた。

『相変わらず何事も適当な奴だ。見合う強度の弓がなければ、どのような矢も何ほどの役にも立つまい』

白竜の前に法陣円が浮かぶ。

ラウルは目を見張り、それから幼い頃の御伽噺で、高位の竜は法術を用いるのだと聞いたのを思い出した。

(本当だったんだー)

法陣円から浮かび上がった光が、弓を形作る。

「見て、ヴィリ」

「物質創造——」

リズリーアが頬を紅潮させ、ヴィルリーアと両手を合わせる。

「特級、最高位の術だよヴィリ！　すごいすごい」

「も、もしかして、ガイドさんの矢も」

「そうだよ、きつと！　すごいすごい」

白竜は言葉通り、それぞれへの品を法陣円から創り上げた。

セレスティには盾を。

セレスティがそう望んだもので、下部の尖った縦長、白竜の鱗に似た装飾が表面を覆っている。剣を望まなかったのはシュディアーに拘っているからだ。

リズリーアとヴィルリーアには、術式強化の触媒として自らの鱗を。

術式を飛躍的に高められると聞いて、二人は高位になるまでもつたいないから使わないと誓っていた。

レイノルドには、手鏡一つ。

何故鏡かと戸惑いつつもレイノルドは固辞しようとしたが、白竜が長い首を寄せて耳元に何事か囁くと、レイノルドはそれを受け取った。

「レイ、それ何？」

リズリーアが覗き込む。

『役に立つかどうかは本人次第さ』

最後に白竜はラウルを見下ろした。

『鍛冶師よ。そなたの鍛冶に役立つものは私には生み出せぬ』

「やはり、へっほこ過ぎだからか」

レイノルドが溜息を零す。

「しみじみ言わないでくれるかな、レイ」

『だがそなたは我が子と私の恩人だ。いつかそなたが求める時に一度、そなたの命を助けてやろう』

「そんな……」

ラウルは気恥ずかしさと共に微笑みを返した。

「有難うございます。お気持ちがとても嬉しいです。でも」

へへへ。

「俺は、もうこんな冒険に出ることはありませんので、命の危険があるところになんて、もうこの先一生、二度と、絶対、行かないと思います！　いえ、行きません！　だからお気持ちだけ、ありがたく頂きます！」

「断固たる決意表明だな」

ガイドが目を細め、隣でレイノルドが何とも言い難い情けなさそうな顔をしている。

「ラウルらしいですね」

「ねえ」

セレスティとリズリーア、ヴィルリーアが首を傾け合う。

『人の生もそれなりに長かろう。我は百年先でも構わぬよ』

どことなく可笑しそうな響きを含み、白竜はそう告げると翼を広げた。

太陽が昇るにつれ、くらがり森の中にも陽射しが差し込み始めた。

風が梢を揺らすごと、森の中に落ちる幾筋もの光が揺れる。

ガイドはあっさり過ぎるほどあっさり立ち去った。

『キルセン村にいるんだろ、遊びに行こうぜ』

のんびり言うヴァースの声に寂しさを紛らわす。

それにしても。

「俺、あのガイド・グレスコーと一緒に冒険しちゃったよ。今度エ

ーリックとアデルに自慢しよう」

何故か傍らでレイノルドがうんうん頷いている。

「では、私達もこれで。本当にこの子供達がご迷惑をおかけしまし

た」

深々頭を下げるクリスタリアへラウルは慌てて両手を振った。

「いえいえ、迷惑かけたのは俺ですから！ 二人に本当に、助けて

もらいました！」

「一緒に行ってよかったでしょっ」

と胸を張ったリズリーアへ母の眼差しが動く。

「外出禁止」

「うっ」

「反省してないなら三日追加」

既に昨日の時点で五日間の外出禁止を言い渡されている。

「は、反省してるもん！ ごめんなさい母様！」

「ぼ、ぼく、リズちゃんの分まで家に籠るから……」

「ヴェリにはお仕置きにならないのよねえ」

賑やかに、明日また会おうね、とでも言うように盛大に手を振っ

て、三人は森を去った。

クリスタリアが現れた時と同じ——リズリーアが言っていた、

『転位』の法术を使って。

「すごい……あつという間にいなくなっちゃった」

「あれが転位ですか」

『かなり高位だなー』

セレスティが感嘆したように息を零し、ヴァースが相槌をうつ。

セレスティはラウルへ、体を向けた。

帯びていた剣を鞘ごと外し、ラウルへと差し出す。

「ラウル。お借りしていたノウムを、お返しします。とても素晴ら

しい剣だと、この旅で改めて分かりました」

「役立てて頂き、有難うございます」

ラウルはノウムを受け取り、その上でどちらを差し出すべきか、

東の間迷った。

けれどここは、やはり。

「あの、シュディアールは貴方に差し上げます」

「シュディアールを——」

セレスティが嬉しそうに頬を輝かせ、それから引き締める。

首をゆるく振った。

「いえ——私にはまだ、あの剣を扱う力がありません」

力ってまんま力だね。

使えるとしたらどれだけ筋骨隆々にならなきゃいけないんだろう

か。

「セレスティ。貴方はそう言うと思ってました。でも使えるようになるまで、シュディアルはここにいますので」

「ラウル——」

セレスティは右手を握りしめ、その拳を感情を表すように胸の真ん中に当てた。

「——お言葉に甘えて——」

ラウルは微笑んで頷き、それから手にしていたノウムをもう一度セレスティへと差し出した。

「ノウムを使ってください。国王陛下の御前試合でこの剣を貴方が使ってくれたら、俺も誇らしいです」

「必ず。一年間修行を積んで腕を上げ、御前試合で優勝します」

セレスティならば有言実行、きつとやり遂げてくれるに違いない。

白竜の盾もある。

「セレスティ殿なら、次に会う時は近衛師団の士官としてでしょうね。楽しみにしています」

レイノルドが手を伸ばし、固く握手を交わす。

自分への態度とはだいぶ違うなあ、と思いながらラウルも頷いた。

国王の御前試合で勝ち上がれば、正規軍や近衛師団の士官級が約束されている。

その時のセレスティの姿が目に見えるようだ。

「シュディアルを迎えにきます」

リトストスが嫉妬しそうだ。

ここが鍛冶小屋でなかったことに胸を撫で下ろす。

『頑張れよーお前ならできるー』
もう一度、「必ず」、と約束し、セレスティも旅立った。

最後に残ったレイノルドへ、ラウルは向き直った。

「レイも。色々ありがとう」

「別に、お前の為に何かしたわけじゃない」

「素直じゃないなあ。昔は俺に褒められたくて」

あ。

血管切れそうになっている。

これ以上はやめよう。

俺にもちゃんとそういうことが分かるようになった。これが成長か。ふふ。

「なあ、レイ。君に渡したいものがあるんだ」

レイノルドを手招き、ラウルは鍛冶小屋へと入った。

炉の奥の棚を開け、その中に立てかけてあったものを取り出す。

一振りの剣。

剣身が三尺(約90cm)ほどの両手剣だ。

「師匠の剣だよ。他は生活費のために手放したけどこれだけ、残しておいた」

「良いことのように聞こえそうで聞こえない……」

レイノルドが不思議そうに呟いている。

ラウルは飾り気のない鞘から剣を抜き、澄んだ剣身を水平に寝かせてレイノルドへ差し出した。

「君に使ってもらいたい。いつか師匠の剣を使いたいって、君ずつと行ってただろう？」

「――」

レイノルドはしばらくの間、冴えざえとした見事な長剣を見つめていたが、ふん、と鼻を鳴らした。

何かアレだな、猫みたいだな。

「遠慮する」

「え、でも」

「俺もまだ未熟だ。当面はお前の打った剣を使ってやる。街でせいぜい宣伝してやるさ。俺が使ったら注文も少しくらい入るだろう」

「えっ本当？」

じゃない。

注文が入れば嬉しいけれど。

「無理しなくていいんだよ」

「お前な……」

もっと自尊心を持ってよ、と呆れたように眉間に皺を寄せ、レイノルドは壁に掛けてある剣へ歩み寄った。

「どの剣がいいか。フルゴル、はここにあった方が役立ちそうだしな」

街で抜くには明る過ぎる、と言う。

それは同感かも。まあもう俺、暗い森なんて歩かないけどね。

「なら……」

ラウルが見回した先で、優美な剣身を持つ剣が一振り、ガタガタと身を揺らし始めた。

「なっ、何だ?!」

ぎよっとしてレイノルドが身を引く。

『リトスリトスー。落ち着けー』

「リトスー——？ 落ち着け？」

「あ、リトスリトスだよ、その剣。綺麗自慢で綺麗好きで褒められ好きでちよつとというかかなり嫉妬深いみたい。レイを選んで欲しいみたい」

セレスティに夢中だったはずなのになあ。

惚れっぼいんだな。

「お、俺に？」

何かさらつと怖いこと言っていないか？ とレイノルドが睨んだが、ラウルはニコニコ笑みを返した。

レイノルドは胡散臭そうに鼻に皺を寄せ揺れている剣を見た。

『あんたを守ってくれるぞー。惚れっぼいけどなー』

ヴァースが畳み掛ける。

決して悪質な押し売りでは無いので安心して欲しい。

「惚れ……？」

更に胡散臭そうに首を傾げ、それからまあいいか、と、レイノルドは素直にリトスリトスに手を伸ばした。

いいのかな？ とラウルは思ったが口にしなかった。

リトスリトスがとても嬉しそうな表情をしている、気がする。

「レイ。またいつでも、遊びにきていいからね」

レイノルドはものすごく嫌そうな顔をした。

ラウルの住まいを離れ、森の中をレイノルドは歩いていた。太陽が上がるにつれ気温も上がり始めたが、まだ森の中には涼やかでやや湿った香気が漂っている。

半刻ほど歩いてレイノルドは足を止め、辺りを見回した。誰もいないことを確認し、鞆の中から手鏡を取り出す。

白竜からもらったものだ。

『その鏡はあなたが知りたいことを、教えてくれるだろう』

「——」

銀で縁取られた、手のひらを広げたほどの大きさの鏡だ。

覗き込むと、自分の目が視線を返してくる。

その目は恐れている。

知ること。

そして、欲してもいた。

「——知りたいこと、か」

『真実を』

教えられたわけでもなく、それを思い浮かべながら鏡の表面に触れる。

映っていた自身の姿が揺れ、溶けて渦を巻いた。

混じり合った複雑な色の中から、新たな像が浮かび上がる。

良く知った姿——

レイノルドの

「父さん……」

父、セルゲイの姿。

あの時——ラウルの父、アルバートが死んだその日、その時間。

あの時、レイノルドは館にいなかった。

父は、どこにいたか——

鏡の中に浮かび上がった父は、一人机の前に座り手にした書類を覗んでいる。

室内——

移り住んだばかりのイル・ノーの館。その書齋だと分かった。

オーランド子爵邸があるロツソの街からは、馬で半日ほど。

父が手元の書類をめくる。

小さくてよく見えないが、内容は分かった。

オーランド子爵領の、その年の作高を記した帳簿。

次にレイノルドは違う場所へ想いを巡らせた。

ラウルの父、アルバートへ。

鏡の中の景色は変わり、屋外へと移る。

雨が降っている。強い雨。

川縁、土手の近く。

叩きつけるような雨の中、一頭の騎馬が近付いて来る。

レイノルドは自分の鼓動が高く、早くなるのを感じた。

川に沿って曲がりくねる道には、川と反対側に低い木が茂っている。

今にも、そこから、誰か飛び出すのではないか。

アルバート・ヴォルフ・オーランド子爵を襲うために、黒い装束

に身を包み、鈍く光る剣を構えて。

(父さんが、叔父上を——)

二人は領地の運営について諍いをしていた。

あれほど助け合っていた二人の間には、修復しようのない亀裂が生じていた。

父セルゲイはラウルの父アルバートを見限り、イル・ノーへ居を移していた。

(だから)

けれど。

父の雇った暴漢が飛び出すことはなく、アルバートを乗せた馬は雨の道を進んで行く。

じつと鏡の中を見つめるレイノルドの瞳を、ふいに光が突き刺した。

それが鏡の中から発せられたと気付き、そして雷が落ちたのだと理解する。

馬が土手に倒れている。

「——」

レイノルドは鏡の柄を強く握りしめた。

『真実を』

自分の見たいものを見たのではないと、レイノルドに証明できるわけではない。

だが、向き合った白竜の深い青い瞳。

呼吸を忘れていたことに気づき、レイノルドはゆっくり——、

五月も末に近づき、くらがり森の中でも夏の兆しを感じられるようになった。

樹々の梢の間から零れる陽射しは、緑の葉や朝露に弾かれきらきらと光を散らす。

少し動くと薄っすらと汗ばみ、時折抜けていく風が肌に心地良い。

最近では堂に入ってきた薪割りを朝の内にすませ、半分とちよつとを薪小屋に積む。残りは鍛冶小屋だ。

『そろそろ新しい剣打たねーのかよー』

ヴァースを腰に帯びるのが日常になってしまった。

ほんの十日ほど前の賑やかさが懐かしく、今となってはヴァースが会話できることに感謝しているくらいだ。やはり話し相手がいるのは違う。

側から見ると一人で喋っているのだが。

「まあお客さん来ないし」

とヴァースと自分との両方に答える言葉を返す。

『お客が来てから打ってたら間に合わねーだろー。セレスティとレイノルドが外で宣伝してくれてんだからさー。そのうちわんさかお客が来るんじゃないのー』

「毎日それ言ってるんだよねー」

一人も来ない。

その間アデラードとエリックが二度ほど来てくれたが、街でラウルの剣が噂になっているかというのと、良い方でも悪い方でも特に聞こえていないとのことだった。

「もう……来ないかもね……」

『元気出せよー。きつと来るつてー。最悪来年、セレスティが王都の御前試合で優勝すりゃあよー』

「うう。それまでに飢え死ぬかも……」

これから爽やかな夏になるというのに、懐が極寒だ。

『じゃあなおさら無難な剣打つて少しでも小銭稼がねーとー』

「無難な剣が俺に打てるのかな……」

『まったく、うじうじしてんなー』

ヴァースがいてくれてよかった。

何だかんだ言ってもラウルのジメジメ付き加減に常に変わらず付き合ってくれる。

「レイだったら眉間に絶壁ができてるな……」

あらかた薪を積み終えると、残りを積んだ一輪車を押し、ラウルは薪小屋から小さい畑を抜け、鍛冶小屋へと向かった。

「前はこの一輪車もうまく押せなくてすぐ倒しちゃってさ」

『ご主人には難しいかもなー』

「二輪にしようかなって思うんだけど、畑の間を抜けないんだよね」

『畑の位置変えるのも、ご主人には大仕事だもんなー』

「その間に井戸もあるしね。家とき、井戸と、風呂と、鍛冶小屋と、全部離れてるのどうなのかな」

『一棟にしようと思えばできるだろうけどご主人一人じゃ無理だろうしなー』

ふふ。

やればできるからやれと言われなくて心地良い。

『駄目なこと考えてねーかー』

「ぜんぜん考えてないよ！」

一輪車を押しして鍛冶小屋の扉の前に止める。

「まあでもそろそろ、ほんとに剣を打ち始めないとは思ってるよ」

扉を押し開ける。

薄暗い小屋の中に、開いた扉から、ラウルの姿を切り取って陽光

が差し込む。

土の床。

押された空気に舞い上がった埃が、陽光の中にゆっくりと舞う。

明け方だった。

奪われたオルビスを追って、ヴァースと、フルゴルと、夜の森で無謀な冒険をした。

あの時、帰り道、足が重かった。とつても。

一步踏み出すごとにもう一步も歩くことができないと思い、よく家まで辿り着けたと我ながら感心する。

ふらふらになりながら鍛冶小屋へ、入って――

――びい！

ばさりと、翼の音と共に白い影がラウルの肩に降りた。

白い透き通るような鱗、まんまるな青い瞳。

飛んでいってしまっただと思っていた。

目的は果たしたから、それでいい。

けれど。

覗き込んでくる子飛竜の、青い目を見つめた。

光に照らされると空色に澄みわたる。

ラウルは一輪車を押して鍛冶小屋に入り、炉のそばに薪を積んだ。

剣を掛けてある壁の前に立ち、挨拶代わりに彼等を眺める。ノウムとリトストスを譲ったので少し寂しくなった。

フルゴルが明るく輝き出すのは毎度のことだ。

フルゴルの灯りに照らし出された炉には、今は火が入っていない。

鍛刀台、研磨台、水桶。鋼を入れる木箱。金槌や鉄鋏、ヤスリや革など道具類を突っ込んだ棚。

「まず、鋼採取からやらないとなあ」

ちよつとサボっていたから手元には一本分の鋼もない。

『よーし、ご主人、今日は鋼掘りに行こうぜー』

ヴァースが明るく言い、今日の重労働を思いラウルは肩を落としました。

一息つくると行きたくなくなるので、ラウルはツルハシなど採掘具一式を背負い籠に入れ、昼食と蜂蜜酒と水を揃えたとすぐ、くらがり森の小道を歩いて坑道へと向かった。

「今度こそ、売れる剣を打ちたいなあ」

衆目の中でも気にせず使える剣を。

セレスティやレイノルドがラウルの剣を宣伝してくれて、客が殺到する前に。

「お客さん、大勢来すぎちゃったらどうしよう」

押さないで押さないで。

皆さんの分、充分にありますから。

「ぐふふ」

そんな、名鍛冶師だなんて、俺なんてまだまだだ。

「ぐふふ」

『ご主人、気持ち悪いぞー』

爽やかな森の中を妄想を膨らませて歩き、きりよせ川辺りを抜け、二刻弱で坑道に着いた。

「どっこいせえ！」

『どっこいせー』

ガツン！

「どっこいせえ！」

『どっこいせー』

ガツン！

「どっこいせえ！」

『どっこいせー』

ガツン！

「どっ、こいせえ！」

『どっこいせー』

ガツ、ン！

「どっこい、せえ……」

『どっこいせー』

ガツ

「どっ……こい……せ……」

『どっこいせー』

カツ

「どっ……」

『どっこいせー』

二刻ばかりツルハシを振るい、一貫（約3kg）ほどを採掘すると、背負い籠に積み入れる。

さあ、最後の苦行だ。

重量を増したこれらを担いで家まで帰ること。

「どっ……こいせえ！！」

と担ぎ上げ、ラウルは苦しい息を吐いた。

「こ、これが無ければ尚、いいんだけどなあ。ヴァース君、俺の身体動かして」

『がーんばれーがーんばれー』

まあうん。

分かっているんだけどねうん。

うん。

『レイノルドに頼めばいいじゃねえか』

「そうだね、今度はレイに頼もう」

『そこはふつう、“いやいやヴァース、自分のことだから自分でするよ”、とか遠慮するもんじゃないのか』

「レイに頼もう」

坑道を出て、入り口にしっかりかんぬき門と鍵をかけると、ラウルは

重い荷物を背中中でゆすつて背負いなおし、ふう、と空を見上げた。

覆い被さるような樹々の枝の向こうに青い空が広がっている。

昼も過ぎているがまだ空は澄んで明るく、とても良い天気だ。

緩やかな傾斜の道をしばらく降ると、小道はきりよせ川に行き当たる。

ラウルでも飛び越せるほどの幅しかないが、きりふり山から流れ出て、森を抜け、ボードガード竜舎のあるキルセン村に流れを供給しつつ、ミスノル平原を南下して流れていく川だ。

どこまで流れていくのか、きつとどこかで他の川と合流して雄大な流れになっていくのだろう。

きりふり山の山肌に染み込んだ雨水は地下水となって、ラウルの家の井戸も潤してくれている。

ラウルは川のそばに立ち、開けた空を見上げた。

高く伸びる枝の向こうにきりふり山の山頂が見える。

「――」
切り立つような山頂は雪を纏っている。

山肌は険しく、急峻だ。

「俺たちがあんなどころを登って行ったなんて、今考えても信じられないなあ」

『途中までとは言ってもなあ』

「もう二度と、登らないだろね」

『どうだろうなあ』

「いやいや、登らないよ、誓って」

背負っていた籠を下ろし、重量から解放された可哀想な肩を回す。

背中をうんと伸ばし、肺に溜まっていた息を盛大に吐き出した。

「ふはあー！」

『あと半刻、がんばって歩こうぜ』

「何度も言うけどさ、ほんとにヴァースが俺の足を動かしてくれたらなあ」

諦めきれない。

『応援してやるぞ』

重い荷物を担いで歩いてきた上、行きよりも暑さが増していて、すっかり汗をかいている。

冷たい水に足首でも浸そうと、ラウルは革靴の紐を解き、裸足になって小川へ入った。

指先や足首を撫でて流れていく水が心地良い。

ラウルは澄んだ水の流れから目を上げ、深呼吸するように、言った。

「ここで、拾ったんだ。話したっけ、ヴァース」

『何度も聞いたけど、この場所を見たのは初めてだな』

「卵の状態でさ」

ヴァースは答えないが、耳を傾けているのは分かる。

耳があるかはともかく。

「一里以上も転がり落ちてきたなんて、びっくりだよ。それで怪我がなかったの、すごいよなあ」

――伝説の竜になる

うん。

そうだ。きっとなるだろう。

ラウルよりも遥かに長い生を生きて、ラウルがこの世からいなくなって、数百年後か、千年後か。

宝玉に例えたその名が、この国の歴史の一つに刻まれるのだ。

「俺を、覚えてくれてるといいなあ」

記憶のほんの僅か、片隅にでも。

『覚えてるさ』

ヴァースがのんびりと言う。

「うん」

『溜まり、って、あれか？』

どうやって周囲を見ているのか、ヴァースの声にラウルは首を巡らせた。

左の川岸の、一角が流れにより削られて、水が渦巻くように滞留している場所だ。

「うん、そう。あそこに白い卵が浮いてて――」

ゆらゆらと。

ラウルは目を見張った。

白い塊が、流れ溜まりに浮いている。

「え、また卵——」

なあんで。

そうそうあるわけが無い、と首を戻そうとして、

「わああ!？」

見間違いではなく、確かに。

白い。

けれど卵じゃない。

ラウルはたっぷりふた呼吸分、呼吸を止めた後、我を忘れて川の中を駆け出した。

苔むした川底の小石に足を滑らせ、腹から川に倒れ盛大に飛沫を上げる。

顎やら肘やら痛かったが、それも全く気にはならなかった。

視線の先で、川の中にぶかぶかと浮かんでいる、真っ白な——

「なっ、な、な……」

子竜。

流れ込む水が緩やかな渦を作り、その渦の中で首だけ出してくるくると回っている。

回りながら何度か、目が合った。

「ぴい！」

とにかく駆け寄って川の中に膝をつき、急いで翼の下に手を入れ、ラウルは子竜を川面から抱え上げた。

零れる水が陽光を弾いて辺りに光を散らす。

「何やってんの君っ、オ——」

いつから浸かっていたのか、真っ白な綺麗な鱗がすっかり冷えている。

「オルビース！」

陽射しを受けて、空色の瞳がぐるりと瞬く。

「ぴい！」

——会いにきた!

声の流れ込む。

「会いに——」

——ラウル

ダメじゃないか、山を降りてきちゃ、まだ君は小さくて、いくらこれから伝説になろうと言ったって、何があるかわからないのだから、と。

厳しく言い聞かせようとして——

ラウルはオルビースを抱きしめ、言葉にならないまま仰向けに倒れた。

もう一度、盛大に上がった水飛沫が、梢から降り注ぐ陽光をきらきらと弾いた。